府道 松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書 Ⅰ

西浦橋遺跡・菱木下遺跡
万崎池遺跡・太平寺遺跡

―本 文 編―

財団法人 大阪文化財センター

大阪文化財センター
藏書
第13012号

府道 松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書 I

西浦橋遺跡・菱木下遺跡
万崎池遺跡・太平寺遺跡

― 本　文　編 ―

財団法人　大阪文化財センター

序　　　　　文

堺市を流れる石津川は、その流れの中に幾多の地域の歴史を刻みこんでいます。大山古墳をはじめとする百舌鳥古墳群と「陶邑」古窯址群は、いずれも石津川流域の歴史として存在しています。単に古墳時代のみでなく、弥生文化受容の歴史も石津川を軸にしており、石津川が形成した微地形を利用して、弥生時代の人々がその生活の場を築いていったことが明らかになりました。

都市計画道路府道松原～泉大津線予定地内にある、今回報告する4遺跡は、百舌鳥古墳群と「陶邑」古窯址群の中間に位置し、縄文時代から中近世に至る石津川、和田川中流域の歴史的所産として捉えることができます。

幅約40m、長さ 1.4kmにわたる発掘調査は、東西端の氾濫原から中央の段丘全体におよんで実施されました。つい数年前まで、何らの遺跡も周知されていなかった場所であったとは思えない程の、多種多様な遺構・遺物が検出されました。1万数千年前のナイフ形石器から戦前の防空壕まで、驚くほどの量と質であります。西浦橋遺跡で検出された弥生時代の用水堰と、万崎池遺跡で検出された平安時代の堤防は、いずれも灌漑施設としては同じでありながら、その技術水準は大きく異なっています。同じ2・3棟の住居跡であっても、時代が異なれば、その裏にある歴史的な内容は、全く異なったものであったと考えられます。豊富な資料を、豊かな歴史像に構築させる仕事こそ、私達の責務であろうと考えます。

調査によって得られた成果が、一人でも多くの人に生かされ、文化財保護に役立てられるよう心から希望します。

調査にあたり、大阪府教育委員会をはじめ、大阪府土木部道路課、大阪府特定街路建設事務所の関係各位から、多大な援助と協力を得ることができ、心から感謝の意を表する次第であります。今後とも、当センターの事業完遂の為、温かい御支援を賜わるよう、切望してやみません。

財団法人　大阪文化財センター

理事長　加　藤　三之雄

府道松原泉大津線関連遺跡
発 掘 調 査 報 告 書

Ⅱ

— 西浦橋遺跡 —

財団法人 大阪文化財センター

序　　　　文

堺市は大阪府の中央部西寄りに位置する府下第一の衛星都市であります。市域は南北に長く、北西の海浜部と南東の丘陵部にわかれ、海浜部には仁徳天皇陵古墳を中心とする百舌鳥古墳群や中世環濠都市遺跡「堺」など、我が国を代表する遺跡がみられます。また南東丘陵部には、これまた我が国最古で、最大の規模を誇る陶邑古窯跡群がひろがっています。このように堺市域は、いわば文化財の宝庫とも言うべき地域であります。

さて、大阪府土木部では松原と泉大津方面を結ぶ都市計画道路の建設を計画いたしましたが、その路線が泉北丘陵の北端付近を通過することになりました。路線上では大園遺跡・信太寺跡などの著名な遺跡が調査されておりますが、当センターでは大阪府教育委員会の指導によって西浦橋・菱木下・万崎池・太平寺の4遺跡の調査を実施するはこびとなりました。ここに上梓する報告書は西浦橋遺跡にかかるものの第2冊目にあたります。本書が泉北丘陵を含むこの地域の歴史解明の一助となれば、これにまさる喜びはありません。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた大阪府教育委員会・堺市教育委員会・大阪府土木部をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げるとともに、今後とも当センターに対し一層の御指導・御鞭撻たまわるようお願いする次第であります。

1984年3月

財団法人　大阪文化財センター

理事長　加藤　三之雄

例　　　言

1　本書は府道松原泉大津線建設に伴う、堺市菱木所在、西浦橋遺跡の発掘調査報告書である。西浦橋遺跡の発掘調査は下記のように3次にわたって実施している。

次数	工区	調　査　期　間	面積	担　当　者	報　告　書
その1	Ⅱ工区	1981年9月8日～1982年3月30日	4,682㎡	芝野圭之助・橋本高明	松原泉大津線関連・Ⅰ
その2	Ⅰ工区	1982年5月15日～1983年3月31日	3,353㎡	安里　進・橋本高明	本報告書（松原泉大津線関連・Ⅱ）
その3	Ⅰ工区	1983年4月1日～1984年3月31日	3,320㎡	大野　薫・橋本高明	

本書は（その2）・（その3）の調査について報告するものである。

2　調査は大阪府土木部より委託をうけて、財団法人大阪文化財センターが実施した。調査に要した費用 329,863,000円（その他の遺跡の整理費を含む）は大阪府土木部が負担した。

3　遺物整理は調査と併行して実施し、本報告書作成にかかる総括的作業は1983年12月1日から1984年3月31日の間に実施した。

4　調査及び報告書作成に関係した者は次のとおりである。

1982年度

理事兼事務局長　井上定清
事務局次長兼総務課長　大塚恭朗
総務課　庶務係　主幹兼庶務係長　阪上允子、主査　田中喜代子、主事　秋山芳廣・灰本明子・千野和久・宮本哲男・田口宗義・鎗山洋子
　普及係　主幹兼普及係長　福岡澄男、技師　杉本直子、主事　小島容子
業務課　業務課長　中井貞夫（調査総括責任者）、主幹　椋尾孝彦
　業務第4係　業務第4係長　広瀬和雄、技師　山口誠治
　業務第6係　主幹兼業務第6係長　石神　怡、技師　安里　進・橋本高明　技能員　立花正治

1983年度

事務局長　小林廣喜
事務局次長兼総務課長　尾田勝之
総務課　庶務係　主幹兼庶務係長　阪上允子、主査　田中喜代子、主事　秋山芳廣・灰本明子・千野和久・宮本哲男・田口宗義・鎗山洋子
　普及係　主幹兼普及係長　福岡澄男、技師　杉本直子、主事　小島容子
業務課　業務課長　石神　怡（調査総括責任者）、主幹　吉村信男
　業務第1係　主幹兼業務第1係長　中西靖人、技師　山口誠治
　業務第5係　業務第5係長　尾上　実、技師　大野　薫・橋本高明

技能員　立花正治

5　調査にあたっては大阪府教育委員会の指導をうけるとともに、堺市教育委員会・大阪府土木部南部特定事業建設事務所・地元各位の協力を得た。

6　自然科学的分野の調査・分析には次の諸氏・諸機関の協力を得ることができた。

サーモ・ルミネッセンス年代測定	市川米太氏（奈良教育大学）
^{14}C年代測定	山田　治氏（京都産業大学）
樹種鑑定	松田隆嗣氏（元興寺文化財研究所）
樹輪年代法	野田眞人氏（京都大学原子炉実験所）
花粉・珪藻分析	パリノ・サーヴェイ株式会社

7　調査および報告書作成にあたり、次の各氏から有益な指導・助言を得ることができた。記して感謝します。

泉　拓良氏（京都大学）、奥田　尚氏（八尾市立刑部小学校）、北野俊明氏・樋口吉文氏
野田芳正氏（堺市教育委員会）、日下雅義氏（立命館大学）、中尾憲市氏（大成高校）、
那須孝悌氏・樽野博幸氏（大阪市立自然史博物館）、松尾信裕氏（大阪市文化財協会）、
家根祥多氏（帝塚山大学）

8　本書の編集は橋本が担当し、安里・大野が援助した。

凡　　例

1　西浦橋遺跡の遺跡略号はＮＵＢである。ＮＵＢ－Ｉ－２は西浦橋遺跡Ｉ工区その２を表わす。

2　本書遺構図中の方位は国土座標第Ⅵ系の座標北を用いた。

3　標高はＴ.Ｐ.に統一した。

4　遺構略号はＳＤが溝を、ＳＫが土壙を表わす。

5　遺物は土器・石器・埴輪・土製品・鉄製品ごとに、挿図・図版・観察表に共通する通し番号を与えている。

6　遺物実測図の断面は次のように使いわけた。

黒　塗――縄文土器・弥生土器・土師器
白抜き――須恵器・須恵質土器・埴輪・陶磁器・土製品・サヌカイト製石器・子持勾玉
ドット――黒色土器・瓦器
斜　線――磨石・台石等

例　　　　言

1　本書は、大阪府土木部道路課が計画、施行している都市計画道路松原泉大津線建設に伴う、堺市菱木、草部、太平寺、平井に所在する西浦橋遺跡、菱木下遺跡、万崎池遺跡、太平寺遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は、大阪府土木部道路課から、財団法人大阪文化財センターが委託を受けて実施したものである。

3　本調査に要した費用、合計1,086,389,000円は、全て大阪府が負担したものである。

4　本調査は、昭和55年7月から昭和57年3月までの間実施した。

5　出土遺物の基礎的整理作業も発掘調査と並行して実施した。また、本書の作成にかかる総括的な整理作業は、昭和57年4月から昭和57年10月までの7ヶ月間に実施した。

6　本調査は、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪文化財センターが実施した。調査並びに本書作成に関係した者は以下の組織表の通りである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	井上定清
	事務局次長兼総務課長	筒井康雄（現大阪府水道部総務課長代理）
	〃	大塚恭朗
	主幹兼庶務係長	阪上允子、主査　田中喜代子、主事　秋山芳廣、灰本明子、千野和久、田口宗義、舘山洋子、宮本哲男
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師　妹尾直子、主事　小島容子
調査総括責任者	業務課長	堀江門也（現大阪府教育委員会文化財保護課主査）
	〃	中井貞夫
	主幹	椋尾孝彦
	業務第4係長	高島　徹、技師　山口誠治
調査担当	主幹兼第6係長	中井貞夫
	〃	石神　怡、主査　赤木克視、技師　芝野圭之助、佐久間貴士、久米雅雄、福田英人、橋本高明、村上富喜子、技能員　立花正治

7　本書作成にあたり、西浦橋遺跡、太平寺遺跡の樹種鑑定を嶋倉巳三郎先生、万崎池遺跡土壙墓のリン分析を安田博幸先生にお願いし、玉稿をえたことに深く感謝の意を表します。又石津川流域の地形分類図の提供を快く承諾していただいた立命館大学前薬和子氏に対しても心から感謝の意を表します。

8　本書作成の段階で次の方々、機関の御指導、御教示を得たことに対し深く感謝いたします。
大阪府教育委員会、堺市教育委員会の多くの技師の皆様、佐賀県立九州陶磁文化館　大橋康二、八尾市刑部小学校　奥田尚、京都大学　泉拓良、同　家根祥多、若狭歴史民俗資料館　網谷克彦

9　花粉分析については、パリノサーヴェイ株式会社、木器の保存処理については財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

10　本調査では、大阪大学、大阪外国語大学、大阪教育大学、大阪キリスト教短期大学、大阪経済大学、大阪芸術大学、大阪女子大学、大阪市立大学、大阪樟蔭女子大学、大阪府立大学、大阪薬科大学、大谷女子大学、関西大学、関西外国語大学、関西外国語短期大学、関西学院大学、京都大学、京都産業大学、近畿大学、金蘭短期大学、神戸市外国語大学、神戸女学院大学、堺女子短期大学、帝塚山学院大学、同志社大学、奈良女子大学、羽衣学園短期大学、プール学院短期大学、武庫川女子大学、桃山学院大学、立命館大学等の学生諸氏の参加、協力を得た。

11　本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドも作成した。広く利用されることを希望する。

12　執筆分担は次の通りである。

Ⅰ、Ⅱ：石神　怡、Ⅲ　第１章第１節～第３節：橋本高明、第４節１、２、３：芝野圭之助、３石器：石神　怡、第５節：芝野圭之助、第２章：芝野圭之助、Ⅳ　第１章：久米雅雄、第２章第１節～第４節１、２、３、４、５：佐久間貴士、２土器：村上富喜子、第５節、第６節：佐久間貴士、Ⅴ　第１章：橋本高明、第２章：中井貞夫、第３章第１節～第４節１、２：福田英人、３：石神　怡、第５節：福田英人、第４章第１節～第３節：芝野圭之助、第４節１：石神　怡、２、３、４、５、６、７、８：芝野圭之助、７五輪塔：小島容子、第５節：芝野圭之助、Ⅵ　第１章第１節～第４節：赤木克視、第５節：村上富喜子、第６節：赤木克視、Ⅶ　石神　怡、Ⅷ・１：安田博幸・奥野礼子、２：嶋倉巳三郎

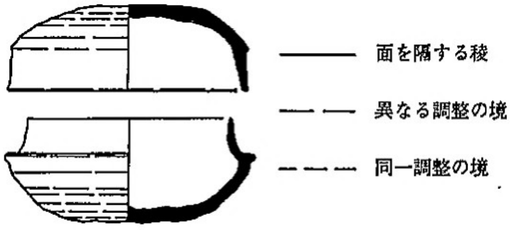
凡　　　　例

1. 本書の遺構実測図の方位Nは、国土座標による座標北をさす。
2. レベルはすべてT.P.（東京湾平均海水面）を用い、＋の標示は省いた。
3. 地区割は20mメッシュを1単位とし、最小地点は5mメッシュにより示している。
4. 調査地は各遺跡を以下の調査区に分けた。西浦橋遺跡第Ⅰ（府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ）・第Ⅱ調査区、菱木下遺跡第Ⅰ～第Ⅲ調査区、万崎池遺跡第Ⅰ～第Ⅴ調査区、太平寺遺跡第Ⅰ・第Ⅱ調査区である。
5. 本書の記述は西から東へ、西浦橋遺跡、菱木下遺跡、万崎池遺跡、太平寺遺跡の順に行なった。挿図および表の番号は各遺跡毎に1からつけた。図版番号は全遺跡とおしで1からつけた。
6. 遺構はアルファベットと数字の組合せで表記した。

　アルファベットは、SBK…竪穴住居址、SBP…掘立柱建物、SBF…柵、SDA…溝（人工）、SDN…河川（自然）、SE…井戸、SF…耕作遺構、SKA…土壙（土器溜、埋甕含む）、SKN…落ち込み（自然）、SP…池、淵、SR…道路、STK…土壙墓、STP…土器棺、STS…方形周溝墓、SX…その他

　数字は各遺跡の調査区毎に西から東へ1から順にふっている。

7. 遺構実測図の縮尺は1/200、1/10、1/20、1/50、1/100を基本としたが、遺構の大きさにより縮尺を変えたものもある。
8. 遺構断面図には、地山を示すのにレンガのスクリーントーンを用いた。
9. 遺物実測図の縮尺は原則として1/4としたが、大型品は1/6、石器は打製2/3、磨製1/2、瓦類および拓本1/3、木器は小物1/2、一般1/4、大物1/6等、遺物の大きさにより縮尺を変えた。
10. 遺物実測図の断面は、白ぬき…縄文式土器・弥生式土器・土師器・陶器・磁器・石器、黒塗…須恵器、粗いドット…黒色土器、細かいドット…瓦器、斜線…瓦である。なお、木製品は木取りを知るため、年輪の明確なものについて一部年輪を描き込んだ。
11. 土器実測図の線の使い方は次の図に示した通りである。



府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書 I

西浦橋遺跡・菱木下遺跡・万崎池遺跡・太平寺遺跡

目　　次

序文

例言

凡例

I　調査にいたる経過と調査経過……3

II　考古学的・地理的環境と調査の課題……5

第1章　各遺跡の地理的立地……5

第2章　石津川流域の遺跡群とその立地条件……6

　第1節　旧石器時代・縄文時代……6

　第2節　弥生時代……10

　第3節　古墳時代……12

III　西浦橋遺跡……25

第1章　第II調査区……27

　第1節　はじめに……27

　第2節　微地形と層序……28

　　1　微地形……28　　2　層序……28

　第3節　遺構……29

　　1　第II調査区の遺構……29

　第4節　遺物……50

　　1　概観……50　　3　小結……109

　　2　各時代の遺物……51

　第5節　まとめ……113

　　付　遺物観察表……119

第2章　付論……139

　1　飯蛸壺形土器をめぐる諸問題……139

　2　小字名図について……144

IV　菱木下遺跡……147

第1章　第I調査区……149

　第1節　はじめに……149

第２節　微地形と層序……………………………………………………………………………… 149
第３節　遺構…………………………………………………………………………………………… 153
1　縄文時代以前の遺構…………………… 153
2　弥生時代の遺構………………………… 153
3　古墳時代及びそれ以後の遺構………… 178
第４節　遺物…………………………………………………………………………………………197
1　トレンチ及び包含層内出土遺物……… 197
2　弥生時代の出土遺物…………………… 198
3　古墳時代及びそれ以後の出土遺物…… 215
第５節　まとめ………………………………………………………………………………………… 225
付　遺物観察表……………………………………………………………………………… 231
第２章　第Ⅱ・第Ⅲ調査区…………………………………………………………………………… 239
第１節　はじめに……………………………………………………………………………………… 239
1　調査範囲と期間………………………… 239
2　遺構と遺物……………………………… 240
3　調査区の地区割と名称………………… 240
第２節　微地形と層序……………………………………………………………………………… 240
1　微地形…………………………………… 240
2　層序……………………………………… 243
3　遺構面…………………………………… 244
第３節　遺構…………………………………………………………………………………………… 245
1　縄文時代………………………………… 245
2　弥生時代………………………………… 245
3　古墳時代から奈良時代………………… 261
4　平安時代後期から室町時代…………… 301
5　室町時代後葉から安土桃山時代──16世紀…………………………………… 337
6　江戸時代………………………………… 344
7　近代から現代…………………………… 347
第４節　遺物…………………………………………………………………………………………… 351
1　縄文時代の遺物………………………… 351
2　弥生時代の遺物………………………… 352
3　古墳時代から奈良時代の遺物………… 374
4　平安時代後期から室町時代の遺物…… 389
5　近世から近代の遺物…………………… 459
第５節　花粉分析からみた植生の歴史……………………………………………………………… 464
1　地山……………………………………… 464
2　弥生時代から古墳時代………………… 465
3　平安時代………………………………… 465
4　鎌倉時代から室町時代（13～15世紀）… 465
5　室町時代後葉から安土桃山時代（16世紀）………………………………… 468
6　江戸時代………………………………… 468
7　現代……………………………………… 468
第６節　菱木氏と菱木下遺跡………………………………………………………………………… 469
付　遺物観察表……………………………………………………………………………… 471
Ⅴ　万崎池遺跡………………………………………………………………………………………… 487
第１章　第Ⅰ調査区…………………………………………………………………………………… 489
第１節　はじめに……………………………………………………………………………………… 489

第２節　微地形と層序……489
第３節　遺構……490
第４節　遺物……493
第５節　まとめ……496
付　遺物観察表……498

第２章　第Ⅱ調査区……500
第１節　はじめに……500
第２節　微地形と層序……500
第３節　遺構……500
第４節　遺物……504
付　遺物観察表……508

第３章　第Ⅲ・第Ⅳ調査区……510
第１節　はじめに……510
第２節　微地形と層序……510
1　微地形……510
2　層序……510
第３節　遺構……511
1　第Ⅲ調査区……511
2　第Ⅳ調査区……513
第４節　遺物……543
1　第Ⅲ調査区……543
2　第Ⅳ調査区……545
3　第Ⅲ・第Ⅳ調査区の石器……555
第５節　まとめ……556
付　遺物観察表……585

第４章　第Ⅴ調査区……597
第１節　はじめに……597
第２節　微地形と層序……597
第３節　遺構……598
第４節　遺物……626
1　旧石器・縄文・弥生時代の石器……626
2　弥生時代……626
3　古墳時代……629
4　奈良時代……629
5　平安時代……634
6　鎌倉・室町時代……634
7　江戸時代……634
8　小結……636
第５節　まとめ……637
付　遺物観察表……641

Ⅵ　太平寺遺跡……645

第１章　第Ⅰ・第Ⅱ調査区……………………………………………………………………………………… 647

第１節　はじめに………………………………………………………………………………………………… 647

第２節　微地形と層序…………………………………………………………………………………………… 651

1　微地形……………………………………… 651　　2　層序……………………………………… 653

第３節　第Ⅰ調査区の遺構……………………………………………………………………………………… 659

第４節　第Ⅱ調査区の遺構……………………………………………………………………………………… 660

1　調査の方法………………………………… 660　　3　氾濫原の遺構…………………………… 683

2　沖積段丘面の遺構………………………… 661

第５節　第Ⅱ調査区の遺物……………………………………………………………………………………… 694

1　はじめに…………………………………… 694　　2　各時代の遺物…………………………… 694

第６節　まとめ…………………………………………………………………………………………………… 763

付　遺物観察表………………………………………………………………………………………………… 765

Ⅶ　まとめ—周辺遺跡との関連において—………………………………………………………………… 777

1　はじめに…………………………………… 779　　3　まとめ…………………………………… 811

2　各期の概論………………………………… 779　　4　あとがき………………………………… 812

Ⅷ　付載　自然科学的分析の成果……………………………………………………………………………… 819

1　堺市万崎池遺跡ＳＴＫ 118 土壙（墓？）内土壌のリン分析………………………………………… 821

2　太平寺遺跡・西浦橋遺跡の木材の樹種……………………………………………………………… 824

挿 図 目 次

Ⅰ 調査にいたる経過と調査経過

第１図 調査遺跡位置と地区割図……………………4

Ⅱ 考古学的・地理的環境と調査の課題

第１図 周辺遺跡分布図……………………………8
第２図 地形分類と遺跡分布………………………9
第３図 百舌鳥古墳群古墳分布図……………………15
第４図 咄池表採須恵器………………………………21

Ⅲ 西浦橋遺跡

第Ⅱ調査区

第 1 図 調査区位置図……………………………27
第 2 図 基本土層図………………………………30
第 3 図 ＳＴＳ１、ＳＫＡ１平面図・断面図…33
第 4 図 ＳＢＫ１平面図・断面図………………34
第 5 図 ＳＢＫ２〜４平面図・断面図…………35
第 6 図 ＳＢＫ５〜８平面図・断面図…………36
第 7 図 ＳＢＫ５、ＳＢＰ１平面図・断面図…37
第 8 図 竪穴住居址群平面図・断面図……39、40
第 9 図 ＳＢＫ９・10平面図・断面図…………41
第 10 図 ＳＤＡ２断面図…………………………42
第 11 図 ＳＢＰ４・５平面図・断面図…………43
第 12 図 ＳＸ４平面図・断面図…………………44
第 13 図 近世土壙群平面図………………45、46
第 14 図 ＳＫＡ24平面図・断面図………………48
第 15 図 ＳＫＡ23･25、ＳＥ１平面図･断面図…49
第 16 図 旧石器〜弥生時代の石器………………53
第 17 図 旧石器…………………………………54
第 18 図 縄文・弥生式土器………………………55
第 19 図 磨製石器…………………………………56
第 20 図 ＳＤＮ２出土弥生式土器………………58
第 21 図 ＳＤＡ２出土弥生式土器………………59
第 22 図 ＳＤＮ１出土土器・その他……………60
第 23 図 弥生式土器および木器…………………61
第 24 図 木製椅子…………………………………62
第 25 図 包含層出土古式須恵器他………………64
第 26 図 包含層出土須恵器………………………65
第 27 図 ＳＤＮ２出土須恵器……………………67
第 28 図 ＳＤＮ２出土須恵器……………………68
第 29 図 ＳＤＮ２出土須恵器……………………69
第 30 図 ＳＤＮ２出土須恵器……………………70
第 31 図 ＳＤＮ２出土須恵器……………………71
第 32 図 ＳＤＡ４出土土器………………………72
第 33 図 ＳＤＡ３・４、ＳＤＮ９出土土器他…73
第 34 図 包含層出土土器…………………………74
第 35 図 ＳＤＡ２出土６世紀後半須恵器他……75
第 36 図 ＳＤＡ２出土６〜７世紀須恵器………76
第 37 図 ＳＤＮ２出土６〜７世紀須恵器………77
第 38 図 ＳＤＡ２出土須恵器装飾付甕…………78
第 39 図 埴輪……………………………………79
第 40 図 鞴羽口……………………………………80
第 41 図 蛸壺・製塩土器…………………………81
第 42 図 ピット内出土遺物………………………82
第 43 図 ＳＤＡ２出土土器………………………84
第 44 図 ＳＤＡ２出土土器………………………85
第 45 図 包含層出土須恵器………………………86
第 46 図 ＳＤＮ２上層出土８世紀須恵器………87
第 47 図 包含層出土８〜９世紀土器……………88
第 48 図 ＳＤＮ２出土須恵器……………………89
第 49 図 須恵器硯…………………………………89
第 50 図 ＳＤＮ２出土土師器……………………90
第 51 図 施釉陶器…………………………………92
第 52 図 中世土師器・瓦器・須恵器……………93
第 53 図 遺構内出土中世土器……………………94
第 54 図 中国陶磁器・瀬戸・唐津………………97

第 55 図　包含層出土瓦拓影…………………… 100
第 56 図　砥石……………………………………… 102
第 57 図　包含層出土石器………………………… 102
第 58 図　ＳＤＡ５他出土土器………………… 103
第 59 図　備前・丹波・信楽・擂鉢…………… 105
第 60 図　湊焼炮烙・火舎・甕………………… 107
第 61 図　日本刀・湊焼甕……………………… 108
第 62 図　遺構内出土遺物……………………… 109
第 63 図　遺構変遷図（Ⅰ）弥生時代………… 114
第 64 図　遺構変遷図（Ⅱ）古墳時代………… 115
第 65 図　遺構変遷図（Ⅲ）奈良・平安時代… 116
第 66 図　遺構変遷図（Ⅳ）鎌倉・室町時代… 117
第 67 図　字名図………………………………… 145

Ⅳ　菱木下遺跡

第Ⅰ調査区

第 1 図　遺構平面略図……………………151、152
第 2 図　トレンチＦ断面図…………………… 153
第 3 図　ＳＢＫ１平面図・断面図…………… 154
第 4 図　ＳＢＫ２平面図・断面図…………… 155
第 5 図　ＳＢＫ３・４平面図・断面図……… 157
第 6 図　ＳＢＫ３・４小トレンチ断面図…… 158
第 7 図　ＳＤＡ１及び隣接土壙平面図・断面図………………………………………… 162
第 8 図　ＳＫＡ４平面図・断面図…………… 163
第 9 図　ＳＴＳ１平面図・断面図…………… 165
第 10 図　ＳＴＳ１築成断面図及び主体部平面図・断面図……………………………… 167
第 11 図　ＳＴＳ２・３平面図・断面図……… 168
第 12 図　ＳＴＳ２・３周溝切りあい断面図… 169
第 13 図　ＳＴＳ４周溝東壁断面図…………… 170
第 14 図　ＳＴＳ５平面図……………………… 171
第 15 図　ＳＴＳ５・６周溝南壁切りあい断面図………………………………………… 172
第 16 図　ＳＴＳ６・７周溝切りあい断面図… 173
第 17 図　ＳＴＫ１・２平面図・断面図……… 174
第 18 図　ＳＴＰ２平面図……………………… 175
第 19 図　ＳＢＫ５・６平面図・断面図……… 180
第 20 図　ＳＢＰ４平面図・断面図…………… 183
第 21 図　ＳＢＰ11平面図・断面図…………… 184
第 22 図　ＳＢＰ19平面図・断面図…………… 185
第 23 図　ＳＤＡ４遺物出土状況……………… 189
第 24 図　ＳＫＡ10～12平面図・断面図……… 191
第 25 図　ＳＫＡ13～18・20・21及びＳＴＫ20～25平面図・断面図…………………… 192
第 26 図　ＳＴＫ10～16平面図・断面図……… 194
第 27 図　ＳＲ１（古道）断面図……………… 196
第 28 図　トレンチ内出土土器………………… 199
第 29 図　第１・第２包含層内出土土器……… 200
第 30 図　ＳＢＫ１～３内出土土器（ＳＤＡ１内出土土器を含む）…………………… 201
第 31 図　ＳＴＳ１周溝内出土土器…………… 203
第 32 図　ＳＴＳ１主体部（K_2、K_5）内出土土器………………………………………… 203
第 33 図　ＳＴＳ２・３・５周溝内出土土器… 205
第 34 図　ＳＴＳ４周溝内出土土器…………… 207
第 35 図　ＳＴＳ６・７周溝内出土土器……… 209
第 36 図　ＳＴＳ８溝内出土土器……………… 210
第 37 図　ＳＴＳ１～５周溝内出土土器拓影図………………………………………… 212
第 38 図　ＳＴＳ５～８周溝内及びＳＢＫ１内出土土器拓影図………………………… 213
第 39 図　土壙及びピット内出土土器………… 214
第 40 図　ＳＴＳ１周溝内上層出土土器……… 215
第 41 図　ＳＴＳ４周溝内上層出土土器……… 216
第 42 図　ＳＴＳ５・６周溝内上層出土土器… 216
第 43 図　遺構面直上出土土器Ａ……………… 218
第 44 図　遺構面直上出土土器Ｂ……………… 219
第 45 図　ＳＢＫ５内出土土器………………… 221
第 46 図　ＳＢＫ６内出土土器………………… 222
第 47 図　ＳＫＡ21内出土土器………………… 223
第 48 図　ＳＤＡ４内出土土器………………… 226
第 49 図　ＳＢＫ１・３内出土石器…………… 227
第 50 図　ＳＴＳ１・４・６、ＳＤＡ３内出土

石器…………………………………… 228
第 51 図　ＳＢＫ１、ＳＴＳ５、ＳＫＡ20、Ｓ
ＤＡ４内出土石製品………………… 229

第Ⅱ・第Ⅲ調査区

第 52 図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区地形図……………… 239
第 53 図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区地区割図及び南壁土層図…………………………241、242
第 54 図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区弥生時代遺構分布図……………………………………247、248
第 55 図　ＳＢＫ１平面図・土層図・断面図… 252
第 56 図　ＳＫＡ５平面図・土層図……………… 253
第 57 図　ＳＫＡ10平面図・土層図……………… 253
第 58 図　ＳＫＡ11・21・28平面図・土層図・断面図…………………………………… 255
第 59 図　ＳＫＡ27平面図・土層図・断面図… 256
第 60 図　ＳＤＡ９土層図………………………… 258
第 61 図　ピット 101 平面図・土層図………… 258
第 62 図　弥生時代遺構石器・剥片分布図…… 260
第 63 図　古墳時代以降の堆積土中の石器・剥片分布図…………………………………… 260
第 64 図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区古墳時代遺構分布図…………………………………………… 262
第 65 図　ＳＫＡ32平面図・断面図……………… 264
第 66 図　土壙墓切り合い図…………………… 269
第 67 図　副葬品・被覆物を伴う土壙墓……… 276
第 68 図　土壙墓遺物の接合関係図………277、278
第 69 図　ＳＴＫ３平面図・土層図……………… 281
第 70 図　ＳＴＫ25平面図・断面図……………… 281
第 71 図　ＳＴＫ73平面図・土層図……………… 281
第 72 図　ＳＴＫ83平面図・土層図……………… 281
第 73 図　ＳＴＫ 107 ・ 108 ・ 109 平面図・断面図…………………………………… 282
第 74 図　ＳＴＫ 111 平面図・土層図………… 284
第 75 図　ＳＴＫ 160 平面図・土層図………… 284
第 76 図　ＳＴＫ 181 平面図・土層図………… 284
第 77 図　ＳＴＫ 259 平面図・土層図………… 284
第 78 図　ＳＴＫ 265 ・ 269 平面図・土層図… 285
第 79 図　ＳＴＫ 321 ・ 326 平面図・断面図… 286
第 80 図　ＳＴＫ 340 平面図・断面図………… 287
第 81 図　ＳＴＫ 343 平面図・断面図………… 287
第 82 図　ＳＴＫ 347 平面図・断面図………… 287
第 83 図　ＳＴＫ 352 平面図・断面図………… 287
第 84 図　ＳＴＫ 356 平面図・断面図………… 287
第 85 図　ＳＴＫ 361 平面図・断面図………… 288
第 86 図　ＳＴＫ 366 平面図・断面図………… 288
第 87 図　ＳＴＫ 369 平面図・土層図………… 288
第 88 図　第Ⅱ調査区中世遺構分布図………… 302
第 89 図　第Ⅲ調査区中世遺構分布図………… 303
第 90 図　丸瓦分布図…………………………… 305
第 91 図　平瓦分布図…………………………… 305
第 92 図　ⅢＷ区高台礫群平面図・土層図…309、310
第 93 図　ⅢＷ区高台遺構変遷図……………… 311
第 94 図　第Ⅱ調査区ＳＢＰ平面図…………… 316
第 95 図　ⅢＥ区ＳＢＰ平面図………………… 317
第 96 図　ⅡＥ区ＳＤＡ22・24・25土層図…… 319
第 97 図　ⅢＷ区ＳＤＡ31・33・35土層図…… 320
第 98 図　ⅢＷ区ＳＤＡ27土層図……………… 321
第 99 図　ⅢＥ区ＳＤＡ37～41土層図………… 321
第 100 図　ＳＥ１平面図・土層図……………… 323
第 101 図　ＳＥ２平面図・土層図……………… 324
第 102 図　ＳＥ３平面図・土層図……………… 324
第 103 図　ＳＥ４平面図・土層図……………… 325
第 104 図　ＳＥ５平面図・土層図……………… 326
第 105 図　ＳＥ６平面図・断面図……………… 327
第 106 図　ＳＥ７平面図・土層図……………… 328
第 107 図　ＳＥ10～13平面図・断面図……329、330
第 108 図　ＳＥ14平面図・断面図……………… 331
第 109 図　ＳＥ16平面図・土層図……………… 331
第 110 図　ＳＥ17平面図・土層図……………… 332
第 111 図　ＳＴＫ 381 平面図・土層図………… 337
第 112 図　ＳＫＡ43平面図・断面図…………… 338
第 113 図　ＳＫＡ47平面図・土層図…………… 339
第 114 図　ＳＫＡ59平面図・断面図…………… 340
第 115 図　ＳＫＡ61平面図・断面図…………… 340

第116図　ⅢW区高台ＳＫＡ72土層図………… 340
第117図　ⅢＥ区中世後葉（16世紀）遺構分布図…………………………………… 341
第118図　ⅢＥ区近世遺構分布図……………… 341
第119図　ⅢＥ区ＳＫＮ８平面図……………… 341
第120図　ＳＥ18平面図・土層図……………… 342
第121図　ＳＰ１土層図………………………… 343
第122図　第Ⅲ調査区水路及び道路の変遷・南壁土層図………………………………… 345
第123図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区近世・近代井戸分布図………………………………………… 348
第124図　第Ⅲ調査区近代遺構分布図………… 349
第125図　ＳＥ42平面図・断面図……………… 351
第126図　縄文時代石鏃………………………… 352
第127図　第Ⅲ調査区ＳＫＡ27、ＳＤＡ９出土弥生式土器拓影図…………………… 352
第128図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区出土弥生式土器・土製円板……………………………… 356
第129図　第Ⅱ調査区出土弥生式土器………… 359
第130図　第Ⅲ調査区出土弥生式土器………… 360
第131図　第Ⅲ調査区ＳＫＡ26・27出土弥生式土器…………………………………… 361
第132図　第Ⅲ調査区ＳＢＫ１、ＳＤＡ９出土弥生式土器………………………… 362
第133図　第Ⅲ調査区ＳＤＡ９出土弥生式土器…………………………………………… 363
第134図　第Ⅲ調査区ＳＤＡ９出土弥生式土器…………………………………………… 364
第135図　弥生時代石器………………………… 368
第136図　弥生時代石器………………………… 369
第137図　弥生時代石器………………………… 370
第138図　弥生時代石器………………………… 371
第139図　弥生時代石器………………………… 372
第140図　弥生時代石器………………………… 373
第141図　ＳＫＡ32出土須恵器………………… 375
第142図　溝・大落ち込み等出土須恵器……… 376
第143図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区土壙墓出土須恵器…………………………………………… 378
第144図　第Ⅱ調査区土壙墓出土須恵器……… 381
第145図　第Ⅱ調査区土壙墓等出土須恵器…… 382
第146図　第Ⅱ調査区土壙墓出土須恵器・土師器…………………………………………… 383
第147図　第Ⅲ調査区土壙墓出土須恵器……… 384
第148図　第Ⅲ調査区土壙墓出土須恵器……… 385
第149図　陶棺分布図…………………………… 386
第150図　陶棺…………………………………… 387
第151図　陶棺…………………………………… 388
第152図　金環・紡錘車・土錘………………… 389
第153図　建物・礫群関係出土遺物…………… 392
第154図　ＳＥ１出土遺物……………………… 393
第155図　ＳＥ１出土遺物……………………… 394
第156図　ＳＥ１・２出土遺物………………… 395
第157図　ＳＥ３出土遺物……………………… 397
第158図　ＳＥ４・５出土遺物………………… 398
第159図　ＳＥ５出土遺物……………………… 399
第160図　ＳＥ６・７・８出土遺物…………… 400
第161図　ＳＥ10出土遺物……………………… 401
第162図　ＳＥ９・11・12出土遺物…………… 402
第163図　ＳＥ13出土遺物……………………… 403
第164図　ＳＥ14・15出土遺物………………… 404
第165図　ＳＥ16出土瓦質井戸枠……………… 405
第166図　ＳＥ16・17出土遺物………………… 406
第167図　ＳＥ17出土遺物……………………… 407
第168図　ＳＤＡ21・25・28出土遺物………… 408
第169図　ＳＤＡ29・30出土遺物……………… 409
第170図　ＳＤＡ30出土遺物…………………… 410
第171図　ＳＤＡ31出土遺物…………………… 411
第172図　ＳＤＡ31～34出土遺物……………… 412
第173図　ＳＤＡ37・38出土遺物……………… 413
第174図　第Ⅱ調査区溝・土壙出土遺物……… 414
第175図　ＳＫＡ72出土瓦質甕………………… 415
第176図　第Ⅱ・第Ⅲ調査区土壙墓・土壙・大落ち込み出土遺物…………………………… 416
第177図　中世陶器……………………………… 421
第178図　中世陶器……………………………… 422
第179図　常滑・甕の胴部文様………………… 423

第 180 図　瀬戸……………………………………… 425
第 181 図　中国陶磁器…………………………… 426
第 182 図　中国陶磁器…………………………… 427
第 183 図　軒丸瓦………………………………… 429
第 184 図　軒丸瓦………………………………… 432
第 185 図　軒平瓦………………………………… 434
第 186 図　丸瓦…………………………………… 436
第 187 図　平瓦…………………………………… 437
第 188 図　鬼瓦…………………………………… 439
第 189 図　ヘラ描き瓦・墨書土器……………… 440
第 190 図　塼分布図……………………………… 441
第 191 図　板状土製品分布図…………………… 442
第 192 図　板状土製品…………………………… 443
第 193 図　五輪塔………………………………… 443
第 194 図　鉄製品分布図………………………… 445
第 195 図　中世金属製品………………………… 445
第 196 図　鉄滓分布図…………………………… 446
第 197 図　貨銭・鞴羽口・土錘・柱状土製品… 447
第 198 図　滑石製石鍋…………………………… 448
第 199 図　中世石製品…………………………… 450
第 200 図　中世木製品…………………………… 451
第 201 図　ＳＥ６井戸枠材……………………… 452
第 202 図　ＳＥ13井戸枠材……………………… 453
第 203 図　中国陶磁器分布図…………………… 458
第 204 図　日本陶器ねり鉢・すり鉢分布図…… 458
第 205 図　日本陶器甕分布図…………………… 458
第 206 図　近世陶磁器…………………………… 460
第 207 図　近世土器……………………………… 461
第 208 図　近世土製品・貨銭…………………… 462
第 209 図　近世木製品…………………………… 463
第 210 図　ＳＥ43井戸枠瓦……………………… 464
第 211 図　花粉分析試料採集地点……………… 465

Ⅴ　万崎池遺跡

第Ⅰ調査区

第 1 図　調査区位置図…………………………… 489
第 2 図　黒色土器出土状態……………………… 490
第 3 図　現況及び土層図………………… 491、492
第 4 図　ＳＫＡ２・３・４・５………………… 494
第 5 図　黒色土器………………………………… 495
第 6 図　遺物……………………………………… 497

第Ⅱ調査区

第 7 図　ＳＴＫ45平面図………………………… 500
第 8 図　南壁断面図……………………………… 501
第 9 図　弥生・古墳・奈良時代土器…………… 506
第 10 図　中世土器………………………………… 507
第 11 図　瓦・砥石………………………………… 507

第Ⅲ・第Ⅳ調査区

第 12 図　西側谷堤推定位置図…………………… 512
第 13 図　西側谷堤土層断面図…………………… 513
第 14 図　谷標準土層図…………………………… 513
第 15 図　周辺開析谷、古墳時代・弥生時代遺跡位置図…………………………………… 514
第 16 図　ＳＢＫ１・３・４・５・６平面図・断面図……………………………517、518
第 17 図　ＳＢＫ２・11・12・13平面図・断面図……………………………………519、520
第 18 図　ＳＢＫ７・８・９・10平面図・断面図…………………………………………… 521
第 19 図　ＳＢＫ３土壙土器出土状態………… 521
第 20 図　ＳＢＰ14平面図・断面図…………… 522
第 21 図　ＳＸ１平面図・断面図……………… 523
第 22 図　ＳＫＡ２土器出土状態……………… 524
第 23 図　ＳＫＡ４平面図・断面図…………… 524
第 24 図　土壙墓群……………………………… 525
第 25 図　土壙墓須恵器出土状態……………… 535
第 26 図　ＳＤＡ４出土須恵器壺……………… 540
第 27 図　ＳＢＰ17平面図・断面図…………… 541
第 28 図　ＳＢＰ17柱穴内黒色土器出土状態… 541
第 29 図　ＳＢＰ18平面図・断面図…………… 542

第 30 図　ＳＴＫ201・208平面図・断面図… 543
第 31 図　ＳＫＡ６土師皿出土状態…………… 545
第 32 図　ＳＫＡ７・８平面図・断面図……… 545
第 33 図　谷出土弥生式土器…………………… 546
第 34 図　Ｐ24出土縄席文土器………………… 548
第 35 図　ＳＸ１出土管玉……………………… 548
第 36 図　ＳＢＫ13出土土器…………………… 549
第 37 図　西側段丘面出土弥生式土器………… 559
第 38 図　西側谷青灰色粘土・青灰色砂層出土弥生式土器…………………………… 560
第 39 図　西側谷暗黒色粘土層出土弥生式土器……………………………………… 561
第 40 図　東側谷青灰色粘土層出土弥生式土器……………………………………… 562
第 41 図　東側谷暗黒色粘土層出土弥生式土器……………………………………… 563
第 42 図　東側谷暗黒色粘土層出土弥生式土器……………………………………… 564
第 43 図　東側谷暗黒色粘土層出土弥生式土器……………………………………… 565
第 44 図　谷青灰色粘土層出土弥生式土器…… 566
第 45 図　東側谷暗黒色粘土層出土土器……… 567
第 46 図　東側谷暗黒色粘土層出土土器……… 568
第 47 図　東側谷暗黒色粘土層出土土器……… 569
第 48 図　東側谷青灰色粘土層出土遺物……… 570
第 49 図　東側谷暗黒色粘土層出土須恵器…… 571
第 50 図　東側谷出土江戸時代磁器…………… 572
第 51 図　東側谷出土江戸時代土器…………… 573
第 52 図　東側谷出土江戸時代土器…………… 574
第 53 図　谷出土木器…………………………… 575
第 54 図　ＳＢＫ１・２・３・４出土土器…… 576
第 55 図　ＳＢＫ５・６・12出土土器………… 577
第 56 図　ＳＫＡ２・４、ＳＸ１出土土器…… 578
第 57 図　Ｐ24出土土器………………………… 579
第 58 図　土壙墓出土須恵器…………………… 580
第 59 図　土壙墓出土須恵器…………………… 581
第 60 図　ＳＫＡ５・６、ＳＤＡ５、他出土遺物…………………………………… 582
第 61 図　石器…………………………………… 583
第 62 図　石器…………………………………… 584

第Ⅴ調査区

第 63 図　調査区西端南北断面図……………… 597
第 64 図　ＳＢＫ１・２平面図・断面図……… 599
第 65 図　弥生時代ピット及び土壙平面図・断面図………………………………… 600
第 66 図　土壙群上層遺構平面図……………… 601
第 67 図　土壙群平面図及び遺構番号………… 602
第 68 図　土壙群時期別変遷図………………… 609
第 69 図　土壙平面図・断面図………………… 611
第 70 図　ＳＢＰ１平面図・断面図…………… 616
第 71 図　ＳＢＰ２平面図・断面図…………… 618
第 72 図　ＳＢＰ３平面図・断面図…………… 619
第 73 図　ＳＢＦ１、ピット群５平面図・断面図…………………………………… 620
第 74 図　ＳＰ１～７遺構平面図・断面図…… 622
第 75 図　ＳＥ３平面図・断面図……………… 624
第 76 図　石器…………………………………… 627
第 77 図　弥生式土器・土師器・黒色土器…… 628
第 78 図　土壙群他出土須恵器………………… 630
第 79 図　土壙群出土須恵器…………………… 631
第 80 図　土壙群周辺出土須恵器……………… 632
第 81 図　M14区南壁下層出土遺物他………… 633
第 82 図　中・近世遺物………………………… 635
第 83 図　ＳＰ２出土下駄……………………… 636

Ⅵ　太平寺遺跡

第Ⅱ調査区

第 1 図　太平寺遺跡の位置…………………… 647
第 2 図　太平寺遺跡周辺現地形……………… 648
第 3 図　調査区及び地区割…………………… 649
第 4 図　太平寺遺跡周辺旧地形……………… 651
第 5 図　周辺の条里地割及び坪付…………… 652
第 6 図　第Ⅱ調査区土層及び遺構面概略図… 653

第 7 図　ボーリング柱状図……………………… 654
第 8 図　氾濫原土層柱状図……………………… 655
第 9 図　氾濫原最終筋掘Cトレンチ土層断面図…………………………………………… 655
第 10 図　F5北壁断面図……………………… 656
第 11 図　沖積段丘土層柱状図………………… 657
第 12 図　第Ⅱ調査区調査方法………………… 660
第 13 図　最終筋掘Bトレンチ断面図………… 661
第 14 図　縄文時代遺構平面図………………… 662
第 15 図　E5－c・d北壁断面図……………… 663
第 16 図　弥生時代～古墳時代前半遺構平面図………………………………………665、666
第 17 図　古墳時代中期遺構平面図………669、670
第 18 図　SBK1・2実測図………………… 671
第 19 図　SDN2土層断面図………………… 674
第 20 図　SBP1実測図……………………… 677
第 21 図　平安時代以降遺構平面図………679、680
第 22 図　SBP2実測図……………………… 681
第 23 図　F6・G6北壁断面図……………… 684
第 24 図　SKA8実測図……………………… 685
第 25 図　江戸時代遺構平面図……………687、688
第 26 図　粘土掘削跡実測図………………689、690
第 27 図　縄文式土器拓影図…………………… 694
第 28 図　石器…………………………………… 697
第 29 図　SBP1・2、床土出土土器……… 726
第 30 図　氾濫原出土瓦拓影図………………… 727
第 31 図　古墳時代遺構及び遺構上面包含層（茶黒色粘質土層）の地点別遺物出土状況………………………………… 733
第 32 図　古墳時代包含層下層(黒色粘質土層)の地点別遺物出土状況………………… 734
第 33 図　古墳時代の地点別鉄滓・砥石・鞴羽口出土状況…………………………… 735
第 34 図　須恵器ヘラ記号拓影図……………… 736
第 35 図　須恵器叩き目・ヘラの痕跡等拓影図…………………………………………… 736
第 36 図　SBK1・2、SKN6、SDN2Ⅰ期、黒色粘質土層、灰茶色粘質土層出土土器………………………… 737
第 37 図　SKN7出土土器…………………… 738
第 38 図　茶黒色粘質土層出土須恵器………… 739
第 39 図　茶黒色粘質土層出土須恵器………… 740
第 40 図　茶黒色粘質土層出土須恵器………… 741
第 41 図　茶黒色粘質土層出土須恵器………… 742
第 42 図　茶黒色粘質土層出土須恵器………… 743
第 43 図　茶黒色粘質土層出土土器…………… 744
第 44 図　茶黒色粘質土層出土土師器………… 745
第 45 図　SDN2Ⅱ期出土須恵器…………… 746
第 46 図　SDN2Ⅱ期出土須恵器…………… 747
第 47 図　SDN2Ⅲ期出土須恵器…………… 748
第 48 図　SDN2Ⅲ期出土須恵器…………… 749
第 49 図　SDN2Ⅱ・Ⅲ期出土須恵器……… 750
第 50 図　SDN2Ⅲ期出土須恵器…………… 751
第 51 図　SDN2Ⅲ期出土須恵器…………… 752
第 52 図　SDN2Ⅲ期出土須恵器…………… 753
第 53 図　SDN2Ⅲ期出土土器……………… 754
第 54 図　室町時代洪水跡出土土器…………… 755
第 55 図　室町時代洪水跡出土遺物…………… 756
第 56 図　江戸時代洪水跡出土土器…………… 757
第 57 図　蛇行州及び後背湿地堆積層出土遺物…………………………………………… 758
第 58 図　江戸時代水田跡・シルト堆積層出土遺物……………………………………… 759
第 59 図　SDN3、SKA4・5出土土器… 760
第 60 図　鞴羽口・鉄滓………………………… 761
第 61 図　砥石…………………………………… 762

Ⅶ　まとめ

第 1 図　TK103（上段）ON222（下段）出土蓋杯……………………………… 793
第 2 図　万町北遺跡10世紀建物群遺構図…… 804
第 3 図　西ノ辻遺跡中世期遺構図…………… 805
第 4 図　和気遺跡第35工区遺構図…………… 806
第 5 図　出羽国東置賜郡土豪屋敷…………… 807
第 6 図　福田片岡遺跡中央地区遺構図……… 807

表　目　次

Ⅱ　考古学的・地理的環境と調査の課題

第１表　百舌鳥古墳群墳形・規模一覧表…………18
第２表　石津川流域遺跡群地形立地存続時期（地形分類は前栞和子氏による）……22

Ⅲ　西浦橋遺跡

第Ⅱ調査区

第１表　遺構集計表……………………………31
第２表　竪穴式住居址一覧表…………………34
第３表　掘立柱建物一覧表……………………43
第４表　土壙・埋甕一覧表……………………47
第５表　石器数量表……………………………51
第６表　縄文式土器出土地点別数量表………52
第７表　弥生式土器包含層内出土地点別数量表…58
第８表　ＳＤＮ２出土弥生式土器数量表…………58
第９表　方形周溝墓出土遺物数量表……………58
第10表　須恵器甕体部外面格子叩き目出土地点別数量表……………………………63
第11表　埴輪出土地点別数量表………………79
第12表　製塩土器出土地点別数量表…………79
第13表　鞴羽口出土地点別数量表……………79
第14表　蛸壺出土地点別数量表………………80
第15表　製塩土器出土地点別数量表…………91
第16表　施釉陶器出土地点別数量表…………91
第17表　黒色土器出土地点別数量表…………92
第18表　東播系練り鉢型式別・出土地点別数量表……………………………………92
第19表　青磁碗出土地点別数量表……………95
第20表　白磁出土地点別数量表………………95
第21表　中国染付出土地点別数量表…………96
第22表　常滑焼出土地点別数量表……………96
第23表　平瓦・丸瓦出土地点・層位別数量表……98
第24表　平瓦型式別数量表……………………98
第25表　平瓦型式別・出土地点・層位別数量表……………………………………99
第26表　丸瓦型式別数量表……………………99
第27表　丸瓦型式別・出土地点・層位別数量表……………………………………101
第28表　窯壁片出土地点別数量表……………101
第29表　砥石出土地点別数量表………………101
第30表　近世陶器出土地点別数量表…………104
第31表　湊焼出土地点別数量表………………106
第32表　５世紀後半から６世紀初頭における遺跡別出土遺物組成表……………………110
第33表　遺構別器種組成数量表………………111
第34表　ＳＤＮ２出土土器時期別組成一覧表…112
第35表　蛸壺形土器出土地名表(1)～(3)……140～142

Ⅳ　菱木下遺跡

第Ⅰ調査区

第１表　弥生時代の竪穴住居址…………………160
第２表　焼土・炭化物共伴土壙…………………163
第３表　１号周溝墓の主体部墓壙………………166
第４表　３号周溝墓の主体部墓壙………………169
第５表　５号周溝墓の主体部墓壙………………170
第６表　６号周溝墓の主体部墓壙………………172
第７表　方形周溝墓一覧表………………………173
第８表　周溝墓外土壙墓一覧表…………………175
第９表　竪穴住居址内土壙一覧…………………179
第10表　竪穴住居址内出土土器比較表…………181
第11表　掘立柱建物一覧表………………………182
第12表　土壙一覧表………………………………190
第13表　土壙墓一覧表……………………………195

第Ⅱ・第Ⅲ調査区

第14表　弥生時代溝（ＳＤ）一覧表……………… 249
第15表　弥生時代土壙（ＳＫＡ）一覧表……… 250
第16表　古墳時代土壙（ＳＫＡ）一覧表……… 265
第17表　古墳時代大落ち込み（ＳＫＮ）一覧表
……………………………………………… 266
第18表　古墳時代溝（ＳＤ）一覧表……………… 266
第19表　土壙墓の形態・規模別分類表………… 272
第20表　土壙墓の形態別数量表………………… 272
第21表　土壙墓の形態別数量図………………… 273
第22表　土壙墓遺物接合表(1)・(2)…………279、280
第23表　古墳時代～奈良時代土壙墓一覧表(1)～
(12)………………………………………289～300
第24表　第Ⅱ・第Ⅲ調査区出土瓦数量表……… 304
第25表　中世遺構の区画と変遷表……………… 307
第26表　中世掘立柱建物（ＳＢＰ）・柵（ＳＦ）
一覧表……………………………………… 315
第27表　中世溝（ＳＤＡ）遺構一覧表………… 318
第28表　中世井戸（ＳＥ）一覧表……………… 322
第29表　中世土壙墓（ＳＴＫ）、土壙（ＳＫ
Ａ）、大落ち込み（ＳＫＮ）一覧表
(1)～(4)………………………………333～336
第30表　近世井戸（ＳＥ）一覧表……………… 346
第31表　幕末～近・現代井戸（ＳＥ）一覧表… 350
第32表　第Ⅱ様式遺構別器種別数量表………… 353
第33表　第Ⅲ様式遺構別器種別数量表………… 355
第34表　ＳＤＡ９出土遺物数量表……………… 358
第35表　弥生式土器の器種組成及び胎土組成の
比率………………………………………… 358
第36表　弥生時代石器数量表…………………… 365
第37表　縄文・弥生時代石器一覧表(1)・(2)…366、367
第38表　陶棺出土遺構一覧表…………………… 386
第39表　菱木下遺跡主要器種の時期別推移…… 390
第40表　軒丸瓦一覧表…………………………… 430
第41表　軒平瓦一覧表…………………………… 435
第42表　丸瓦・平瓦一覧表……………………… 438
第43表　鬼瓦一覧表……………………………… 439
第44表　塼の厚さ別数量図……………………… 442
第45表　金属器出土の遺構・包含層一覧表…… 444
第46表　金属器一覧表…………………………… 444
第47表　鉄滓出土の遺構・包含層一覧表……… 446
第48表　滑石製品一覧表………………………… 448
第49表　中世砥石一覧表………………………… 449
第50表　主要遺構器種別出土量(1)・(2)……456、457
第51表　地区別陶磁器出土量…………………… 457
第52表　主要遺構時期別出土量………………… 457
第53表　近世土製品一覧表……………………… 461
第54表　ＳＥ43の井戸枠瓦一覧表……………… 464
第55表　菱木下遺跡花粉分析結果(1)・(2)…466、467

Ⅴ　万崎池遺跡

第Ⅱ調査区

第１表　土壙一覧表(1)・(2)……………………502、503

第Ⅲ・第Ⅳ調査区

第２表　竪穴住居址一覧表……………………… 515
第３表　土壙墓群一覧表(1)～(9)……………526～534
第４表　中世土壙墓一覧表……………………… 544
第５表　遺構別主要器種出土量………………… 551

第Ⅴ調査区

第６表　ＳＢＫ１ピット法量表………………… 600
第７表　土壙一覧表(1)～(6)…………………603～608
第８表　万崎池遺跡第Ⅴ調査区土壙群法量（長
軸）一覧表………………………………… 610
第９表　万崎池遺跡第Ⅳ調査区土壙群法量一覧
表…………………………………………… 610
第10表　土壙墓長軸及び底面標高の関係……… 614
第11表　平安時代掘立柱建物ピット一覧表…… 617

Ⅵ　太平寺遺跡

第Ⅱ調査区

第１表　縄文時代土壙一覧表……………………… 662
第２表　弥生時代～古墳時代前半落込み一覧表
……………………………………………… 664
第３表　古墳時代の遺物組成とその割合……… 698
第４表　坏及び高坏坏部の体部高・口径よりみた法量の分布状況……………………… 699
第５表　高坏脚部と坏部の組み合わせ………… 703
第６表　䟽・直口壺の法量と平均値…………… 704
第７表　坏内底面仕上げナデ…………………… 718
第８表　坏蓋内天井面の仕上げナデ…………… 718
第９表　須恵器甕胴部叩き……………………… 719
第10表　沖積段丘面鞴羽口数量表……………… 721
第11表　遺構・地点・層位別砥石一覧表……… 722
第12表　遺構・層位別鉄滓重量表……………… 723
第13表　沖積段丘面出土遺物数量表…………… 731
第14表　古墳時代遺構・上面包含層出土遺物の組成とその割合………………………… 732

Ⅶ　まとめ

第１表　和泉地域縄文時代遺跡存続期………… 782
第２表　遺跡出土土器数量・比率……………… 790
第３表　和泉地域古代中世寺院創建時期……… 809

付　図　目　次

Ⅲ　西浦橋遺跡

付図１　西浦橋遺跡第Ⅱ調査区遺構平面図

付図２　西浦橋遺跡第Ⅱ調査区シガラミ

Ⅳ　菱木下遺跡

付図３　菱木下遺跡第Ⅱ調査区遺構平面図

付図４　菱木下遺跡第Ⅲ調査区遺構平面図

付図５　菱木下遺跡第Ⅱ・第Ⅲ調査区土壙墓平面図

付図６　菱木下遺跡第Ⅱ調査区中世遺構平面図

付図７　菱木下遺跡第Ⅲ調査区中世遺構平面図

Ⅴ　万崎池遺跡

付図８　万崎池遺跡第Ⅰ調査区遺構平面図

付図９　万崎池遺跡第Ⅱ調査区遺構平面図

付図10　万崎池遺跡第Ⅲ調査区（西半）遺構平面図

付図11　万崎池遺跡第Ⅳ調査区（西半）遺構平面図

付図12　万崎池遺跡第Ⅳ調査区（東半）遺構平面図

付図13　万崎池遺跡第Ⅴ調査区遺構平面図

Ⅵ　太平寺遺跡

付図14　太平寺遺跡第Ⅱ調査区土層縦断面図

付載挿図目次

図１　万崎池遺跡土壙ＳＴＫ118試料土壌採取位置概略図……………………………… 821

付載表目次

表１　試料土壌中のリン含量（PPm）………… 823

表２　太平寺遺跡出土材樹種一覧表…………… 824

表３　西浦橋遺跡出土材樹種一覧表…………… 824

付載写真図版目次

Plate 1　西浦橋遺跡杭列材……………………… 825

Plate 2　西浦橋遺跡杭列材……………………… 826

Plate 3　太平寺遺跡出土材……………………… 827

Plate 4　太平寺遺跡出土材……………………… 828

Plate 5　太平寺遺跡出土材……………………… 829

Ⅰ　調査にいたる経過と調査経過

Ⅱ　考古学的・地理的環境と調査の課題

Ⅰ　調査にいたる経過と調査経過

今回の調査は、都市計画道路府道松原～泉大津線建設に伴う事前調査である。この道路は美原町丹上を基点とし、泉大津市助松町迄の全長15.7kmの主要幹線道路である。基点から堺市小阪までは近畿自動車道和歌山線との併設区間であり、堺市小阪から終点までが松原～泉大津線の単独区間となる。昭和40年7月都市計画決定され、昭和46年3月事業認可がなされた。

このような道路計画の進展の中で、大阪府教育委員会が大阪府土木部と埋蔵文化財の取扱いについて協議を行ない、とりあえず路線内の分布調査と周知遺跡の範囲確認の調査を実施することとなった。そして、昭和50年2月10日付で大阪府より当センターに、府道堺かつらぎ線から府道大阪臨海線間の分布試掘調査の依頼があり、同年2月から3月にかけて調査を実施した。その結果、東より堺市所在太平寺遺跡、万崎池遺跡、菱木下遺跡、西浦橋遺跡、鶴田池東遺跡の5ヶ所の新規の遺跡が発見され、和泉市観音寺遺跡と大園遺跡の範囲確認がなされた。それは『都市計画道路松原～泉大津線建設予定地内遺跡試掘分布調査報告書』として、昭和50年3月当センターから刊行された。

その後、新規遺跡については、大阪府教育委員会の手で試掘調査が昭和54年4月になされた。この調査結果に基づき、再度大阪府教育委員会と大阪府土木部で協議がなされ、府道堺かつらぎ線（石津川）から和田川迄の4遺跡（太平寺遺跡～西浦橋遺跡東半部）についての調査依頼が昭和55年4月、大阪府から当センターにあった。昭和55年7月当センターと大阪府の間で受託契約が締結され、調査実施の運びとなった。

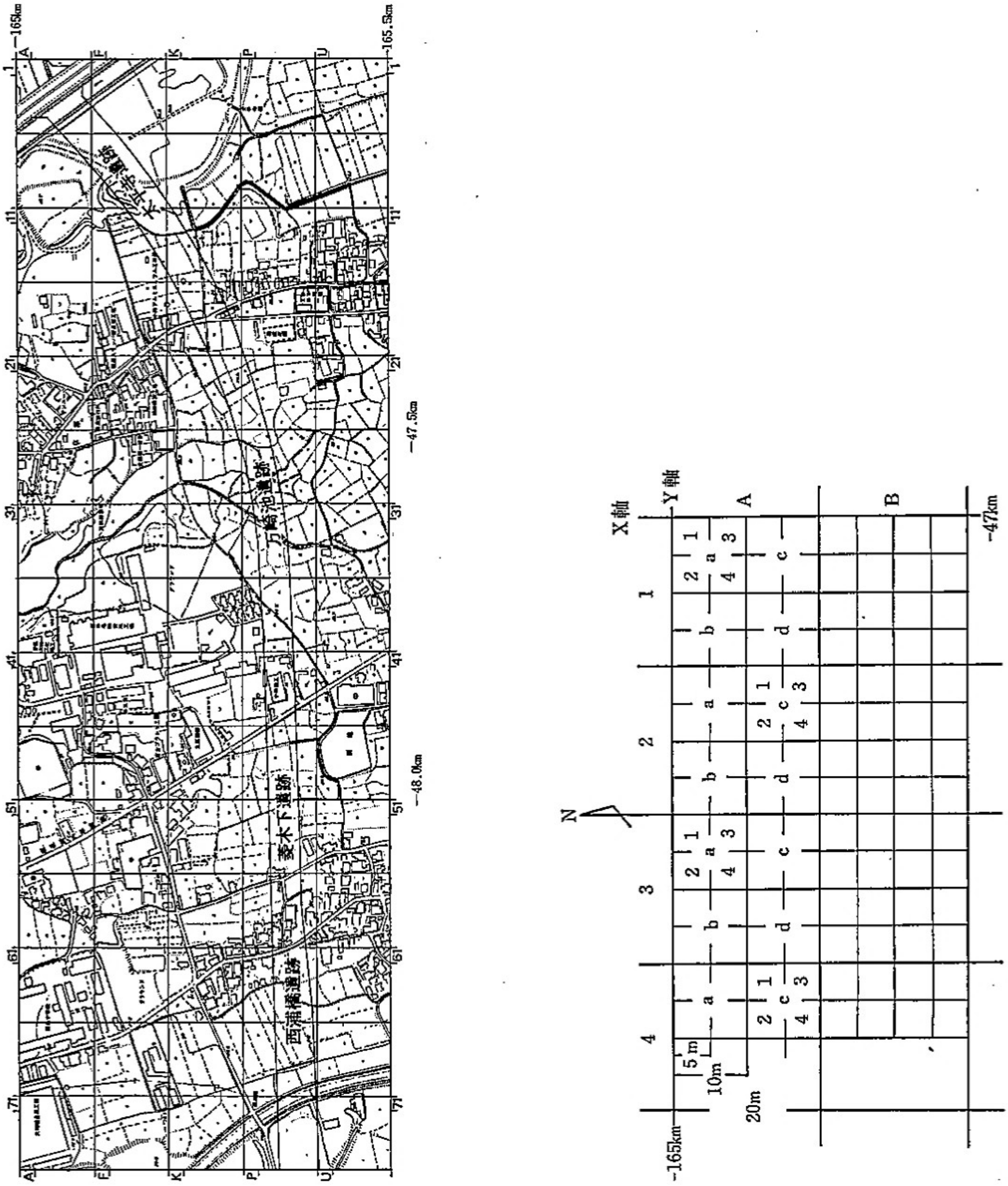
昭和55年8月12日付で、文化財保護法第57条第1項に基づき、文化庁長官あて、埋蔵文化財発掘調査届出書を提出、昭和55年1月16日付で文化庁長官より通知があった。

昭和55年7月より西浦橋遺跡を除く3遺跡について調査が開始され、昭和57年3月に調査は終了した。西浦橋遺跡は若干遅れ、昭和56年9月より調査を開始し、昭和57年3月調査を終了した。なお西浦橋遺跡は当初設計土量を大幅に上まわったので、昭和57年度も引続き調査を実施した。

遺構遺物量の多さに比べて整理期間が短く、本報告書の完成はかなり遅れたが、ようやく今完成の運びとなった。

以下遺跡ごとの調査面積を記しておく。

遺跡名	所在地	面積（㎡）
西浦橋遺跡	堺市　菱木	4,809（第2調査区）
菱木下遺跡	堺市　菱木	12,300
万崎池遺跡	堺市　草部、太平寺	31,200
太平寺遺跡	堺市　太平寺、平井	6,100



第１図　調査遺跡位置と地区割図

Ⅱ　考古学的、地理的環境と調査の課題

第１章　各遺跡の地理的立地

今回報告する遺跡群はすべて石津川流域の歴史として捉えられる。遺跡群は、石津川本流とその支流である和田川に挟まれた段丘とその開析谷、埋積谷の上に立地する。段丘は、洪積段丘と沖積段丘に分類できる[1)]。遺跡群の立地する洪積段丘は主として中位段丘であって、今回の調査地には低位段丘は存在しなかった。沖積段丘は縄文後期以後に形成されたことが今回の調査で明らかになった。

和田川右岸に面した氾濫原と沖積段丘が西浦橋遺跡の西半部にあたり、東半部は中位段丘上に位置する。菱木下遺跡から万崎池遺跡まではすべて中位段丘上に立地する。勿論、段丘上にはいくつかの開析谷と堆積谷が存在し、その微地形への対応こそが、各遺跡、各時代の特質を示すものである。東端の太平寺遺跡は旧石津川の右岸に位置し沖積段丘と氾濫低地上に立地する。

今回の調査は和田川右岸から石津川右岸まで、約 1.4㎞にわたる調査であり、両河川の氾濫原から氾濫原までの旧地形を露呈させたことになる。全調査区間の約67％が中位段丘、約22％が沖積段丘及び氾濫原、11％が谷地形である。段丘崖の傾斜は石津川側に急で、和田川側は緩い。そして中位段丘にはかなり地形の起伏がみられる。大きな谷地形としては、万崎池遺跡第Ⅱ調査区と第４地区の間に存する幅35m、深さ２～３mの南南東一北北西にのびる谷地形と、菱木下遺跡第Ⅱ調査区の南に存在する新池から北北西にのびる谷の２本がみられ、枝谷としてそれぞれ２～３本の谷がみられる。それ以外にも菱木下遺跡第Ⅰ調査区の中心部に、北北西一南南東方向の小谷、万崎池遺跡第Ⅴ調査区に東一西方向の小谷などがみられる。今回の調査地区の中で最も高い地点は万崎池遺跡第Ⅰ調査区と第Ⅳ調査区でＴ．Ｐ．26.5m、低い地点が西浦橋遺跡の西端部と太平寺遺跡の東部でＴ．Ｐ．20.5m、比高約６mである。各遺跡の微地形と遺構の関係は後章で詳述されるが、概括的に述べるならば、住居址は中位段丘と沖積段丘上に、土壙墓は埋積浅谷の斜面地、方形周溝墓は中位段丘上等を中心に造営されているといえる。水田は検出できなかったが、西浦橋遺跡で検出された堰遺構から導水する溝の延長にある地形から、谷地形を利用した水田が予想される。

時代ごとの遺構・遺物と地形との関係を簡単に記すならば、旧石器時代遺物のプライマリーなあり方はみられなかったが、遺物はほぼ中位段丘全体にみられた。即ち、西浦橋遺跡、菱木下遺跡、万崎池遺跡においてである。縄文時代の遺構としては、西浦橋遺跡の西半部の沖積段丘上に晩期の土壙がみられたが、遺物としては、太平寺遺跡の沖積段丘においても検出され、早期末前期、後期、晩期の土器がみられた。今の所、中位段丘上には縄文時代の明確な遺構・遺物は検出

されていない。弥生時代前期の遺構は検出されておらず、この時期の居住区は確定できないが、西浦橋遺跡内の沖積段丘から中位段丘の縁辺にあたる所に小規模に存在したと推定される。中期になると中位段丘の谷地形に面した所に住いしたらしく、菱木下遺跡のほぼ全域と万崎池遺跡第Ⅲ、第Ⅳ調査区、西浦橋遺跡で遺構・遺物が検出された。後期の遺構としては、中期同様、中位段丘上に確認されている。すなわち、万崎池遺跡第Ⅴ調査区に竪穴式住居の存在が知られ、同第Ⅲ調査区の谷からは遺物が検出された。全期間を通じて最も豊富で広範囲の遺構・遺物の検出をみた時期は古墳時代である。即ち、石津川の沖積地から和田川の沖積地までのほぼ全域に亘って、豊富な遺構・遺物の検出がなされた。西浦橋遺跡の中位段丘の縁辺、菱木下遺跡第1地区の中位段丘上、万崎池遺跡第Ⅲ調査区の中位段丘の埋積谷及びその縁辺、太平寺遺跡沖積段丘上等で古墳時代の竪穴式住居が検出された。菱木下遺跡や万崎池遺跡で検出された土壙墓群は中位段丘上にある小さな谷地形の斜面地に立地している。奈良時代として明確にできる遺構は西浦橋遺跡の西半部の沖積段丘上及び中位段丘上の菱木下遺跡で検出できた。又前述の菱木下遺跡、万崎池遺跡のいくつかの土壙墓群もその時期である。平安時代に入ると地域開発の動向の中で新たな集落の形成がみられるようになる。中位段丘上の万崎池遺跡第Ⅳ、第Ⅴ調査区、沖積段丘上の太平寺遺跡などで掘立柱建物がみられた。又同時期と考えられる溜池用の堤防が万崎池遺跡の開析谷の中に築造されていた。12世紀以降15世紀までの集落としては中位段丘上の西浦橋遺跡、菱木下遺跡第Ⅱ、第Ⅲ調査区で検出されている。西浦橋遺跡の沖積段丘上は主にこの時期の水田として利用されていた。又万崎池遺跡の中位段丘に数基の土壙墓群が形成されていたが、古墳時代から奈良時代にかけての土壙墓群とはいささか異なる立地であった。

以上概略的に各遺跡の遺構・遺物の検出立地について述べてきたが、その詳細はⅢ以降の各遺跡の論述の中で展開されるものである。遺構立地がどれだけ時代性を反映しているかは同時期のすべての遺構立地が明らかになるなかでしか捉えられないかもしれないが、いえることは同じ性格を想定できる遺構が連綿と同じ立地にあるということではなく、比較的短期間にその立地を変えていることが多い。ただし、菱木下遺跡と万崎池遺跡にみられる土壙墓は5世紀末から8世紀までの長期間にわたって造営されたものである。又水田についても沖積段丘上に奈良時代もしくは平安時代以降今日まで連続して立地している点で、他の遺構とは異なっているといえる。

第2章　石津川流域の遺跡群とその立地条件

第1節　旧石器時代・縄文時代

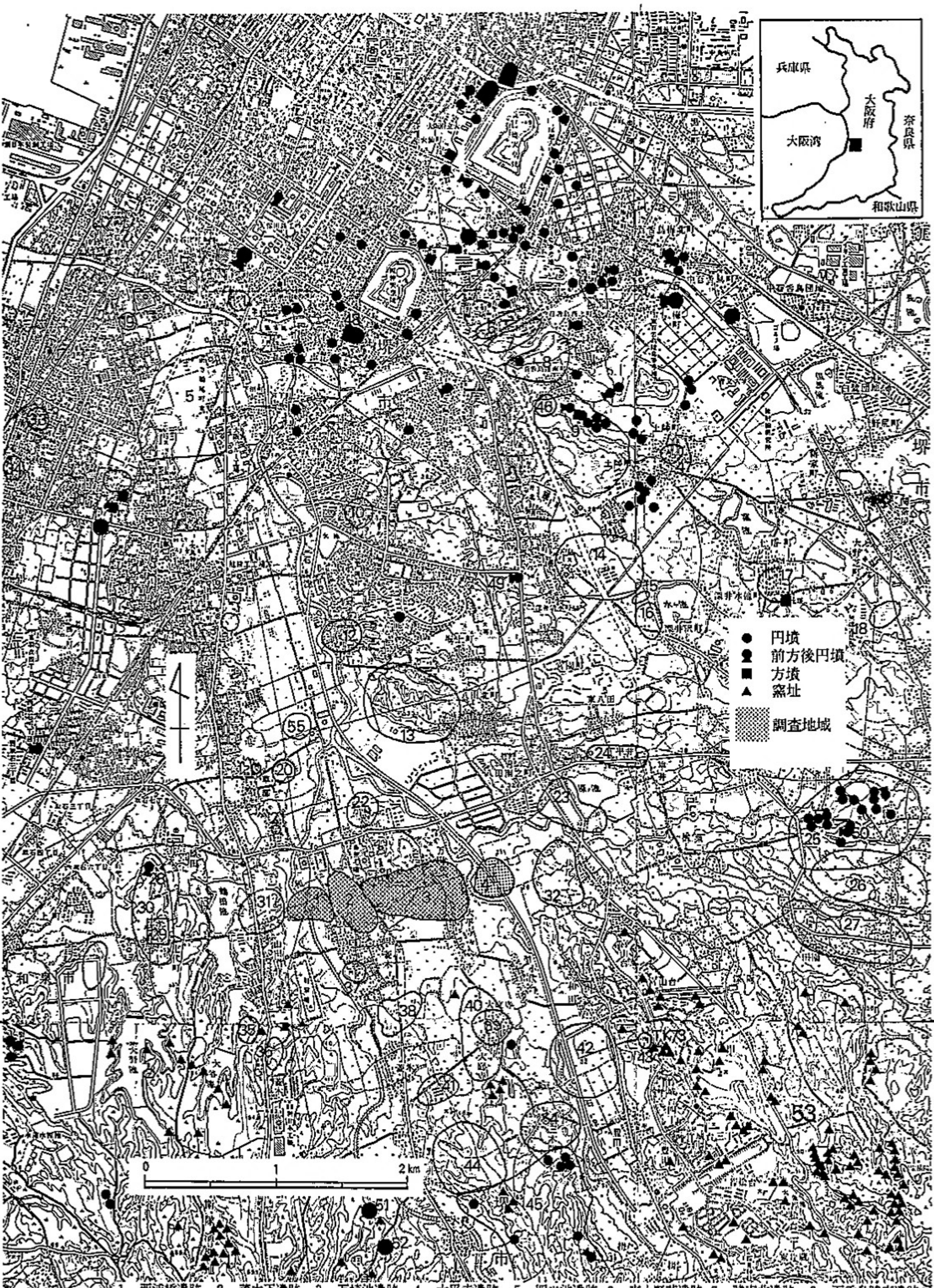
今回の調査で検出された3ケ所の遺跡の旧石器はいずれも原位置を保っていず、後世の遺物とともに出土したものである。石津川流域の他遺跡においても旧石器の出土は知られているが、いずれも2次的な堆積物で、一般に量も少ないが、鈴の宮遺跡[2)]では一定の量のまとまりをもって出

土している。広い意味でのナイフ形石器文化に属する遺跡としての野々井遺跡[3]、鈴の宮遺跡、尖頭器及び有舌尖頭器の時代としての百舌鳥本町遺跡[4]、野々井遺跡、四ツ池遺跡[5]等がある。いずれも中位段丘上に立地する。

縄文時代の遺跡としては、今回太平寺遺跡から出土した早期末〜前期初頭の土器がこの地域で最古のものといえる。今迄中期の遺構・遺物は知られていない。四ツ池遺跡[6]の沖積層から後期前葉から中葉にかけての遺構・遺物が検出されている。即ち第２阪和国道建設に伴う事前調査での三光台地北西端Ｆ地区における土壙、ピット等の遺構と遺物、台地東北部第17区における溝、ピットなどの遺構と遺物の検出がそれである。四ツ池遺跡以外でも縄文時代後期の遺跡が２ヶ所調査されている。１ヶ所は西浦橋遺跡[7]であり、もう１ヶ所は西浦橋遺跡から北に 1.2㎞離れた石津川左岸の沖積段丘上に立地する上(かむろ)遺跡[8]である。時代としてはほぼ四ツ池遺跡のものと同じ頃のもので、後期前葉から中葉のものである。後期後葉から晩期中葉までの遺跡は石津川流域においては希薄である。確実な人跡として次に認められる時代は晩期でも終末に近い、凸帯文の甕を有する時期である。先にのべた四ツ池遺跡、西浦橋遺跡、上遺跡の他、太平寺遺跡の北北西約1.7㎞、上遺跡の石津川を挟んだ対岸にあたる鈴の宮遺跡[9]がこの時期のものである。鈴の宮遺跡も他遺跡同様沖積段丘上に立地する。今迄の調査においては自然河川のみしか検出されていず、そこから凸帯文の甕を中心とする遺物が多く出土した。以上の４遺跡以外にも石津川支流の百舌鳥川に面した中位段丘の開析谷から凸帯文土器が出土している。陵南遺跡[10]である。又、西浦橋遺跡の対岸にあたる鶴田池東遺跡[11]から緑色片岩製石刀が検出されており、厳密な時期は確定できないが終末から余りかけはなれた時期ではないであろう。鶴田池東遺跡は上位段丘上と段丘斜面、開析谷にまたがって立地している。石刀は開析谷から出土した。四ツ池遺跡の西北西１㎞の砂堆上に黄金山遺跡[12]があり、そこからも凸帯文土器が出土したとされている。鶴田池東遺跡を除いて他の４遺跡はいずれも晩期終末の時期のもので、弥生文化がこの地に成立する直前もしくはすでに稲作を開始している時期の所産である。これらを相互にどう関連づけるかがこの報告書の第１の課題となる。

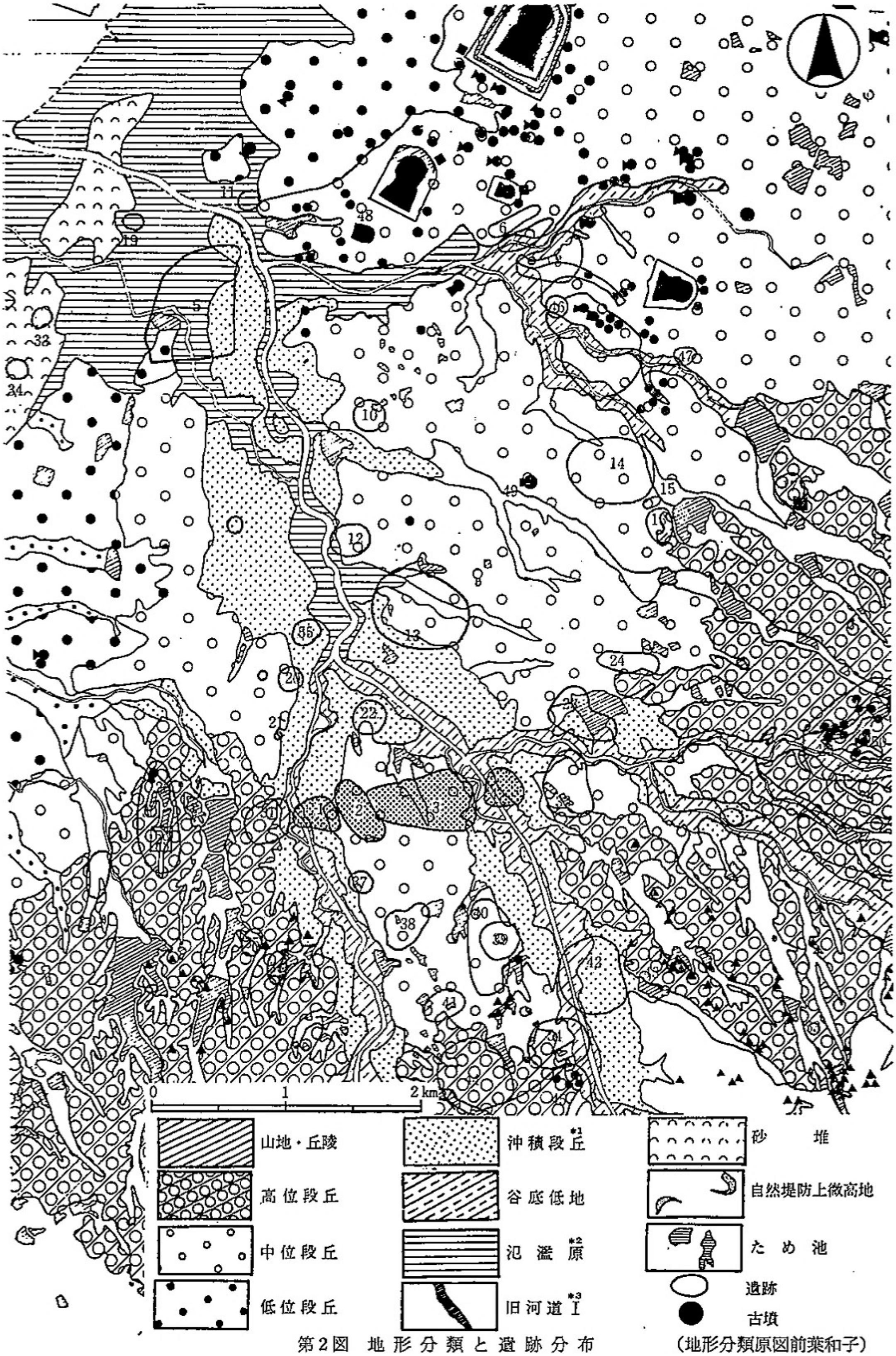
以上のべてきた石津川流域の縄文時代の遺跡についてはその立地の点で、石津川を眼前にのぞむ沖積段丘、もしくは氾濫原に立地する遺跡、洪積段丘の開析谷をのぞむ位置に立地する遺跡、海にのぞむ砂堆上の遺跡の３種類に分けられる。これらの立地差が遺跡の遺構・遺物の点でどう異なり、地域内における相互関連がどうであったかについては今後の課題である。これら遺跡の出土土器から石津川流域における沖積段丘の形成時期が縄文時代後期前葉まで遡ることを示している。又、太平寺遺跡における北白川下層式土器の出土から前期迄その形成が遡ることもありえるが遺物が二次的堆積の結果である為、可能性にとどめざるをえない。

四ツ池遺跡出土の縄文晩期の凸帯文甕形土器に籾痕があり、縄文時代終末期における稲の存在を確証しているが、この四ツ池遺跡こそ、縄文時代後期以降、とりわけ晩期終末弥生文化成立期以降、この地域の歴史的核としての役割を果した遺跡である。



1．西浦橋遺跡　2．菱木下遺跡　3．万崎池遺跡　4．太平寺遺跡　5．四ツ池遺跡　6．東上野芝遺跡　7．陵南北遺跡　8．百舌鳥陵南遺跡　9．土師遺跡　10．史跡家原寺境内　11．石津遺跡　12．毛穴遺跡　13．鈴の宮遺跡　14．15．16．深井清水町遺跡　17．史跡大野寺土塔　18．福田遺跡　19．船尾西遺跡　20．草部遺跡　21．御山古墳　22．万崎遺跡　23．小阪遺跡　24．平井遺跡　25．陶器千塚　26．辻之遺跡　27．田園遺跡　28．黄金塚古墳　29．信太寺跡　30．上代遺跡　31．鶴田池東遺跡　32．伏尾遺跡　33．浜寺黄金山遺跡　34．浜寺昭和町遺跡　35．山田古墳群　36．山田遺跡　37．散布地A　38．散布地B　39．大庭寺跡　40．散布地C（咄池）　41．散布地D　42．深田遺跡　43．多治速比売神社本殿　44．野々井遺跡　45．牛石古墳群　46．百舌鳥陵南町廃寺　47．土師廃寺　48．大塚山古墳　49．観音山古墳　50．御坊山古墳　51．野々井古墳　52．二本木山古墳　53．陶邑古窯址群　54．散布地E　55．上遺跡

第1図　周　辺　遺　跡　分　布　図



第2図　地形分類と遺跡分布　　（地形分類原図前薬和子）

第2節　弥　生　時　代

四ツ池遺跡[13]は石津川の左岸にあり、低位段丘と沖積段丘にまたがって存在する。低位段丘上で標高約11～12m、沖積段丘上で標高約4～5mである。数年前までは台地の下にあたる氾濫原には弥生時代以前の遺構・遺物は存在せず、台地およびその縁辺に限られると考えられてきたが、最近の調査により台地東の地表面からかなり深い位置に遺構・遺物が確認されつつある。この様な状況は単に四ツ池遺跡だけでなく、石津川流域の沖積地のすべての遺跡についていえることは先にふれたとおりである。

四ツ池遺跡の調査としては三光台地といわれる低位段丘の先端、現在浜寺中学校が建っている地区での昭和20年代以降の調査、昭和40年代の第2阪和国道建設に伴う台地北側の縁辺から氾濫原にかけての調査、それ以降の区画整理事業等の大小の開発に伴う洪積段丘、沖積段丘上の事前調査などが知られている。これらの調査の結果、四ツ池遺跡の歴史は弥生時代・古墳時代を中心にほとんど途切れることなく、今日に至ってることが判明した。

台地の東に広がる沖積段丘には数多くの溝、自然河川が検出されているが、とりわけ大きな埋積谷が3本みられ、弥生時代の集落を複数に区切っている。調査担当者はこの遺跡を大きく3群の集落単位に分割できると指摘している[14]。台地上の集落、台地東側の集落、台地の東北部の集落がそれである。仮にそれらを第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ集落とするなら、第Ⅱ、第Ⅲ集落は沖積段丘上に立地するものである。台地上の第Ⅰ集落の全体像を必ずしも捉えた訳ではないが、ほぼ弥生時代全期間にわたって存在していたとされている。第Ⅱ集落は、中期中葉の実態は不明であるが他時期は集落として存在したようである。第Ⅲ集落も中期中葉から後期前半までに集落が消滅されたとされているが、遺物としては存在するようで、集落の継続がなかったかどうかは未だ断定しがたいと考える。そして重要な点は、台地北部と西北部にある方形周溝墓群が第Ⅰ集落の墓域とするなら、第Ⅱ集落も中期前葉と後葉の方形周溝墓群を有していることである。

成立時点が第Ⅰ集落と他の2集落とで少し差があり、後者が若干遅れるとされるが、少なくとも前期後葉から中期前葉にかけて3群の集落が存在し、その後もほぼ2群の集落として独立した墓域を有して存在していたこと、又、第Ⅰ集落の全容が十分解明された訳ではないが、集落規模、区画溝の存在などの点で、第Ⅰ集落が第Ⅱ、第Ⅲ集落を凌駕していることは明らかである。ただし、第Ⅰ集落の中で一体いくつの単位集団が含まれていたのか、一つだけなのか、複数なのかなどの基本点においても不明な点が多いが、先に述べた方形周溝墓のあり方からみて、2つ以上の集団の存在は確実であろう。そして、これらの事実をどう認識するかが四ツ池ムラの歴史像の構築に不可欠であり、第Ⅰ集落がその成立の時点から一貫して、このムラの主導権を持ちえたのか、全く反対に2群ないし3群が全くの対等関係としてあったのか、ある時点から優劣関係が生じたのか等々さまざまな可能性がある。

四ツ池遺跡における集落実態とその変遷過程は石津川流域の弥生諸集落とも無関係ではありえ

なかったであろうが、未だ十分には整理しえない段階である。

縄文時代晩期後葉の集落が、四ツ池遺跡、黄金山遺跡、陵南遺跡、鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡などで存在していたことは先にふれたが、これらの集落はいずれも小さな集落であり、決して大規模な集落とは考えられない。ただ西浦橋遺跡では土器棺、土壙などが存在し、一定期間の定着性は裏付けられた。しかし、この地域における縄文土器の中にしめる河内産土器の割合は、弥生土器におけるそれと比較して、非常に高く[15]、決してこの地域だけに基盤をおいて生活したとは考えられない面がある。この地域における弥生文化の受容の点からみた場合、凸帯文土器に籾痕があり、最も古い弥生土器が存在する四ツ池遺跡が、その核となって活動したことはその後の集落展開から明らかである。四ツ池遺跡以外で弥生時代前期の集落として存在したのは、鈴の宮遺跡、上遺跡、西浦橋遺跡、石津遺跡である。いずれも、弥生時代前期後半からのムラの成立である。弥生時代前期前葉から中葉の段階において鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡が四ツ池遺跡における弥生文化の受容過程と併行して縄文時代の生活様式を基本的に固守していたのか、一旦集落が消滅していたのか今後の問題として残る所である。ただ弥生文化のこの地域における受容過程と展開過程の中で、四ツ池ムラ内部の集団関係—第Ⅰ集落と第Ⅱ、第Ⅲ集落の関係—と同様、石津川流域における弥生諸遺跡の集団関係が成立していたと想定される。即ち、弥生文化の核としての水稲農耕の技術体系の伝達と維持は何らかの政治性を生みだす契機になりえたであろうから。しかし広瀬和雄氏が指摘している[16]ように、水稲農耕にとって最も必要とされる水であっても、初期水稲耕作の技術段階においては、集団間の利害を生むような水利関係はなかったと推定される。その意味では農耕を維持していく為の生産手段の確保、たとえば水田確保の為の土木事業とそれを遂行するための農具の生産及び関連する石器などの資源の確保等々を通して地域諸集団関係が成立していったのであろう。しかし全体としてこの時期の小規模な集団における自立性の強い生活においては、地域内での一定の人口圧に達するまでは、先鋭化した集団関係には到らなかったであろう。つまり弥生時代中期後葉までのこの地域における社会関係はゆるやかな紐帯関係にとどまったと言えるのではなかろうか。

先にあげた弥生時代前期から継続している中期の集落の他に、鈴の宮遺跡のすぐ北西の石津川の右岸の中位段丘上にある毛穴遺跡[17]は弥生時代中期前葉から中葉にかけてムラが成立したようである。万崎池遺跡の成立も中期中葉からである。これらはいずれも弥生文化の受容以降の耕地の外延的拡大の一環として、周辺の遺跡から定着したものであろう。前者は鈴の宮遺跡との間にある谷地形、後者は段丘の小さな開析谷を生産基盤とした集落であったであろう。近接性から言えば、毛穴遺跡と鈴の宮遺跡、万崎池遺跡と西浦橋（菱木下）遺跡は大きくは同じムラとして考えるべきかもしれない。鶴田池東遺跡も中期からの成立である[18]。

砂丘上の遺跡については、先にあげた黄金山遺跡の他、日明山遺跡[19]、浜寺公園遺跡[20]等々後背湿地を生産基盤としたと考えられる遺跡が多く知られているが、実態は余り知られていない。四ツ池遺跡から約1㎞の範囲にあるこれらの遺跡群と四ツ池遺跡との関係についても長い間の課題の

ままである。

石津川流域における弥生時代中期の展開は、前期以降の耕地の分散的拡大の結果としての集落の成立とその後の展開として捉えられ、基本的には集団関係の大きな変動もなく推移したように見える。即ち、西浦橋遺跡で検出された中期前葉から中葉における水利施設としての杭列群遺構にみられる技術的到達点を基盤に、各遺跡が独自の世界を形成していたようである。

弥生時代後期における動向としては、四ツ池遺跡第Ⅱ集落における集落規模の縮小、鈴の宮遺跡、菱木下遺跡における中期後葉から後期にかけての集落の衰退現象が読みとれる点等々、弥生時代でのこの地域における最も大きな変化が看取される。上記遺跡の衰退現象とは反対に新たな集落の成立がこの地域でみられる。万崎池遺跡第Ⅴ調査区におけるそれと野々井遺跡のそれである。前者は竪穴住居址２棟である。野々井遺跡は標高60mの中位段丘上にあり、万崎池遺跡の南約 2.5kmの位置にある。長径60.5m、短径45mの環濠の中に５棟の竪穴住居を有し、環濠外にも１棟以上の竪穴住居が存在する。時期的には、弥生時代後期末葉から庄内式土器の時期とされ、鈴の宮、菱木下、万崎池などの諸遺跡がその痕跡を全くもたない時期のものである。この環濠集落はいわゆる集落全体をとりかこむのではなく、環濠の内にある１棟の大型住居を含む有力勢力と環濠外にある劣勢勢力とに分裂した２つ以上の単位集団を有する集落である[21)]。弥生時代前期から中期にかけてゆるやかな紐帯関係として成立していた集団関係が中期後葉から後期以降、何らかの理由で集団関係が大きく変化したことをこの集落の成立は物語っている。

なお石津川流域において浜寺町遺跡、菱木遺跡、陶器北遺跡など３ヶ所の銅鐸出土遺跡があるが、これらについては、浜寺町、陶器北、菱木の順に型式的に新しいものとされている[22)]。そして石津川流域全体を１つの祭祀圏と考えるか最低３つの祭祀圏を想定するのかによっても問題の所在は異なってくる。

第３節　古　墳　時　代

弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉にかけての集落実態は先にふれた同じ野々井遺跡の第Ⅲ、第Ⅳ地区において最もまとまった状態で検出されている。

野々井遺跡は高位段丘から中位段丘にかけて立地し、先の第１調査区は中位段丘に立地し、他は高位段丘上に立地している。担当者が全体を６調査区に分けたいずれからも古墳時代初頭以降の集落・古墳などが検出されている。報告書が未刊の為、詳細な変遷過程は不明であるが、いくつかの貴重な事実が明らかになっている[23)]。即ち、第１調査区の弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての集落の後続集落として、高位段丘上に４群の古墳時代前期の集落が存在する。いずれも１時期２～３棟前後で１単位をなしている。最南端にある第３調査区の南にかたまった８棟の住居址はいずれも一辺６～ 6.5mで、他群の住居址に比べて大形である。野々井遺跡古墳時代前期の中心地区と考えられる。但し、古墳時代前期の４群の集落がすべて同時期なのか、連続的に存在したのかは不明である為、中心地区とした集落の歴史的位置は今は不明である。この野々井

遺跡における古墳時代前期集落群の形成のあと、同じ所に集落が形成されるようになるのは、泉北窯址群の最古の窯が築造された時期と考えられる[24)]。少くとも庄内式土器の時期から継続的に集落が存在したのではなく、一時集落の廃絶のあと泉北窯址群で須恵器が生産されはじめる時期まで空白であった。従って、いわゆる布留式の前半の集落は不在であった。

石津川流域で他に庄内式の時期の集落として明確なのは四ツ池遺跡である[25)]。最近の調査で、先に述べた第Ⅲ集落で、１辺約５ｍの竪穴式住居が２棟１単位で検出されている。他地区でも同時期の遺構が検出されているが、明確な住居址は検出されていない。同時期の他遺跡としては、石津川支流の陶器川の右岸にある沖積段丘上の小阪遺跡[26)]がある。遺跡の全面的調査は行なわれていず、その内容は不明である。鈴の宮遺跡の南端部の沖積段丘上においても庄内式土器が検出されているが、集落実態は不明である。他に石津川の下流の石津遺跡[27)]においても同時期の土器が確認されている。

この古墳時代初頭の遺跡は、四ツ池遺跡、石津遺跡などの弥生時代以来継続して存在する沖積段丘上の遺跡群、小阪遺跡のように以前の痕跡がなく、この時期に新たに集落が営まれ始めた遺跡、弥生時代後期末葉に高位段丘の直下に突然集落が成立し、その後さらに上方の高位段丘上に集落を構えた野々井遺跡の３つに分けられる。第１のタイプは集落内の動向としてはその内に様々な経緯はあったとしても一貫して同じ場所で継続した遺跡であり、第２のそれは、従来遺跡として存在しえなかった自然条件から集落立地が可能となった新たな自然条件―可耕地―への進出として捉えることが可能である。又第３の野々井遺跡の場合、その成立から展開まで、この地域の歴史を語る上で重要な位置を占めるものである。しかし、環濠をもつ集落が、周辺に可耕地として余り余地のない点での生産基盤の問題、それ以後さらに高位に居を移していることの意味、等々問題が多い。石津川流域における弥生時代後期後半の集落がごく限られた所にしかなく、空白に近い状況にあることは先にふれたが、この野々井遺跡の成立が、小阪遺跡のような新たな可耕地への集落全体の単なる移動といったものではなく、その立地からみて、かなり無理な状況への移動として捉えられる。そして、それ以降の古墳時代初頭における丘陵上への移動は環濠集落の新たな展開として捉えることが可能である。環濠内の住居址群は先にふれた第３調査区の大形建物群への移動であり、環濠外の住居址は周辺住居群への移動と捉えることができる。万崎池遺跡第Ｖ調査区の弥生時代後期の集落もそれ以後には続かず、少なくとも第Ⅳ調査区の古墳時代中期の集落まで、松原～泉大津線内の遺跡は姿をけすことになる。その意味で、弥生時代後期末から古墳時代初頭までの集落は、この地域ではこの野々井遺跡しか存在しないことになる。現状からみて、庄内期の集落から連続する集落としては氾濫原にある四ツ池遺跡や石津遺跡などに限られ、他の集落での継続性は確認されていない。しかし和田川上流左岸にある二本木山古墳[28)]の存在からみて、庄内期以降、須恵器生産の開始以前においても、この地域において集落が群在していたことは確実であろう。二本木山古墳以外にも石津川中流域において検出したほぼ同時の古墳は他に２基ある。１基は太平寺遺跡の南東 400ｍの丘陵上にある古墳であり[29)]、他の１基は今回万崎

池遺跡第１調査区で検出されたものである。後者は削平されており規模等は不明であるが、円筒埴輪が検出された。これら２基の古墳の存在は在地首長とそれに統轄されたムラムラの存在を裏付けるものである。

須恵器生産開始前後の集落としては四ツ池遺跡、石津遺跡の他、これらと同じ集落の構成単位になるかもしれない船尾西遺跡[30)]がある。四ツ池遺跡、石津遺跡と同様氾濫原に立地している。

船尾西遺跡を含めたこれら３遺跡は四ツ池集落群として捉えられる程、５世紀前葉から末葉迄、ほぼ同時的に集落を営んでいたと考えられる。船尾西遺跡は６世紀以降中世までは集落としての立地は認められないが、石津遺跡、四ツ池遺跡は古墳時代以降も連綿と集落が営まれた。

これら３遺跡以外にも石津川支流百舌鳥川左岸の氾濫原を前にした洪積段丘の縁辺に立地する仲野町遺跡があるが[31)]、規模等は不明である。

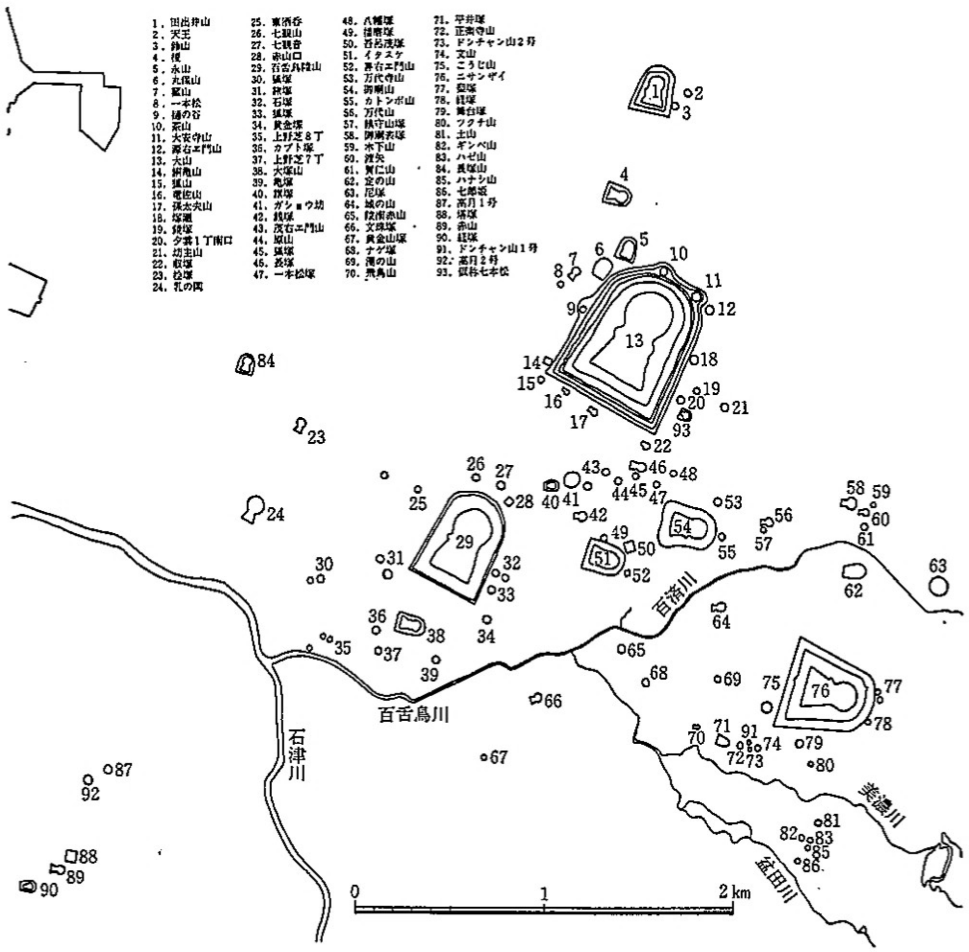
百舌鳥古墳群成立を乳の岡古墳築造をもってそれにあて、その時期を４世紀末５世紀初頭に比定すれば、少なくとも同時もしくは直前の遺跡としては、今の所先述した四ツ池集落群しか知られていない。しかし石津川中流域における小古墳の存在は下流域における遺跡群以外にかなりの数の集落の存在を想定せしめるとともに地域的・政治的結合体の存在を推定せしめるものである。しかも乳の岡古墳を在地首長墓として位置づけるなら、二本木山古墳の上位者としての首長墳と規定でき、ヤマト王権の墓域としての百舌鳥古墳群の形成にとっても、極めて重要な役割を果たしたと推定される。

石津川流域における弥生時代成立以降の最大の画期は５世紀前葉から中葉にかけての時期である。即ち、それは百舌鳥陵山古墳にはじまる大王陵造営、それにわずかに遅れて開始される泉北窯址群における須恵器生産の開始、石津川流域の新たな遺跡群の成立という点にそれは顕現している。古墳造営、生産、集落のいずれからみてもこの時期がこの地域における最大の画期であることは確かである。

百舌鳥古墳群という名で知られる古墳群は約 100基の大小の古墳から成り立っている。形としては、前方後円墳、帆立貝形古墳、円墳、方墳などである。しかし個々の古墳については十分に解明された例は少なく、未だ古墳群全体を構造として捉えきれていない状況である。従来、百舌鳥古墳群としては石津川右岸を南限とし、田出井山古墳を北限、尼塚古墳を東限とする範囲とされ、石津川左岸の浜寺四ツ塚については一応別扱いとされていたが、百舌鳥古墳群を大王陵としての古墳群、在地首長墓としての古墳群を複数にもつ古墳群の集合体としてとらえ、その地域の一体性を基準にするなら当然浜寺四ツ塚古墳群は百舌鳥古墳群の範囲内で捉えるのが妥当であろう。

調査することなく消滅した古墳がある為、正確な古墳の形態、数値は不明であるが、今日多く人の努力で判明している古墳について概略すれば次の如くである[32)]。（第１表）

形態がほぼ判明している古墳が88基、内前方後円墳が20基、帆立貝形古墳11基、方墳７基、円墳50基である。勿論この中には前方後円墳が破壊され、円墳としての形状しか残存していない可能性のものなども含まれる。又数値の判明している69基のうち、前方後円墳は全長 487mの大山



第3図　百舌鳥古墳群古墳分布図

古墳から50mの銭塚古墳まで存在する。少なくとも50m以上のものしかこの形態をとらないことが分る。帆立貝形古墳は全長87mの丸保山古墳から収塚古墳や塚廻古墳の35mまで存在する。方墳の最大のものは塔塚古墳で１辺45m、小さいものは天王古墳の19mである。円墳は大安寺山古墳の径60mを最大とし、坊主山古墳の10mを最小とする。それぞれの最大値を比較すると、前方後円墳、帆立貝形古墳、円墳、方墳の順になる。古墳における階層差を示すものなのであろう。

規模の上から百舌鳥古墳群をいくつかに分けるとすれば、まず 150mをこえる大形古墳が７基ある。そのうち二重濠をもつ古墳が５基存在する。藤井寺市津堂城山古墳に初現する二重濠の形態をそれ以後のヤマト王権の大王陵とする為の規定的な一要素としえるかどうか確認しえた訳ではないが、田出井山古墳を除く大山古墳、百舌鳥陵山古墳、ニサンザイ古墳、御廟山古墳の４古墳が他の古墳と画然とその規模を異にする点、特異な外部施設の形態としての二重濠の存在は大王陵としてこれらの古墳を位置づけても妥当性を失うものではないのではなかろうか。田出井山古墳については、その大きさの点で問題点も指摘されているが、百舌鳥古墳群中の在地首長墓と

想定される古墳の中で大形古墳としての乳の岡古墳、大塚山古墳、イタスケ古墳が同時期の大王陵と比較して規模の上で圧倒的な差を有している事実、古墳時代前期末から中期初頭にかけての在地首長古墳の規模の上での相対的大形性などから田出井山古墳と同時代の在地首長墓との規模の上での隔絶性はよみとれるであろう。又田出井山古墳の大王陵としての規模の小ささそのものについては王権の変遷過程の中で改めて論じるべきであろう。

大王陵としての5基を除く 151m以上の2基と100mから150mまでの4基の1群は、乳の岡古墳にはじまる在地首長墓系列として捉えられるであろう。その規模の大きさは、石津川流域に本拠地をおく地域首長として単に存在しただけでなく、ヤマト王権を背景とした和泉全体の地域支配を想定しえるものである。これら在地首長墓がどう変遷していったかについては明瞭に指摘しえず、その終末についても不明である。これら 100mクラスの古墳がいずれも中期後半以前の時期を想定され、大王陵における田出井山古墳、ニサンザイ古墳の時期の在地首長墓がどれに相当するかが問題になるが、今の所どの古墳がそれに相当するかは明確にすることは出来ない。ヤマト王権内部における和泉地域の首長の相対的な位置の変化、和泉地域内部における首長権の変化等々も問題となるであろう。

石津川流域をこえた在地首長権の表象としての 100m規模の古墳一終末期にはかなりの小規模化が想定されるが一の下位の一群としては数10m前後の古墳がある。百舌鳥古墳群では規模の点で第3のランクを位置づけられる古墳である。これらの古墳の最も大きな特色は、一定のまとまりを有する点である。比較的よくまとまっている古墳群としては、先にふれた浜寺四ツ塚古墳、ニサンザイ古墳の北1kmの範囲に存在する定の山古墳、尼塚古墳、大木山古墳、渡矢古墳など10基近い古墳群、御廟山古墳、大山古墳、百舌鳥陵山古墳にかこまれた中に存在する鉢塚古墳、旗塚古墳、ガショウ坊古墳などの一群がある。その他にも平井塚古墳や文珠塚古墳など百舌鳥川流域の一群、大山古墳の西北にある菰山古墳、樋の谷古墳などの存在も陪冢であるなしの問題をこえて解明されなければならない一群である。

この規模のもう1つの特色は必ずしも一定の形態で存在するのではなく、前方後円墳もあり、帆立貝形古墳もあり、塔塚古墳の如き方墳、ガショウ坊古墳のような円墳もあるといった様々な形態をもっている点にある。古墳群ごとの十分な変遷過程をおえない為、必ずしもその形態のもつ意味については十分説明しえない。いずれにしてもこれらの古墳は、石津川流域を中心とした地域を統轄した複数グループの首長墓であることは確かである。それは石津川左岸から大津川右岸に存在する首長墓系列[33)]における取石地区、信太地区の中期以降の古墳とほぼ同じ規模を有している点からもそのことは言えるのではないかと考える。どのグループが一体どの地域を基盤として成立したのか、又先に述べたもう1ランク上位の首長との関係をどう捉えるかなどの問題も本報告書の課題として残るものである。

規模の点で最も小さな古墳としては10mから20mの小円墳と小方墳である。規模の判明している約70基のうちの½近くを占める約30基がこの規模である。この古墳も一定の群集性をもってい

る。即ち、ニサンザイ古墳群の南に存在する10基以上の円墳群、御廟山古墳、大山古墳、百舌鳥陵山古墳にかこまれた範囲にある一群、百舌鳥陵山古墳の西南に存在する数基の一群などである。この中には大王陵や大形古墳に近接する小古墳を除いてあるが、既述した古墳の中にも陪冢として存在する古墳もあるかもしれないが、数は少ないと考える。又多くの消滅したものも含まれる為、今後どこまで復原分析が可能かも問題もあるが、これらの古墳をどう捉えるかが百舌鳥古墳群の解明にとって不可欠の条件であることは確かである。

これら小古墳は今迄のべてきた規模からみた階層性の点より、村落首長級の墓[34]として捉えられる可能性を有している。必ずしもこのことを明確に証明しうるものではないが、ニサンザイ古墳の南に存在する古墳群は陵南遺跡[35]、土師遺跡[36]との関係を想起せしめるものであり、イタスケ古墳近くにある古墳群は東上野芝遺跡との関連を想定させるものであるといえるからである。勿論想定される村落数が現在存在する小古墳のすべてで割り切れるものではないが、一応考える余地があると考える。

以上大雑把に百舌鳥古墳群についてその規模と分布から４つの階層性を想定しえるとしたが、今後さらに細かな資料操作と分析を通じて百舌鳥古墳群の構造的解明と歴史的解明がなされねばならないし、その資料のいくつかは今回の報告書の中で語られることになるであろう。そしてその一端として、百舌鳥古墳群と同時期の集落について述べることとする。

先に石津川流域における最大の画期を５世紀前葉から中葉にかけておくことを述べ、その根拠の１つとして、流域における新たな集落の形成をあげた。最近10年における石津川流域において調査された遺跡としては百舌鳥川支流の百済川と美濃川の流域にある中位段丘上の４つの遺跡、石津川中流域右岸の沖積段丘上の４つの遺跡、石津川と和田川にはさまれた中位段丘上の３つの遺跡、和田川右岸丘陵上の１遺跡、対岸の同左岸段丘上の２遺跡がある。以下簡単に各遺跡についてふれていく。

百舌鳥川流域遺跡群と呼称できる東上野芝遺跡[37]、陵南北遺跡[38]、陵南遺跡、土師遺跡はいずれも開析谷に挟まれたそれほど広くない中位段丘面に立地している。４遺跡の生産基盤としての水田は狭小な開析谷と百済川と美濃川の氾濫原のみで、大規模な水田は到底望めない立地である。いずれも標高約20mの所に立地し、東上野芝遺跡の 150m北にはイタスケ古墳、陵南北遺跡の段丘西端には赤山古墳が存在し、陵南遺跡の東約200mには湯の山古墳、土師遺跡の東北150mには全長58mの平井塚古墳、そのすぐ東にドンチャン山古墳、正楽寺山古墳などの小古墳があり、 500m東北にニサンザイ古墳が存在する。これらの遺跡はいずれも、５世紀中葉から６世紀中・後半までを中心とする集落である。但し部分的には７世紀以降にも継続する。

４遺跡の中で最も北にある東上野芝遺跡から竪穴住居２棟、掘立柱建物５棟が検出され、竪穴住居から掘立柱建物への変化が５世紀後半から６世紀にかけてあったと報告者は述べている。遺物としては、須恵器と土師器を中心とし、その比率は３：１で、圧倒的に須恵器が多いことが示されている。又鉄滓、鞴羽口、製塩土器が出土している。

第1表　百舌鳥古墳群墳形・規模一覧表　（中井正弘「伝仁徳陵と百舌鳥古墳群」大阪府教育委員会「大阪府文化財地名表」による。）

法量 / 形態	10～19m No.	20～29m No.	30～39m No.	40～49m No.	50～69m No.	70～99m No.	100～149m No.	150～199m No.	200m～ No.	法量不明 No.	計	取石地区・信太地区古墳群 No.
円墳	一本松(8) 鏡塚(19) 坊主山(21) ナゲ塚(68) 湯の山(69) 正楽寺山(72) 聖塚(77) 高月1号(87)	狐山(15) 東酒呑(25) 七観音(27) 石塚(32) 上野芝8丁(35) カブト塚(36) 上野芝7丁(37) 狐塚(45) カトンボ山(55) 陵南赤山(65) ドンチャン山2号(73) 経塚(78) 舞台塚(79) ドンチャン山1号(79)	塚廻(18) 狐塚(33) 原山(44) 八幡塚(48) 万代寺山(53) ?木下山(59)	樋の谷(9) 源右エ門山(12)	茶山(10) 大安寺山(11) 七観山(26) ?亀塚(39) ガショウ坊(41)	茂右エ門山(43)				?狐塚(30) ?旅塚(31) 一本松塚(47) 万代山(56) 鎮守山塚(57) 賀仁山(61) 黄金山塚(67) ツクチ山(80) ?土山(81) ?ギンベ山(82) ?ハゼ山(83) ?ハナシ山(85) ?七郎姫(86) 高月2号(92)		鍋塚 60～70m 王塚 46m 狐塚 56m
小計	8	14	6	2	5	1				14	50	
方墳	天王(2) ?赤山(28) ?夕雲1丁南(20)	鈴山(3) ?銅亀山(14) ?吾呂茂塚(50)	菅右エ門山(52)	塔塚(88)								
小計	3	3	1	1							8	
帆立貝形			収塚(22) 菰山(7)	尼塚(63) 仮称七本松(93)	竜佐山(16) 旗塚(40) こうじ山(75) 経塚(90)	丸保山(6) 御廟表塚(58) 定の山(62)						貝吹山 50m
小計			2	2	4	3					11	
前方後円墳					孫太夫山(17) 銭塚(42) 文珠塚(66) 平井塚(71)	榎(4) 城の山(64)	永山(5) 長塚(46) イタスケ(51) 長塚山(84)	田出井山(1) 乳の岡(24) 大塚山(38) 御廟山(54)	大山(13) 百舌鳥陵山(29) ニサンザイ(76)	桧塚(23) ?播磨塚(49) 渡矢(60) ?飛島山(70) 赤山(89)		丸笠山 96m 黄金塚(34) 85m 大園 50m 富木車塚 48m
小計					4	2	4	4	3	5	22	
形態不明										文山(74)		
小計										1	1	
計	11	17	9	5	13	6	4	4	3	20	92	

陵南北遺跡も東上野芝遺跡とほぼ同様の時期の成立と存続である。但しこの遺跡は過去の削平がひどく遺構の残存状況はよくなく、わずかに６世紀の掘立柱建物が検出されたのみである[39)]。しかし遺物としては土器以外に木製の鞍が出土し、注目されている。陵南遺跡はすでに縄文時代晩期の遺跡として述べたが、中心は先の２遺跡と同様５世紀後半から６世紀後半までである。遺構としては竪穴住居13棟、掘立柱建物10棟が重複関係をもって存在した。ここでは必ずしも竪穴住居から掘立柱建物への変遷を確認されなかったが、１単位もしくは２単位の単位集団の集落変遷であるといえる。鉄滓等の遺物は検出されなかった。

最南端に立地する土師遺跡は細い開析谷に幾本にもきざまれた段丘上に立地する。集落は大きく２単位に分かれ、美濃川右岸に立地するのは中世集落であり、美濃川と盆田川にはさまれた部分に５世紀中葉から６世紀にかけての集落が存在する。５世紀の住居址は南北に走る中央の溝より東にあり、竪穴住居４棟が検出されている。１辺 8.5mの方形の竪穴住居の北壁にはカマドが付設されていた。他の住居址は１辺４mから５mのものである。６世紀の竪穴住居は６棟あり、南北の中央溝の両側に３棟づつ存在していた。但しこれらが同時期かどうかは不明であるが、すべて同時期として３単位に分けられる。この集落からは土器以外に製塩土器、鉄滓、鞴羽口、子持勾玉、有孔円板などが出土している。この集落には同時期の掘立柱建物は検出されなかった。又南北溝内から９基の円筒埴輪棺が検出されている。この溝は５世紀末に一旦埋め戻され、その後６世紀初頭の時期に棺を埋葬したとされている。集落成員の特性をこの埋葬形態は示しているのだろうか。

以上４つの集落は調査範囲の限定を考えても、特別大規模な集落では決してない。これらの集落だけで百舌鳥古墳群造営の主体とはなりえないことは明らかである。もっと小単位の集落が多く存在したことを暗示している。判明している竪穴住居址を合計しても同時期せいぜい10棟前後である。集落全体がでたとしても、その３倍にはならないだろうと考えられる。陵南北遺跡の実態は今１つ不明な点が多い。土師遺跡と東上野芝遺跡における鉄滓、鞴羽口、製塩土器の存在、初期須恵器の存在等の共通性は、陵南遺跡の様相とかなり大きく異なっている。おしなべて同一内容の集落が同一地域にあったのではないことを証明している。又住居形態にしても、初期の須恵器を有していても、掘立柱建物を住居としていたのではなく、竪穴住居址がかなり遅くまでこの地域に残ることが明らかになった。

石津川中流域右岸遺跡群とよべる鈴の宮遺跡[40)]、太平寺遺跡、深田遺跡[41)]、豊田遺跡[42)]のうち後者２遺跡は百舌鳥川流域遺跡群と同様、５世紀中葉から後半にかけての成立である。鈴の宮遺跡は縄文時代から集落が営まれていたが、古墳時代中期の集落としては丘陵縁辺と沖積段丘上に立地し、竪穴住居は丘陵縁辺に立地している。５世紀後半の住居址以外に土壙、溝も出土している。同時期の窯が集落のすぐ近い部分で検出されている。しかしきわめて小規模な集落であったと考えられる。

深田遺跡は石津川右岸の標高約30mの沖積段丘上に位置する。すぐ東の丘陵上に多治速比売神

社があり、遺跡から神社前面までの約 200mがこの付近で最も広い可耕地である。その点でこの遺跡の立地する位置は石津川流域の中でも屈指の好条件の場所といえる。つまり、窯址群を後にひかえ、可耕地の確保も比較的容易な場所としてそれはいえる。調査の結果夥しい須恵器の出土とともに柵列をもつ３棟の建物群、溝、土壙などの遺構が検出された。子持勾玉、鞴羽口、製塩土器などが出土した。なお須恵器と土師器の比は８：２であった。報告者はこの遺跡を須恵器の集積地として捉え、石津川を利用して各地に移送したと考えている。須恵器の出土量の多さに対する一つの考え方であっても、それが妥当かどうかについてはさらに検証する必要があると考える。少なくとも製塩土器、鞴羽口はすでに述べたようにこの時期のこの地域の集落としては通常の出土品といえ、須恵器生産と直接かかわりあいながら、この地の開発を同時的に行なった中枢的集団の集落として捉えておくのが妥当であろう。

豊田遺跡は深田遺跡の東南 1.3kmの地にあり、集落成立は５世紀後半といえる。しかし遺構としては今の所溝のみである。しかし深田遺跡同様の性格、つまり石津川流域の開発と須恵器生産の両方に係わりをもった集団であったのだろう。

太平寺遺跡の詳細については後章を参照されたい。

石津川中流域遺跡群は５世紀における地域開発と須恵器生産との関係を抜きに成立しえないのであり、その意味で百舌鳥川流域遺跡群の集落とその担っている質に差はあっても石津川流域の集落群として全体として捉えていくことも今回の報告書の責務の１つである。

その他石津川下流域遺跡群としての四ツ池遺跡、船尾西遺跡、石津遺跡などの存在がしられるが、四ツ池遺跡以外集落の実態は不明である。

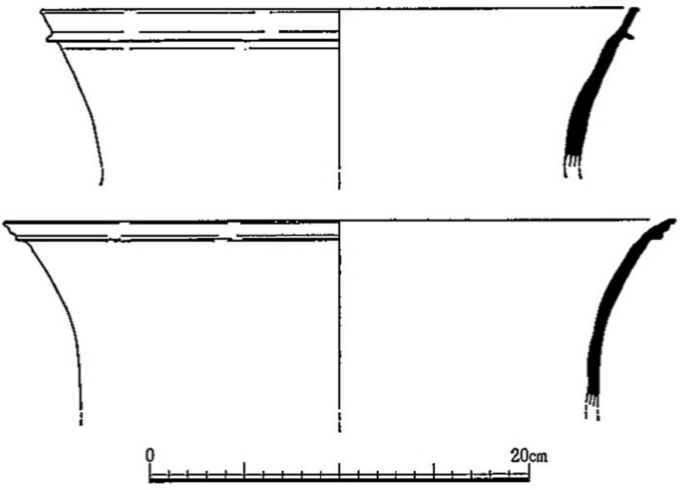
四ツ池遺跡における５世紀の遺構としては２棟の竪穴住居が検出されている。又６世紀のそれもわずかに検出されている。どの程度の可耕地があったかよく分っていないが、沖積段丘上の遺跡としてはかなり広く可耕地を求められると推定され、百舌鳥古墳群の基盤として十分働いたものと思われる。

これら以外に和田川右岸の西浦橋遺跡その南の菱木下遺跡、段丘中央部の万崎池遺跡など今回報告する遺跡群がある。又、対岸の和田川左岸の高位段丘上に山田遺跡[43)]も存在する。詳細は不明であるが５世紀後半から６世紀にかけての集落であり、須恵器の多量の出土から大野池地区窯跡群との密接な関係を推定せしめる。

古墳・集落とともに５世紀のこの地域の画期を彩るものとして須恵器生産の開始がある。いわゆる「陶邑」窯の成立である。石津川流域における最古の窯は高蔵地区において成立し、少し遅れて、栂地区・光明池地区にも成立するとされている。今回の調査に関連した周辺の分布調査によって万崎池遺跡の南約 600mの咄池で初期須恵器の窯址が発見され、栂地区の窯の動態について新たな知見をえた。丘陵の入口から奥へという窯の動向は基本的に栂地区でもいいえることが分った。須恵器生産とこの地域の集落の関係についても本報告書の課題の１つといえる。

石津川流域の７世紀以降の考古学的資料はその前代に比較して極めて乏しいものであり、これ

からの積み重ねに待たざるをえない。例えば古墳築造にかわる寺院建立を支えるべき7世紀の遺構・遺物の出土は余りみられない。白鳳寺院としてはわずかに陵南廃寺[44]、土師観音寺[45]の周辺が調査されているが、明瞭な遺構は検出されていない。わずかに土師遺跡で奈良時代の掘立柱が検出されている。又陵南遺跡において遺物としては7世紀、8世紀のものが出土しており、



第4図　咄池表採須恵器

将来的には土師遺跡において氏族の居宅等の検出も予想される所である。又土師遺跡から 1.5km の中位段丘上の深井清水町遺跡[46]も7世紀から8世紀の遺構・遺物が検出されているが、明確な建物等は未だみられていない。

石津川流域における歴史時代の集落として明らかなのは土師遺跡の平安時代から鎌倉時代にかけての建物跡で、とりわけ西群の建物には柵をともなう2棟の建物が検出されている。鈴の宮遺跡においては10世紀から11世紀にかけての仏光寺が創建されている。その後12世紀の井戸が検出された他13世紀には7棟の掘立柱建物が検出されている。後述するように、太平寺遺跡や万崎池遺跡における画期としての10世紀は明らかに新たな地域開発の為によるものであり、それらが仏光寺創建と何らかの関連をもつのかどうか興味深い所である。

その他船尾西遺跡においても13世紀の建物が検出されているが、今回菱木下遺跡で報告する中世の屋敷と比較できるような資料はこの地域では未だ検出されていない。

以上後述する各遺跡の論述と係わりあう周辺遺跡について述べてきたが、残された問題についてはまとめとして最後に論述するつもりである。

第2表　石津川流域遺跡群地形立地存続時期（地形分類は前薬和子氏による）

遺跡群名		遺跡名	立地	時代						備考
				旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	
上流域遺跡群		辻之	高位段丘				○		○	
		田園	〃				○	○	○	
		泉北窯址群	丘陵・高位段丘	○			○	○	○	註3他
中流域遺跡群	和田川左岸	山田	高位				○			註43
		山田古墳群	〃				○			
		鶴田池東	高位～沖積段丘		○	○	○	○	○	註11
		上	沖積段丘		○	○				註8
	石津川左岸 和田川右岸	牛石古墳群	丘陵				○			
		野々井	丘陵、高位中位段丘	○		○	○	○	○	註3
		西浦橋	中位段丘～沖積段丘	○	○	○	○	○	○	註7
		菱木下	中位段丘	○		○	○	○	○	
		万崎池	〃	○		○	○	○	○	
	石津川右岸	豊田	沖積段丘				○		○	註42
		深田	〃				○			註41
		太平寺	沖積段丘、氾濫原		○	○	○		○	
		鈴の宮	中位段丘、沖積段丘	○	○	○	○	○	○	註2他
		毛穴	中位段丘			○				註17
	陶器川流域	小阪	中位段丘、沖積段丘				○	○	○	註26
	百舌鳥川流域	深井清水町	中位段丘					○	○	註46
		土師南	〃				○	○		註45
		土師	〃				○	○	○	註36
		陵南廃寺	〃					○		註44
		陵南	〃		○		○	○		註10他
		陵南北	中位段丘、氾濫原		○		○	○	○	註38
		東上野芝	中位段丘				○	○		註37
		百舌鳥古墳群	中位段丘、低位段丘				○			
下流域遺跡群	石津川左岸	四ツ池	低位段丘 沖積段丘、氾濫原	○	○	○	○	○		註5他
		船尾西	氾濫原		○		○		○	註30
		浜寺昭和町	砂堆			○		○	○	
		黄金山	〃		○	○	○	○	○	註12
	石津川右岸	石津	氾濫原		○	○	○	○	○	註27

註

1）　今回の地形分類はすべて前薬和子の研究成果に基づく原図によっている。原図掲載を快く承諾いただき心から感謝します。
2）　北野俊明　「鈴の宮」Ⅲ　堺市教育委員会　1983
3）　中村　浩　「歴史環境」　「陶邑」Ⅰ　大阪府教育委員会　1976
4）　小野山節　「稲作技術の伝来」「堺市史続編」第１巻　1971
5）　芹沢長介　「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」　1966
6）　「池上・四ツ池遺跡」16、17　第２阪和遺跡調査会　1971
　　樋口吉文　「四ツ池遺跡」　四ツ池遺跡調査会　1981
7）　野田芳正　「西浦橋遺跡発掘調査報告」「堺市文化財調査報告」第12集　堺市教育委員会　1983
8）　森井貞雄氏教示
9）　註２に同じ
10）　中村　浩編　「百舌鳥陵南遺跡発掘調査概要」　大阪府教育委員会　1975
11）　芝野圭之助　「西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要」　1980
12）　堅田　直　「四ツ池遺跡」　考古学シリーズ５　帝塚山大学考古学研究室　1969
13）　註12、第２阪和国道内遺跡調査会　「池上・四ツ池」　1970、同　「第２阪和国道内遺跡発掘調査報告書」４　1971、同　「池上・四ツ池遺跡」２～17　1969～1971、四ツ池遺跡調査会　「四ツ池遺跡」1971～1981　堺市教育委員会　「四ツ池遺跡」　1977～1983、堺市教育委員会　「四ツ池遺跡発掘調査報告書」　1981
14）　樋口吉文　「まとめ」　「四ツ池遺跡」　四ツ池遺跡調査会　1978、同　「まとめ」「四ツ池遺跡発掘調査報告書」　堺市教育委員会　1981
15）　小嶋暁子　「遺物」　「池上・四ツ池」　P.106　第２阪和遺跡調査会　1970
　　北野俊明　「結語」　「鈴の宮」Ⅲ　P.114　堺市教育委員会　1983
16）　広瀬和雄　「岸和田・貝塚市域周辺の遺跡群の動向」　「畠中遺跡発掘調査概要」Ⅰ　大阪府教育委員会　1978
17）　北野俊明　「遺跡の位置と環境」　「鈴の宮」Ⅲ　P.４　堺市教育委員会　1983
18）　註11に同じ
19）　註12に同じ
20）　註12に同じ
21）　中村　浩　「遺跡の立地とその環境」　「陶邑」Ⅱ　大阪府教育委員会　1980
22）　小野山節　「稲作技術の伝来」　「堺市史」続編第１巻　1971
23）　註21に同じ
24）　尾谷雅彦氏教示
25）　樋口吉文　「四ツ池遺跡」　堺市教育委員会　1983
26）　野田芳正　「遺跡の位置と環境」「小阪遺跡発掘調査報告」　堺市教育委員会　1983
27）　森　浩一　田中英夫　「堺市浜寺石津町遺跡概報」「古代学研究」９　1968
28）　藤沢一夫　「野々井二本木山古墳の調査」「大阪府の文化財」　大阪府教育委員会　1962
29）　芝野圭之助氏教示
30）　北野俊明　樋口吉文　「船尾西遺跡発掘調査抄報」　堺市教育委員会　1978
31）　北野俊明氏教示
32）　ここでの数値は基本的に中井正弘の「伝仁徳陵と百舌鳥古墳群」での数値に浜寺四ツ塚古墳群を加えている。
33）　広瀬和雄　「和泉北部における古墳群の動向」　「大園遺跡発掘調査概要」Ⅱ　大阪府教育委員会　1975
34）　吉田　晶　「日本古代村落史序説」　1980
35）　註10に同じ

36)　奥田　豊編　『土師遺跡49年度発掘調査概報』　1975、同編　『土師遺跡50年度発掘調査概報』
1976　森村健一　『土師遺跡発掘調査報告書』その１　1976　十河稔郁　「土師遺跡発掘調査報告」
『堺市文化財調査報告書』第９集　1981　すべて堺市教育委員会

37)　樋口吉文　「東上野芝遺跡発掘調査報告」　『堺市文化財調査報告』第10集　堺市教育委員会　1972

38)　奥田　豊編　『陵南遺跡発掘調査報告書』　陵南遺跡調査会　1975

39)　北野俊明氏教示

40)　註２に同じ

41)　中村　浩編　『陶邑・深田』　大阪府文化財調査抄報第２集　大阪府教育委員会　1973

42)　奥　和之氏教示

43)　泉森　皎　「山田遺跡の住居址とその付近」　『和泉考古学』第４号　1959

44)　森村健一　『土師遺跡発掘調査報告』Ⅱ　堺市教育委員会　1977

45)　堺市教育委員会　『土師南遺跡』現地説明会資料　1984

46)　北野俊明・十河稔郁　「深井清水町遺跡発掘調査報告」、十河稔郁　同　『堺市文化財調査報告書』
第９集　1981、嶋谷和彦　同　『堺市文化財調査報告』第13集　1983、いずれも堺市教育委員会

Ⅲ　西　浦　橋　遺　跡

Ⅲ 西　浦　橋　遺　跡

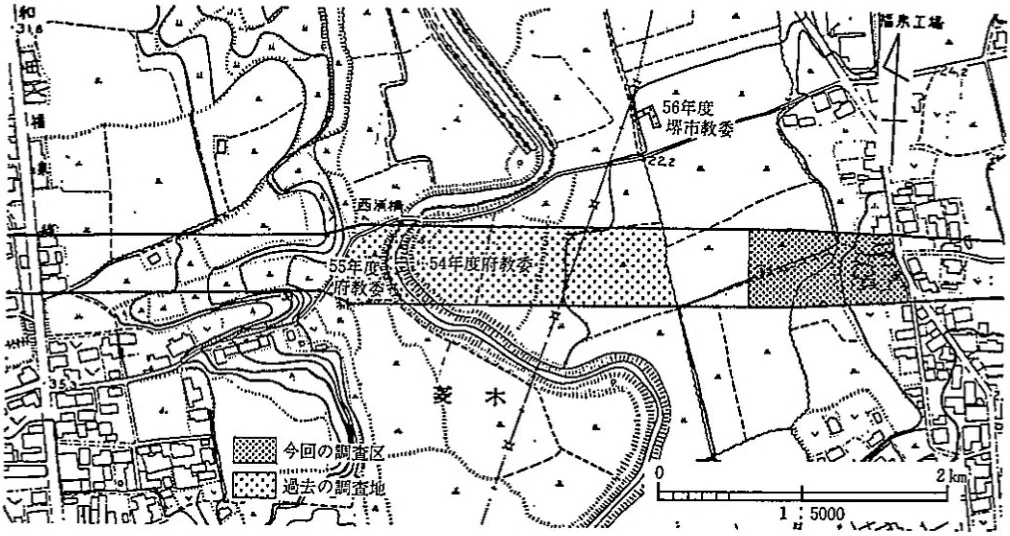
第1章　第Ⅱ調査区

第1節　は　じ　め　に

遺跡の立地、境界　西浦橋遺跡は、泉北丘陵内の栂丘陵の西北端に位置する洪積段丘の縁辺にひろがる。当遺跡は、遺跡の西部を南から北に向かって流れる和田川によって形成された沖積地・氾濫原と遺跡の東部に見られる洪積段丘中位面にまたがって立地している。又、西を鶴田池東遺跡、東を菱木下遺跡と接しており、これらの遺跡と当遺跡の境界については、東は市道菱木33号線、西は和田川氾濫原で画されている。

過去の調査　当遺跡の調査は、昭和53・54年度に大阪府教育委員会が、和田川の両岸の沖積地・氾濫原部分を行ない、昭和55年度には、和田川西岸の沖積地部分を大阪府教育委員会[1]が再度実施しており、昭和56年度堺市教育委員会[2]が東岸の沖積地部分を実施している。これまでの調査は、沖積地・氾濫原部分を重点的に行なっており、縄文時代晩期から江戸時代に至る遺構・遺物が断続的に確認されている。

今回の調査は、当初昭和56年9月30日より昭和57年3月31日までの期間で、菱木下遺跡との境界（市道菱木33号線）から西へ 163m、8222.2㎡を実施する予定であった。しかし、調査開始に伴い沖積地部分の南北両側に土層観察用トレンチを設定した結果、従来無遺物層として狭義の地



第1図　調　査　区　位　置　図

山とされていた黄色粘土層の下層に灰色砂礫層が確認され、弥生時代中期の壺、甕等の遺物を検出した。よって、急拠、設計変更を行ない調査区を道路センターNo.540ラインより東側部分の4869㎡を実施することとし、No.540ラインより東側部分については、次年度の調査とした。尚、No.540を境にして西をⅠ工区、東をⅡ工区とした。今回の調査は、Ⅱ工区を行なった。

調査は、東部の台地上から行ない、順に西部の沖積地部分へと拡大していった。台地上では、弥生時代中期から江戸時代に至る各時期の遺構が、同一面（地山面）から検出され、沖積地部分では、各時期毎に包含層の堆積が見られた。そこには、弥生時代から現代に至る溝・建物跡を中心とした遺構が検出された。

第2節　微地形と層序（第2図；図版6）

1　微地形

当遺跡は、前節でも述べられたように、泉北丘陵内のいわゆる栂丘陵の西北端に位置する。遺跡は、南から北に向かって流れる和田川の両岸に形成された沖積地及び氾濫原と東に接する菱木下遺跡から続く洪積段丘中位面にまたがる形で立地している。

今回の調査区は、和田川の東岸にあたり現和田川から東へ約150m付近の段丘崖を経て菱木下遺跡と接する部分までである。

現地表面の標高は、調査区西端でT.P.＋21.10mを測り、地形は東に向かってゆるやかに上昇している。段丘崖直下では、T.P.＋21.50mを測る。段丘崖は、約1.0〜0.8mの比高を持ち、段丘崖直上ではT.P.＋22.30mを測る。62bライン付近までは、比較的急傾斜をもって上昇し、その後はゆるやかな傾斜になる。調査区東端でT.P.＋23.35mを測る。

以下、層序について記載するが、段丘面上は、段丘崖付近において若干の斜面堆積層（灰茶色砂質土層）が見られるのみで包含層はほとんど見られず、調査区西部の沖積地、氾濫原を中心に下位より概説する。

2　層序

今回の調査では、現地表面下約1.3mにおいて自然河川内から弥生時代中期の杭列群遺構が検出されたために、これより下層に至る掘削を停止した。しかし、調査中に行なった土層確認のための試掘等の結果によって現地表面下3.0mまでの沖積層を確認した。概ね13層である。

第13層　青灰色砂礫層。　厚さ、時期については未確認であるが、縄文時代晩期以前の堆積層であろう。当時の自然河川内の堆積層か氾濫によるものか不明であるが、南北方向に広がりをもつようである。

第12層　青灰色シルト層。　調査区中央では約0.8mの厚みであるが、南部では１m以上である。厳密には、３層ないし４層に分層が可能であるが各層の起伏ははげしい。上部には、木材、落葉を伴った腐植土層がブロック状に認められ、内部より縄文時代晩期船橋式土器を１点検出している。又、第12層上面からも船橋式土器を検出している。

第11層　灰色シルト層。　約0.2～0.3mの厚みで堆積している。遺物は検出されていないが、部分的に黒褐色粘土層を含んでいる。

第10層　黄色粘土層。　約0.4～1.0mの厚みを持つ。調査区中央では0.4～0.5m程度であるが、南部では0.8～1.0mある。上層、下層の２層に分層することができる。下層は、やや粘性が強い。２層とも炭化物は含んでいるが、遺物は未確認である。おそらく縄文時代晩期末の堆積層であろう。

第９層　灰色砂層。　第10層上面から切った自然河川内の堆積層である。基本的には、微砂層・細砂層・粗砂層による互層を呈しているが、底部付近及び中間層において落葉、炭化物を含む腐植土層がベルト状に見られる。これは、ある時期の河川の底面近くであろう。弥生時代中期の杭列群遺構は、河川が½程度埋没した時点で設置されている。又、河川自体が完全に埋没するのは、弥生時代中期後葉であろう。

第８層　灰褐色砂礫土層。　約0.2～0.4mの厚みをもつ。遺物は、検出されていない。Ｒ64・Ｒ63区の一部・Ｓ64区・Ｔ64区と南北に帯状に見られる。北端ではＴ.Ｐ.＋ 20.30m、中央ではＴ.Ｐ.＋20.50m、南端ではＴ.Ｐ.＋20.70mと北に向かって下降する微高地状を呈している。南端のＴ64区では平安時代末から鎌倉時代初頭のピット群が見られ、さらにＳＤＮ２の西肩をなしている。

第７層　黄灰色粘土層。　約0.3～0.4mの厚みを持つ。下部は砂性が強く、細砂がブロック状に認められる。炭化物は多量含まれているが、遺物は検出されていない。沖積地全域にほぼ均一に堆積しており、安定した沖積平野を形成している。上面には奈良時代の溝ＳＤＡ３、ＳＤＡ４が見られる。

第６層　灰色粘質土層。　約0.15～ 1.0mの厚みで均一に堆積しているが、64ｂライン付近より東は茶褐色粘質土層に変わる。平安時代末から鎌倉時代初頭にかけての水田の耕作土であろう。

第５層　茶灰色粘質土層。　約 0.2mの厚みで均一に堆積する。64ｂライン付近のＳＤＡ６より東で淡灰茶色砂質土層に変わる。中世の耕作土であろう。

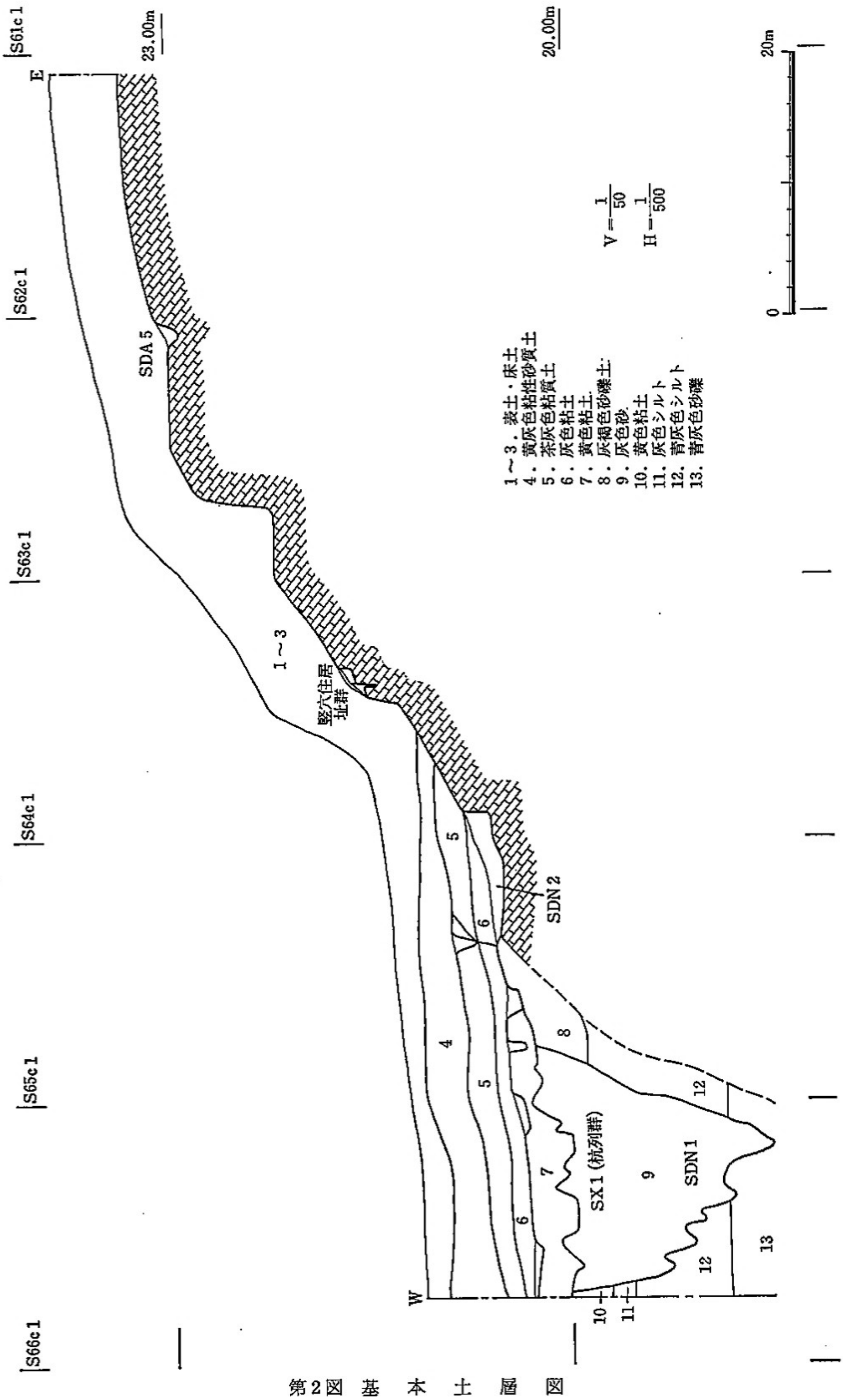
第４層　黄灰色粘性砂質土層。　0.15～ 0.4mの厚みで調査区西端から段丘崖直下に至る広範囲に認められる。近世の耕作土であろう。

第３～１層　現代水田の床土・耕作土である。

第３節　遺　　　構 (付図１；図版２～21)

１　第Ⅱ調査区の遺構

現地調査の段階で検出した遺構は、弥生時代から現代に至る90ケ所である。その後、報告書作成段階において若干の検討を加えた結果60ケ所となった。又、縄文時代については、遺物のみ出土し、遺構は検出されなかった。これらの遺構の大半は、段丘上に集中し、土壙・溝・掘立柱建


S61c1
S62c1
S63c1
S64c1
S65c1
S66c1
23.00m
20.00m
E
W
SDA5
1～3
竪穴住居址群
SDN2
SDN1
SX1（杭列群）
1～3．表土・床土
4．黄灰色粘性砂質土
5．茶灰色粘質土
6．灰色粘土
7．黄色粘土
8．灰褐色砂礫土
9．灰色砂
10．黄色粘土
11．灰色シルト
12．青灰色シルト
13．青灰色砂礫
V＝1/50
H＝1/500
20m
0

第2図　基　本　土　層　図

物・竪穴住居址・井戸・鍛冶炉・自然河川・杭列群等バラエティーに富んでいる。その概要は、第１表に示すとおりである。

第1表 遺 構 集 計 表

		弥生時代	古墳時代	奈良時代	鎌倉時代	室町時代	江戸時代	計
竪穴住居址			12					12
掘立柱建物			1	1	3			5
溝	(自然)	1	1			1		3
	(人工)	1		3			1	5
井戸							2	2
土壙		2					22	24
方形周溝墓		2						2
その他の遺構	杭列群	2						2
	集石				1			1
	鍛冶炉				1			1
	埋甕						3	3
計		8	14	4	5	1	28	60

以下、各時代順に、主要遺構の説明を行なうこととする。

A 縄文時代

先にも述べた様に、この時期の遺構は検出されていないが、若干の土器片・石器（石鏃）が出土している。石鏃は、後世の包含層内より検出されたものであるが、土器片は、第12層青灰色シルト層より比較的良好な縄文時代晩期船橋式を検出している。第12層上面は、面的な調査を行なっていないために、遺構の有無は未確認であるが、船橋式土器の包含層であると言えよう。

昭和56年度に堺市教育委員会が当調査区の北西約60mの地点を調査した際にも同時期の遺物が検出されており、又、現在調査中の第Ｉ調査区でも、縄文時代晩期長原式の甕棺が１基検出されている。これらの事実を総合すると、当調査区近辺に縄文時代晩期末の集落の存在を想定することができる。

B 弥生時代

この時期の遺構としては、調査区東端の台地上に、方形周溝墓２基（ＳＴＳ１・２）、土壙２基（ＳＫＡ１・２）、沖積地部分に自然河川（ＳＤＮ１）、自然河川に伴う杭列群（ＳＸ１）、溝（ＳＤＡ１）、溝に伴う杭列群（ＳＸ２）が検出された。

方形周溝墓（ＳＴＳ１・２、ＳＫＡ１）（第３図；図版11）

調査区東端の台地上（Ｓ61区）に検出されたもので、この付近は、調査区内の最高所にあたりＴ.Ｐ.＋ 23.40ｍを測る。２基の方形周溝墓は、共に後世の削平をはげしく受け、周溝の一部が検出されたのみで、方形周溝墓として取り上げるには非常に問題がある。しかし、すぐ東部に隣

接する菱木下遺跡第Ⅰ調査区に検出された比較的残存状況の良い方形周溝墓群と同時期の溝であり、菱木下遺跡第Ⅰ調査区の方形周溝墓と立地、距離等の点から一連のものと考えられる事。STS1は、東端で直角に曲がる事、等から検出された2本の溝状遺構を方形周溝墓の周溝の一部としてとり扱った。

STS1　東西方向の溝でおそらく方形周溝墓の北辺を画するものであろう。溝の西端は、徐々に浅くなり切れている。東端は、やや浅くなりながらも南へ直角に屈曲している。しかし、その先は攪乱土壙に切られ不明である。東西方向の長さ9.0m、幅員1.2〜1.6m、深さ0.3mである。埋土は、上層が黒褐色粘質土層、下層が灰黄褐色粘質土層である。埋土内からは、少量の土器片、サヌカイト片、石庖丁が検出された。又、STS1の南に接する様にして、直径1.0m、深さ0.3mの円形土壙（SKA1）がある。埋土は、STS1の上層で同一であるが遺物は検出されていない。STS1に伴うものとすれば、墓壙の可能性が強い。

STS2　STS1の北東 2.5mに位置する東西方向の溝である。西部は、防空壕によって切られ、東部は調査区外に至る。検出長3.5m、幅員1.5m、深さ0.1〜0.3mである。埋土は、暗茶灰色砂質土層で少量の土器片、サヌカイト片を出土した。

先にも述べた様に、これら2基の方形周溝墓は菱木下遺跡第Ⅰ調査区西端で検出された7基からなる方形周溝墓群に連続するものと考えられる。その中でもSTS1は、最西端に位置し、墓域の西限にあたるものと思われる。

自然河川（SDN1）、自然河川に伴う杭列群（SX1）、溝（SDA1）、溝に伴う杭列群（SX2）　（付図2；図版7〜10）

調査区東部の沖積地部分及び微高地に検出されたものである。

自然河川（SDN1）　調査区南西隅から北東方向に向かい、調査区中央付近で大きく蛇行して北西方向へ流れる。川幅は、約10〜15m、蛇行地点では約20mある。深さは、未掘の為未確定であるが、蛇行地点付近で川に対して直交したトレンチを入れた結果では、2m程度である。

自然河川（SDN1）に伴う杭列群（SX1）　SDN1の蛇行地点すなわち川幅の最も広い所に川に直交して川幅いっぱいに打設されている。又、SX1が打設された時点では、SDN1は約⅔埋没している。SX1の全長は、西端が次年度調査地域にかかっている為に不明であるが、検出長は約20mである。SX1は、丸太材（現存長3〜7m、直径10〜20cmの自然木の枝を切り落とした丸太）を横にして上下二段に重ね、その背後（川下）に丸杭（現存長0.5〜0.7m、直径3〜5cm）を打設して固定している。そして、丸太材の前面（川上）に板杭（現存長0.4〜0.6m、幅員10〜15cm、厚み3〜5cm、先端部は尖らせている）を密に並べて打設している。さらにその前面には部分的に丸杭が見られる。ただSX1西端の4〜5mについては、丸太材は認められず、板杭のみである。

溝（SDA1）　SX1の東端より北東方向にのびるものである。幅員約5m、深さ約 0.5mである。SDN1の東岸は、この付近では礫層によって形成された微高地で、SDA1は、この

礫層を掘削している。

溝（ＳＤＡ１）に伴う杭列群（ＳＸ２）

ＳＤＡ１とＳＤＮ１の接点から、北東方向へ約５ｍの地点に見られるものである。ＳＤＡ１に直交して、丸杭を密に打設している。丸太材は見られない。

Ｃ　古墳時代

この時期の遺構としては、竪穴住居址（ＳＢＫ１～12）、掘立柱建物（ＳＢＰ１）、溝（ＳＤＮ２）がある。

これらの遺構は、全て古墳時代中期、後期に属するもので、前期に遡るものはなく、前期は遺物も極めて少量しか出土していない。又、遺構の分布は、台地縁辺部から沖積地部分にかけて集中して見られる。

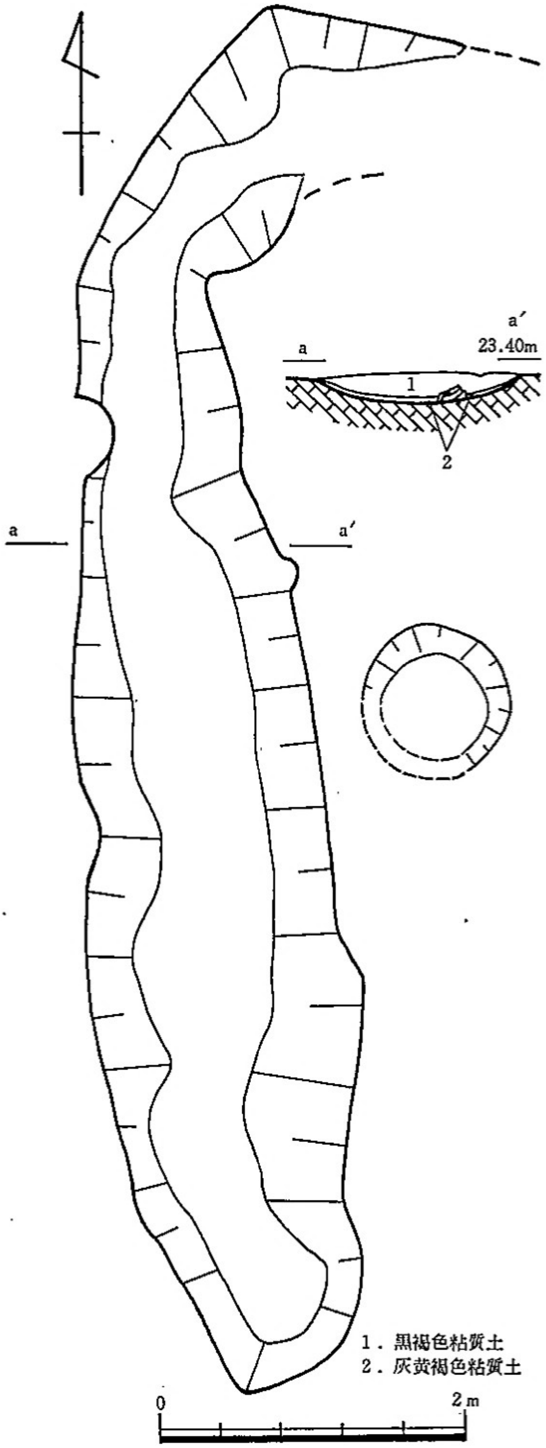
竪穴住居址（ＳＢＫ１～12）　（第４～９図；図版12～15）

台地縁辺部（Ｓ63・Ｔ63区）の緩やかな斜面に段丘崖にそって12棟検出された。全て方形プランを呈し、一辺3.0～4.5ｍと全般的に小さく、後世の削平をはげしく受け、ほとんどのものが原形をとどめていない。ただ、ＳＢＫ５のみがかろうじて完全なプランを残して検出された。

規模・方位・埋土・時期等については、第２表に記したとおりである。

ＳＢＫ１　今回検出された住居址群の最も北に位置するもので、他の住居址からやや隔たれた位置にあり、又、最高所にある。東隅と西隅に柱穴が見られるが、削平がはげしく残存状態は非常に悪い。

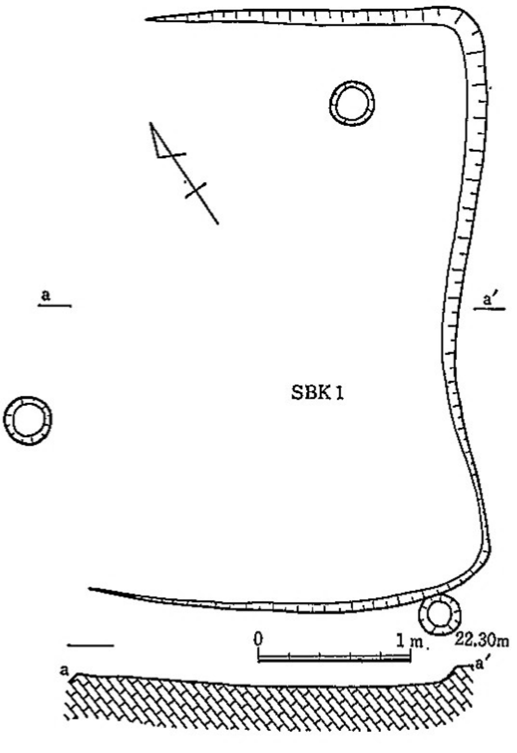
ＳＢＫ２　北東隅と南東隅に２ヶ所柱穴が見られる。柱穴間は、 2.6ｍである。住居址東辺に周溝（幅員0.2m、深さ0.1m）



第３図　ＳＴＳ１、ＳＫＡ１平面図・断面図

第2表 竪穴式住居址一覧表

番号	地　区	形状	規模一辺（m）	深（cm）	埋　　土	主　　軸	時　　期
1	R63、S63	方形	4.5	5	茶灰色礫土	N34°40′38″E	5世紀末～6世紀前半
2	S63	方形	3.8	11	茶灰色粘質土	N	5世紀末～6世紀前半
3	S63	方形	4.3	12	茶灰色粘質土	N10°44′53″W	5世紀末～6世紀前半
4	S63	方形	4.4	6	茶灰褐色粘質土	N	5世紀後半
5	S63	方形	3.3	10	茶灰色粘質土	N 5°34′49″W	
6	S63	方形	4.0	5	茶灰色粘質土	N 8°06′34″W	5世紀末～6世紀前半
7	S63	方形	3.3	7	茶灰色粘質土	N36°40′41″E	5世紀末～6世紀前半
8	S63	方形	3.8	10	茶灰色粘質土	N35°28′30″E	5世紀末～6世紀前半
9	S63、T63	方形	4.4	16	茶灰色粘質土	N 9°15′51″W	
10	T63	方形	4.0	12	茶灰色粘質土	N 6°17′38″W	5世紀後半
11	T63	方形	4.0	11	茶灰色礫土	N40°42′21″E	5世紀末～6世紀前半
12	T62	方形	4.0	16	上層：茶灰色砂礫土	N 9°27′04″E	
					下層：淡茶灰色粘質土		



第4図　SBK1平面図・断面図

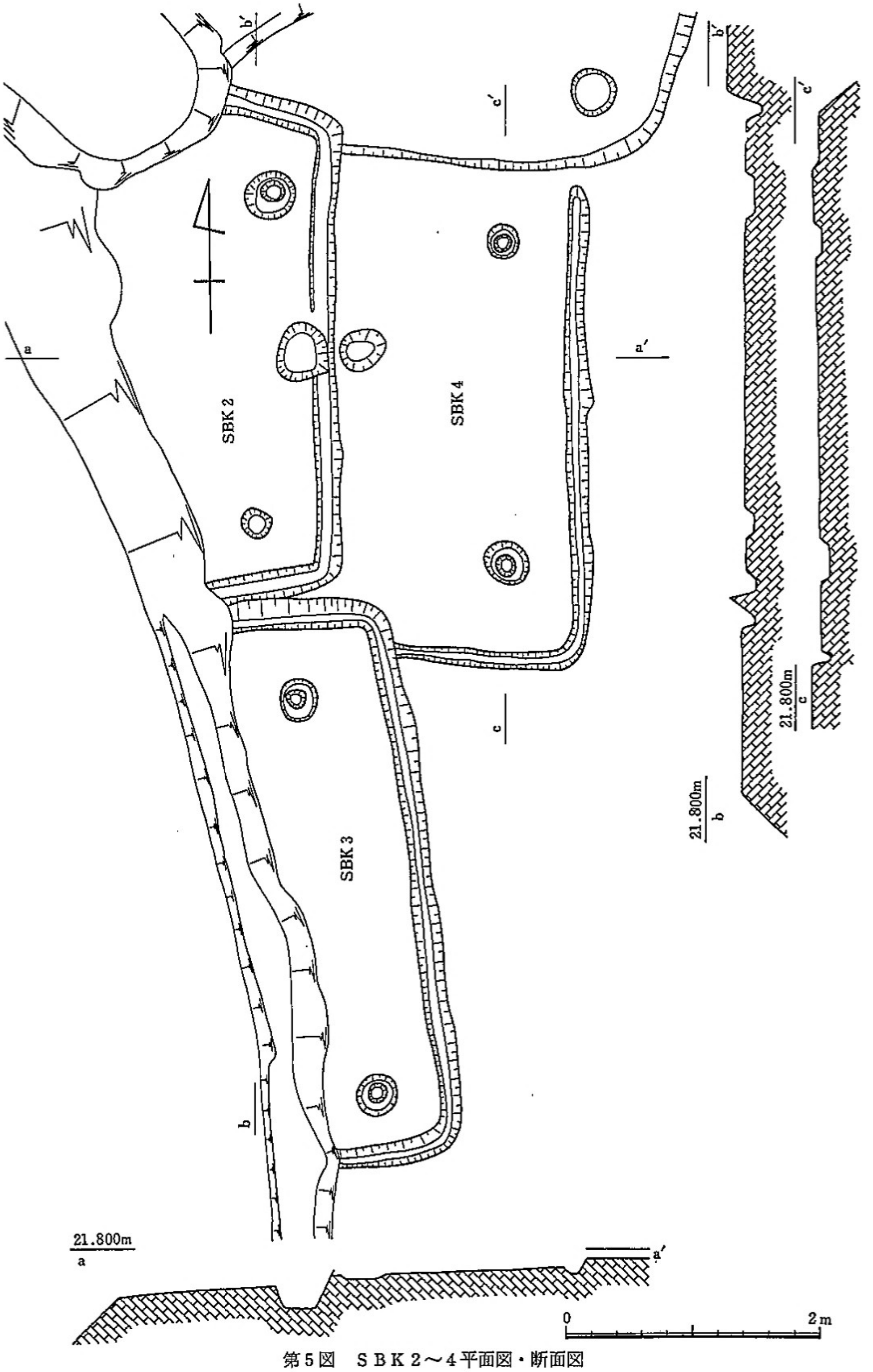
をもつ。東辺中央に炭・焼土の入った土壙が見られた。残存状態は、非常に悪く西部約⅔は欠損している。

SBK3　SBK9と並んで比較的大型の住居址である。柱穴は、北東隅と南東隅に検出され、間隔は3.2mである。周溝（幅員0.2m、深さ 0.1m）は、比較的明瞭に検出された。SBK2と若干の切合い関係にあり、SBK3が新しい。西側約⅔は欠損している。

SBK4　SBK2の東に位置する。SBK2・3に切られている。北東隅と南東隅に柱穴があり、柱穴間は2.6mである。

SBK5　今回の調査で検出された住居址の中で最も小型である。唯一完全なプランで検出されたもので、柱穴は住居址の4隅と北辺の柱穴間の中央に1ヶ所見られる。柱穴間は、南北 1.7m、東西 2.0mである。SBK6・7・8を切っている。

SBK6　SBK5の南西に重複して位置する。柱穴は、北西隅、南西隅、南東隅にあり、柱



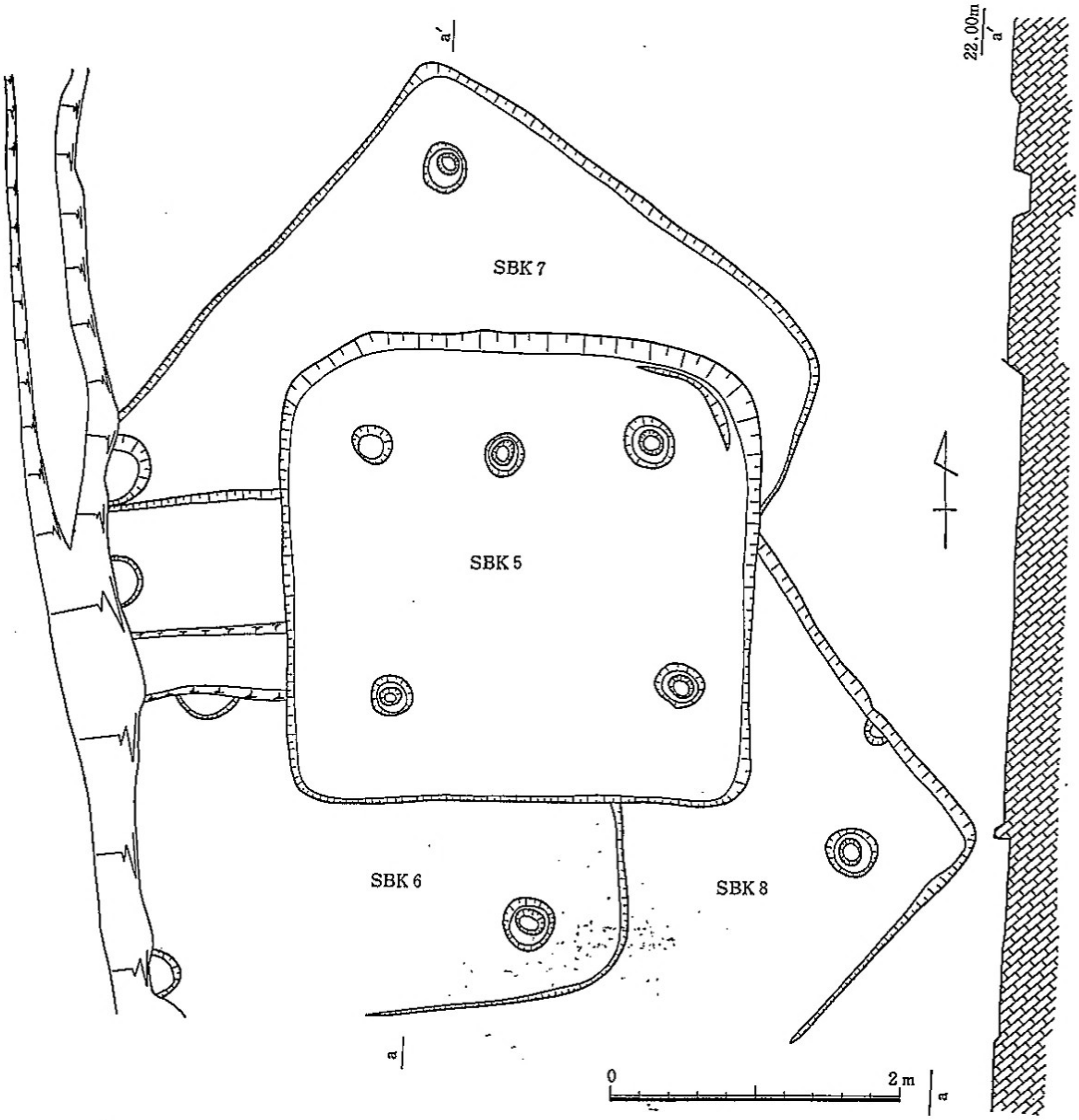
第5図　ＳＢＫ２～４平面図・断面図

穴間は南北2.7m、東西2.5mである。

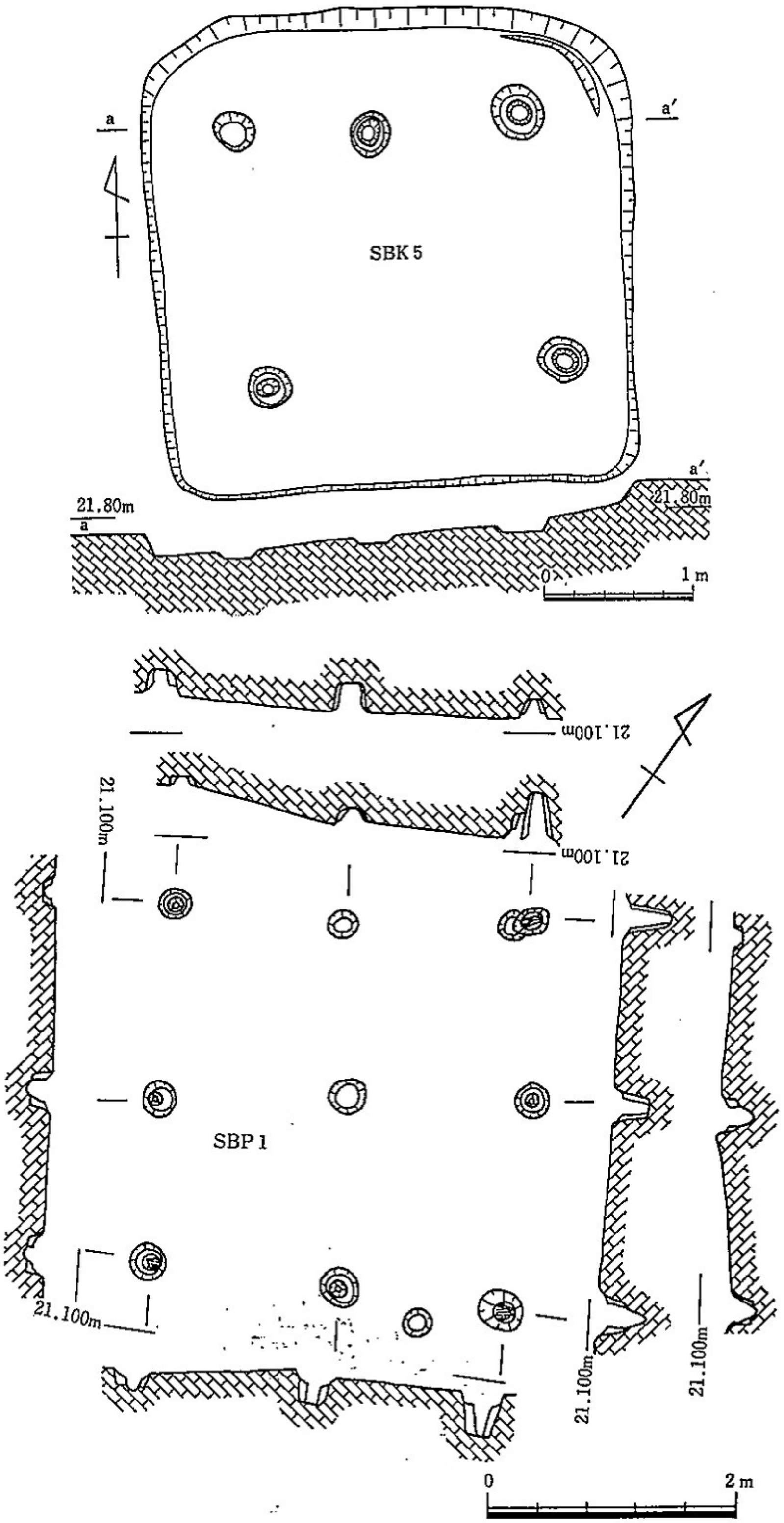
SBK7　SBK5の北側に位置する。北隅に1ヶ所柱穴が検出された。

SBK8　SBK5の東側に位置するものであるが、若干の「く」の字状の凸が残っている程度であるが、柱穴が1ヶ所検出されている事から一応住居址として扱う事にした。

SBK9　SBK6の南に位置するものである。北東隅、南東隅に柱穴が見られ、北東隅の柱穴が住居址隅より1.7m離れるのに対し、南東隅のものは、0.8mしか離れず不揃いである。柱穴間は、 3.0mである。北辺から東辺にかけて周溝（幅員0.2m、深さ0.1m、埋土茶灰黄色粘質土層）が見られる。西側約⅓は、削平され欠損している。



第6図　SBK5～8平面図・断面図



第７図　ＳＢＫ５、ＳＢＰ１平面図・断面図

ＳＢＫ10　ＳＢＫ９の南東に重複する。ＳＢＫ９とＳＢＫ11に切られる。北東隅、南東隅に柱穴が見られ、柱穴間は 2.3ｍである。又、東辺の中央に楕円形の土壙がある。西側約½は欠損している。ＳＢＫ４と共に最古のものと思われる。

ＳＢＫ11　今回検出された住居址群の最南端に位置するもので、段丘礫層を掘り込んでいる。住居址中央に不定形な土壙をもつ。西側約½は、削平されている。

ＳＢＫ12　東側を大きく削平されており、又中央に近世井戸ＳＥ２がある為に、原形の約¼しか残っていないものと思われる。

掘立柱建物（ＳＢＰ１）　（第７図；図版12）

段丘崖直下（Ｓ63区南部、Ｔ63区北部）に約30個のピットが検出されたが、建物として認め得るものはＳＢＰ１のみである。２間×２間の総柱の建物で、南北3.2ｍ、東西3.0ｍの南北棟である。柱穴の掘り方は全て円形を呈し、直径20～30㎝である。又、ピット60、ピット61、ピット65には柱根を残していた。時期は、５世紀末～６世紀前半に位置付けられよう。

溝状遺構（ＳＤＮ２～８）　（図版16）

段丘崖直下（Ｓ63・64、Ｔ63・64区）に、南北方向に見られるもので、沖積地部分の東端に見られる南北の自然堤防状の微高地と段丘崖との間の後背湿地的なものと思われる。調査区南端から北へ約25ｍ続き、幅員約10ｍ、中央の深い部分で 0.4ｍの深さをもつ。埋土は、大きく３層（上・中・下層）に分かれ、下層より黒灰色粘土層・黒灰褐色粘質土層・黒灰茶色粘性土層である。下層は６世紀初及び弥生時代、中層は６世紀後半、上層は８世紀及び平安時代の遺物を含んでいる。更に、下層をベースにしてＳＤＮ３～６、中層をベースにしてＳＤＮ７～８がある。ところが、これらの溝は、全て南北方向のものであるが、明瞭に検出されたものではなく、自然流路的なものと考えたい。

Ｄ　奈良時代

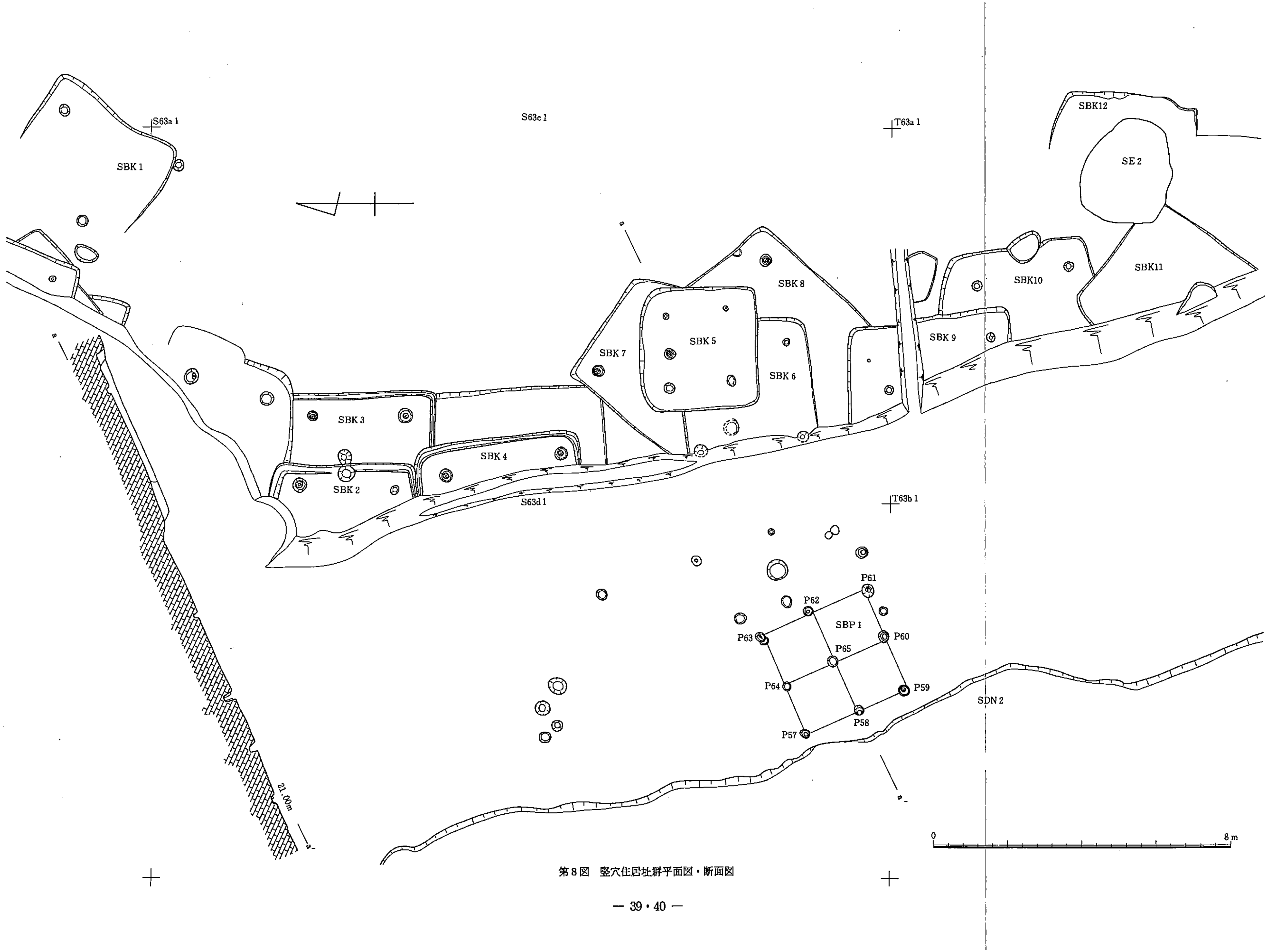
この時期の遺構としては、掘立柱建物（ＳＢＰ２）、洪積段丘上の溝（ＳＤＡ２）、沖積地部分の溝（ＳＤＡ３・４、ＳＤＮ９）がある。

掘立柱建物　（図版16）

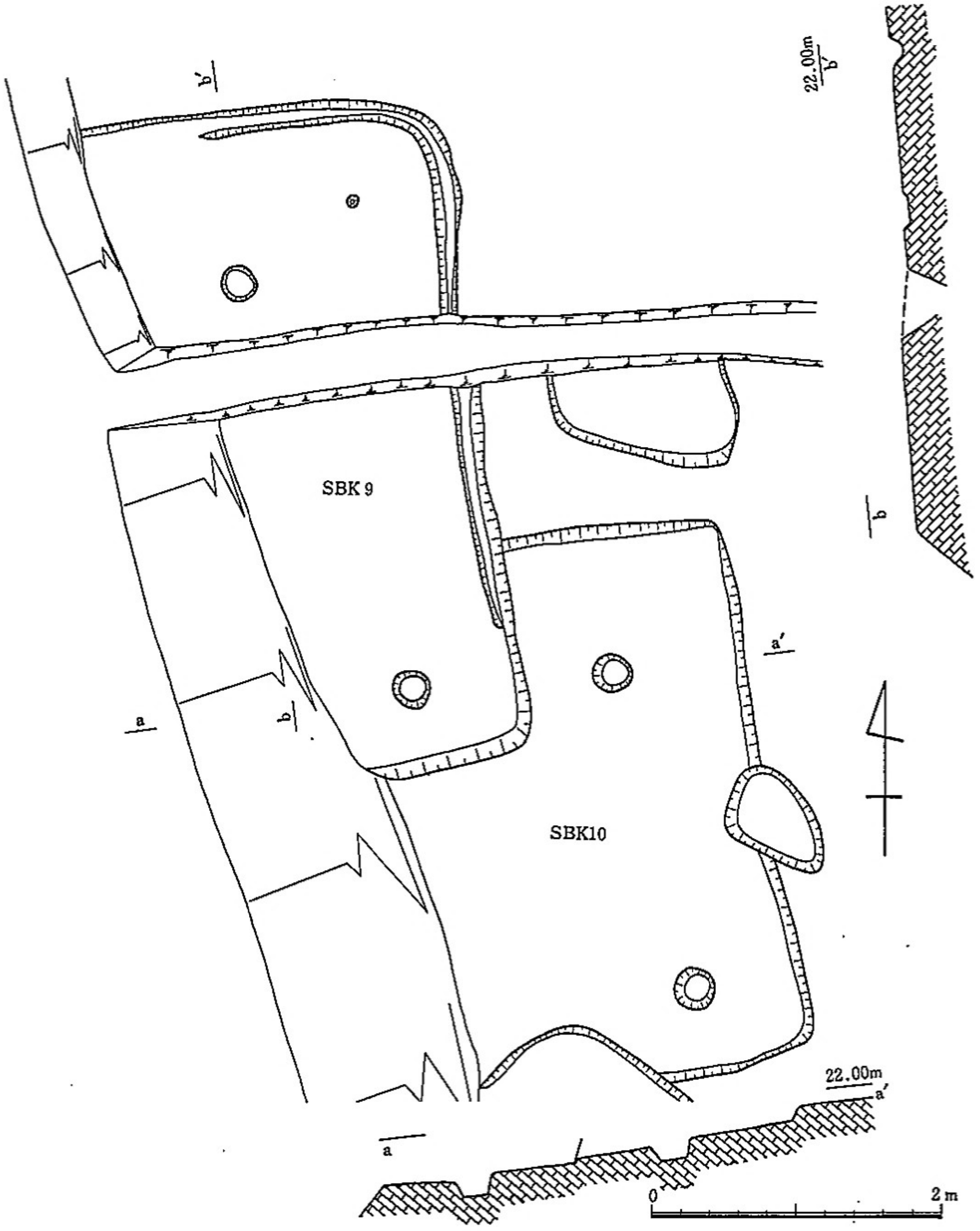
ＳＢＰ２　古墳時代から徐々に埋没しつつあったＳＤＮ２の上面にある。黒灰茶色粘性土層をベースとし、比較的不安定な地盤に立地していると言えよう。桁行３間（ 5.3ｍ）×梁行３間（ 4.8ｍ）の南北棟の建物である。束柱は見られない。柱間は、桁行と梁行で異なり、桁行の柱間が1.9ｍ、梁行は第２間が1.9ｍのほかは1.5ｍである。 掘方の大きさは、ピット37が0.7～0.8ｍであるが、その他は0.4～0.5ｍの不整形を呈している。柱穴は、全て 0.2ｍ程度である。掘方の埋土は、黒灰茶色土層、柱穴の埋土は、暗灰茶色土層である。

洪積段丘上の溝　（第10図；図版17）

ＳＤＡ２　調査区東端Ｓ61・Ｒ61区に位置する東西方向の溝である。幅員 5.0ｍ、深さ0.75～1.0ｍ、全長は西をＳＤＡ５に切られ東は調査区外に達するために不明である。 検出長15.0ｍで



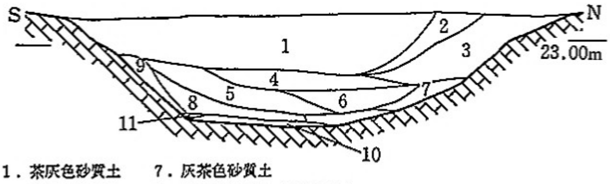
第 8 図　竪穴住居址群平面図・断面図



第９図　ＳＢＫ９・10平面図・断面図

ある。溝底のレベルは、基本的には西に向かって下降するが、中央付近には土壙状の凹地が見られる。埋土は、大きく３層に分けられ下層から暗茶灰色粘質土層、茶灰色粘質土層、茶灰色砂質土層である。上・中層からは大量の土器が検出され、その大半は６世紀後半及び奈良時代の須恵器である。下層の暗茶灰色粘質土層からは、弥生時代中期の土器片しか検出されていない。

沖積地部分の溝　（図版３・５）



第10図　ＳＤＡ２断面図

ＳＤＡ３　Ｒ・Ｓ・Ｔ65区にあり、ほぼ南から北に向かって調査区を縦断する溝である。幅員約1.0〜2.0m、深さ0.2〜0.4mを呈し、埋土は上下２層に分かれる。下層は、淡灰褐色粘質土層、上層は暗灰褐色粘質土層である。又、南端から約10mは２段掘りになっており最下層に灰色砂層が埋積していた。

ＳＤＡ４　ＳＤＡ３の東側３〜５m付近をＳＮＡ３にほぼ平行に走っているが、調査区ほぼ中央付近で２本に分かれ、１本はＳＤＡ３と合流し、１本は約10m北進してとぎれる。ＳＤＡ３に比べて直進性に欠ける。

ＳＤＮ９　Ｒ63〜65区に見られるもので、東西方向に弓なりになっている。おそらく下層のＳＤＮ１・ＳＤＡ１と重複した位置にある事から凹地の溜りと考えたい。

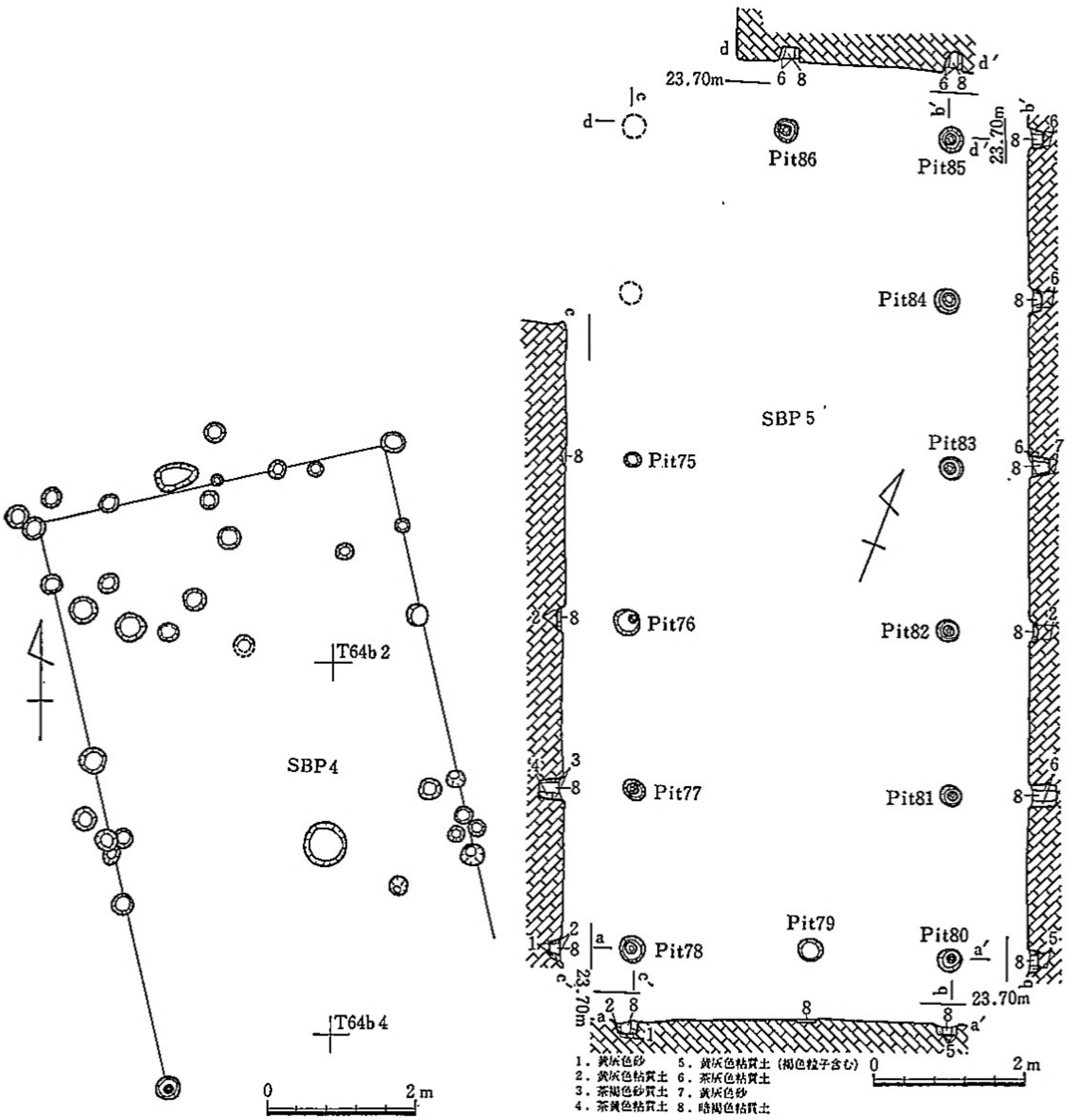
Ｅ　鎌倉時代

この時期の遺構としては、掘立柱建物（ＳＢＰ３〜５）、集石遺構（ＳＸ３）、鍛冶炉状遺構（ＳＸ４）がある。これら遺構は、洪積段丘上と自然堤防上の微高地にある。

掘立柱建物（ＳＢＰ３〜５）　（第11図；図版18）

ＳＢＰ３・４　Ｔ64区にある。この付近は、微高地の中でも最高所にあたりＴ.Ｐ.＋ 20.70m前後を測る。40数個のピットが検出されたが、建物として認め得るものは、２棟である。又、この微高地は、南々東に向かって徐々に上昇しており、建物群も調査区外へ連続する可能性が十分に考えられる。ＳＢＰ３は、その大半が調査区に達しており、梁行２間（ 4.8m）の南北棟の建物と推定できるに過ぎない。掘方は、円形を呈し、直径約 0.2mである。掘方の埋土は、灰褐色砂質土、柱穴の埋土は暗灰褐色砂質土である。ＳＢＰ４は、ＳＢＰ３の北東にあり桁行５間以上（7.7m以上）×梁行４間（5.0m）の南北棟の建物である。しかし、柱間は不規則である。桁行西辺は北から第１間1.0m、第２間2.4m、第３間1.0m、第４間1.0m、第５間2.4m、桁行東辺は第１間1.0m、第２間1.2m、第３間2.4m、第４間1.0m、梁行の北辺は西から第１間1.0m、第２間1.4m、第３間1.4m、第４間1.0mである。掘方は全て円形を呈し、直径0.2〜0.3mである。掘方の埋土はピット12・13が黒灰茶色土、その他は灰黄茶色砂質土、柱穴の埋土は暗灰褐色砂質土である。

ＳＢＰ５　当調査区の最西端Ｓ61区にある。この付近は、今回の調査区内では最高所にあたり、Ｔ.Ｐ.＋ 23.40mを測る。Ｓ61区の西部からＴ61区の西北部にかけて60個以上のピットが密集するが、建物として認め得るものは１棟であった。桁行５間（11.0m）×梁行２間（ 4.3m）の南北棟の細長い建物である。北西隅とその南の掘方が防空壕によって欠損しているが、ＳＢＰ４と



第11図　ＳＢＰ４・５平面図・断面図

第３表　掘立柱建物一覧表

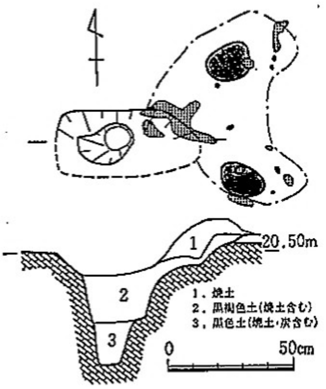
番号	地　区	規　　　模（m）	面積(㎡)	建物主軸	備　考
1	S 63、T 63	2間（3.2）×2間（3.0）	9.6	N63°20′E	古墳時代
2	T 63、64	3間（5.3）×3間（4.8）	25.44	N15°30′20″W	奈良時代
3	T 64	梁行3間（4.8）	—	N 6°50′33″E	鎌倉時代
4	T 64	5間（7.7）以上×4間（5.0）	—	N14°02′10″W	鎌倉時代
5	S 61	5間（11.0）×2間（4.3）	47.3	N19°17′24″W	鎌倉時代

比較すると極めて均整のとれた建物と言える。柱間は、桁行の第3間（中心間）が1.9mと狭く、その他は、2.2m〜2.3mである。又、建物の南の梁行は、東側の第1間が 2.3m、西側の第2間が2.1mである。掘方は全て円形を呈し、直径0.3m程度である。柱穴は、直径0.15〜 0.2mである。埋土は、掘方が黄灰色粘質土層、柱穴が暗黄茶色粘質土である。

集石遺構（ＳＸ３）及び鍛冶炉状遺構（ＳＸ４）　（第12図；図版19）

ＳＸ３　Ｒ63・64、Ｓ64区の西部にかけて、黄灰色粘土層の上面に３〜５㎝大の小石が集中して認められたものである。人為的なものか、ＳＸ３の東側に帯状に見られる微高地の石が崩落したものか不明である。

ＳＸ４　ＳＸ３内に見られる。試掘トレンチによって、約½欠損している為に規模等については不明な点が多い。残存状態から推定すると、隅丸方形の土壙（長辺0.6m、深さ0.5m）の北側の壁に焼土がこびりついている。この焼土は、土壙の上場より上方に盛り上がっている。土壙の底部は、直径約10㎝の円形を呈し、底から約20㎝は炭化物を多量に含む黒灰色粘土層が見られた。土壙の北側には、焼土片と鉄滓が散乱し、ＳＸ３の上面からは比較的多量の鉄滓が検出された。ＳＸ３とＳＸ４が互に関連する遺構かどうかは、鉄滓の分布範囲がＳＸ２をあまり超えない事から、一応関連するものと考えたい。



第12図　ＳＸ４平面図・断面図

Ｆ　室町時代

この時期の遺構としては、台地上にある溝（ＳＤＡ５）のみである。ＳＤＡ５は、Ｒ62・Ｓ62区に見られるもので北西方向に下降しつつのびて調査区外に達している。幅員２〜６ｍ、深さ0.2〜0.5mである。Ｓ62区内では、ほぼ南北に走り、溝底の比高差も少なく、幅も広い。

Ｇ　江戸時代

この時期の遺構としては、土壙群、井戸（ＳＥ１・２）、埋甕（ＳＫＡ23〜25）、溝等がある。特に、土壙が多数検出され、台地上の北東部に集中している。

土壙群　（第13図；図版20）

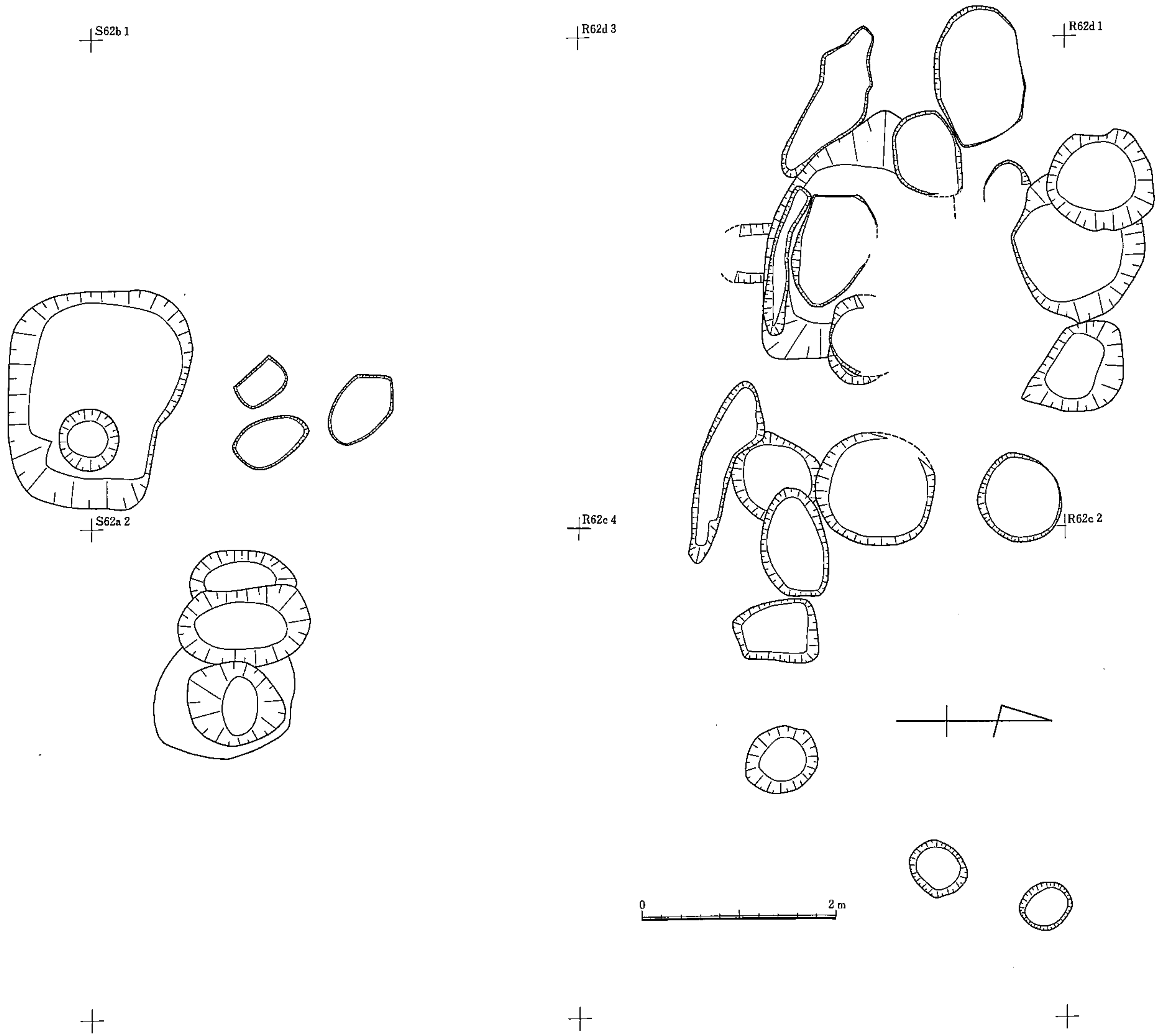
大小合わせて47個検出された。特にＳ62・Ｒ62区に集中して見られる。大半は、円形であるが、長方形等もある。法量・埋土については、第４表のとおりである。

井戸（ＳＥ１・２）　（第15図；図版21）

２基の井戸が検出されたが、両方共素掘りである。深さは、３ｍ以上に達する為に底は確認できなかった。平面プランは、ＳＥ１（Ｓ62区）は円形を呈し、ＳＥ２（Ｔ63区）は上面がくずれた為か不整形である。

埋甕（ＳＫＡ23〜25）　（第14・15図；図版20）

円形の土壙内に、いわゆる湊焼の甕を据えた状態のものを３基検出した。ＳＫＡ23（Ｒ64区）、



第13図 近世土壙群平面図

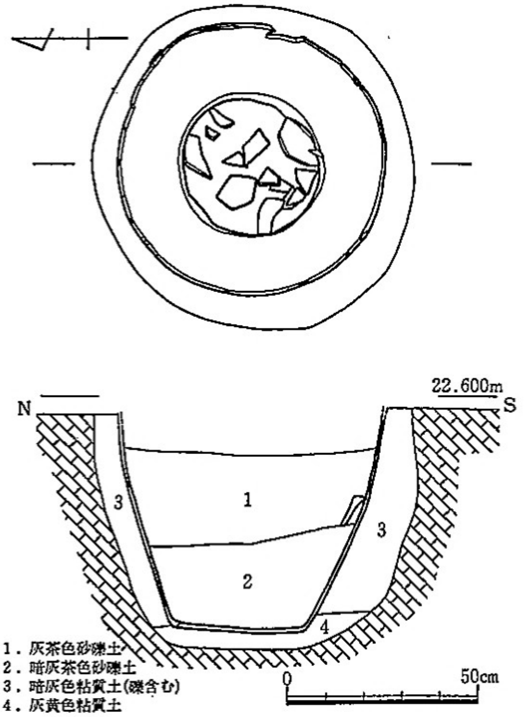
第4表　土壙・埋甕一覧表

土壙

番号	地　区	形　状	規　模（cm）	深（cm）	埋　土
1	R62	円形	直径48	8	茶色砂礫土
2	R62	円形	直径69	8	褐色砂礫土
3	R62	円形	直径60	18	上層：茶色砂礫土
					下層：褐色砂礫土
4	R62	方形	長辺75・80、短辺60・40	10	赤褐色粘質土
5	R62	楕円形	長径110、短径70	6	黄褐色粘質土
6	R62	円形	直径90	17	暗灰褐色粘質土
7	R62	方形	長辺100、短辺80	8	暗灰色砂礫土
8	R62	楕円形	長径90、短径70	12	茶褐色粘質土
9	R62	円形	直径110	4	黄灰色土
10	R62	円形	直径100	45	上層：茶灰色砂礫土
					下層：暗灰褐色粘質土
11	R62、S62	不整形		63	暗褐色粘質土
12	R62	不整形		73	上層：淡青灰色粘土
					中層：灰黄色砂礫土
					下層：黄灰色粘土
13	R62	楕円形	長径143、短径94	6	淡黄灰色粘質土
14	R62	不整形		11	茶褐色砂質土
15	R62	楕円形	長径110、短径74	5	黄茶色粘質土
16	R62	方形	長辺24、短径14	25	茶灰色粘質土
17	R62	円形	直径60	20	黄灰色粘土
18	R62	楕円形	長径75、短径60	17	上層：黄灰色砂質土
					下層：黄灰色粘質土
19	R62	楕円形	長径80、短径50	4	黄灰色粘質土
20	S62	円形	直径60	7	灰茶色砂礫土
21	S62	円形	直径100	10	褐色砂礫土
22	R62	不整形		5	茶褐色砂礫土

埋甕

番号	地　区	掘方形状	規　模（cm）	深（cm）	掘方埋土
23	R62	円形	80	22	暗灰色粘質土
24	R62	円形	85	64	暗灰色粘質土
25	R62	楕円形	長径109、短径86	58	灰色粘質土



第14図　ＳＫＡ24平面図・断面図

ＳＫＡ24（Ｓ64区）については、約½程度しか残っておらず体部中央から上部は欠損していた。ＳＫＡ25（Ｓ64区）は、口縁部が甕内に落ち込んでいたもののほぼ完全な形で検出された。法量・埋土等については、第４表に記したとおりである。

Ｈ　小結

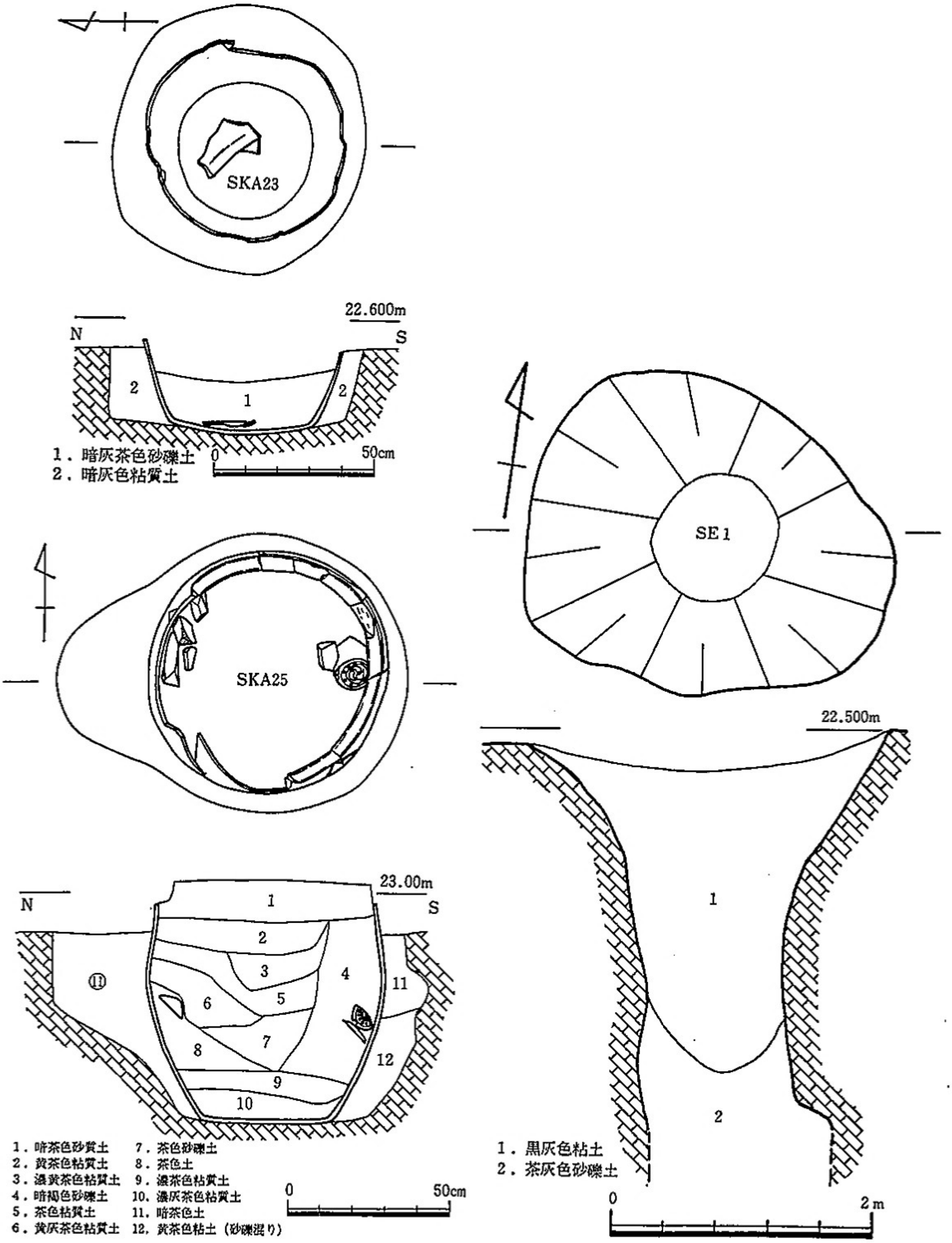
以上、各時期の遺構について概略を記したが、今回の調査では弥生時代後期から古墳時代前期にかけて若干の空白期を置きながらも、弥生時代中期から江戸時代にわたる長期間継続した複合遺跡としての様相を十分に示している。

弥生時代中期のＳＤＮ１、ＳＤＡ１、ＳＸ１、ＳＸ２は、水田経営に不可欠な、水を得る方法の一端が明らかにされたものと言えよう。更に、重要な点は台地上に当調査区及び菱木下遺跡第Ⅰ調査区にかけて検出された方形周溝墓群、竪穴住居址群と合わせて丘陵地内における弥生時代中期のムラ（居住地・墓地・生産地）を把握する好資料を得た事である。

古墳時代後期になると、台地縁辺部に竪穴住居址群が見られ、居住地としての様相を示す。この時期の水田は、調査区内では沖積地部分及び後背湿地的な溝ＳＤＮ２が考えられるが、ＳＤＮ２については、花粉分析の結果イネ科の植物がきわめて少量しか検出されず水田として利用された可能性は薄い。又、沖積地部分は、畦畔・溝等の水田関連遺構が検出されず、調査区内では、古墳時代後期の水田は見られない。

奈良時代には、段丘崖直下にＳＢＰ２が見られる。３間×３間の建物で、ＳＤＮ２の上面に立地しており、ベースは不安定である。おそらく住居的な建物ではなく、倉庫的な建物が想定される。更に、沖積地部分にほぼ南北にのびる溝ＳＤＡ３、ＳＤＡ４がある。ＳＤＡ３の底には、若干の砂層が埋積しており水が流れていた事を示すものであろう。又、ほぼ南北に直進している事から人為的に掘削されたものであろう。この時期になってようやく沖積地部分が安定し、利用され始めたと言える。台地上に検出されたＳＤＡ２も、最下層が弥生時代中期の土器のみ包含しており、従来谷地形であったものを利用しつつ部分的に底を深くする事によって台地上の水を集積し、水田へ導く灌漑施設と考えられる。

調査区内の沖積地部分が、水田として利用されるのは平安時代末及び鎌倉時代初頭であろう。この頃の建物として、ＳＢＰ３・４・５の３棟が検出されているが、ＳＢＰ３・４は沖積地部分



第15図　ＳＫＡ23・25、ＳＥ１平面図・断面図

近くの微高地上にあり、ＳＢＰ５に比べて規画性も乏しい。水田に付随する倉庫的な建物であろう。又、ＳＸ３・４の存在は、鉄製農耕具等の鉄製品に必要な小鍛冶を想定させる。今回の調査区付近の沖積地部分の水田経営は、現代に至るまで継続されているが、台地上の開発は15～16世紀の溝ＳＤＡ５が掘削されてからと言える。しかし、台地上の開発が顕著に行なわれるのは、土壙・井戸・埋甕が多数見られる様になる17世紀以降であろう。

註

1）　大阪府教育委員会　『西浦橋遺跡発掘調査概要』　1981年

2）　堺市教育委員会　野田芳正氏御教示

第４節　遺　　　　物

1　概観

調査区の東半部洪積段丘上と西半の沖積面とでは、遺物の出土量・時期・出土状況が若干異なっていた。東半部では包含層出土遺物量はコンテナ約50箱で主に遺構周辺から出土し、その遺構に相当する時期の遺物が多い。ＳＤＡ２、ＳＤＡ５からは弥生時代から室町時代に至る土器が集中的にコンテナ 100箱近く出土した。なかでも古墳時代後期から奈良時代の須恵器が出土土器の半数以上を占めていた。その他の遺構は調査区中程の北側と南側にある小規模な埋積谷の周辺に若干みられた。ここは斜面堆積物とともに比較的遺物包含層が厚い地点であった。他には段丘崖と段丘上に南北方向に造成された耕地盛土層に遺物が少量含まれていた。

西半部沖積段丘面上には中・近世の遺物包含層が存在し、旧石器～近世に至る遺物がコンテナ約 400箱分出土した。その下層には縄文・弥生時代の河道が検出され、それらの埋没過程の中に溝・杭列等の遺構が検出されたのである。遺物は旧河道とＳＤＮ２付近に集中していた。洪積段丘西端にみられる小規模な段丘崖に設けられた住居跡等から転落したものと考えられる。旧河道からは木製品や弥生式土器・石庖丁・サヌカイト等が多数出土しているほか下層の青灰色シルト層からも縄文晩期甕が出土している。旧河道埋没後堆積した黄色粘土層中には殆ど遺物はなく、その上面に流れるＳＤＡ４から多量の須恵器が出土した。またＳＤＮ２からも５世紀末から６世紀初頭の須恵器が多量に出土し、埋没するに従って６世紀後半・８世紀後半の遺物も含んでいた。

遺物包含層からの出土品には旧石器・縄文・弥生時代の石器及び剝片が 300点近く検出されたほか、縄文後・晩期、弥生前・中期の土器等が出土している。古墳時代以降は古式須恵器から８世紀の円面硯まで多量の須恵器が出土し、平安時代以降黒色土器・施釉陶器・土師器・瓦器・東播系須恵器鉢・中国陶磁器等々が出土している。中世から近世にかけても伊万里・備前・丹波・信楽・常滑・美濃瀬戸・唐津焼等が在地の土師器・瓦質土器・瓦類・湊焼等と共に出土している。

その他の遺物として埴輪・製塩土器・鞴羽口・貨銭・鉄滓・砥石等が出土している。以下時代順に上記の遺物について記述するが、溝内出土土器については埋没時期を示す遺物以外に多量の

前時代の遺物（特に須恵器）を含む場合が多く、（ＳＤＮ２・ＳＤＡ２・ＳＤＡ７等）須恵器については、５世紀代から６世紀前半代、６世紀後半代から７世紀前半、７世紀後半から８世紀後半までの三時期に大別して説明することにした。

２　各時代の遺物

Ａ　旧石器時代　（第16図１・２、第17図；図版126・127）

ＳＤＮ２とその周辺から２点のナイフ形石器が出土し、翼状剝片・石核も検出した。ＳＤＮ２周辺について１ｍグリッドを約10ケ所設け、淡黄白色粘質礫混り土を20cm近く掘り下げたがサヌカイト等は出土しなかった。

本遺跡から出土した旧石器はすべて原位置を保ったものではなく、後世の包含層中から出土したものである。つまり後世の削平による２次堆積物である。しかも中位段丘上にではなく、沖積段丘上からの出土品が多い。

ここではナイフ形石器や翼状剝片のような明瞭な旧石器以外、剝片やチップについてはその風化度を一定の基準とし、著しい風化度を有するサヌカイト片を旧石器とした。縄文時代、弥生時代の石器はサヌカイト本来の黒味をそれほど失なっておらず、明らかに風化度の差がみられた。チャート製の１点を除いて、他はすべてサヌカイト製である。全部で約 400点出土し、石核、ナイフ形石器、有使用痕石器、翼状剝片などが20点である。

ナイフ形石器が２点出土した（第16図１・２）。１は典型的なナイフ形石器であるが、２はファーストフレイクを素材としたものと考えられるもので、小形で、背面調整も、背面からのものである。１は半折しており、２も両端をわずかに欠いている。翼状剝片は１点出土した（第17図１）。打面調整は余り丁寧に行われず３・４回小さく行われているにすぎない。しかも素材の質があまりよくなく、１次剝離の打力が下に抜けず、外側に力が抜けたようで、きれいな剝片とはなっていない。腹面も大きく階段状剝離面が残っている。３（第17図）は剝片素材としては盤状剝片と考えられる。石核は２点出土した。４（第17図）は比較的小さく薄い。風化もあまり進んでいず、打面調整もない。背面も自然面がある。円礫を半截し、さらに四分した剝片を素材としたものである。円周にそって打面とし、小さな剝片をとっている。時代の下がるものかもしれない。５（第17図）は背面に自然面をもつ盤状石核を素材とした、比較的大きな翼状剝片石核である。ファーストフレイクしか剝取されていない。比較的細かな打面調整が施されているが力が下にきれいに抜けず、階段状をなしてとまったためあまりいい剝片がとれず、それ以後石核としては使用されなかったようである。恐らく、右端にみられる調整はスクレパーとして使用する為のものではないかと考えられる。

２（第17図）はチャート製の剝片であるが不思議にも両面ともが腹面状を呈しており、上下２つの打面を有している。

第５表　石器数量表

	数量	％
ナイフ形石器	2	10
剝片石器	9	45
有使用痕石器	4	20
翼状剝片	2	10（ファーストフレイクを含む）
石核	3	15
フレイク 4730	計 20	100％

バイポーラー打法とは異なるが、片側の打点は剝離の過程で生じたものであろう。

今回出土したうち、定形石器としてはナイフ形石器２点であり、翼状剝片及び石核も少なく、組成を云々する所までは論じられないが、それほどの磨滅もうけず、極めて近接した位置からの２次堆積物であると推定される。これらの石器は石核の１点を除いて、国府型ナイフ形石器文化の一時期の所産といえる。

B　縄文時代　（第８図；図版128）

青灰色シルト層から晩期末の甕が出土した以外は包含層及び後世の遺構から出土している。

第６表　縄文式土器出土地点別数量表

	65区		64区		63区		62区	
R								
		2	1					
S								
				2				
T		1	1	1				
	1	1			1			
遺構その他　7						計　18点		

土器

縄文後期口縁部４点と晩期甕口縁部８点、同底部１点が西半部沖積面上の遺構・包含層中より検出された。T65地区青灰色シルト層内より出土した晩期末の甕以外は小破片で文様と胎土について若干説明を加えるのみとする。胎土についてはくさり砂岩を含むものと角閃石・金雲母を含むもの、緑色片岩の風化したものを含むのとに三分された。河内産と考えられる土器は後期の磨消縄文を施すもので、淡黄茶色を呈し、断面は黒色である。砂粒が多くもろい。晩期の土器は細い刻み目凸帯を口縁端部にめぐらし（第18図４）、濃黄茶色を呈す。胎土は均質で硬い。晩期の甕には若干の緑色片岩を含み、凸帯上に背頭大の圧痕がみえるものが含まれ（第18図１）、河内産のものとは趣を異にするものであった。底部片は在地産の胎土で、外面に擦痕が見え、あげ底を呈す（第18図10）。全体に他地域産のものがよく目についた。特に河内産のものは出土土器の半数以上にのぼるようである。

縄文時代・弥生時代石器　（第16図３～17、第19・56・57図；図版126）

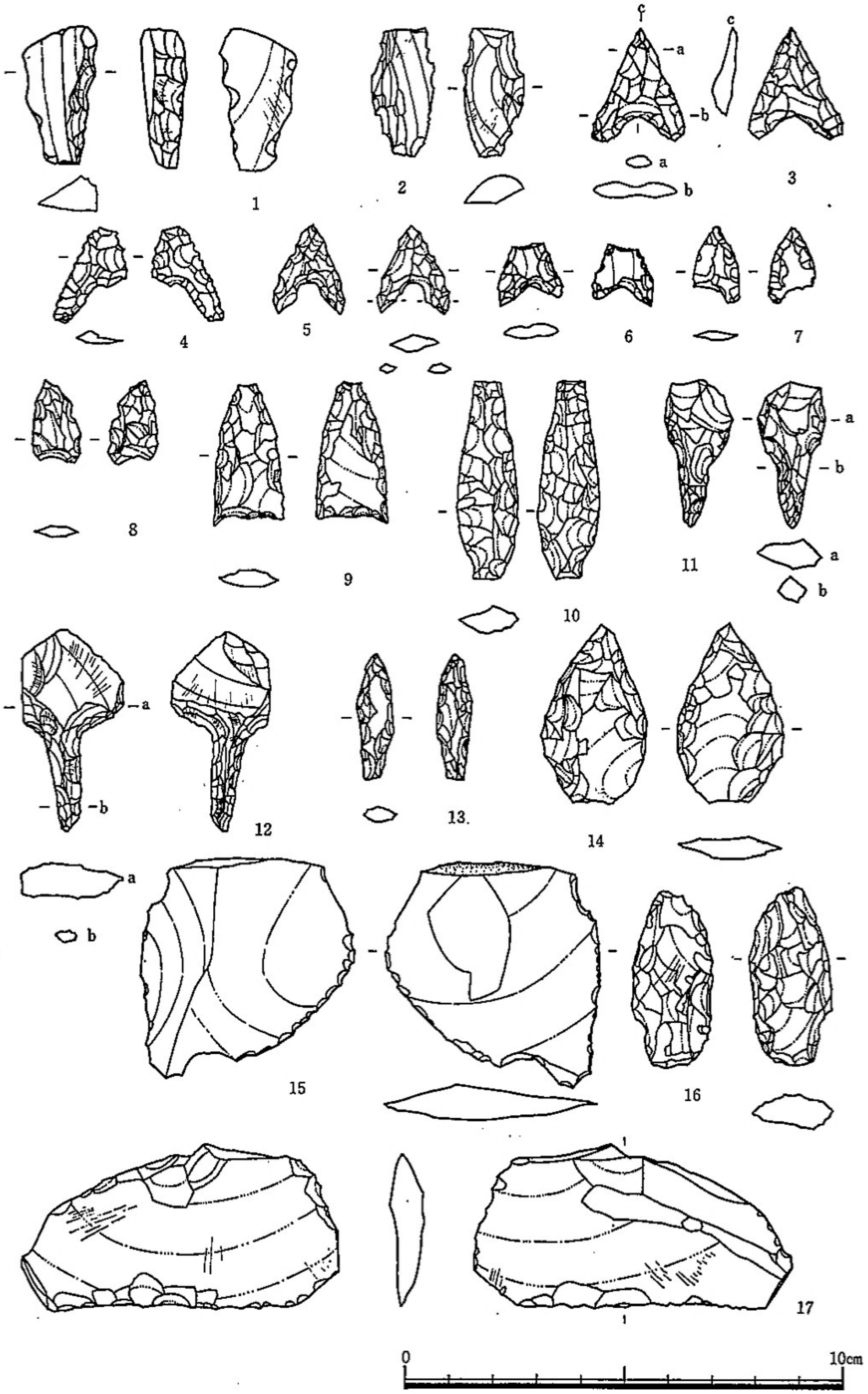
石器については、剝片・チップ等も含めて観察した結果、明確に時期区分し難いものがあり、一括して説明する事とする。

この時期の所産としては剝片、チップも含めて数100点に達する。しかし、石庖丁のような明らかな弥生時代の石器とされる遺物は別として、石鏃、石錐、不定形石器・石斧については必ずしも時代ごとに明らかにできないものもある。従ってその組成としては若干の混乱を伴うことを断っておく。

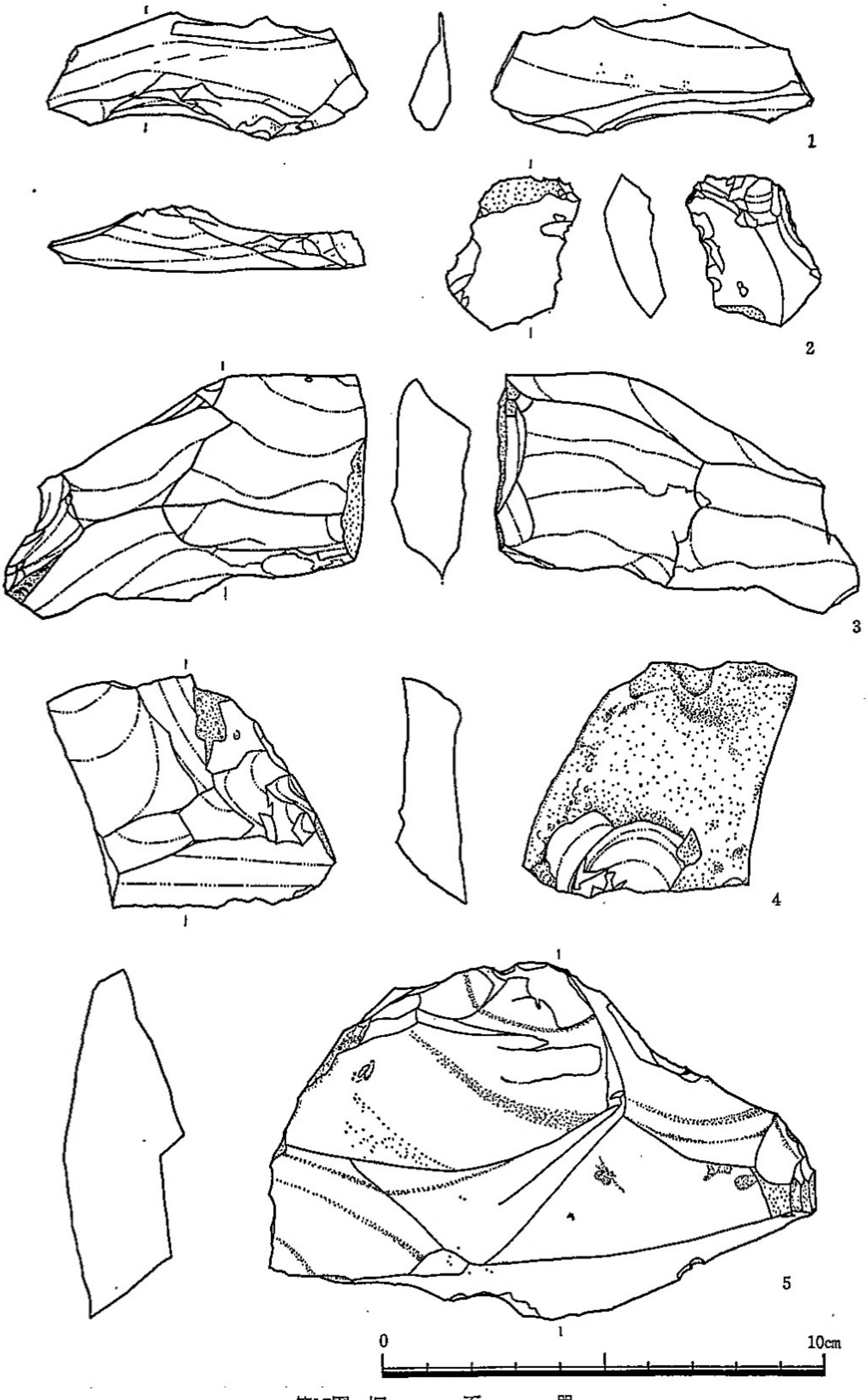
これらの石器はＳＴＳ１の周辺とＳＤＮ２の中から集中的に出土した。

打製石器と磨製石器の比率は石器素材としての剝片やチップを除くと、打製石器２：磨製石器１となる。打製石器と認められるものが全部で60点、うち未製品を含めて石鏃が17点、以下石錐８点、スクレパー１点、不定形石器26点、有使用痕石器７点であった。剝片が約 200点、チップが約200点であった。

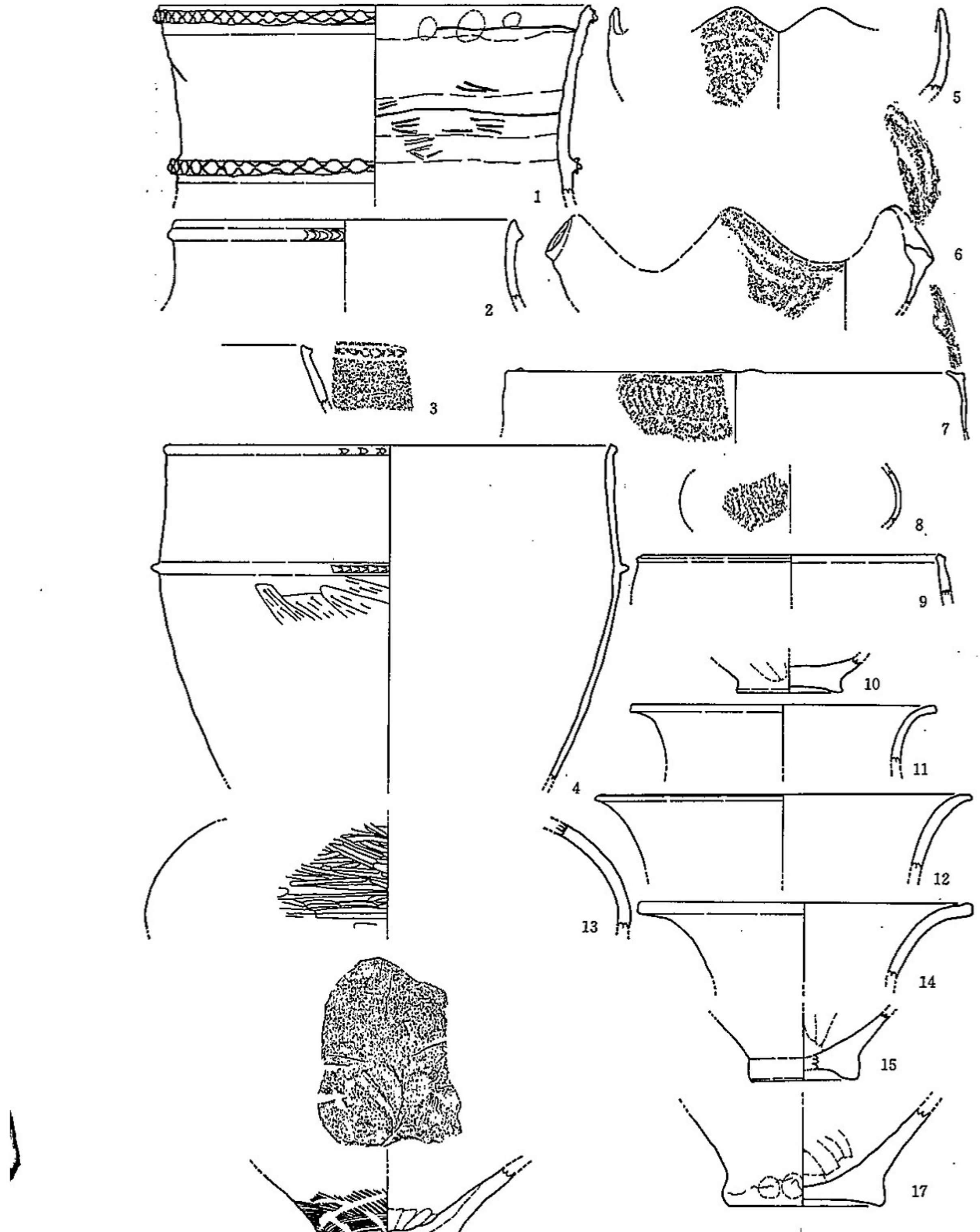
石鏃（第16図３～10・14・16）17点の内、完形品が11点であるが10・14・16以外は凹基式で、



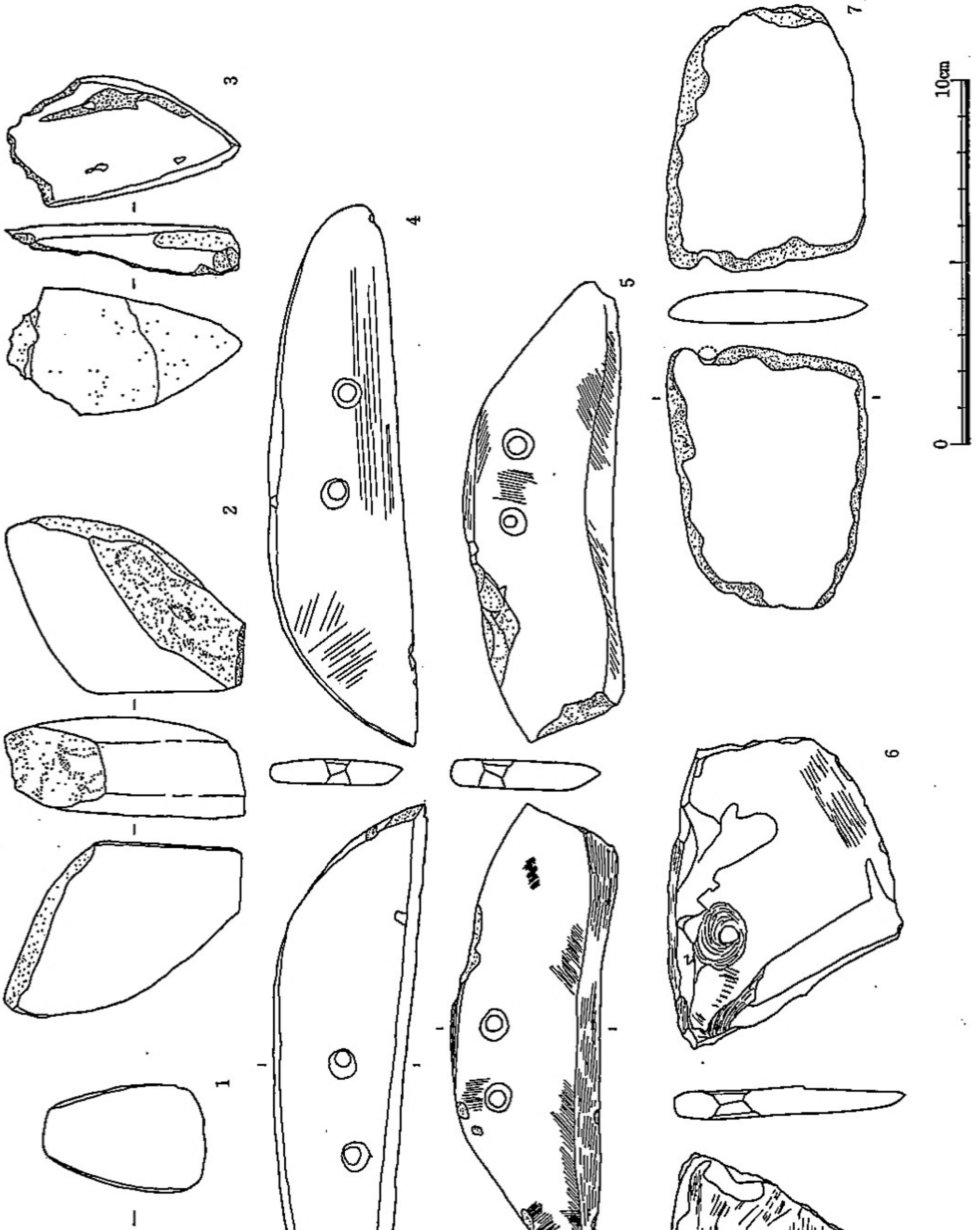
第16図　旧石器～弥生時代の石器



第17図　旧　　　石　　　器



第18図　縄 文 ・ 弥 生 式 土 器



第19図　磨　製　石　器

弥生時代中期前半以前の所産であることを示している。とりわけ4～8は恐らく縄文時代後、晩期の所産と考えられる。4は中期後半頃のものと推定される。石錐（第16図11～13）はつまみ部を有するタイプ（11・12）とつまみ部を有さない、もみキリ（13）の2つのタイプがある。17（第16図）は横長の剥片の刃部に両面加工を施したナイフ様の石器である。又15（第16図）は幅広の剥片の左右側辺に規則的な刃こぼれがみられ、刃部をナイフ状に使用した結果生じたもので、いわゆる有使用痕石器である。これら2点は杭列群ＳＸ１周辺から出土したもので、弥生時代中期前葉より中葉にかけての時期のものである。石核も1点出土した。

磨製石器のうち、石庖丁（第19図4～7）が最も多く、10点である。以下石斧3点、砥石4点、凹み石、叩き石など4点であった。石庖丁は5（第19図）を除いてすべて包含層中から出土したものである。5は弥生中期前葉のＳＴＳ１から出土したものである。4と5は比較的よく使いこんだものであるが4は比較的製作時の形をよくのこしていると思われる。7は未製品であるが、紐孔の穿孔が施されている。石庖丁はすべて緑色片岩製である。石斧（第19図1～3）のうち3は断面が長楕円形を呈し、蛤刃をなさないと推定され、時代としては弥生時代よりむしろ縄文時代とした方が妥当かもしれない。1は扁平の小型の石斧である。工作用のものであろう。3は柱状片刃石斧である。わずかに刃部の角度が判明している。砥石（第56図1・3）は全部で4点出土したが、余り大形のものはなく比較的小さかった。いずれも砂岩製であるが1は比較的粗い砂岩であり、3は硬質砂岩製である。2（第56図）と第57図は砂岩製の叩き石である。

今回のこの地区においては縄文時代包含層の調査が行なわれなかったが下層にその存在が確認されており、今回報告のものはいずれも本来そこに存在したものの2次堆積物とすることができる。弥生時代の遺構についても中位段丘上の方形周溝墓、溝など集落の中心部分からははずれた地区であったこともあって、遺構内からの出土は余りみられず、ほとんどが、後世の包含層から出土したものであった。西浦橋遺跡の石器については菱木下遺跡と総合的に検討を加えた上で、その存在形態を論じる必要があると思われる。

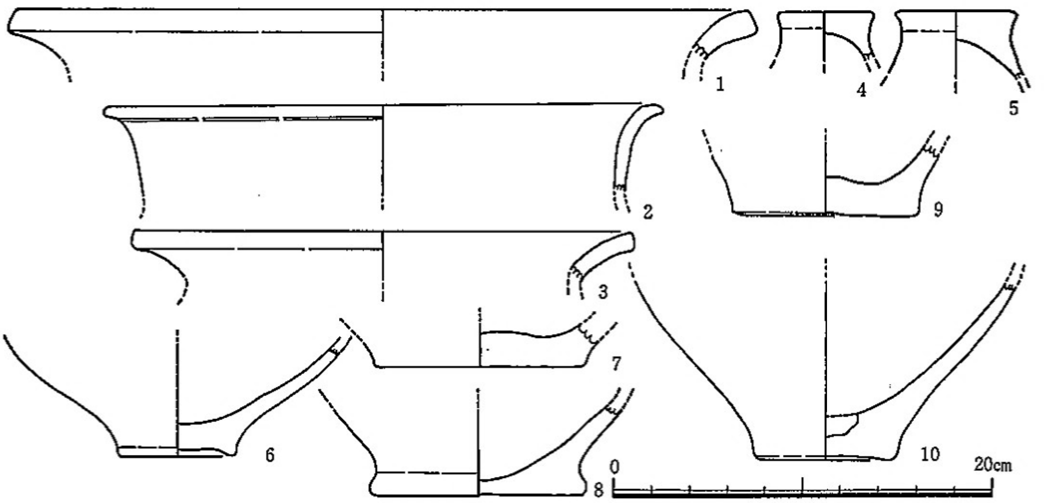
C　弥生時代

土器　（第20～23図；図版128～131）

全調査区から出土した土器片は包含層内より約400点、遺構内からは約900点出土している。時期的には第Ⅰ～第Ⅴ様式期まで認められ、甕・壷類が器種の大半を占める。高杯・鉢・蛸壷等は若干含まれるにすぎなかった。以下、時期を追って説明する。

第Ⅰ様式期にはごく少量の壷類が、縄文晩期の土器片とともに旧河道とその周辺から出土する。

第Ⅱ様式期に至り、状況が変化する。土器量、出土地区、器種構成、他地域産の土器の流入等が増大・拡大する。時期の限定できる個体は50個体以上認められ、ＳＸ１を中心に沖積段丘面上に多く分布していた。これらは残存状態も良好で、石庖丁・剥片石器等と共伴している。また調査区の中央に南北に走る段丘崖の西に接して幅が広く、浅い谷状を呈するＳＤＮ２からも約150点近い土器片が出土した。高坏・鉢等も含まれ、河内・紀伊産の土器片も認められた。調査区東



第20図　ＳＤＮ２出土弥生式土器

半部ＳＴＳ１には須恵器、土師器の混入もあったが、壺５点・甕２点が出土した。ＳＴＳ２からも壺底部３点、河内産のものも含まれ、鉢又は高坏と考えられる破片も混じっていた。サヌカイト剝片や石庖丁も含まれた。またＳＤＡ２の最下層には当時期よりやや新しい土器を含む単純層がみられた。いずれも細片であるが、櫛描平行線文や刺突文を頸部・口縁部に施すものもあり、口縁部内面に櫛描列点文を施し、拡張した口縁帯に円形浮文を持つものもみられた。壺口縁部（第21図１）は胎土に黒色粒及び金雲母が含まれ、茶褐色を呈す。器表面の剝離が著しく、調整の観察は難しい。肥厚し垂下した口縁帯の外面に何らかの施文があったと思わせるわずかなへこみが見られる。甕口縁部（第21図２）は胎土中に片岩が含まれ、紀伊産のものである。底部片（第21図３～10）は径により、４～５cmの小型のものと、６～８cmの中型、12cm前後の大型のものに分けられた。紀伊産の底部は、やや上げ底気味で体部下端が外方にふんばる。在地産のものには分厚い底部から直立気味に体部へと続く甕と考えられるものと、やや薄い底部から斜め上

第７表　弥生式土器包含層内出土地点別数量表

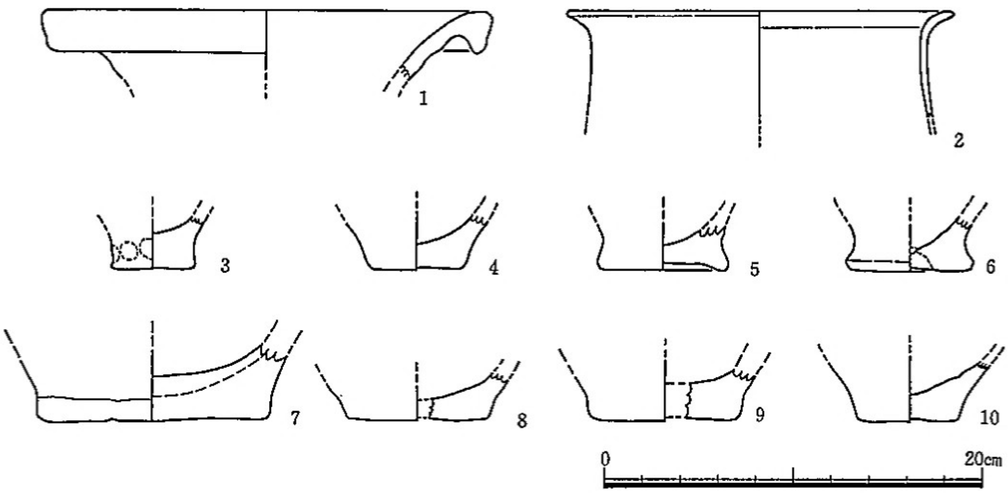
	65		64		63		62		61	
R	1	4	2			1			1	
	26	12	38	32	2	4	18	3		
S	28	13	19	50		8	6		4	12
	21	11	9	23		4				
T	14	5	7	8	2	3				
	19	9	1	5		3				

第８表　ＳＤＮ２出土弥生式土器数量表

	口縁部	肩　部	体　部	底　部	計	比率(%)
河　内	1		7		8	5.6
紀　伊	2		8	4	14	9.8
和　泉	9	11	69	31	120	84.5
計	12	11	84	35	142	99.9
比　率	8.4%	7.7%	59.1%	24.6%	99.8%	

第９表　方形周溝墓出土遺物数量表

	壺	鉢又は高　杯	甕	不明	河内産	サヌカイト	石庖丁	その他
ＳＴＳ１	5		2	4				3
ＳＴＳ２	16	1		17	3	1	1	12



第21図　ＳＤＡ２出土弥生式土器

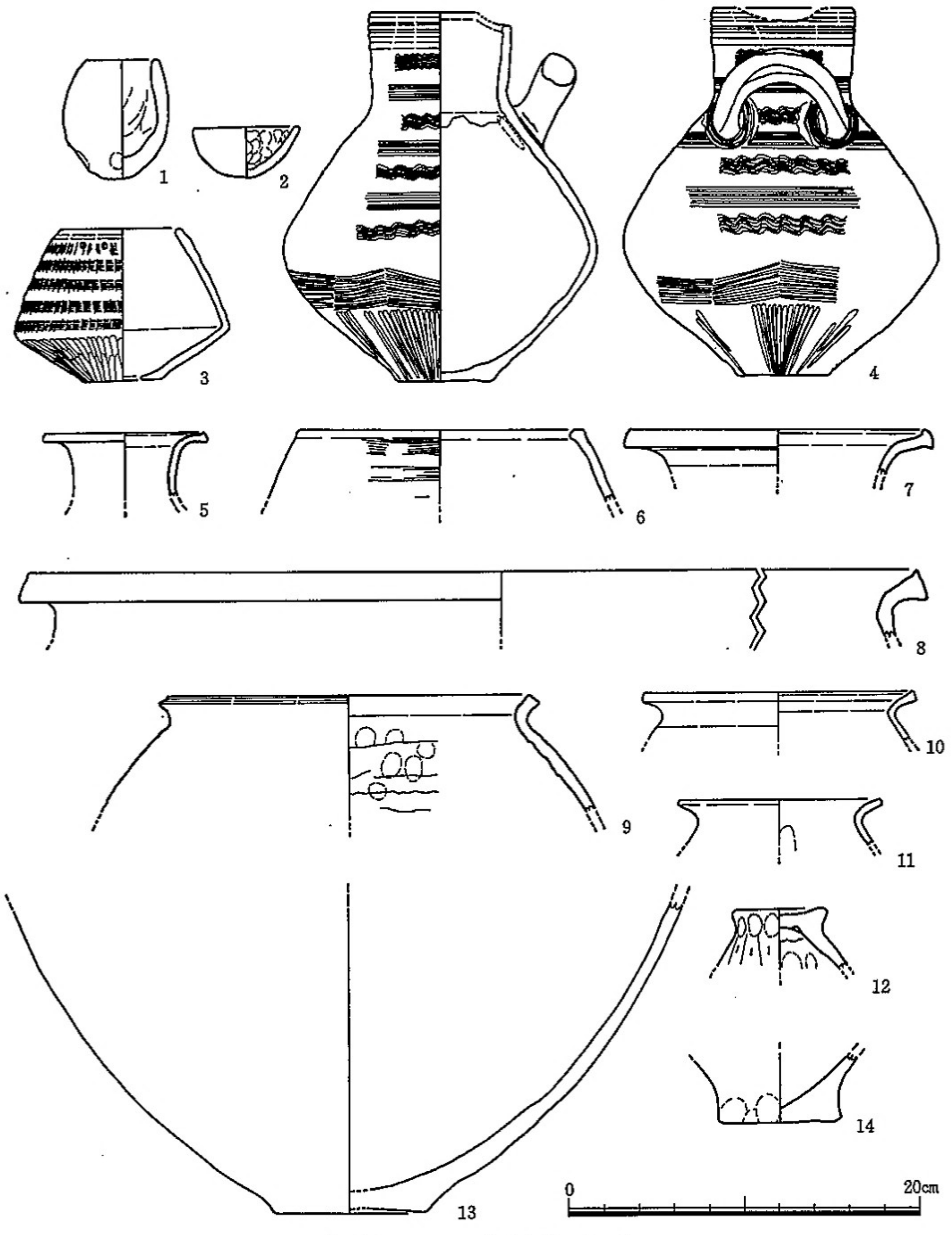
方にひらくものとに分類された。

ＳＤＡ２に一部認められた第Ⅲ～第Ⅳ様式期の土器はＳＸ１上面の灰色砂層中に認められる。その上面には黄色粘土が堆積し、この上面に流れる溝内からも出土しているのである。ＳＤＡ１の上面を覆う茶褐色礫土中には手捏ね土器（第22図１・２）、鉢（第22図６）、甕（第22図10・11）が出土し、ＳＸ１上層からは水指形土器（第22図４）、無頸壷（第22図３）が出土している。水指形土器は直立する口縁部に凹線文がめぐり、平行線文と波状文を交互に７段に亘って施していた。底部・器壁は薄く、外面体部下半に煤が付着していた。無頸壷も口縁部に段状のわずかな凹線が認められ、７条、５段の櫛描簾状文がめぐる。体部下半は箆磨きされ、底部に穿孔がみられる。口縁部には蓋紐を通す２つの穴があけられ、内面は全てなでられている。その他にもＳＤＮ２、ＳＤＮ４（第32図２）・ＳＤＡ２からも同期の土器は出土しているが、量的に減少し、第Ⅴ様式期にはほとんど認められない。ＳＤＡ２（第21図３）で数点みられるのみである。

木器　（第23、24図；図版130）

沖積段丘下に流れる旧河道（ＳＤＮ１）内及び上層杭列ＳＸ１内より、椅子・狭鍬・板杭等が多数の植物遺体とともに検出された。

椅子は「けんぽなし」[1)]の原材を輪切りにし、こしかける上面と脚部の側面にまさ目があらわれるように木取りし、両端の年輪部分が脚の小口にあたるようになっている。細部加工は小刀状の工具で削り出されている。法量は、上面32cm×34cmの隅丸方形部分の厚さが５cm、脚は厚さ３cmの基部から片方は10cm、他方は12cmの長さを測る。脚の長さの差は、検出時に上に乗っていた大木による圧力か、当初からの人為的なものか不明である。鍬は風化が著しく、残存状態は極めて悪いが厚さ１cm足らずの板部を刃先にし、幅３cm、長さ20cmの板上に、舟底形造り出しを加工している。板杭は上端部幅11cm、厚さ1.6cm、下端部厚さ2.4cm前後を測り、全長40cm前後のものが一般であった。いずれも弥生中期前半代の所産と考えられる。

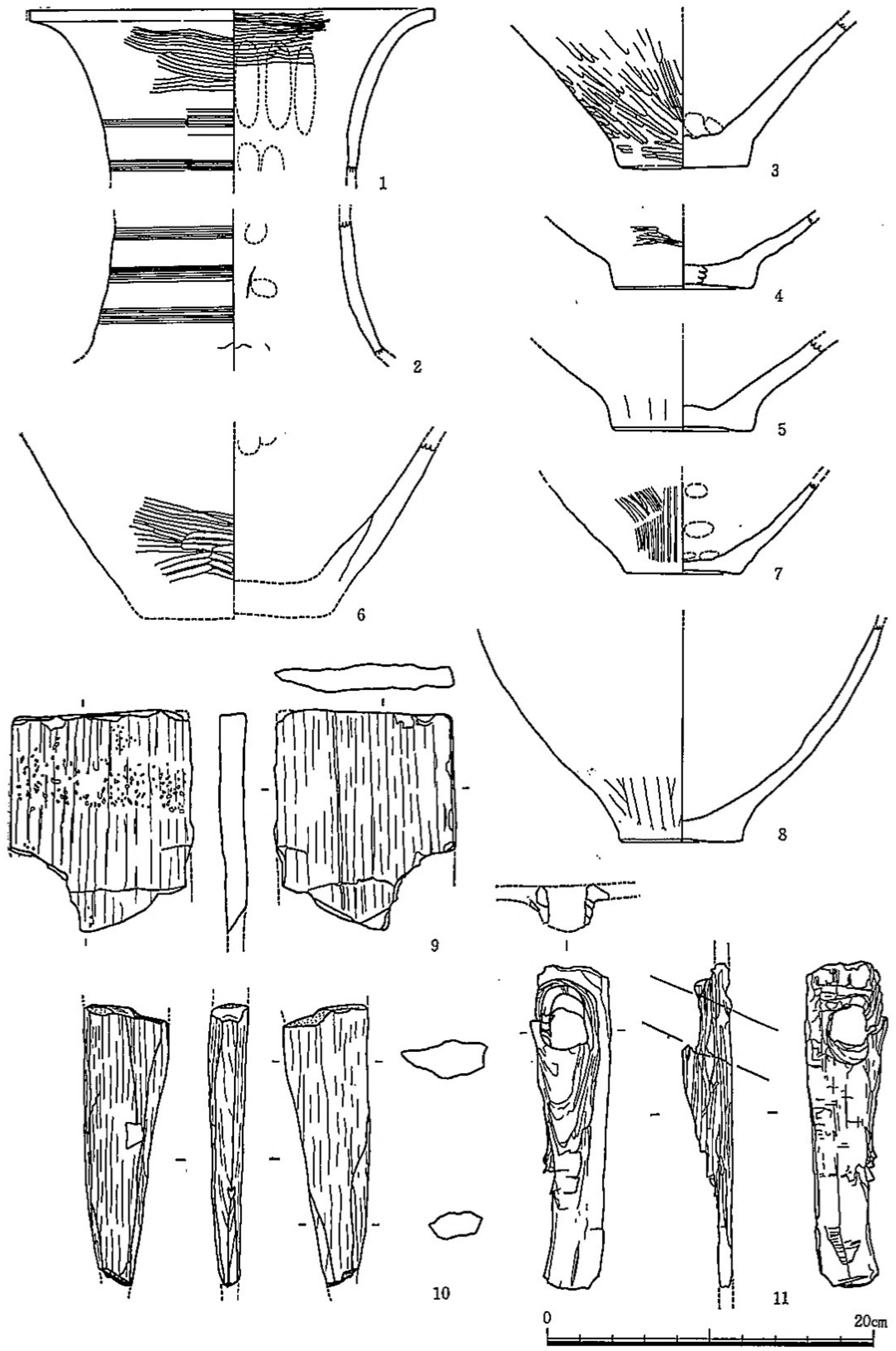


第22図　ＳＤＮ１出土土器・その他

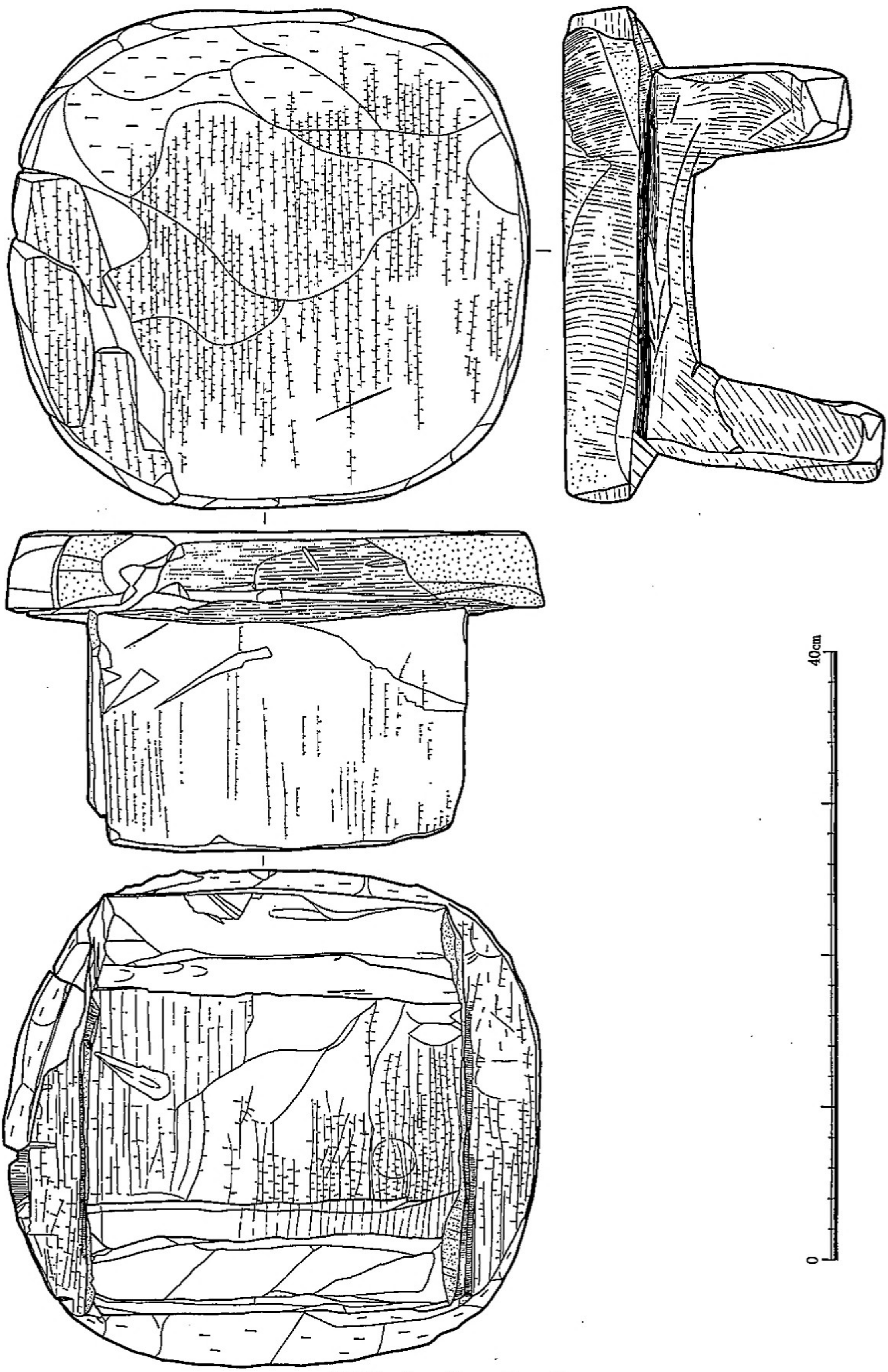
Ｄ　古墳時代　（第25～42図；図版 132 ～ 146）

須恵器

西浦橋遺跡の今回の調査で最も多量に出土した遺物は古墳時代後期の須恵器である。遺構及び包含層出土須恵器の説明は、５世紀から６世紀前半代はＳＤＮ２を中心に、また６世紀後半代のものはＳＤＡ２とＳＤＮ２からの出土品について行う。他にＳＤＡ３、ＳＤＡ４、ＳＤＡ５から



第23図　弥生式土器および木器



第24図　木　製　椅　子

も多数出土しているが、包含層出土のものについても若干ふれる程度になる。また型式編年は田辺昭三『陶邑古窯跡群Ⅰ』、『須恵器大成』、中村浩『和泉陶邑窯の研究』、府教委『陶邑』Ⅰ～Ⅴを参考にしつつ、集落出土須恵器として一時期に一括される器種構成とその数量の提示に努めた。

5世紀から6世紀前半代　調査区東端ＳＤＡ２、中央部ＳＤＮ２の周辺と上層遺物包含層から多く出土している。ＴＫ73型式からＴＫ216型式に併行するⅠ－１から２の段階の資料も同様の分布範囲で散布していた。なかでも体部外面に細かい格子叩き目を施し、口縁部外面に凸帯をめぐらせ、暗灰色を呈する甕についてピックアップしてみた。（第25図４～６）総数41点の分布及び接合関係は第10表のようになり、ＳＤＡ２とＳＤＮ２周辺に偏っている。当初ＳＤＡ２周辺に立ち並んでいた古式須恵器群が６世紀後半には破壊され、沖積段丘面上に散布していたと考えられる。器種は大甕が中心で、他に沖積段丘面上の包含層から器台脚部・蓋・壺等も若干見られ、埴輪も少量ある事から、集落が出現する前の祭祀又は古墳に伴う遺物の可能性も考えられる。甕は５～10個体程度、器台・壺等は各１個体づつしかない。器形は甕口縁部が長く、外反したものと直立気味のものがみられ、口縁端部に凸帯がめぐる。蓋及び壺についても凸帯が明瞭で列点文や波状文がみられる。（第25図１～３・10、第26図１・２・４）

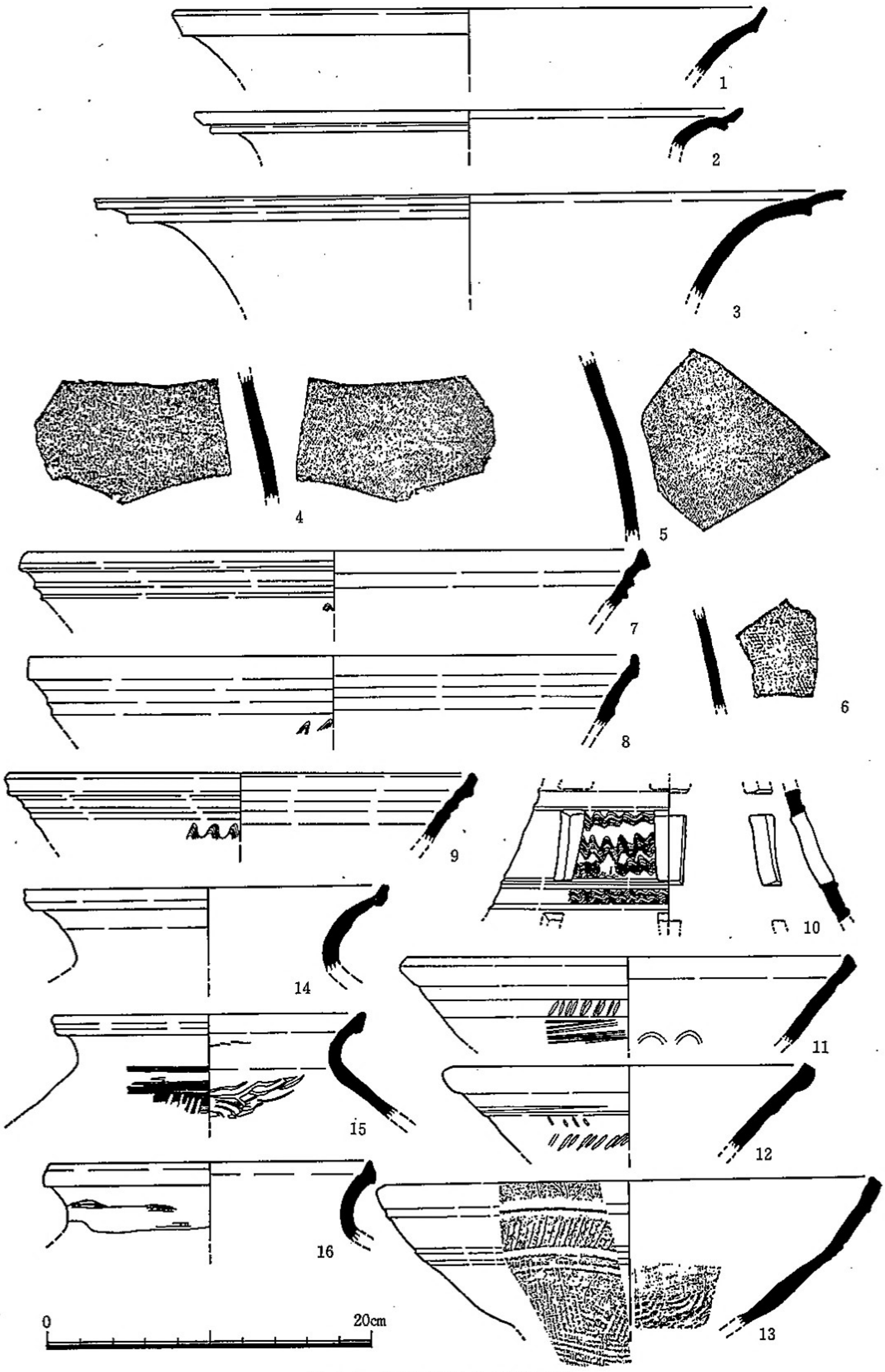
第10表　須恵器甕体部外面格子叩き目出土地点別数量表

	65	64	63	62	61
R		3 茶灰色土２	1	1 ※１	
S	5 茶灰色土※１ 3　※２	9 茶灰色土７ 暗灰粘１	4 暗灰粘２	1	6 ※２
T	1	3 暗灰粘３ 茶灰色土１	7 暗灰粘３ 茶灰色土１		

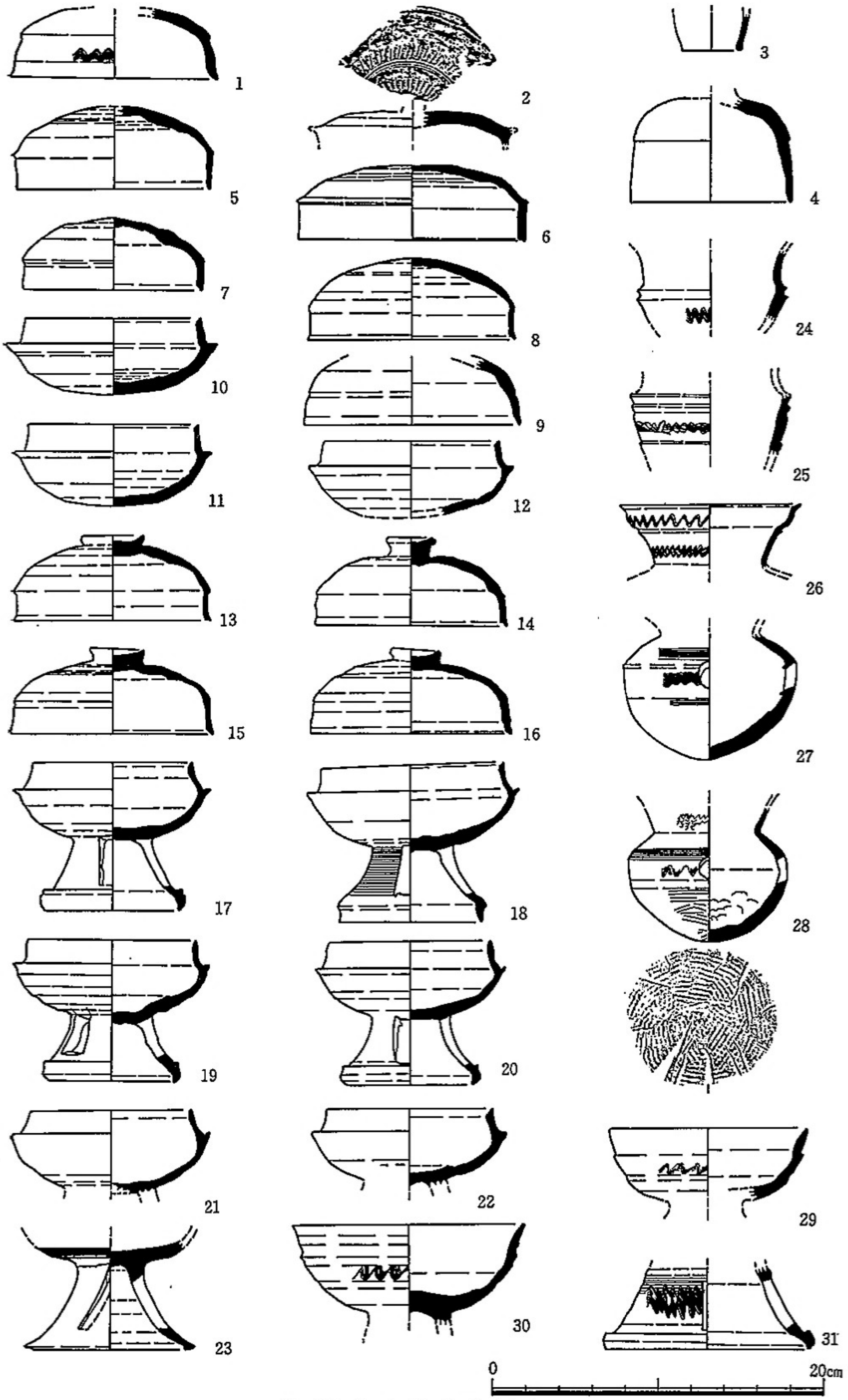
計　41

※１と※２は接合資料

これらの器種が次の段階にはやや増加し、𤭯や壺・甕も多くなる。（第26図～第29図）５世紀後半から末葉にかけて、高坏や坏（第27図16～20）が加わり、６世紀初頭にかけて急増する。ＳＤＮ２内の遺物を例示すると、坏蓋約250（第27図１～６）、坏約270点、無蓋高坏（第28図14～18）・有蓋高坏（第28図５～12）・高坏蓋（第28図１～３）がそれぞれ35、48、42点づつ確認された。器台は25点、𤭯24点（第27図32・33）、壺１点（第29図３）、甕45点（第29図５）、大型装飾付甕６点が数えられた。形態は、全ての器種で器壁が薄く、小型化する。端部の凸帯や端面が消え丸くなり凹線状を呈する。箆削りも雑になり、壺・甕類の成形痕も残る。器台にも坏部に叩き痕が残り、脚裾部にも見える（第31図９）。筒形のものと鉢形のものがみえ、筒形のものは（第31図４）上位の坏部に円形の透し穴をあけ、波状文を一段入れる。筒部は５段に分けられ長方形透しと２～３段の波状文を施す。鉢形のものは口縁部が拡張し、幅１㎝弱の面が形成されてくる（第31図１～３）。鉢は浅く薄くなり、内面が磨り減っている。脚部の数と鉢部の数が合致しない事と合わせると、鉢部のみですり鉢風に使用された可能性も考えられる。直口壺には波状文を有するものと、カキ目のみのものとあり（第28図29・30）、甕は中・小型のものが増し、低



第25図　包含層出土古式須恵器他

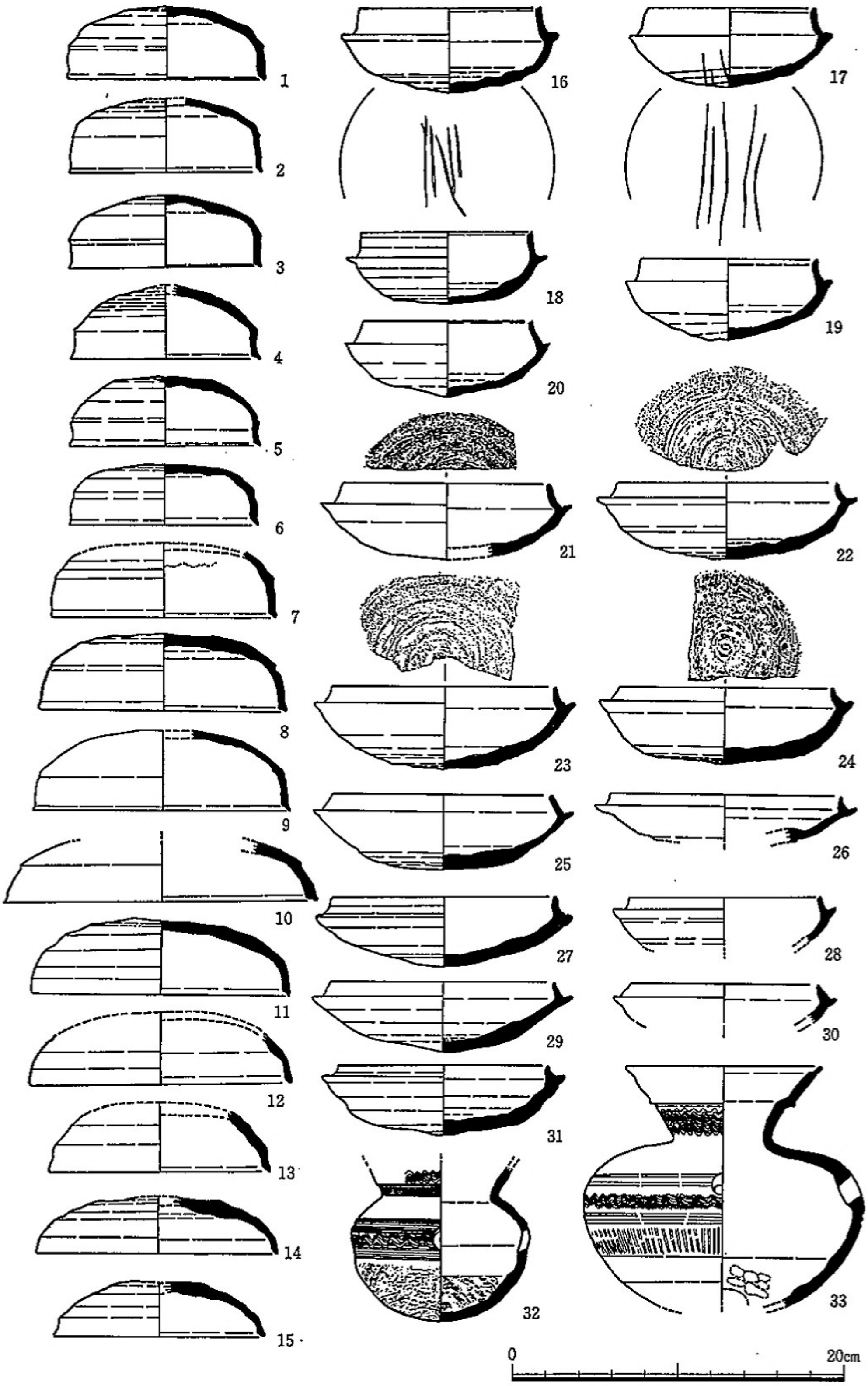


第26図　包含層出土須恵器

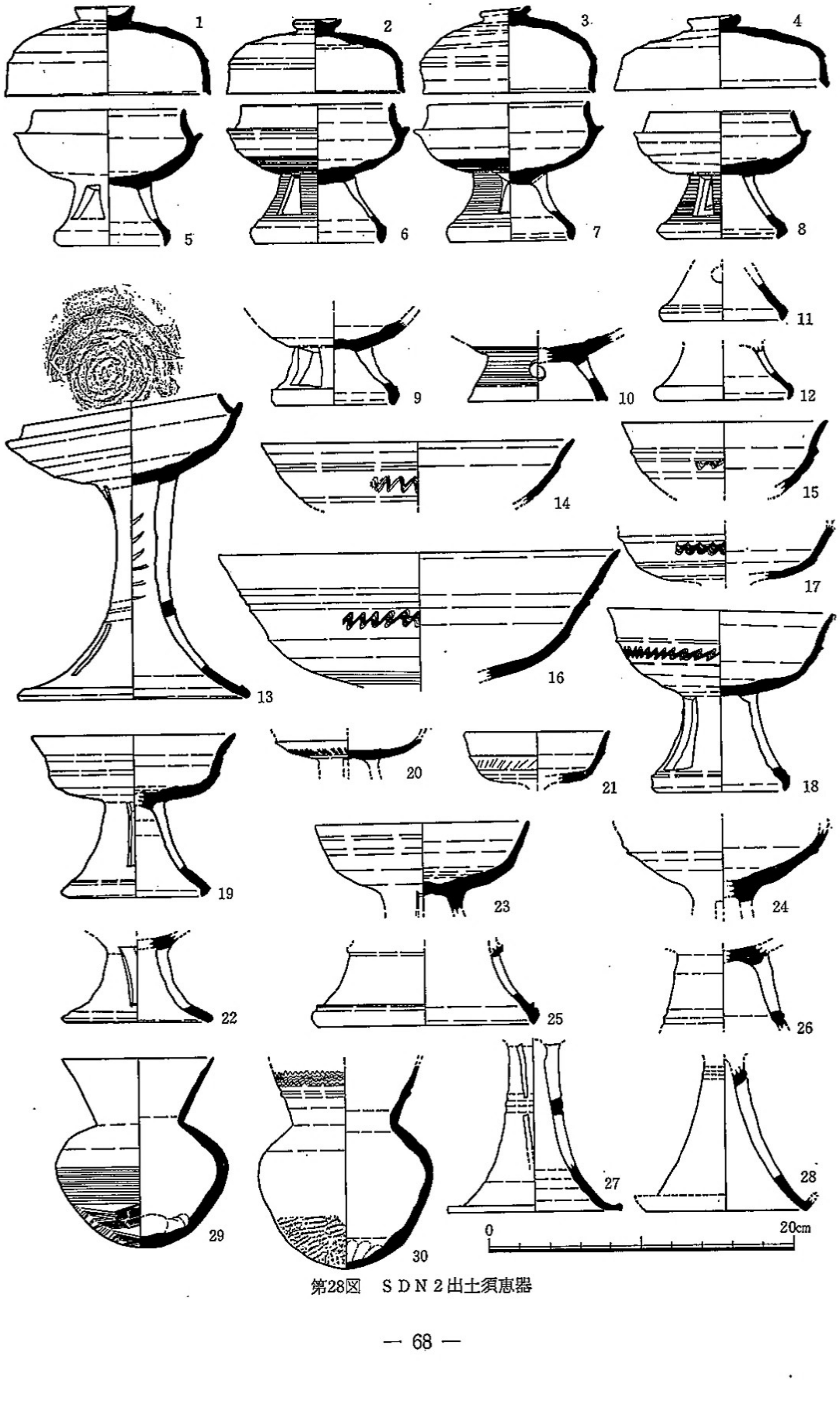
火度焼成のものが多くなる（第29図１～５）。土師器の煮沸形態が皆無に近いこともあり、生焼け中・小型の甕を煮沸用に使用していた可能性も考えておきたい。

６世紀後半から７世紀前半代　出土地点はＳＤＮ２から北西方向に多く見られ、ＳＤＡ２～４にも多量に含まれていた（第32～38図）。坏・坏蓋・高坏・小壺・壺蓋・𤭯・口径15cm前後の壺又は小甕・口径20cm前後の甕・器台（第35図18～21）・陶棺片（第34図18）等があった。ＳＤＮ２の器種組成は、坏50点、坏蓋34点、有蓋高坏15点、器台３点、𤭯６点の他、甕・壺に関しては各40点づつ、他に大形坏・蛸壺・鉢も１点づつ含まれていた。またＳＤＮ２出土須恵器は坏 230点、坏蓋 160点、無蓋高坏12点、有蓋高坏50点、高坏蓋27点、器台30点、𤭯12点、壺34点、甕54点、装飾付甕15点が数えられた。時期は古いかもしれないが、製塩土器が20点、蛸壺１点、鞴羽口も見られた。

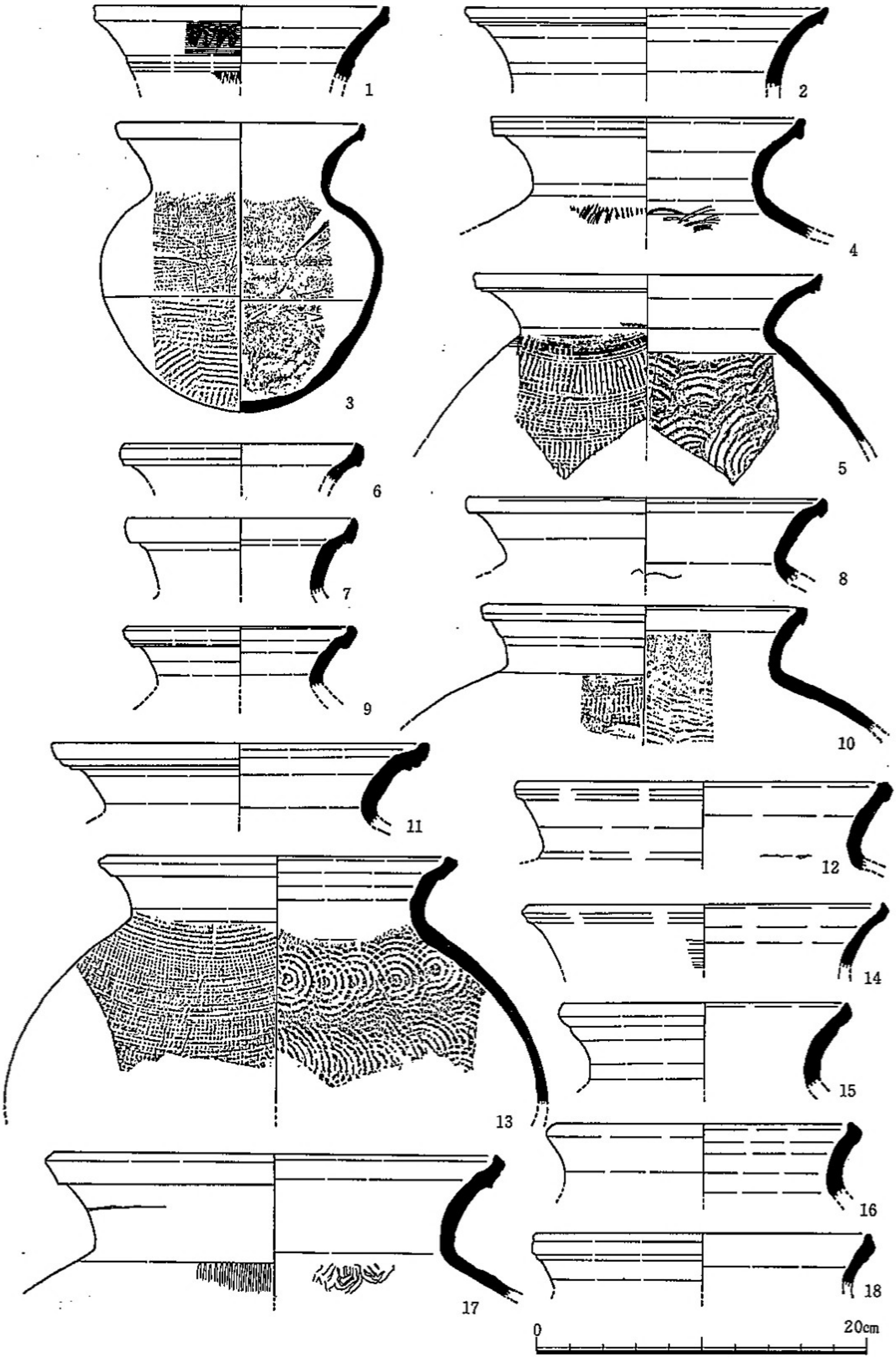
各器種の形態はしだいに丸味を帯び器壁が厚くなってくる。坏蓋は稜線がほとんど意識されず、口径が大形化し、口唇部内面の窪みがしだいに消失し、再び口径が小さくなる。篦削りの範囲が狭くなり、粗雑になってくる。胎土も粗く色調は灰色を呈す（第27図11～15・第32図３～６・第33図３～８・第34図１～７）。坏は立ち上りが短く内傾するようになり、口径も大きく、器壁も厚くなる。底部から受部に向う曲線が徐々に直線化され、底部が尖ってくる。内面に叩きが見られたりもする。次にかえりが坏蓋に移り、宝珠つまみが付着されるに至り、坏の小型化が極まり、蓋と身の区別がつかなくなる。この時期の遺物は、数点づつしか見られない（第27図21～31・第32図８～12・第33図11～19・第34図８～10・第35図２）。無蓋高坏は長脚化し、沈線を坏部外面に施すものと、余り長脚化せず、坏蓋をそのまま逆転させているものに分けられる（第28図21・第34図12）。有蓋高坏も、長脚化するものと、短脚のままで、円形透かしをあけるものとがみられる（第28図13・10・第35図５）。高坏蓋は、つまみが小さく低くなり、全体に丸味を持つ（第28図４・第33図10・第35図４）。器台坏部は小さく、浅くなり、口縁部が拡張していたものが、体部と一体になり皿状を呈し、外面の文様も簡素化される（第31図５～８・第35図18）。脚部は台状のものと筒状のものがみられる（第35図19～21）。壺は小壺がみられ、口縁部が長く、端部に面を持ち、体部も丸く外面を篦削りするものから、口縁部が短く、体部が偏平なものになり、器壁も薄くなってゆくようである（第33図29・第34図14～16・第35図27）。𤭯も丸い体部が徐々に偏平になり、ほぼ平底状となる。口頸部は長大化し、列点文が施される。底部の丸いものは内面に刺突目の痕跡があり、蛸壺内面のものと同じ原体のものがみられた（第30図８・第34図19～21・第35図10～14）。甕は口縁部の形態が短く、直立気味になり、口縁帯が拡張してゆき、頸部と区別がつかなくなってゆく。口縁部内面に段を有するものと、そうでないものがあり、いくつかの口縁部製作手法の差も見られた（第28図11～18・第32図22～26・第36図６～12・第37図３～13）。古墳出土土器等を参考にすると、頸部が４～５cmで外反度が強く、口縁帯の幅が１～２cm前後のものが６世紀後半代と考えられ、それ以降、頸部が短く直立し、７世紀初頭以降は、口縁帯がきちっと造り出されていない例が多いようである（第32図23）。他に小さく丸く終る口縁部



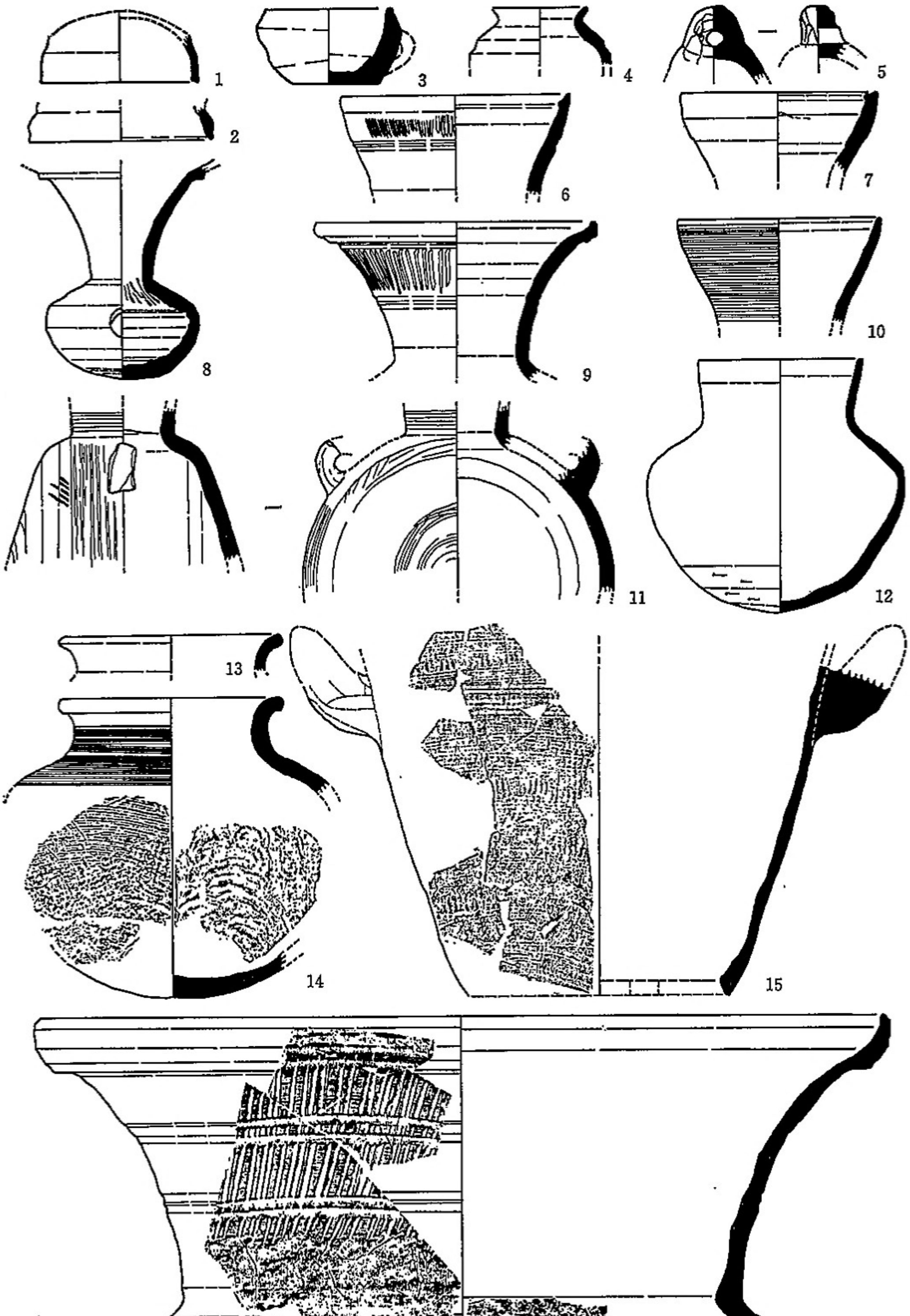
第27図　ＳＤＮ２出土須恵器



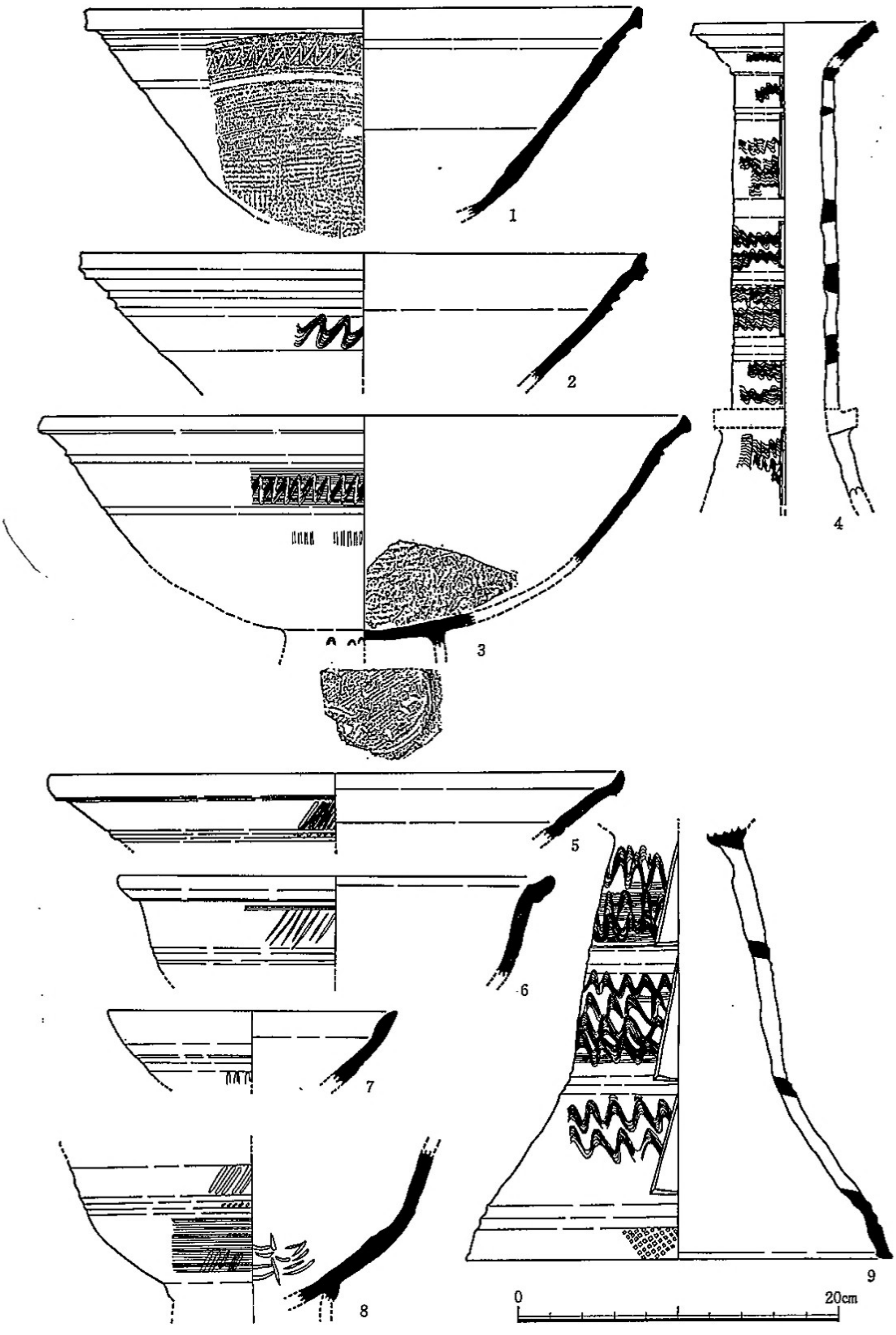
第28図　ＳＤＮ２出土須恵器



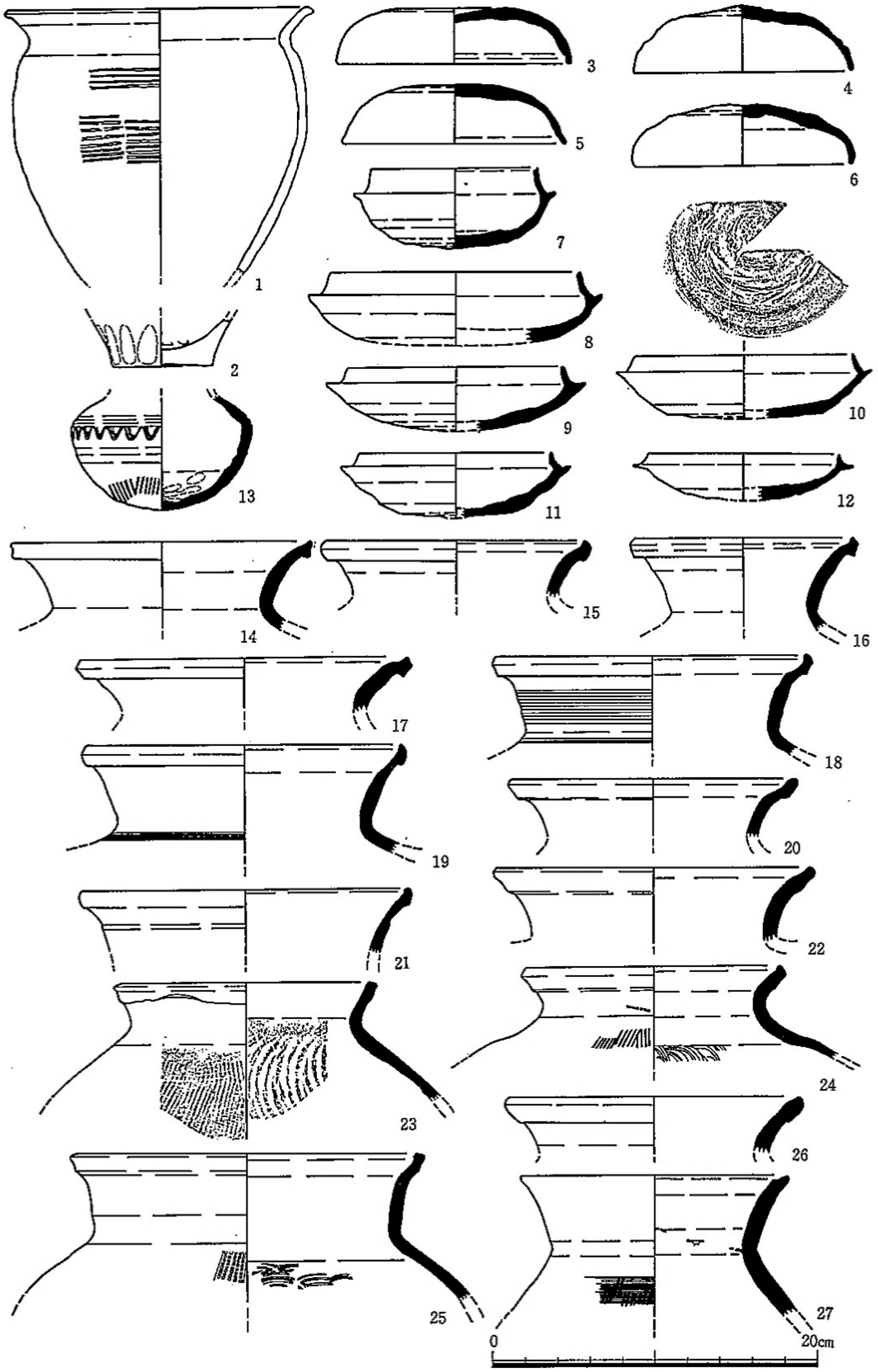
第29図 ＳＤＮ２出土須恵器



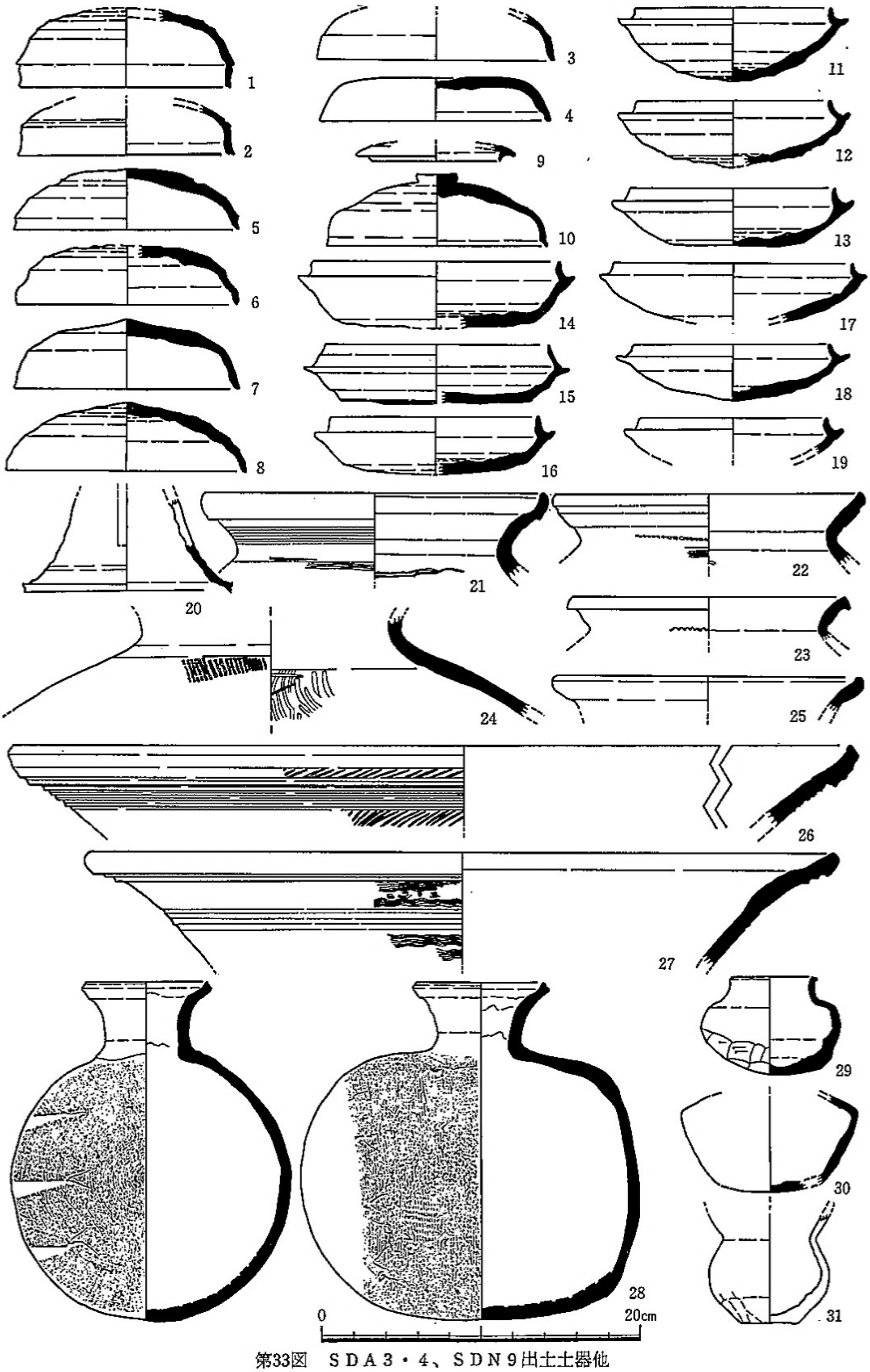
第30図　ＳＤＮ２出土須恵器



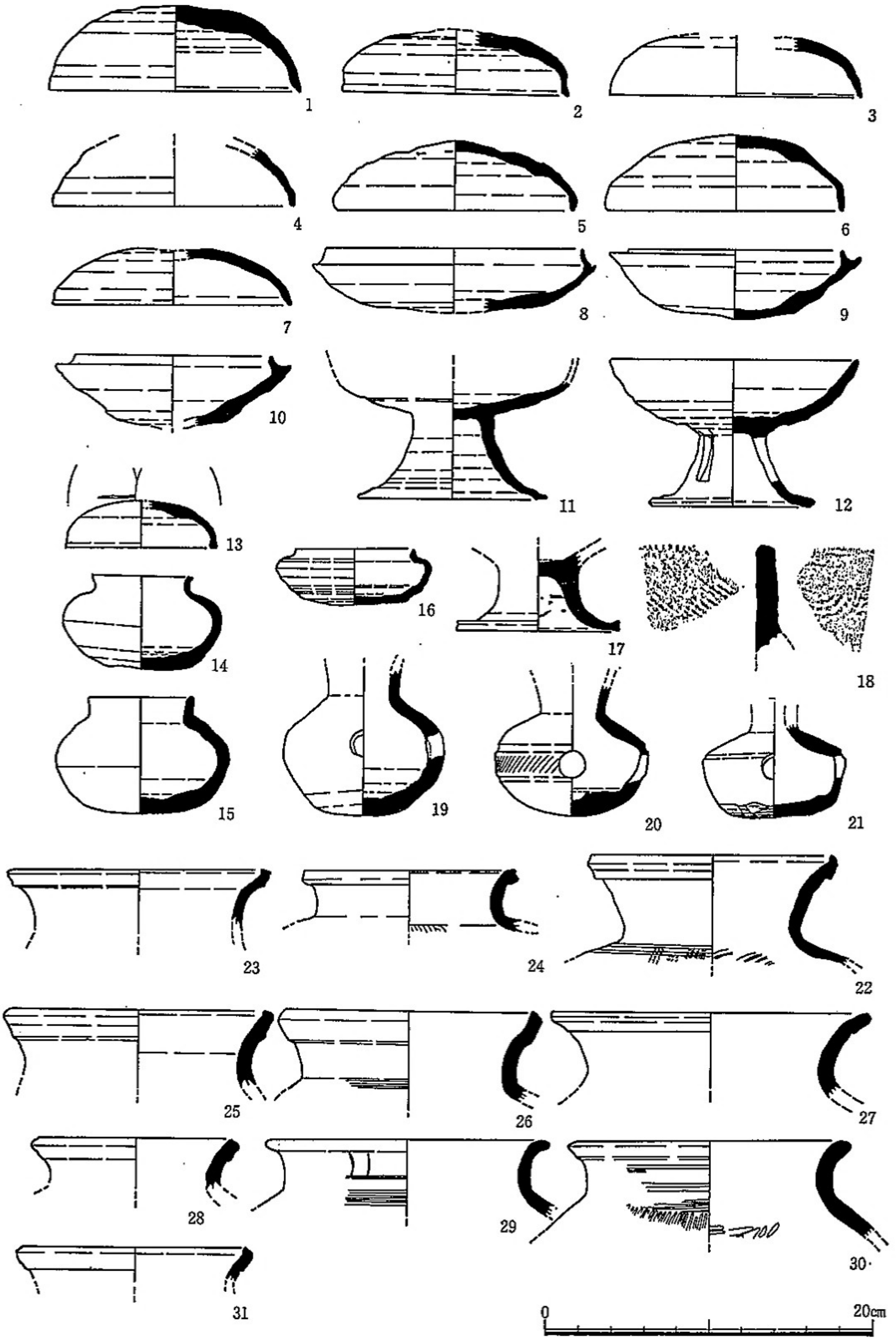
第31図　ＳＤＮ２出土須恵器



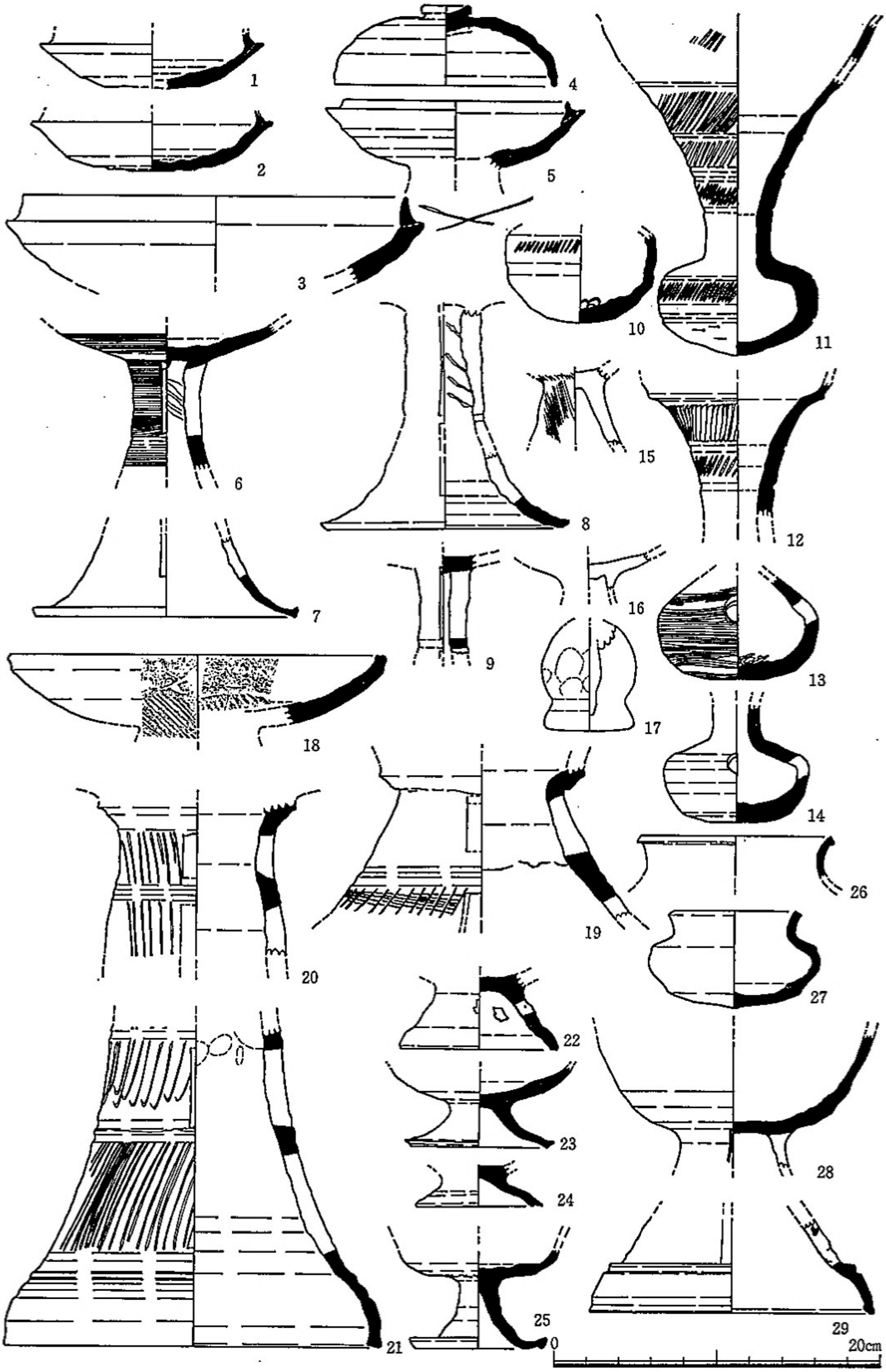
第32図　ＳＤＡ４出土土器



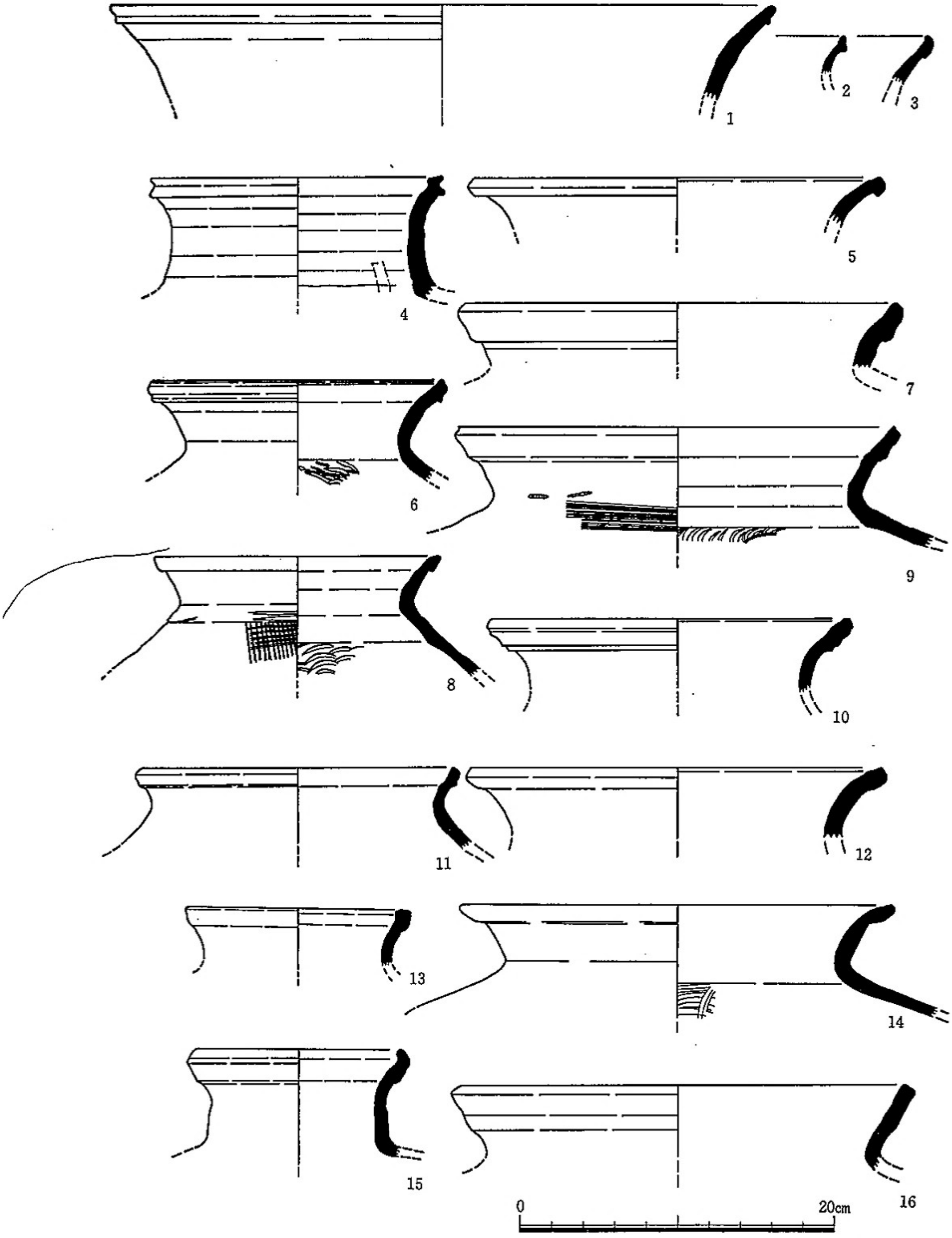
第33図　ＳＤＡ３・４、ＳＤＮ９出土土器他



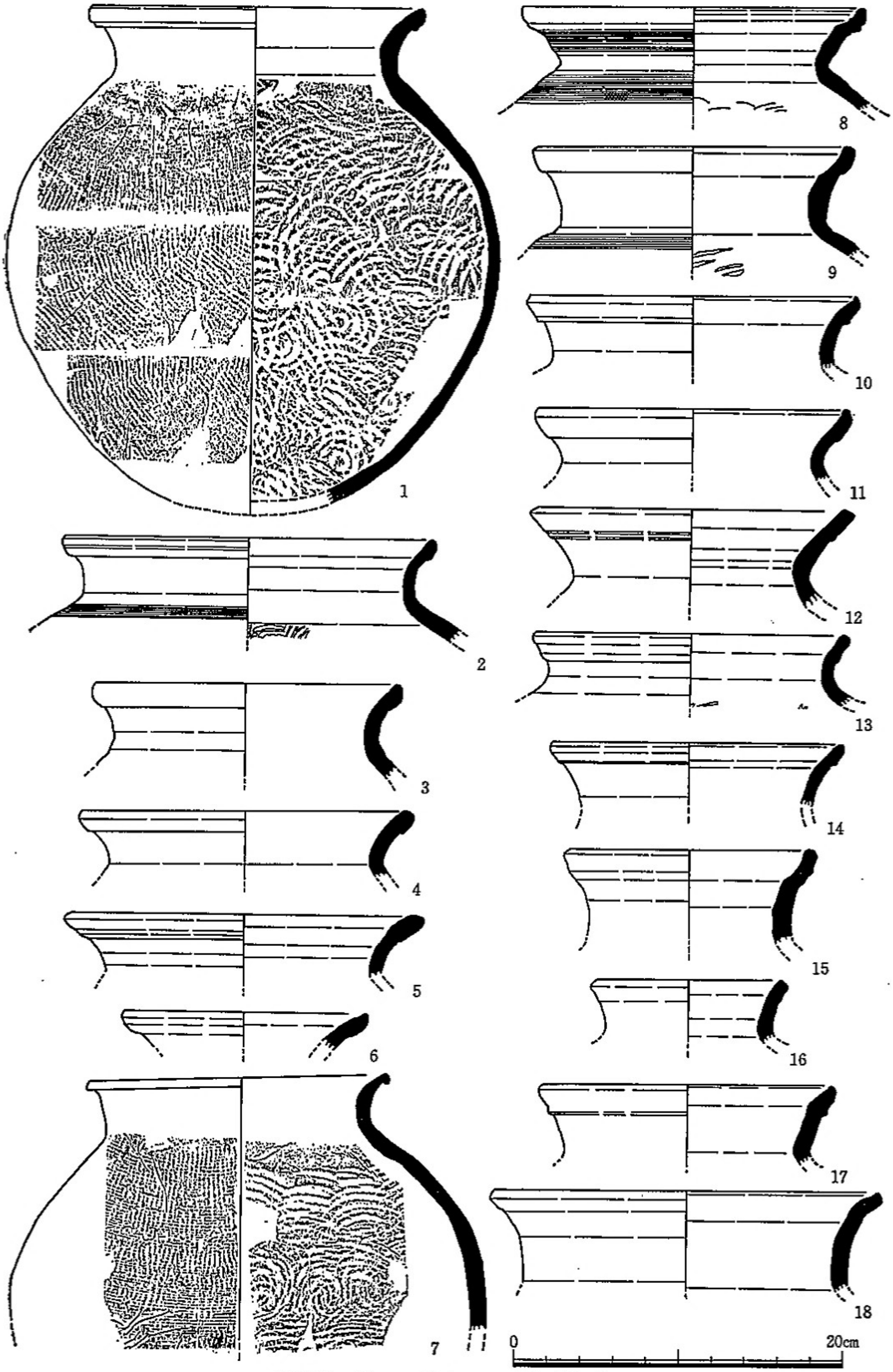
第34図　包 含 層 出 土 土 器



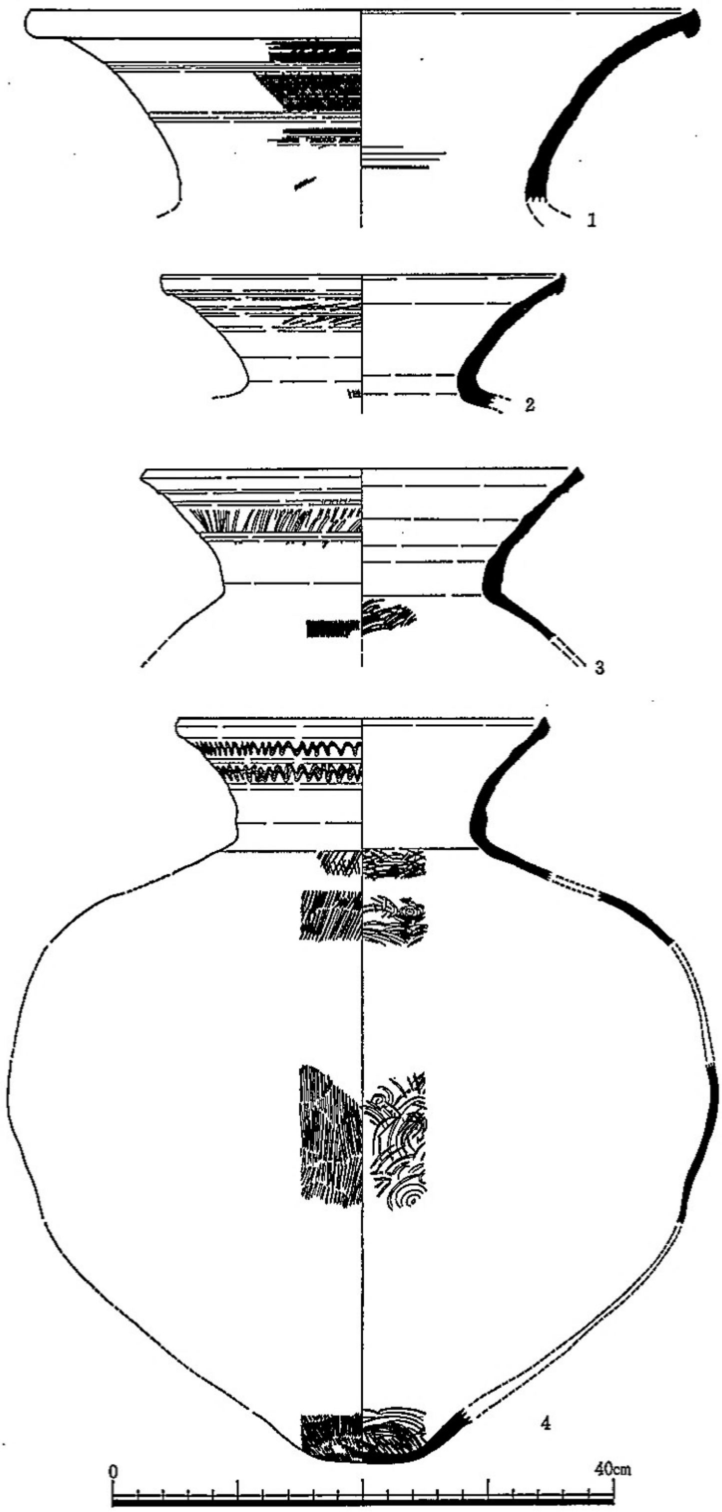
第35図　ＳＤＡ２出土６世紀後半須恵器他



第36図　ＳＤＡ２出土６～７世紀須恵器



第37図　ＳＤＮ２出土６～７世紀須恵器



第38図　ＳＤＡ２出土須恵器装飾付甕

のものや（第29図16）、口縁帯が丸いもの（第34図30）も見られた。内面の叩き目が肩部内面まで消されていたものが（第29図５、13）、口縁直下まで残るようになり、（第37図１）連続同心円が体部中央に見られるものや（第37図７）、弧状文が粗く施されるもの（第32図23）等、体部整形の差も見出せた。装飾付大形甕は口縁部の形態と、頸部の装飾に変化のポイントが認められた。長く外反する口縁部に、丸い端部が造り出されるタイプ（第38図１）から、端部と口縁部が一体となるもの（第38図２）への変化が認められ、それに従って、列点文が直立から斜行するようになることが分った。口縁端部下端の区画がなくなってしまうと、文様帯に箆描風の櫛描波状文がみられる。（第30図16・第33図26・27・第38図１～４）

甑の口縁部（第33図23）やこね鉢の底部（第43図19）・蛸壺（第41図）・提瓶（第30図11）・俵壺（第33図28）等の器種については出土量も少なく、器形の

変化をたどる事は困難であったが、この時期に該当すると思われた。また各遺構内出土の土器については、いずれもこの時期のものを含むが、竪穴住居跡以外に時期を限定し得るものは少ない。

土師器

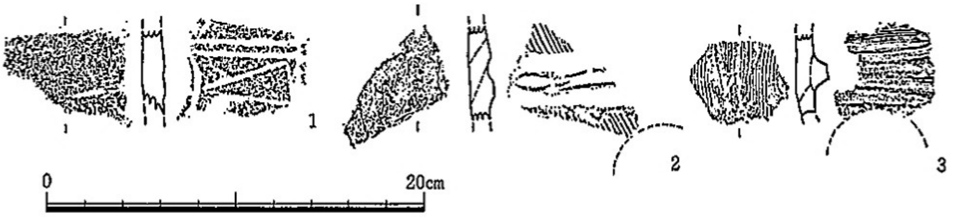
古墳時代の土師器はごく少量の高坏・甕が確認されたのみであった。ＳＤＡ２から高坏脚部が出土し、ＳＤＮ２からは甕が出土している。前者は外面にわずかに刷毛目を残すもの（第35図15）と、生駒西麓産の胎土によるもの（第35図16）とがみられ、５世紀代のものと考えられた。後者は在地産で（第50図12・19・20）、口縁部が短く、外上方にひらくもので６世紀代の所産と考えられる。高坏脚部はＳＤＡ２周辺の古式須恵器に伴うものかもしれない。いずれにしても磨滅が著しく、個体判別が困難なものが多かった。

埴輪

第11表　埴輪出土地点別数量表

	65	64	63
R		1	
S	2	2	
T			1

円筒及び形象埴輪が６点出土している。円筒埴輪は外面横刷毛、内面横刷毛後縦刷毛調整が施され、タガ部上幅 0.8cm、高さ 0.8cmの台形を呈するもの（第39図３）と、外面縦刷毛、内面なで調整、タガ上場幅１cm、高さ 0.3cmのもの（第39図２）がみられる。形象埴輪片は器表面の磨滅が著しく調整の観察が困難であったが、片面には箆による施文が窺える。これらの埴輪は沖積段丘面上の中・近世包含層内より出土した。いずれも細片であり、古墳群の存在や祭祀遺構を云々できるものではない。



第39図　埴　　輪

製塩土器

第12表　製塩土器出土地点別数量表

	65	64	63
R	脚台 1		
S			
T		3	1

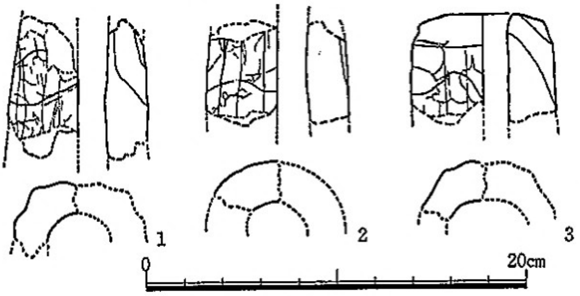
ここでは薄手のものについて説明する。口径６～８cm、器壁４mm程で胎土精良、内面に貝殻腹縁の痕跡がみられる。ＳＤＮ２内より25点出土し、包含層内からは４点出土している。Ｒ65地点では底径２cm前後で脚高 1.5cmを測る脚台式のものが１点だけ出土している。[2]それ以外の薄手のものは、５世紀末葉以降のものと考えられる。

鞴羽口　（第40図）

第13表　鞴羽口出土地点別数量表

	65	64	63
R	2	1	
S		2	
T	2	8	

全部、古墳時代のものと限定できないが、総数19点が出土した。主にＳＤＮ２周辺に集中して分布している。ひとつは円筒状で先端部、いま一方は多面体を為し、外径7.5cm、内径2.8cm前後である。色調は淡黄色及び赤褐色で、胎土は精良な粘土に



第40図　鞴　羽　口

粗い礫が混ざる。器壁は２～ 2.5cmを測るものと７㎜程度のものとある。厚手のものはＳＤＮ２内より４点出土しているが時期は不明である。

第14表　蛸壺出土地点別数量表

	65	64	63	62	61
R	2	4	1	1	
S	4	6	3		1
T	3	3	2		

蛸壺

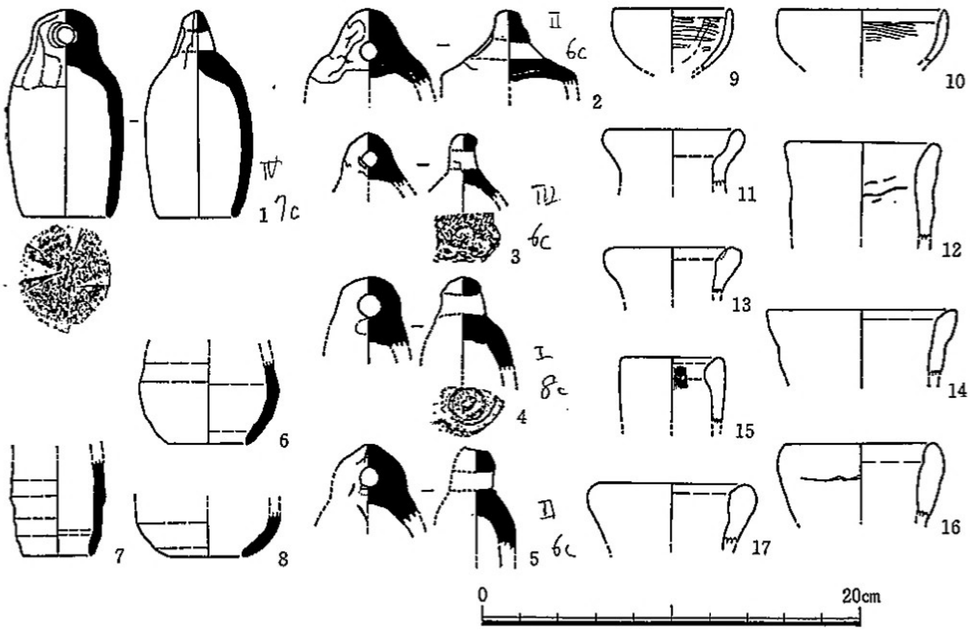
総数30点が出土している。ＳＤＮ２や、ＳＤＡ２及び沖積段丘面上の包含層内より出土している。ＳＤＮ２北寄りにやや集中していた。

紐の形状、法量、天井部内面の調整、体部最大径の位置（高さ）、口縁部の形状等々のありかたに変化を認め、６世紀後半から８世紀代に及ぶと思われる須恵器蛸壺の型式分類を行う。

紐の太さは 1.5cm以上のものと、以下に分けられ、天井部内面の調整にはナデ調整、円形原体による圧痕・ナデのち絞りの３類が見られる。天井部の厚さは、 1.5cm前後のもの、１cm前後のもの、0.5cm前後のものの３種類が抽出された。これらの紐及び天井部のありかたから、〔Ⅰ類〕紐の太さ1.5cm以上、内面天井部回転ナデにより面が整えられ、天井部の厚さ1.5cmと厚いもの。（第41図４）肩は張らず細身であるが紐が太い。体部最大径は上方にあり口縁部は垂下すると考えられる。〔Ⅱ類〕紐の太さ 1.5cm以上で内面天井部は粘土貼り付け後ナデ調整が行われる。天井部の厚さは１cm前後のもので、天井部は面をなし、肩が張り、全体にずんぐりしている。体部最大径は中位にあると思われる（第41図２・５）。〔Ⅲ類〕紐の太さ 1.5cm以下で内面天井部には円形原体による圧痕がみられ、天井部の厚さは 0.5cm前後しかない。比較的小づくりで肩も張らない（第41図３）。〔Ⅳ類〕紐の太さ 1.5cm位で天井部内面はナデ調整の後、外面からの軽いおさえにより絞り目がみられる。天井部の厚さは１cm位、丸い形をしている。肩部はやや張り気味で体部は比較的長い。体部最大径は上位にある（第41図１）。

口縁部のみ残存するものは大きく２類に分けられた。口縁が内傾し、口径の小さいもの（第41図８）と、口縁部が直線的で細身のもの（第41図７）とである。前者は粘土紐巻き上げ後ナデ調整され、後者は一気に水びきされている。６世紀後半代のものと８世紀代のものの差と考えられる。

紐の付け方は、壷部製作後、径１cm位の棒により穿孔されたと考えられているようであるが、



第41図　蛸　壺　・　製　塩　土　器

紐部のナデ調整や、壺部天井の厚さ等から、壺部製作後、逆転し、棒を置いた後、天井部に粘土紐を乗せ、ナデつけた後、棒を引き抜いたものと思われる。引き抜いた勢いではみ出た粘土を再び穴の周囲にナデつけている。

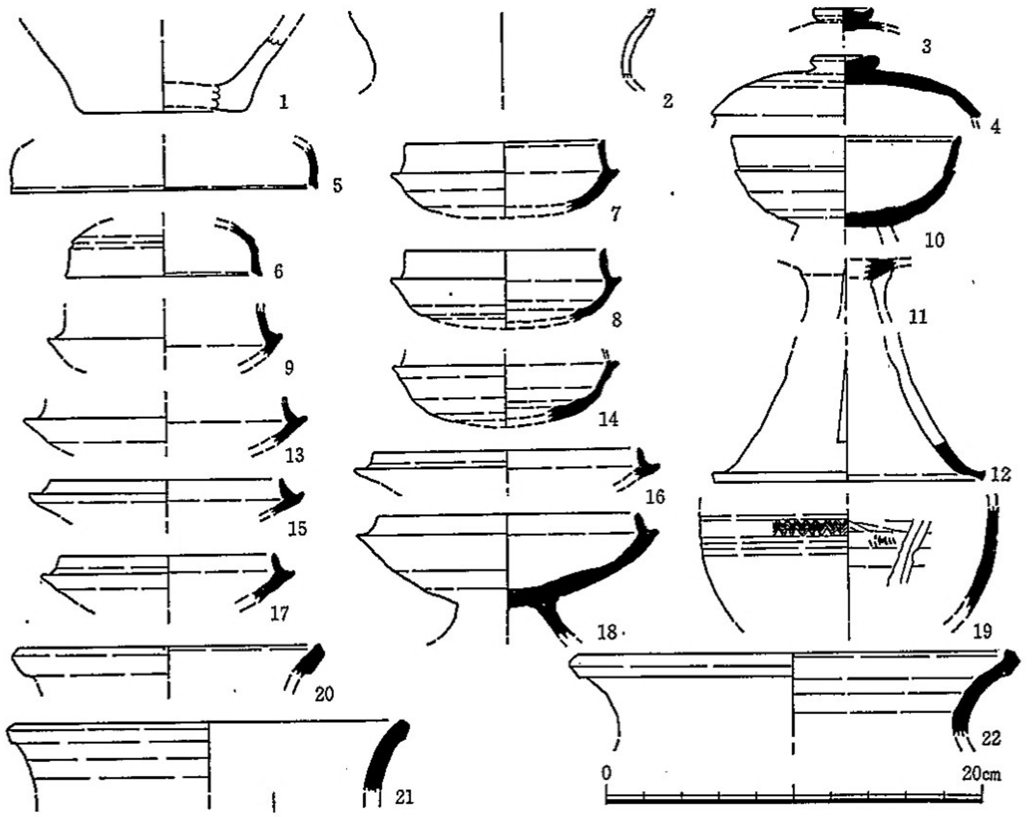
時期的には、Ⅱ類、Ⅲ類が6世紀代で、Ⅳ類が7世紀、Ⅰ類が8世紀代と考えられる。それぞれ外面が磨滅し、使用されたと解される。

遺構内出土土器　（第42図）

竪穴住居跡内出土土器　ＳＢＫ５内出土土器（13）、この須恵器は6世紀後半～末葉の坏口縁部である。淡灰色を呈し、立ち上りの接合部は屈曲している。受部は薄く仕上がる。ＳＢＫ２出土土器（11、17、19）（17）は、6世紀後半の須恵器坏である。青灰色を呈し、立ち上り高は1㎝以内で、受部との境は明瞭である。底部は欠損しているが厚く、外面に回転箆削り痕が残る。（11）は須恵器短脚高坏接合部付近である。坏底部は薄く、脚端部も接合部に比べ薄くなる。回転ナデは丁寧で、透かし穴は3方にあけられていたと思われる。6世紀前半頃のものであろうか。（19）は暗青灰色を呈し、焼成堅緻な壺体部である。内面にはわずかに青海波叩き目文が残るが、外面は横ナデされた後文様帯を区画し、7条の櫛描波状文を施す。5世紀後半代の須恵器壺又は𤭯と考えられる。ＳＢＫ４付近包含層（12、15）、約1㎝の立ち上り高を有し、受部及び内面との接点に明瞭な境を有する須恵器6世紀末葉坏である（15）。焼成やや軟質、淡灰色を呈する。（12）は6世紀後半代の高坏脚部である。淡い黒灰色を呈し、内外面をナデ調整する。

ピット内出土土器　ピット69掘り方内出土（4、5、22）、（4、5）は同一個体の可能性を有する6世紀前半代の高坏蓋である。外面は紫青灰色を呈し、口縁端部に刷毛状の斜行する痕跡

が若干みられる。(22) は、外面口縁帯が拡張し始め時期(6世紀初頭〜前半)の壺口縁部である。口縁帯幅は1cm以内、頸部長は4〜5cmを測り外反する。ピット63掘り方内出土土器(8)、焼成不良で淡白灰色を呈する6世紀初頭の須恵器坏である。内面に立ち上りとの境はなく、受部端は鋭い。立ち上り高は 1.5cmを測り、推定口径10.4cmである。ピット44出土土器(6、9)。9は8とよく似ている。焼成は普通で、口縁端がやや厚い。(6)は稜部凹線状を呈する6世紀初頭の須恵器坏蓋である。灰色、焼成やや軟質、胎土精良である。ピット41掘り方出土土器(7、14、20)。7、14は6世紀初頭の須恵器坏部である。器壁は薄く、箆削りは底部のみに施される。14は立ち上りと体部との境は明瞭であるが、7はナデにより不明瞭になっている。20は6世紀前半代の壺又は甕の口縁部である。口縁帯が幅 1.2cmでやや拡張し始めたものである。ピット39掘り方内出土土器(3)、これは6世紀初頭の須恵器高坏蓋つまみ部である。外面紫灰色、内面淡灰青白色を呈す。つまみ径は 3.3cm、高さは7mmを測る。中央はやや窪む。ピット38掘り方内出土土器(1)。色調淡白褐色、断面黒色を呈す弥生中期の壺又は甕の底部である。胎土は粗く、石英・長石等が見られる。ピット37・47掘り方内出土土器 (10)。推定口径12cmを測る無蓋高坏である。口径が小さく文様帯もない。6世紀前半代のものと考えられよう。ピット36柱痕内出土土器 (16)、立ち上り高1cm以下の須恵器坏口縁部小破片である。青灰色を呈し、胎土精



第42図 ピット内出土遺物

良である。受部はなでにより、立ち上りとの境は不明瞭になっている。６世紀末のものであろう。

Ｅ　奈良時代　（第43～50図；図版142、147～151）

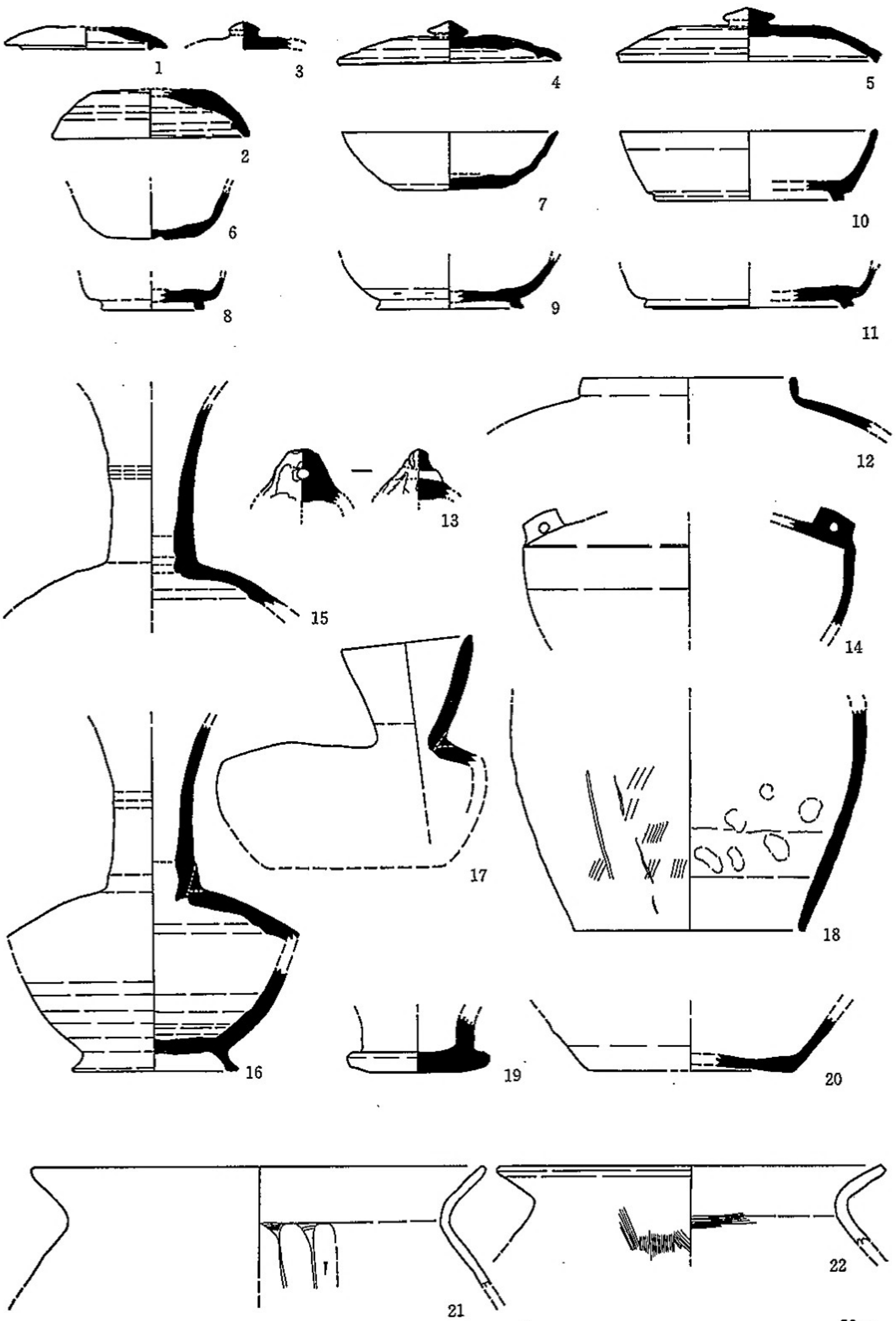
須恵器

ここでは７世紀後半から８世紀末葉に至る須恵器について説明する。７世紀後半から８世紀前半にかけてはＳＤＡ２上層出土の須恵器が中心で、８世紀後半代から９世紀にかけての説明はＳＤＮ２上層出土の資料による。時期区分については古墳時代の項と同様、「陶邑」の研究成果を参考にして行った。７世紀中葉から後期はＴＫ217号窯（平安学園『陶邑古窯跡群Ⅰ』による）を参考資料とし、ＭＴ21を８世紀前半から中葉とし、ＴＫ７を８世紀後半と考えた。

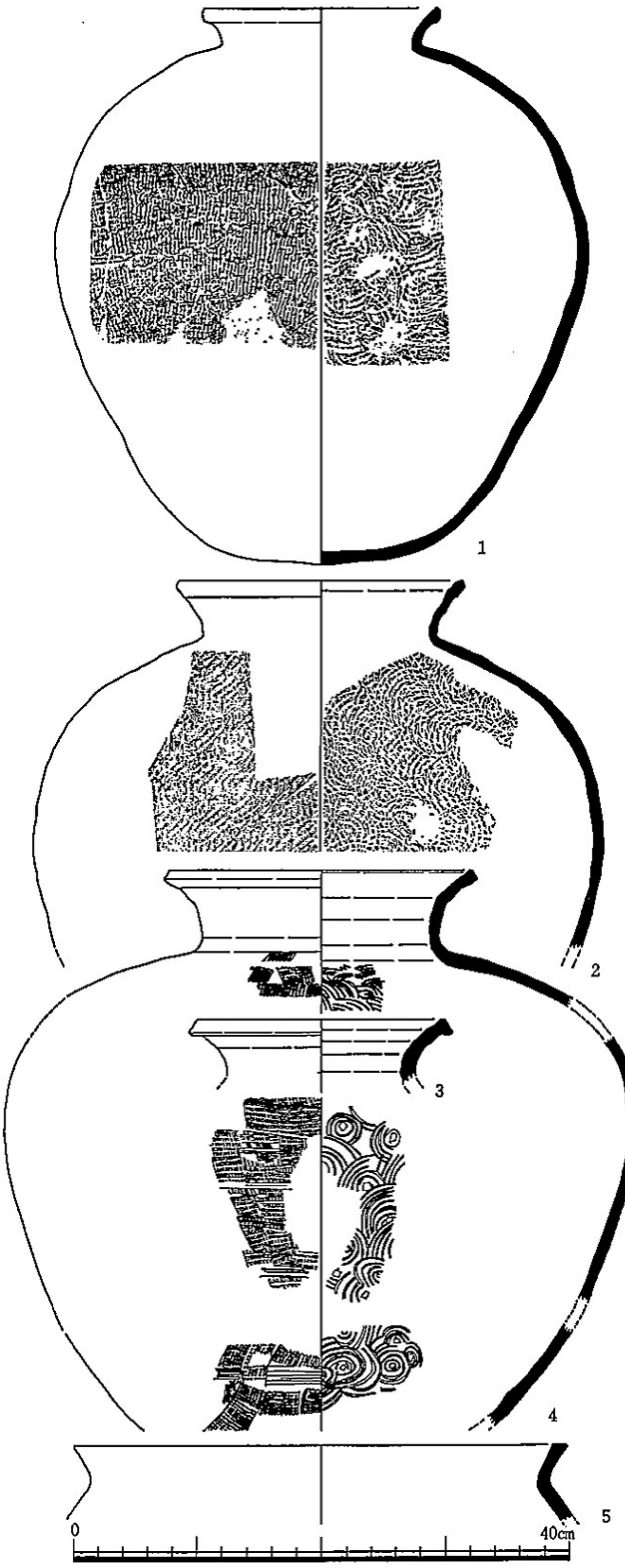
ＳＤＡ２出土須恵器は、坏蓋・坏・薬壺・長頸壺・鉢・甑・平瓮等が含まれ、口径10㎝以下の坏蓋も含まれるが、大半は７世紀後半から８世紀前半に納まるものと考えられる。７世紀後半と考えられる器種は坏蓋（第43図４）、坏（第43図７）、薬壺（第43図12）でやや遡ると考えられる平瓮（第43図17）、甑（第43図18）もみられる。甕は第44図１、２が口縁端部の丸い系譜のもので、３、４が、角ばった口縁部を為すものである。５は直口する短頸の甕で、端部は平坦で肩は張らないものである。

包含層出土のものでは、俵壺口縁部（第45図16）、広口壺（第45図13）、鉄鉢（第45図21）、薬壺蓋（第45図23）、こね鉢（24）等が、該当するものである。

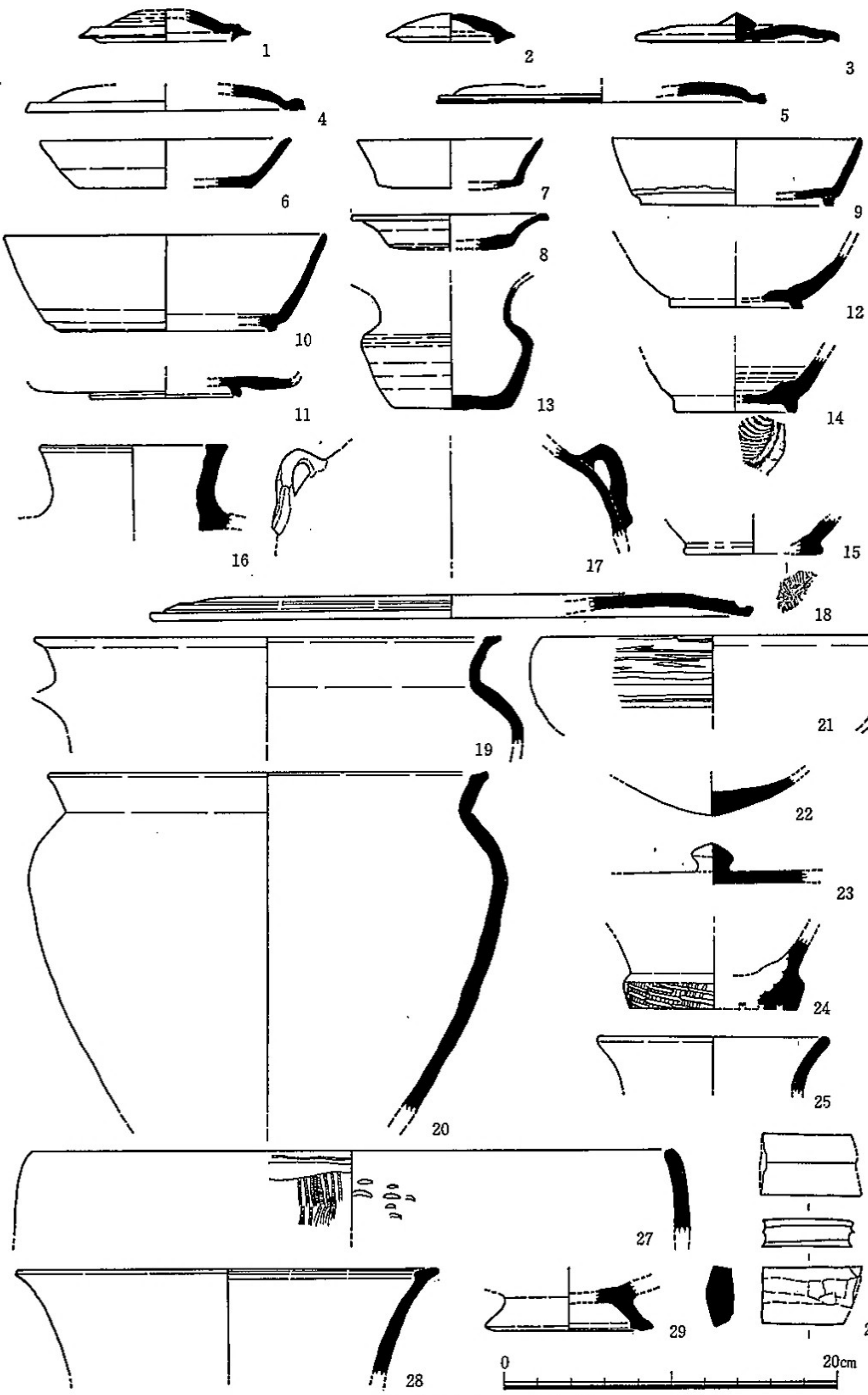
次にＳＤＮ２上層出土須恵器について説明する。７世紀後半と考えられる。坏蓋（第46図１、２、３、７）や、７世紀初頭の坏も認められるが、大半は、ＳＤＡ２で見た、坏蓋（第43図５）の口縁端部が内傾するのに比べ、垂下するもの（第46図４、９、10、11、12）と、外にはみ出て天井部が低いもの（８、14）が多く、つまみも、（５、６）のように偏平なものがみられる。坏は高台のない類（17～22、31）のうち底部から口縁部に向って、強目のヨコナデにより直立させるものと（19、21）、ヨコナデにより外反させるもの（20、31）、内彎気味に斜め上方に延びるもの（18、22）とに分けられる。（17）は外面底部を丁寧に仕上げ、ほぼ直立気味に口縁部が立ち上る。高台付の（23～27）は、底部が平坦で、底部端に高台を付け、（23、26、29、30）口縁部が斜め上方に真っ直ぐに延びるものと、高台が底部中央に寄った位置に付けられ、付着後ナデ調整されるもの（24、25、27）とに分けられる。前者は８世紀後半から末葉、後者は８世紀前半から中葉と考えられる。皿は内外面平滑に仕上げられるもの（32）がみられる。鉢は底部が尖り外面箆磨きのみられるやや古い段階のも（34）見られるが、口縁部がややひらき気味で内傾する端面をもつもの（33）が該当する時期のものと考えられた。体部が球形に近い壺（38、41～43）も見られ、糸切り痕を有するものも出土している。薬壺の蓋（36）は口縁端部がわずかに内側に肥厚し、丸味をもった天井部のものがみられる。土師器甕風の広口壺（35）や、ややなで肩の壺（37、39）もみられる。底部径10～11㎝を測る鉢は、丸底で箆削りするものと、ややあげ底で底部が外側にはみ出さなくて刺突がみられるものと出土している。底部中央が破損しており、磨滅



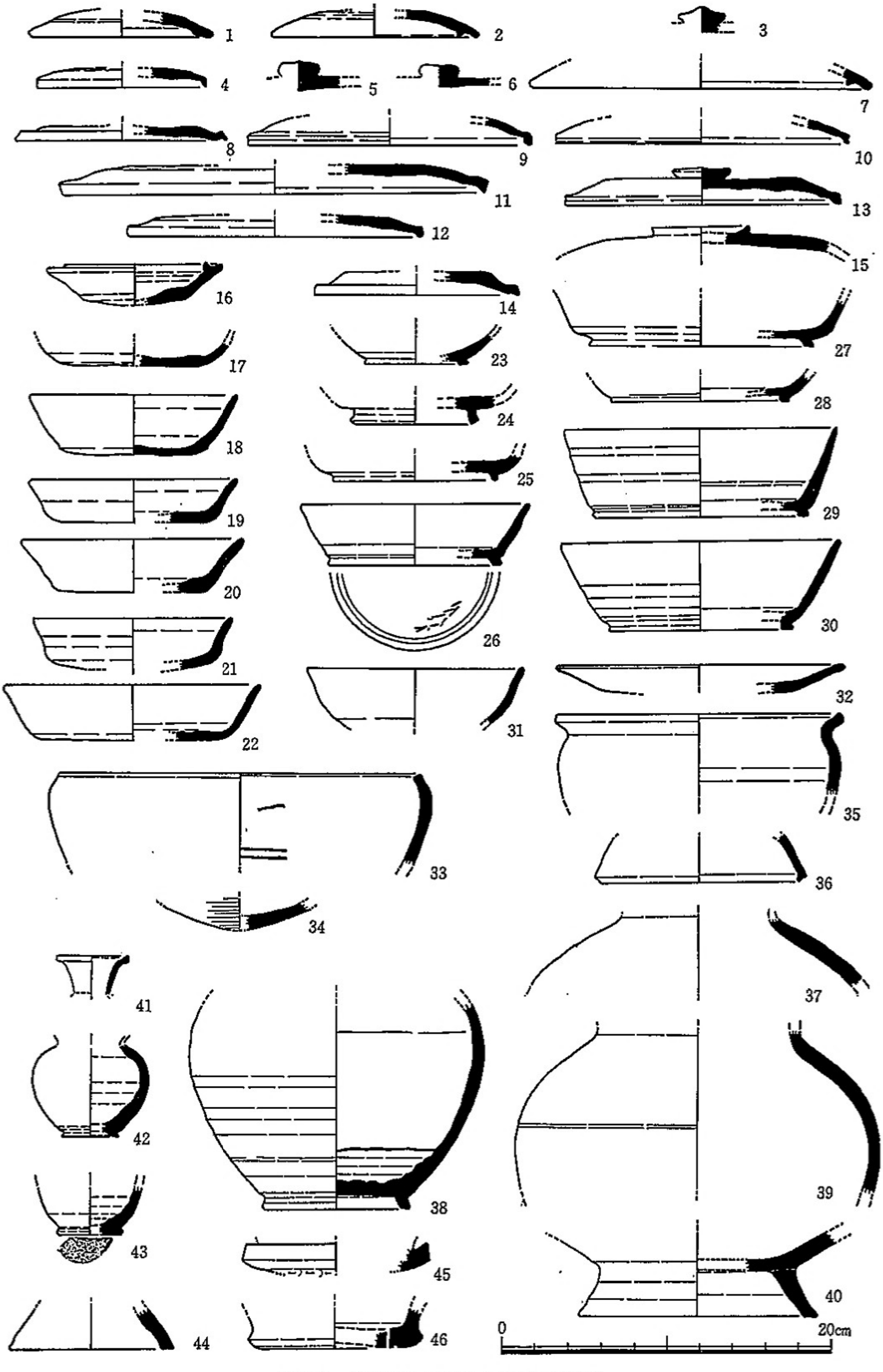
第43図　ＳＤＡ２出土土器



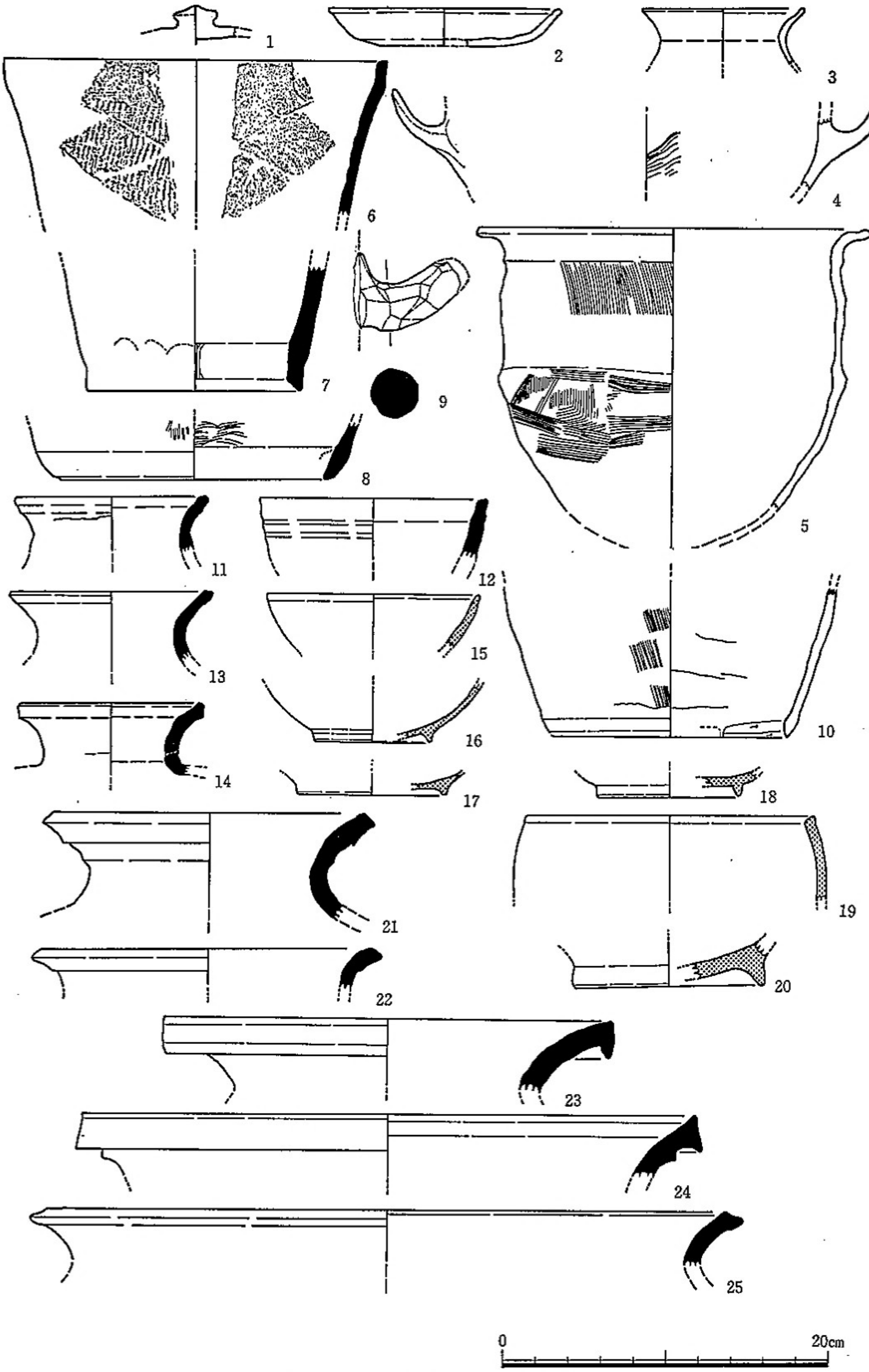
第44図　ＳＤＡ２出土土器



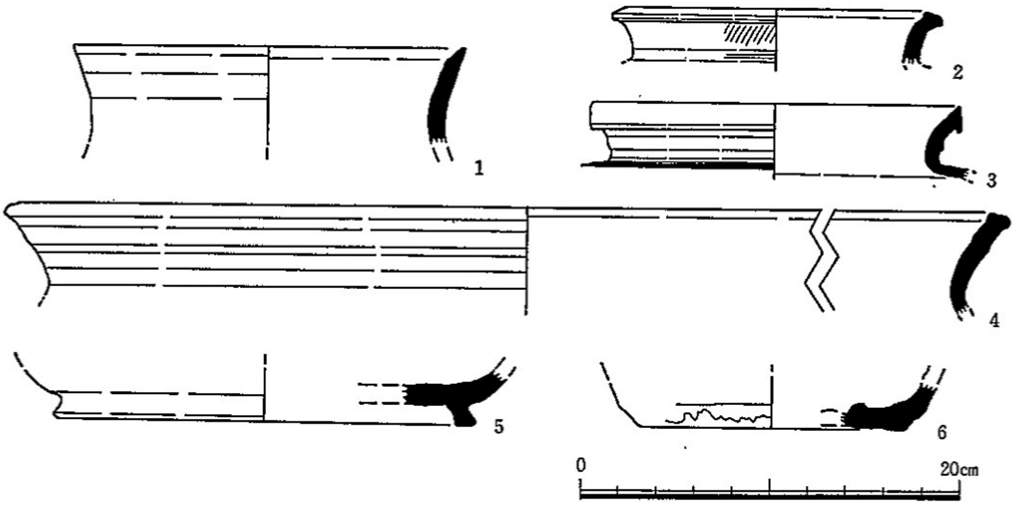
第45図　包 含 層 出 土 須 恵 器



第46図　ＳＤＮ２上層出土８世紀須恵器



第47図　包含層出土８～９世紀土器



第48図　ＳＤＮ２出土須恵器

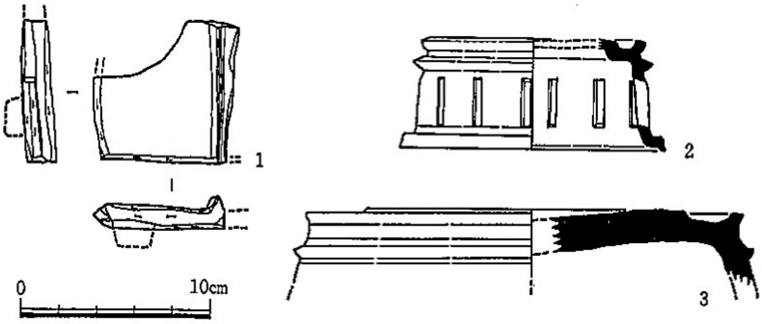
も部分的で、こねる役割より突きつぶす為に使用されたものと思われる。その他に台付壷の脚部も見られた（40、44）。甕は、８世紀後半から９世紀にかけてのものと思われるが、口縁帯が拡大し、面が内傾していたもの（第47図24）から垂下するもの（第47図23）へと変化してくるのである。ＳＤＮ７出土の甕は頸部が長く外反し、端部がやや内傾気味に約５㎜立ち上っている（第47図14）。またＳＤＡ４出土甕（第32図27）は直口し、なで肩のもので、８世紀代のものと考えられる。同様のものに第48図１～４も該当すると考えられる。

甑は（第47図６～９）絶対年代を決定し難いが、小型で、器壁の厚いもの（７）が包含層より出土している。

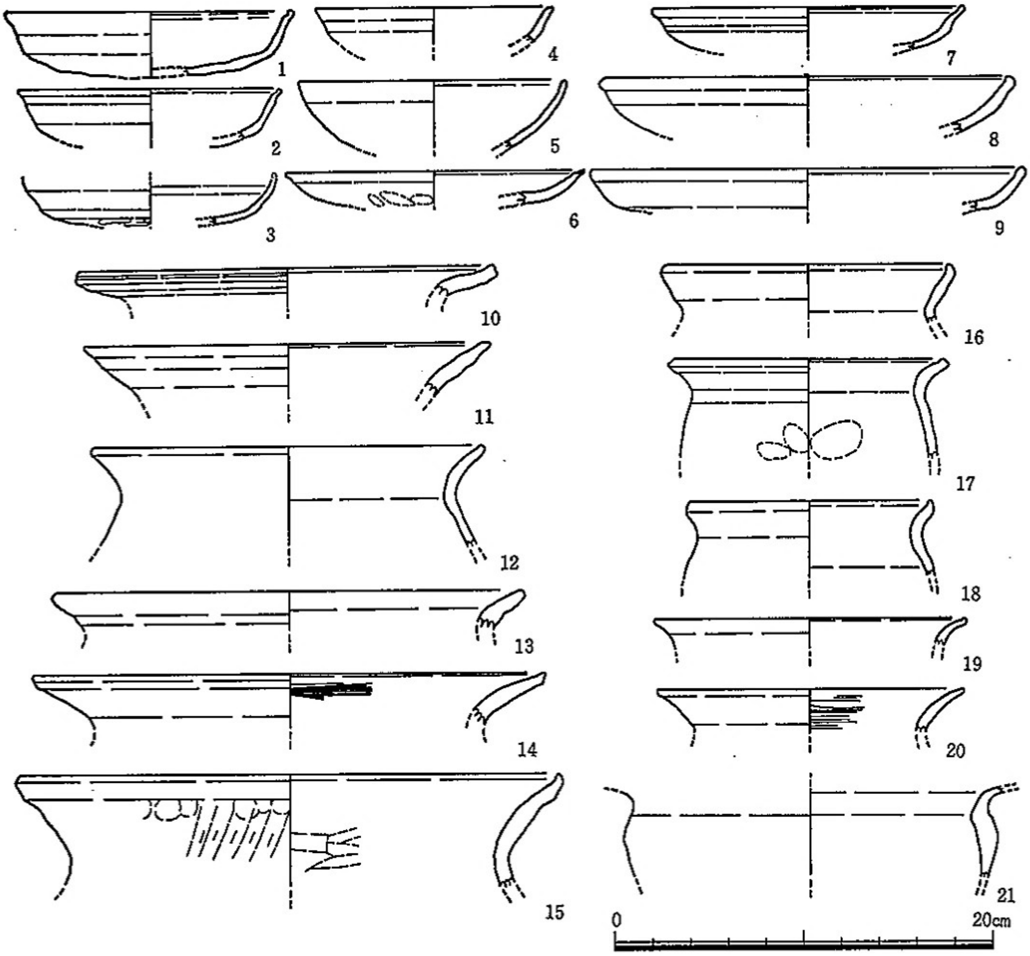
硯の破片は（第49図１～３）、３点出土しているが、（３）は焼きふくらみが上面に見られ失敗品と思われ、（１、２）は使用された痕跡がある。

土師器

ＳＤＮ２上面より少量出土している。供膳形態の内面には暗文がみられず、煮沸形態には刷毛目が見られない。８世紀後半から平安時代のものまでを含んでいる。坏は口径15㎝、器高３㎝程



第49図　須　恵　器　硯



第50図　ＳＤＮ２出土土師器

度のもの（第50図１、２）がみられ、口縁端部が屈曲する。埦状のものは、口径12～13cm、器高３～４cm以上のもので口縁部が内彎し、端部は屈曲しない。皿は浅いもので、口径15cm、器高２cm（６）やや大きくて深いもの（７）は口径16cm、器高 2.5cmで口縁端部が屈曲する。大型品は口径21cm～23cm、深さ2.5cm～３cmを測り器壁が厚い。

甕は、ＳＤＡ２出土の（第43図21、22）を８世紀前半のものと考え、口径23cm、口縁長2.8cm、端部外面に幅４mmの面をつくるもの（22）と、口径27cm、口縁長 3.6cmを測るもので、端部の丸いもの（21）を基準として考えた。これらはいずれも内外面に刷毛目調整がみられる。ＳＤＮ２出土土器で、口縁端部に面を持つものは（第50図10、14）で、包含層出土土器には（第47図５）がある。いずれも口径22cm又は27cmでＳＤＡ２出土土師器に近似する。第50図14の口縁部内面には刷毛目が見える。これ以外には端部が丸く終る第50図12、20と、内側に屈曲し、口縁部自体がやや直立するもの第50図16、18と、口縁長が長く、外上方にひらくもの第50図11、13、15とが見られる。17、19（第50図）は口縁部が外反し、端部がやや内側に突出しており、丁度第50図10、

14と第50図―16、18の中間的形態と言えるようである。21（第50図）は口縁部が欠失し詳細は不明であるが、器壁が厚く肩部が張り、頸部がくびれて外面調整も粗雑なことより平安時代前葉のものと考えられた。Ⅰ類（第50図12、20）は古墳時代的様相を示し、6世紀後半から7世紀代のものと考えられる。Ⅱ類（第50図10、14）は8世紀中～後期で、Ⅲ類（第50図17、19）は8世紀後半頃、Ⅳ類（第50図11、13、15）は口縁部の二段ナデや、外面の指押え痕より、16、18（第50図）にほぼ平行し、9世紀代の所産と考えておきたい。包含層出土の（第47図5）は口径24cm、体部中位に把っ手の痕跡が残る。

製塩土器　（第41図）

第15表　製塩土器出土地点別数量表

	65	64	63
R	1	1	
S	6	2	
T	5	4	5

ここでは厚手のものについて説明する。口径5～8cm、口縁部の厚さ1cm前後で胎土の粗いものである。[3)] a類は口径が小さく（5～7cm）、体部の厚さ5mm前後、口縁部の厚さ1cmを測り外反する（11、13）、胎土中に片岩は認められないが、泉南から紀北にかけてのものかもしれない。成形は、筒状の「型」に粘土紐を巻きあげたようで、口縁部内面に「型」からはみ出た痕跡がみられる。焼成は還元焰のものもみられる。b類は器壁6～8mmで、口径8cm前後、口縁部はゆるやかに外反し、面をなす。外面不調整、内面横ナデ調整が施される。胎土には粗い礫が含まれる（12）。C類は口径8～ 8.5cm、口縁部は丸く、黄色っぽく胎土も粗い。外面に粘土紐接合痕が残る（16）。d類は明瞭に緑色片岩がみられ、口縁部に内傾面を有し、口径10cmを測る（14）。出土地点別に見ると、SDN2内より21点出土し、包含層内より24点検出されていた。SDN2から西北西の方向に多く散布していた。これらの遺物は8世紀後半から9世紀初頭にかけて使用されたものと考えられる。

F　平安時代

須恵器

出土数量は著しく減少し、奈良時代の項で記述した小壺（第46図41～43、第45図14、15）や把っ手付壺（第43図14）が見られるのみである。二面硯（第49図1）は青灰色を呈し、周縁部を箆削りし、焼成は堅緻である。[4)]

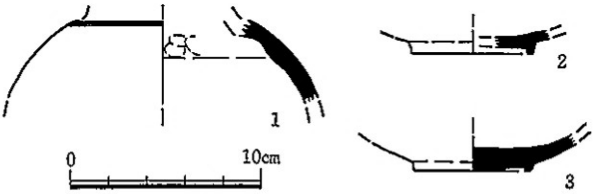
施釉陶器

第16表　施釉陶器出土地点別数量表

	65	64	63	62	61
R					
S		灰	緑		灰・壺
T		灰・壺	緑		

総数5点を数える。緑釉は埦、皿の高台部、灰釉は壺、皿類がみられた。緑釉皿（第51図3）は底径 6.5cm前後、高台高6mm、高台幅 3.5mmを測る。灰釉皿（第51図2）の底部は8cm高台高 6.5mm、幅9mmを測った。底部中央の厚さは、緑釉皿6mm～1.2cmと厚く、灰釉皿は4.5mmと薄い。壺は肩部のみで詳細は不明である。胴部径17cm以上、内面に指押え痕が残り、肩部外面に沈線がみられ、古瀬戸の範疇にはいるものであろうか（第51図1）。

土師器　（第50図4～6、11、15、21）



第51図　施　　釉　　陶　　器

出土量は少なく、奈良時代の項で述べたＳＤＮ２出土資料が該当するものである。

第17表　黒色土器出土地点別数量表

	65		64		63		62		61	
R	1	·1		2						
	2	5	3	3					1	
S	6	5	4	2				1	1	
	3	13	1	3	3					
T	2	5	1	4	6	2			b区	a区
		2			1				d区	c区

黒色土器　（第47図15～20）

総数約90点を数える。包含層上面に約20%、中世層より約60%含まれていた。最も集中するのはＳ65－ｃ地区で、ＳＤＮ２の北西隅にあたる。施釉陶器や製塩土器も出土しており９～10世紀の何らかの人々の活動が窺える。

埦口縁部約20点、底部約30点を数え、鉢（19、20）・甕等もみられた。埦の形態は口縁部が内彎するもの（15）と外反するものがみられ、底部は高台断面三角形のもの（17＝Ⅰ類）で、底径９㎝を測るもの、高台断面形が長く、まっすぐ下におり（18＝Ⅱ類）て、底径8.5㎝を測るもの、高台断面形が外側にふんばり（16＝Ⅲ類）底径７㎝を測るものに分類できる。これらの３類は内面黒色を呈し、胎土に若干の差がみられる。恐らく時間的な変化とみられ、10～11世紀代のものと考えたい。

G　中世　（第52～54図）

第18表　東播系練り鉢型式別・出土地点別数量表

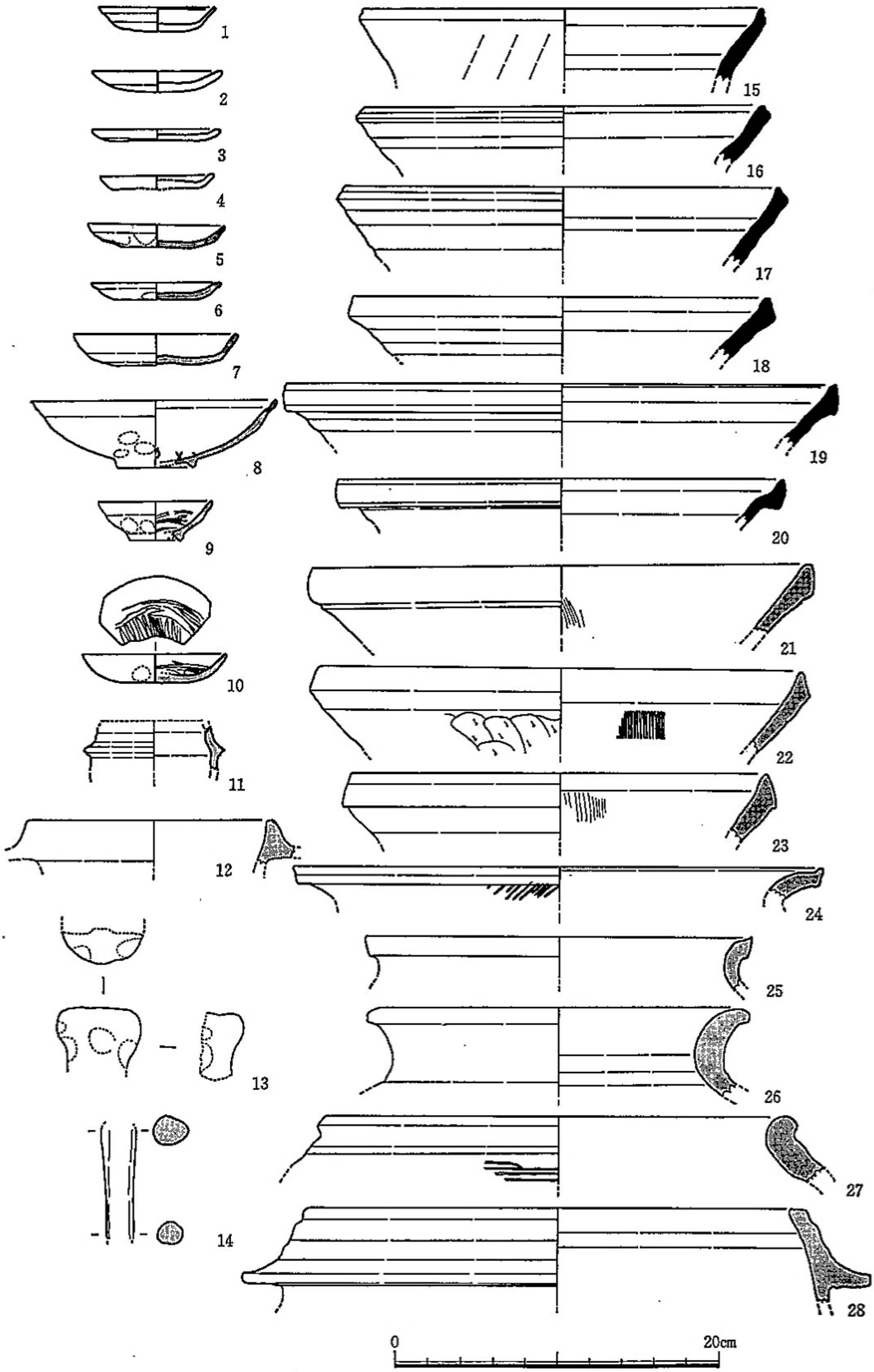
	65	64	63		65	64		65	64	63
R	1	1		R	1	2	R	2	1	1
S	1	2		S	3	3	S	5		
T	1		2	T		1	T		1	
Ⅰ類				Ⅱ類			Ⅲ類			

須恵器

主に包含層から出土している東播系須恵器練り鉢（第52図15～20）について説明する。口縁部の形態、口縁帯の発達度によりⅠ類＝幅１㎝未満のもの（第52図15、16）、Ⅱ類＝幅１㎝～1.5㎝（第52図17、18）、Ⅲ類＝幅1.5㎝以上のもの（第52図19、20）に分類できる。沖積段丘面上の包含層、茶灰色土（下層＝中世層）、暗灰色粘質土（上層＝近世）からⅠ類が８点、Ⅱ類が10点、Ⅲ類が10点出土している。数量や分布は余り変らないが、Ⅲ類にはＳ65地区へ集中する傾向が見られる。沖積段丘上のＳＤＡ５からはⅡ類が４点、Ⅲ類が２点出土している（第53図６、７）。

法量については、Ⅰ類が、25㎝前後で、口縁端部も凹線又は段状を呈し、Ⅱ類は25～26㎝位で余り変化はない。Ⅲ類は27～30㎝と大形のものが出現してくる。

Ⅰ類は12世紀、Ⅱ類は13世紀、Ⅲ類は14世紀と仮定すると、搬入の量は余り変らないが、12世



第52図　中世土師器・瓦器・須恵器

紀は小型で数も少なく、分布地点も散慢で、当調査区から若干離れた場所で使用された可能性が窺え、13世紀には数量が漸増し、使用頻度も増していると考えられた。14世紀には法量の大きな練り鉢が、前代とほぼ同数搬入されているので、若干の消費増があったようである。

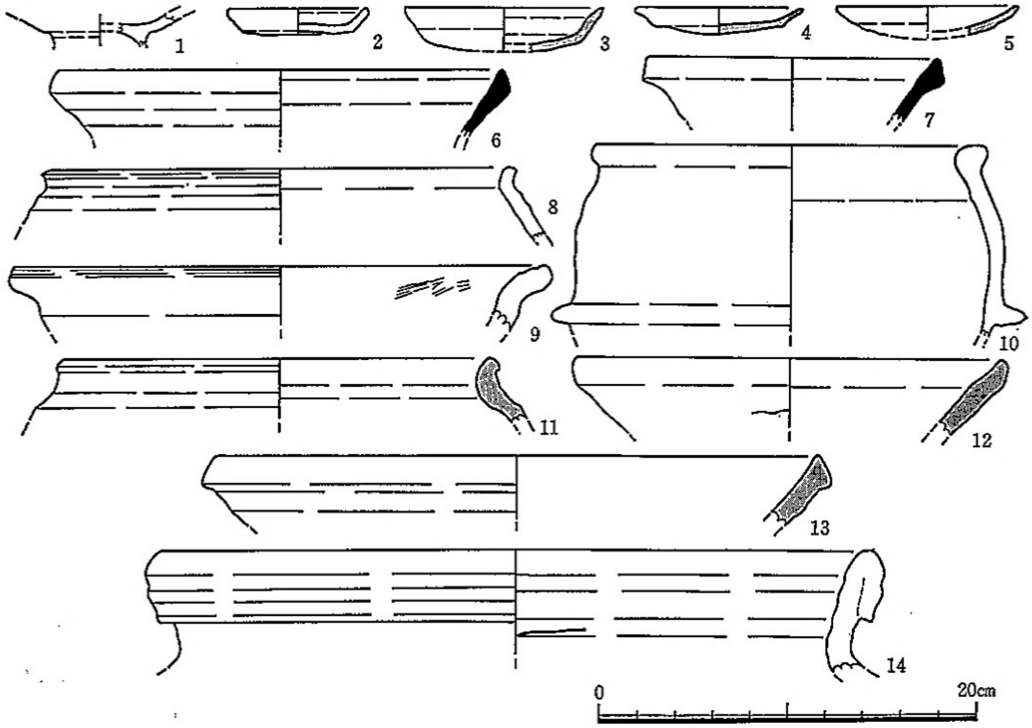
土師器　（第52図１～４）

図化し得たものは４点である。１は包含層（茶灰色土）より出土しているが、他は、より上層からの出土であった。口径６～８㎝、器高0.8～1.2㎝で、口縁部外面及び内面全体を横ナデし、外面底部は不調整である。遺構より出土したものはピット85掘り方内の（第53図１）高台付皿、ＳＤＡ２上面出土皿（第53図２）がある。

瓦器及び瓦質土器

瓦器埦の残存状況は余り良くなく、数量的にも多くない（第52図８）。形態的には逆台形又は逆三角形の高台から横方向に体部が延び、斜め上方に上る。口縁部外面は外反し、内面にゆるやかな窪みがみられる。体部外面は指押え痕が残り、内面には格子暗文がみえる。13世紀前半代のものか。

瓦器皿７点のうち、口径 8.8～10.6㎝を測り、器高 1.8～ 2.3㎝に及ぶ（第52図７、10、第53図３）ものをⅠ類とし、口径 8.3～ 8.8㎝、器高 1.4㎝前後を測るもの（第52図５、第53図４）をⅡ類とする。更に小形の口径7.9㎝前後、器高1.1㎝前後（第52図６）のⅢ類とに分類できる。Ⅰ類を12世紀、Ⅱ類を13世紀前半、Ⅲ類は13世紀中葉から後半頃と考えられる。Ⅰ類は内面に暗



第53図　遺構内出土中世土器

文がみられる。Ⅱ・Ⅲ類は内面及び外面口縁部を横ナデし、底部外面は指押え痕のみがみられる。

瓦器小塊が出土している。S65—b1地区茶灰色土から検出され、口径6.9cm、器高2.3cmを測る。内底面に箆磨きがみられ底部外面には断面三角形を呈する高台が付着されている。

瓦質土器には土釜・甕・擂鉢・不明土製品が出土する。土釜には口縁部が段状を呈する（第52図28）タイプと丸く終る（第52図12）タイプがみられた。また支脚も（第52図14）確認され、様々な系譜の土釜が少量ではあるが使用されていたようである。

甕は口縁部及び頸部が長く、薄く外反度の強い（第52図24）ものから、厚く短いものへと変化し、27（第52図）のように玉縁状になってゆく。口径は20〜30cm前後で、体部には外面平行叩き、内面ナデまたは凹み痕がみられる。

擂鉢は口縁帯の幅1.7〜2.2cmでやや丸味を持った面をなすタイプと、ゆるやかに凹むタイプのが出土している。13（第52図）は不明土製品である。

青磁（第54図）

第19表　青磁碗出土地点別数量表

	65	64	63	62
R	3	5		1
S	1	2	2	
T	5	1	1	

総数22点を数える。調査区北西部、及び南西隅に多く出土している。器種は主に碗である。層位的には近世層と考えられる暗灰色粘質土内に半数以上含まれ、中世層と考える茶灰色土中に4点検出されている。この4点はいずれも碗形態で、外面体部に蓮弁を明瞭に刻み、口縁下約3mmの所に一条の沈線を施し、釉調は厚く緑色も深いもの（Ⅰ類）と、いまひとつは外面に蓮弁を刻まず回転箆削りの後、口縁下7〜8mmの所に沈線を施し、内面には回転箆削りの後、4条の櫛描き文及び1条のラセン状沈線を施文し、口縁下4〜5mmの所に沈線を施すもの（Ⅱ類）とに分けられる。更に後者（Ⅱ類）は内面の体底部の境界に凹線をめぐらすものがある。釉調は厚く、色は淡緑色もしくは黄緑灰色を呈する。口縁の形態は外上方に直線的にのびるもの（Ⅰ・Ⅱ類のどちらにも含まれる）と、やや外反するものが認められる。どちらも器壁が薄く、深いものである。高台については薄く、接地面が狭く、径の大きいものが認められる（9）。これらを大雑把に13〜14世紀代のものと把握し、上層（暗灰色粘質土）に含まれる遺物を見てゆくと、より口縁部が厚いもの（2）、蓮弁が退化したもの、口縁部内外面の沈線のないもの、高台が太く径も小さく、焼成が高温の為、釉が変質しているもの（3）へと変化していると考えられた。

白磁　（第54図）

第20表　白磁出土地点別数量表

	65	64	63
R	2	4	
S	4	4	
T	1	1	2

総数18点出土している。主に沖積段丘面中央に分布し、青磁の分布とやや異なる。碗と皿はほぼ同数で、上層（暗灰色粘質土層）に11個（碗7、皿4個）、下層（茶灰色土）に7個（碗2、皿5）を数える。碗は、玉縁状の口縁部で、内外面に文様は見られない。器壁が薄く（4mm）長い口縁部で内彎するもの（胎土は灰白色）と、同じく器壁

は薄いが内彎せず、外面口縁帯の下に一条のゆるやかな凸帯を持つもの（胎土は白色）がある。1は内面を平滑に仕上げ、口縁帯を丸くふくらませ、口縁下の凸帯はなだらかに消えかかっている。釉は緑がかる。また口縁が厚く（厚さ１㎝）、口縁下の凸帯を有するものもある。高台は一部のみ出土しているが高さ１㎝、幅 8.5㎜、内面底部に釉のかきとりがある。皿の口縁に端面を有するものと、丸く外反するものがあり、削りによる平底のもの（Ⅰ類）(８）と削り出し高台のもの（Ⅱ類）(７）、割り高台のもの（Ⅲ類）(５）がある。皿Ⅰ類（８）は、やや緑がかった釉で胎土は灰色。皿Ⅱ類は、青白っぽい釉で胎土は白い。皿Ⅲ類は黄緑色がかった釉で、胎土は黄白色を呈する。（６）は高台内に墨書がみられる。

第21表　中国染付出土地点別数量表

	65	64	63	62
R	1			3
S		3		1
T	3			

中国染付　（第54図）

総数11点出土している。全て上層（暗灰色粘質土）から出土している。R及びS62区から出土しているものは周辺及び東方の井戸・溝に関連するものであろう。T65・S64区に出土しているものは他の陶磁器類の分布とも重複し、小規模な微高地上に15～16世紀代の建物群存在が見込まれる。いずれも他器種の土器に比べ数量的に少量であるが、供膳形態においては、土師器、唐津・瀬戸等同時期の垸・皿類と伴に一定の比重を占めるものである。堺周辺部における中国陶磁器の普遍的な搬入状況を物語る資料と言えよう。

遺物は口縁部片・底部片のみで完形品はみられない。底部については〔Ⅰ類〕高台が細く低く径が大きいもの。しかも高台内に回転箆削りによる放射状の凹凸がみられ、その上に釉がかけられている。15は皿と考えられるが見込みに獅子の絵がかかれ、釉は青白色を呈す。16世紀末と考えられる。〔Ⅱ類〕(11）は高台内に厚い釉が施され、高台外側に三重圏線又は唐草文等を描くものである。見込みには圏線により文様区画をつくり唐獅子や草花文を濃い紺色でえがく。〔Ⅲ類〕(13）はぶ厚い底部でやや太い高台が削り出される。釉は高台内面に及ばず、色調は黄青白色を呈す。外面には木の葉状の文様が密にえがかれ、内面見込み部は圏線内にデザイン化された草花文がみられる。胎土はⅠ類が白、Ⅱ類が灰白、Ⅲ類は黄白色を呈す。

ＳＤＡ５から青磁碗（２点）、白磁皿（１点）、染付碗（１点）が出土している。

第22表　常滑焼出土地点別数量表

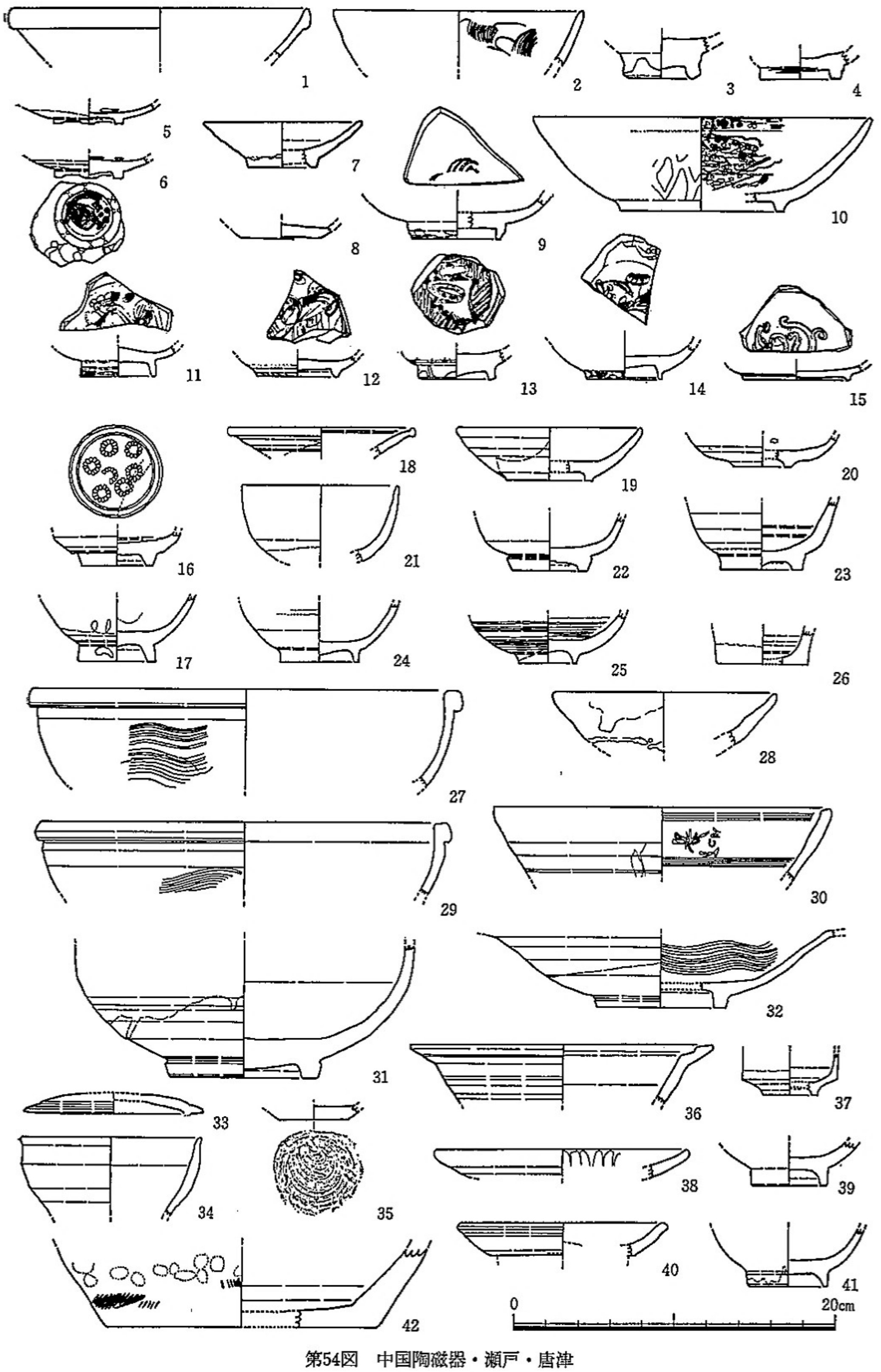
	65		64		63		62	
R				1				
	1		4	1				1
S		2		1	2			
	1	1	1					
T	1	3			1			
		2						

常滑焼

全部で23点出土している。R64及びT65地区に分布の中心がある。全て甕体部片であった。包含層上層に15点、下層に８点含まれていた。中世における分布の中心がR64区で、近世以降はT65が中心になるようである。

瓦・塼類

塼はS64区で２点出土し、平瓦・丸瓦は全地区で各々約900点・約300点と多数出土している。S64～S65区及



第54図　中国陶磁器・瀬戸・唐津

びR62区に集中し、包含層上層に平瓦400点、下層から220点出土していた。主に北西寄りのS65、R64区から出土している。丸瓦は上層から180点、下層から約100点出土し、上層ではS64区から多く出土しR63・64区は少なく、R64区がやや多いようである。

軒瓦については、蓮珠文軒平瓦がS65・T63区から出土し、唐草文軒平瓦がR64・S64・65区から細片が出土している。軒丸瓦については巴文軒丸瓦がR64、S64・63区及びT64〜65区で出土し、宝塔文軒丸瓦がS64区で出土している[5]。いずれもS64区を分布の中心としているようである。

第23表　平瓦・丸瓦出土地点・層位別数量表

丸瓦		65	64	63	62	61
全体	R	24	33	16	59	6
	S	55	68	32		1
	T	41	45	11	4	

丸瓦出土地点別点数一覧表

		65	64	63	62	61
上層	R	5	9	8		
	S	29	46	29		
	T	25	25	8		

上層出土丸瓦、地点別出土地点

		65	64	63	62	61
下層	R	18	22		6	
	S	17	11	3		
	T	19	10	1		

下層出土丸瓦、地点別出土地点

平瓦	65	64	63	62	61
R	63	101	42	123	10
S	132	171	55	7	6
T	78	83	20	17	

平瓦出土地点別点数一覧表

	65	64	63	62	61
R	19	37	21	1	
S	58	110	43		
T	56	62	12		

上層出土平瓦、地点別数量表

	65	64	63	62	61
R	37	50	2	24	
S	56	21	1	1	
T	18	8			

下層出土平瓦、地点別数量表

第24表　平瓦型式別数量表

	凸面	凹面	破片数
ⅠA	縄	布	13
ⅠB	〃	布＋砂	40
ⅡA	縄＋砂 or 布＋砂		90
ⅡB	縄 or 布		20
ⅢA	粗砂	糸切りorモコツ	60
B	細砂	〃	23
C	細砂	ナデ	370
ⅣA	細砂＋ナデ		70
B	ナデのみ		130

次に平瓦の各型式毎の分布状況を概観する。Ⅰ類は凸面に縄叩きが見え、凹面に布目が見えるものである。離れ砂の有無によりA・Bに分けている。ⅠAが13点、ⅠBが40点見られた。また縄叩きと離れ砂が見えるか又は凹面の布目に離れ砂が見えるもの＝ⅡA類と、離れ砂がなく、縄目か布目かのいずれかが見られるもの＝ⅡB類があり、ⅡA類は90点、ⅡB類は20点出土していた。更に、粗い離れ砂が凸面に、凹面に糸切り痕又は模骨痕が見えるタイプ＝ⅢA類と、細かい砂が凸面に見

られ、凹面は糸切り又は模骨痕があるタイプ＝ⅢＢ類に分けられる。これに凸面細砂凹面ナデのみのⅢＣ類が加わる。Ⅳ類は近世瓦と考えられ、凹面・凸面が不明瞭で、ナデ調整が主体のものである。ⅣＡ類は細砂があり、ⅣＢ類はナデのみのものである。第25表に示す通り、上層（暗灰色粘質土＝近世）から出土する割合が多くなるのはⅢＢ類～ⅣＢ類でⅠＡ類は下層からしか出土していない事が解った。また古いと思われるⅠ・Ⅱ類の瓦は調査区西寄りから多く出土し、ⅢＣ類等は東寄りでも多数出土している。これらの事から、Ｓ64区、Ｒ62区で、近世のいつかの時点で時期の混ざった瓦が投棄された事が窺えた。平安後期から中世前半の平瓦については、それ以前から調査区西寄りに散布していたと考えられた。

第25表　平瓦型式別・出土地点・層位別数量表

	ⅠＡ類					ⅠＢ				ⅡＡ					ⅡＢ			ⅢＡ					ⅢＢ					ⅢＣ					ⅣＡ					ⅣＢ				
	65	64	63	62	61	65	64	63	62	65	64	63	62	61	65	64	63	65	64	63	62	61	65	64	63	62	61	65	64	63	62	61	65	64	63	62	61	65	64	63	62	61
R	1	2		1		4	8	1	5	7	12	9	14	1	2	3	1	5	12	2	12	1	2		1	⑤	1	32	51	11	(64)	5	2		6	8	1	1	9	6	8	1
S	③	③			2	⑨	1			⑲	10	4	2	1	3	⑤	2	⑭	9	3		1	4	3	3			54	(64)	17	5		4	㉒	3			7	㉜	19		1
T		1				3	3	5	1	5	6	1			4	2	1	4	2	1			2	2				38	22	4			7	11	2	8		8	28	5	7	
上層	0					11				30					11			23					12					150					41					90				
下層	13					13				25					9			26					5					100					0					3				

○印は最多出土地点

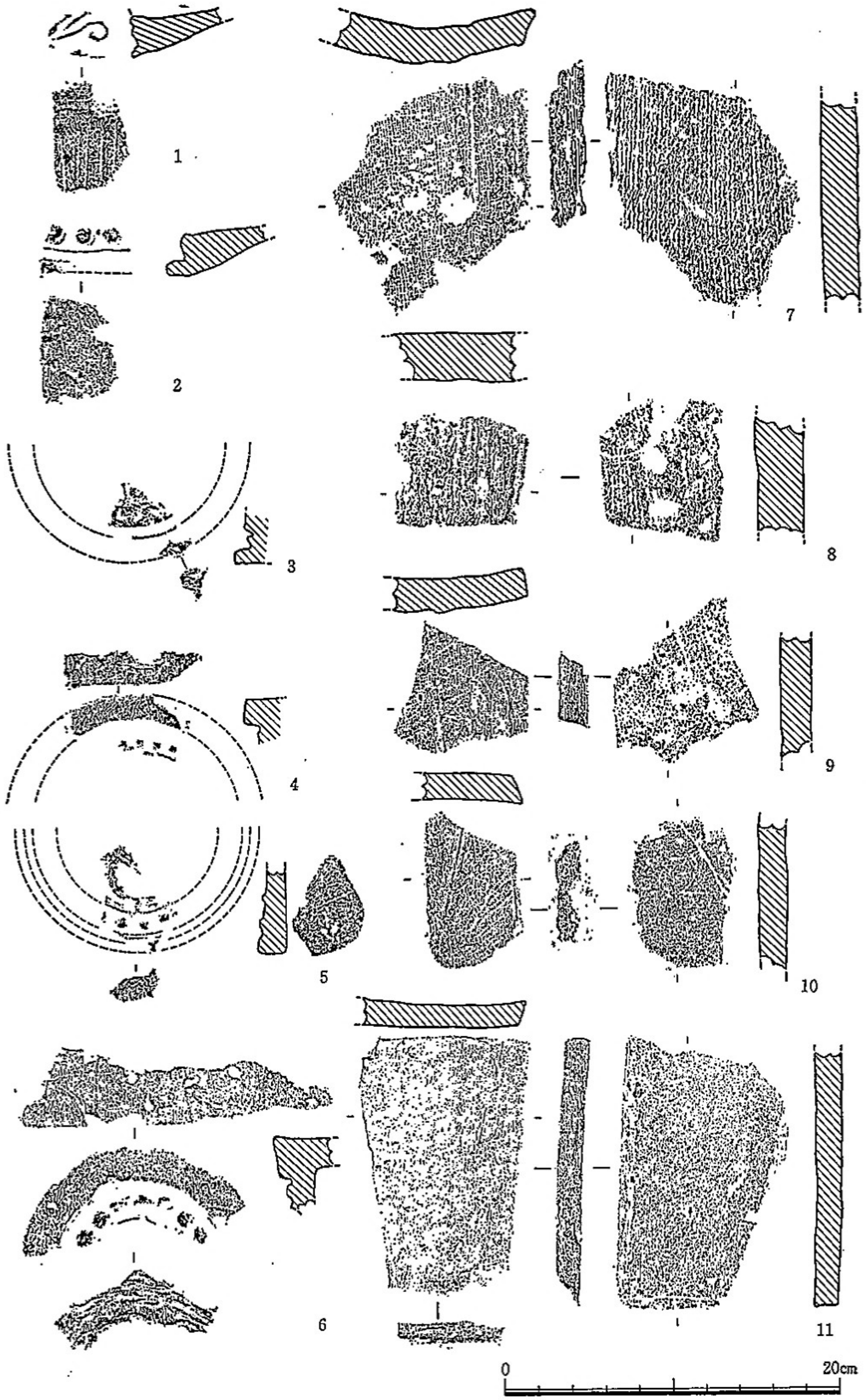
次に丸瓦について見てみると、凸面縄叩き凹面布目痕を持つもの（Ⅰ類）と、凸面縦ナデ後面取りナデするタイプ（Ⅱ類）、凸面を単にナデるだけのもの（Ⅲ類）とに分けられる。Ⅱ類は、凹面に布目痕と糸切り痕とが残るもの（A類）と布目のみが残るもの（B類）と糸切り痕のみ見られる（C類）とに分けられた。いずれも小破片が多く、残存状況は良くなかったが平瓦と同様、Ｓ64区とＲ62区に分布の中心が認められた。しかし型式と土層の関係は平瓦程明確にはあらわれず、分類規準を再度確認する必要も感じられた。一応Ⅰ→Ⅲ類へと新しくなると想定して、第27表を作成し、Ⅰ類が下層に多く、Ⅱ類がやや上層に多く出土することが確認され、ⅡＣからⅢ類は殆ど上層にしか検出されない事が判明した。平瓦とはⅠ類同志が対応し、丸瓦ⅡＡ類と平瓦Ⅱ類が対応し、丸瓦ⅡＢ類は平瓦ⅢＣ類と、数量の点で対応するようである。

第26表　丸瓦型式別数量表

		凸　面	凹　面	数	
Ⅰ		縄　叩　き	布　目　痕	57	
Ⅱ	A	面取りナデ	糸切り痕＋布目痕	41	226
	B	〃	布　目　痕	149	
	C	〃	糸　切　り　痕	36	
Ⅲ		ナ　デ	ナ　デ	27	
計				310	

窯壁

総数11点数えられ、茶灰色土より８点、暗灰色粘質土より３点出土していた。Ｒ64・65区に多く分布し、ＳＸ３周辺に集中すると見て良かろう。しかし瓦類・中世陶磁器の集中地点からは若



第55図　包 含 層 出 土 瓦 拓 影

第27表　丸瓦型式別・出土地点・層位別数量表

		Ⅰ類					ⅡA類					ⅡB類					ⅡC類					Ⅲ類				
	地区	65	64	63	62	61	65	64	63	62	61	65	64	63	62	61	65	64	63	62	61	65	64	63	62	61
総数	R	5	4	1	⑯	2		1	2	11		10	17	9	20	1	2	2	2	⑧	1		2	1	1	1
	S	8	2	4			4	⑬	6			25	㉘	4		1	3	⑧	5			2	⑥	4		
	T	6	7	1	1		2	1		1		12	13	8	1		2	3				3	4	2	1	
小計		75					41					149					36					27				
上層	R	2							2			4	8	4			1	2	2				2			
	S		2	4			4	⑪	4			13	⑮	4			3	⑧	5			1	3	④		
	T	4	1	1								4	6	6			2	1				2	3	1		
小計		14					21					64					24					16				
下層	R	3	4					1		2		5	9		11											
	S	⑦						2	2			8	⑬										③			
	T	2	6				2					7	3	1				②				1	1			
小計		22					9					57					2					5				

○印は最多出土地点を示す。

干ずれており、鞴羽口とも重複しない。数量も少なく、個体の大きさも２～５㎝程度であり、二次堆積の可能性もある。

砥石

８点出土しているが、調査区の南辺に多い。大形のチャート及び砂岩製のものと小形品がみられる。時代は決定し難いが、鞴羽口の分布地点とやや似ており、古墳～奈良時代か又は鎌倉・室町期のものであろう。第57図は縄文時代の叩き石である。

金属器

鉄滓　洪積段丘上及び沖積面上において出土している。R63・64区、S62区が分布の中心である。形状は10㎝前後、楕円形で厚さ約５㎝を測り坩からはずされた状態のものと、破損して２～３㎝になったものとがある。

貨銭　R64－d区で洪武通宝が茶灰色土より出土し、不明の貨銭が土壙13より出土している（第62図11）。

遺構内出土遺物

ピット及び、土壙内出土遺物は瓦器・土師器等の各遺物の項目で説明したので、ここでは溝内出土遺物について触れたい。

第28表　窯壁片出土地点別数量表

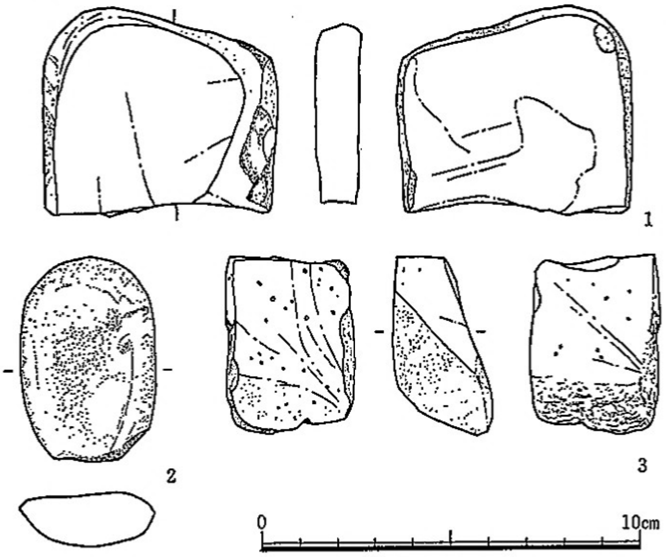
	65		64	
R				
		2	1	4
S		2		
T			1	
		1		

第29表　砥石出土地点別数量表

	65		64		63	
R						
		1			1	
S						
		1				
T	1	1	1			
				1	1	

ＳＤＡ５　ＳＤＡ５はＳＥ１やＳＤＡ２他土壙・埋甕等が近接し、弥生～中世に至る多くの遺物を含んでいる。総数約 800点にのぼり、弥生後期の甕や、生駒西麓産の土器片・古式須恵器・

土師器等々も含まれている。これらの前代の遺物は一応捨象して瓦器・土師器・陶磁器について説明する。供膳形態として瓦器（埦・皿）が19点、青・白磁3点、土師器皿の3点を加え25点が数えられ、調理形態として東播系須恵器練り鉢が6点、煮沸形態である土師器土釜が14点数えられた。貯蔵形態は不明である。以上を中世前期の器種構成とし、次に中世後期の器種を見てみる。供膳＝瀬戸埦・皿、中国染付等（5点）、調理＝瓦質擂鉢（2点）、煮沸＝瓦質土釜（3点）、貯蔵＝瓦質甕・備前焼甕（11点）が数えられた。他の時期の出土遺物量を参考にすると、集落周辺に溝が位置する場合、供膳・調理の比率が高くなり、集落が遠ざかった場合は遺物量が少なく、供膳の比率が下がり、平均的に各器種が出土するようである。



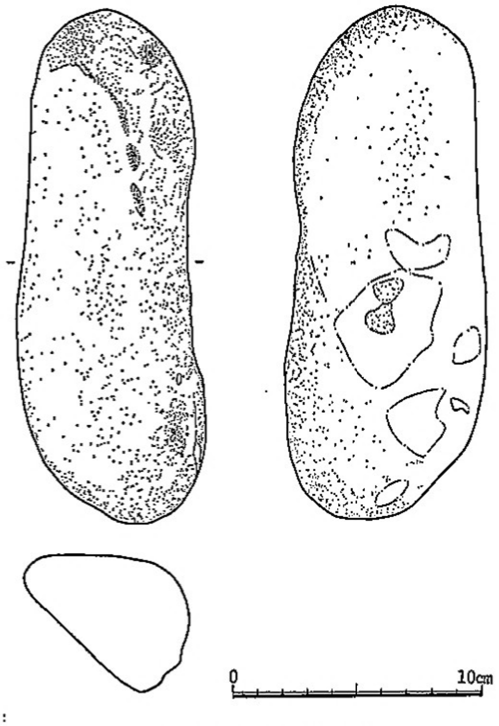
第56図　砥　　　　　　石

その他　ＳＤＮ９、ＳＤＡ３等ＳＤＮ２上面に走る小溝に土釜、瓦器、瓦類が含まれ、ＳＤＮ２が、中世まで不安定な状況であった事を物語っている。

Ｈ　近世（第54・59～62図；図版155～157）

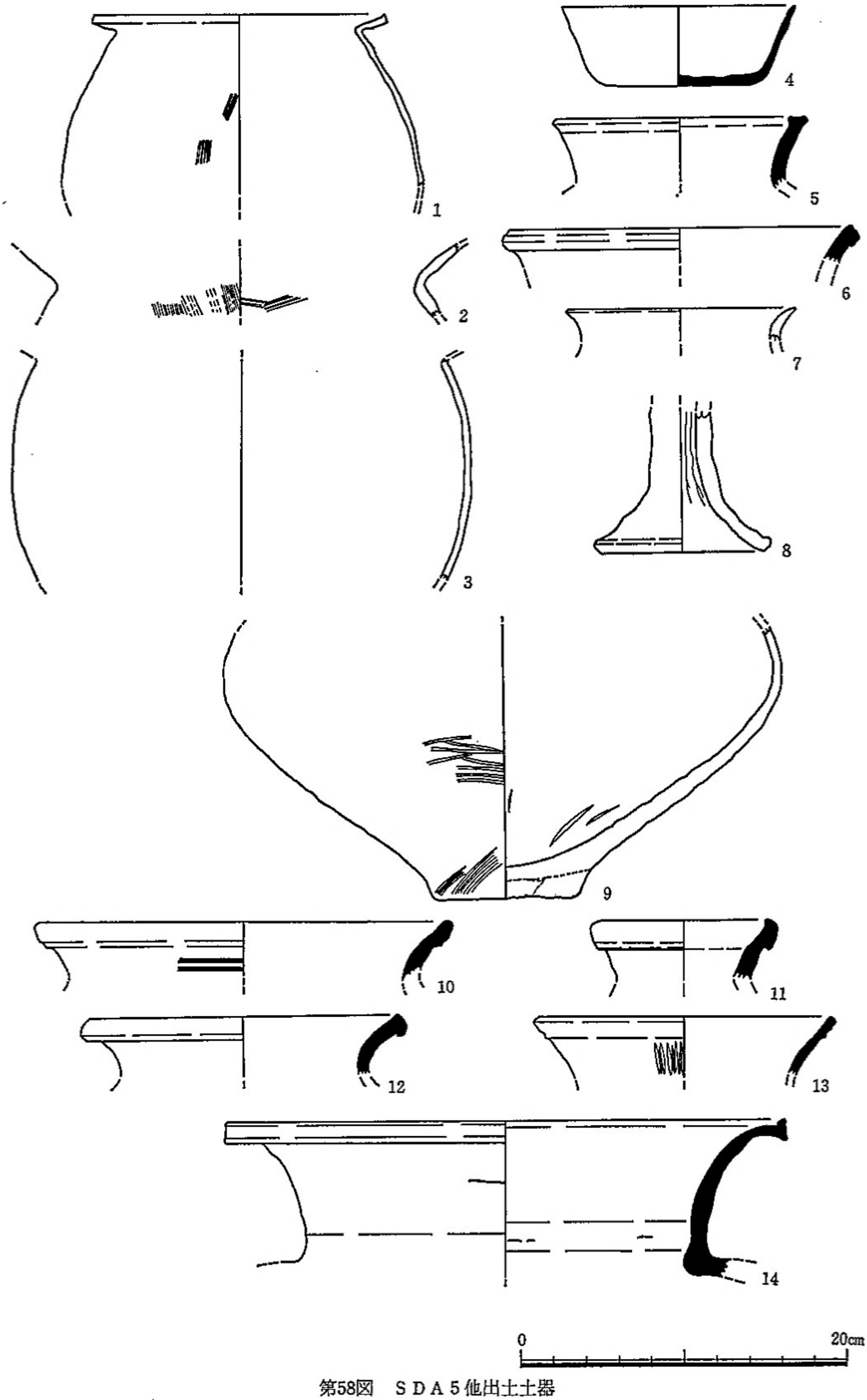
陶磁器

美濃・瀬戸焼　総数37点が確認された。埦が23点、菊皿・燈明皿等は数点で、16世紀後半から17世紀代のものが大半である。殆ど包含層上層からの出土で、Ｔ65地区に集中している。



第57図　包含層出土石器

唐津焼　総数64点を数える。埦・鉢類はほぼ調査区の全域に認められるが、皿状のものはＲ62とＴ65区に認められる。高台の形や器形によって３分された。Ⅰ類（第54図19、20）は浅い皿状を呈し、高台が低く逆台形をなす。釉は外面口縁部と内面全体にかかり、トチンの痕跡が認めら



第58図　ＳＤＡ５他出土土器

第30表　近世陶器出土地点別数量表

		65	64	63	62	61
美濃瀬戸焼	R	2	4	3	2	
	S	5	3	2		
	T	⑩	5	1		
唐津焼	R	1	3	6	5	1
	S	8	8	4	2	
	T	⑫	10	2	2	
備前焼	R		9	8	7	3
	S	6	㉑	2		
	T	6	9	3	1	
信楽焼	R		2	1		1
	S	4	⑦	1		1
	T	5	3	1		
丹波焼	R	1				
	S	5	⑥		1	
	T	2	3	1		

れる。Ⅱ類（第54図16、22）は高台が太く、外面上方に稜線を持つ、緑色の釉と黒灰色の釉がみられ、後者の内面には花文が象嵌されている。高台内に釉はかからない。Ⅲ類は高台が細く小さい。暗緑灰色の釉に白灰色の横方向に流れる筋が見られる。内面底部の釉は幅１cmにわたり輪状にかきとられ、重ね焼き痕がある。高台内にも釉と筋目が施される。

口縁部の形態は丸くおわるものと、屈曲し段を持つもの、埦状のもので直立するややぶ厚いタイプが見られる。他に黒釉の小壺がＳＥ１より出土する。鉢形のものは、口縁部が玉縁状で、内外面に波状文を施したものと、口縁部が外反し、内外面に濃緑色の釉を施したものとある。この高台はガッシリしたもので、周辺を箆削りし、釉はかからない。いまひとつは、口縁が外上方に伸びやや肥厚して丸く終るタイプで、内外面にやや白っぽい緑灰茶色の釉がかかり、内面口縁部下に白色の象嵌がみられるものである。

備前焼　総数75点が調査区のほぼ全域から出土している。包含層上層から大半が出土し、Ｓ64・Ｒ64区に集中している。Ｒ64・Ｓ65区では下層からも検出されている。近世の擂鉢・甕・壺等が多くみられる。擂鉢は近世のものが大半である。口縁部の形態は２cm幅の口縁帯に２本の凹線がめぐる。体部外面は箆削り又は横ナデ調整され、内面口縁部上端に段を持ち、櫛目の上部は横ナデにより消される。櫛目は９～11条、色調は濃茶色・黄褐色を呈す。口径は大・中・小の三類に分けられ、それぞれ、20、30、40cm前後を測る。他の焼きものは平均30cmでほぼ一定している（第59図１～６）。

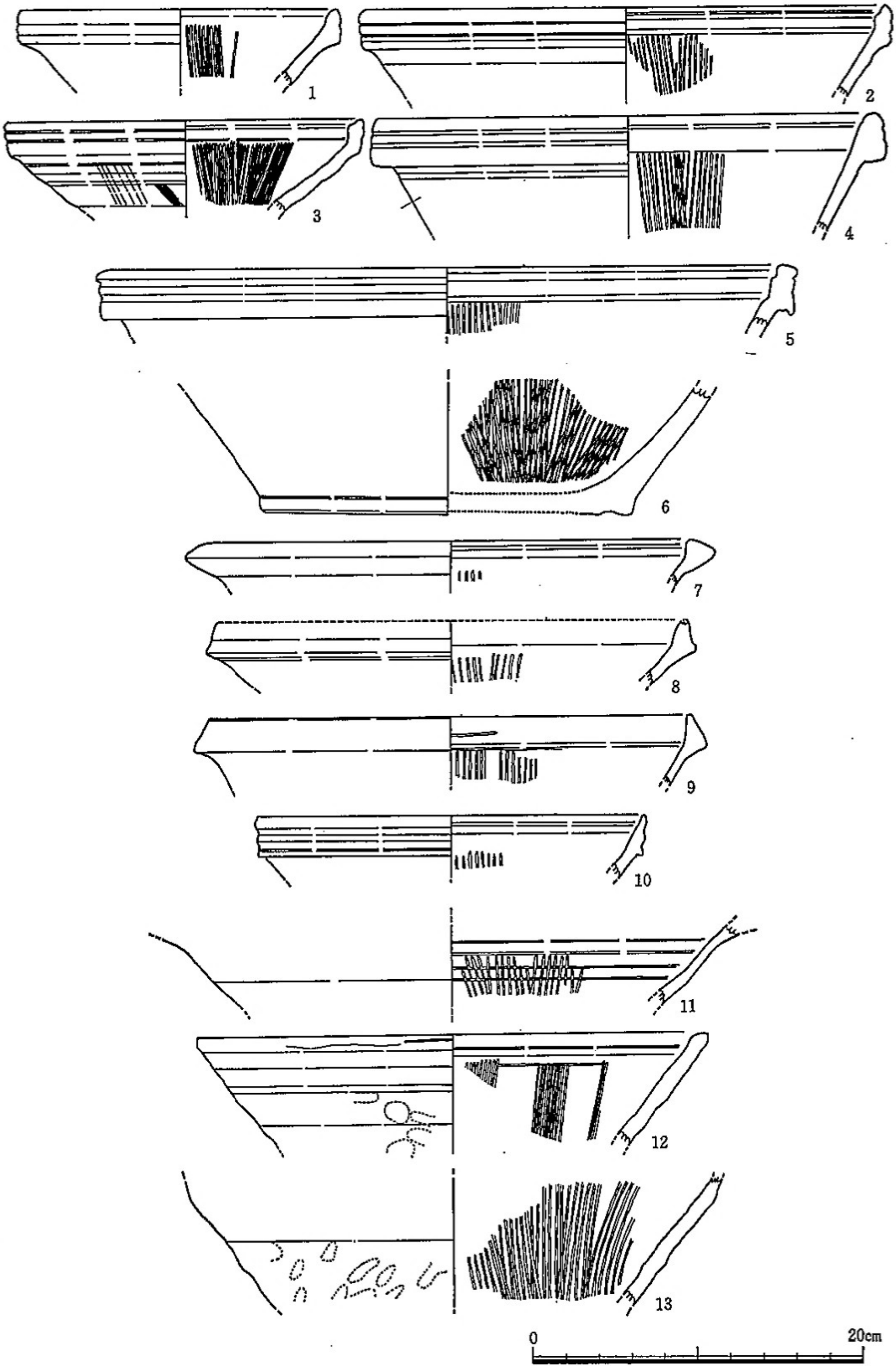
信楽焼　総数26片のうちＳ64区からＴ65区にかけて半数近く出土している。包含層上層に殆ど含まれていた。擂鉢体部３点、口縁部６点が出土している。口縁部の形態は肥厚し、上端に面を持つものと、外面端部が拡張し、凹面をなすもの、更に拡張し、幅２cmを測り２条の凹線が施されるものに分けられる（第59図７～11）。

丹波焼　総数19点中、甕が８点、擂鉢３点、壺４点を数える。擂鉢口縁部は端部が方形をなし、内面にゆるやかな凹線がめぐる。体部外面に指押さえ痕がのこり、内面に９条の櫛目が施される。濃茶色で、断面、灰黒色を呈す（第59図12・13）。

湊焼

主に調査区の東方洪積段丘面上に残存状況の良好な個体が多く、西方沖積段丘面上の包含層から出土した個体は小破片が多い。

Ｒ61～63区より出土した炮烙はⅠ類＝口縁部が内彎しやや幅が狭く、Ⅱ類＝口縁部が直立し、幅の長いものとに分けられる。Ⅰ類は西方の沖積面上に多く（第60図２・４）、Ⅱ類は洪積段丘



第59図　備前・丹波・信楽・擂鉢

第31表　湊焼出土地点別数量表

		65	64	63	62	61
甕	R	1	2	9	14	6
	S	6	11	1		
	T	6	6	3	3	
炮烙	R			4		4
	S	8	8	1		
	T		3	2	13	
火舎	R			2	2	3
	S		2	1		
	T	2	3		1	

面上で多く（第60図３・５〜７）出土している。底部はいずれも離れ砂・型造り成形と考えられ、薄い仕上りで外面には煤が付着している。

火舎はドーム状の天井に三筋の柳葉状の透かし穴があけられ、平坦な底部に退化した脚が付される。内面上半部に煤の痕跡がみられる。

土釜は（第60図８）口縁部のみの残存で、内外面を回転ナデ調整する。

甕は口径30cmの小形のもの（第60図10）と、60〜70cmを測る大形のもの（第60図９）がみられる。口縁部の形態は分厚い方形を呈し、上面が逆台形をなす。口縁部が短く、肩が張る器形から、口縁部が長くなり、肩が張らないものへと変化する。埋甕ＳＫＡ25（第61図４）のように底部は丸底で型づくりと考えられる。体部内面は叩きのあて具の痕跡があり、その上を横ハケ調整している。外面は斜めの粗いナデ又は平行叩きもしくは刷毛調整がみられる。

貨銭　（第62図）

寛永通宝が調査区北側トレンチ内より出土している。直径 2.3cm、厚さ１mm、一辺７mmの穴があく。

遺構内出土遺物

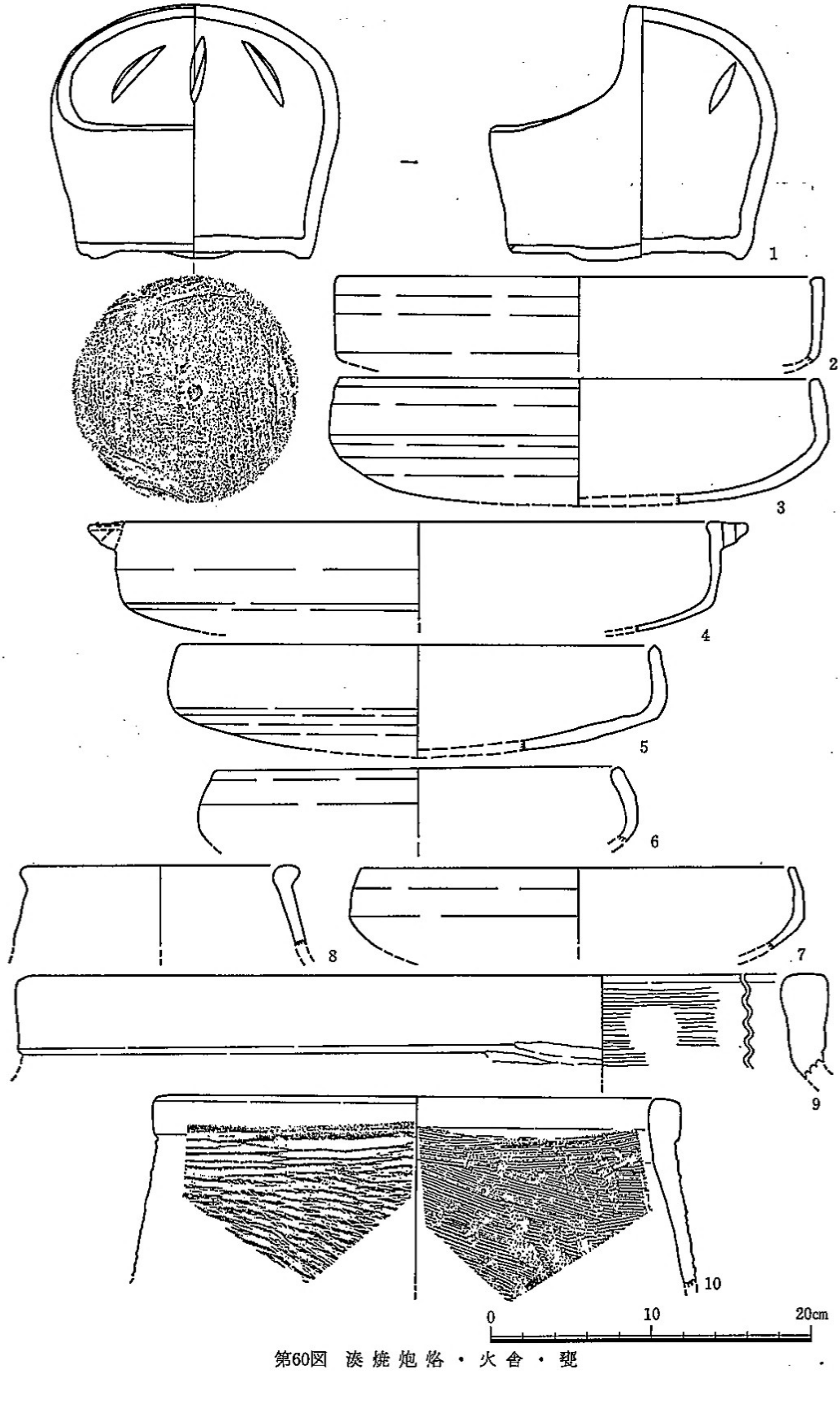
ＳＥ１　湊焼の土堝、土釜が出土している。土堝は内面に刷毛目が施され、外面は箆削りしている。器壁が厚く、口縁部内面に凹線がみられる。土釜は口縁部が長く。端部を肥厚させ、上端に面をつくる。鍔は下方にさがる。橙色を呈し、胎土は密である。

仮設道路内井戸　伊万里焼燭台・皿・堍他、瓦類等、近世〜近代にかけて遺物が出土している。燭台は草花文を外面に施し、底部以外に青白色の釉をかける。

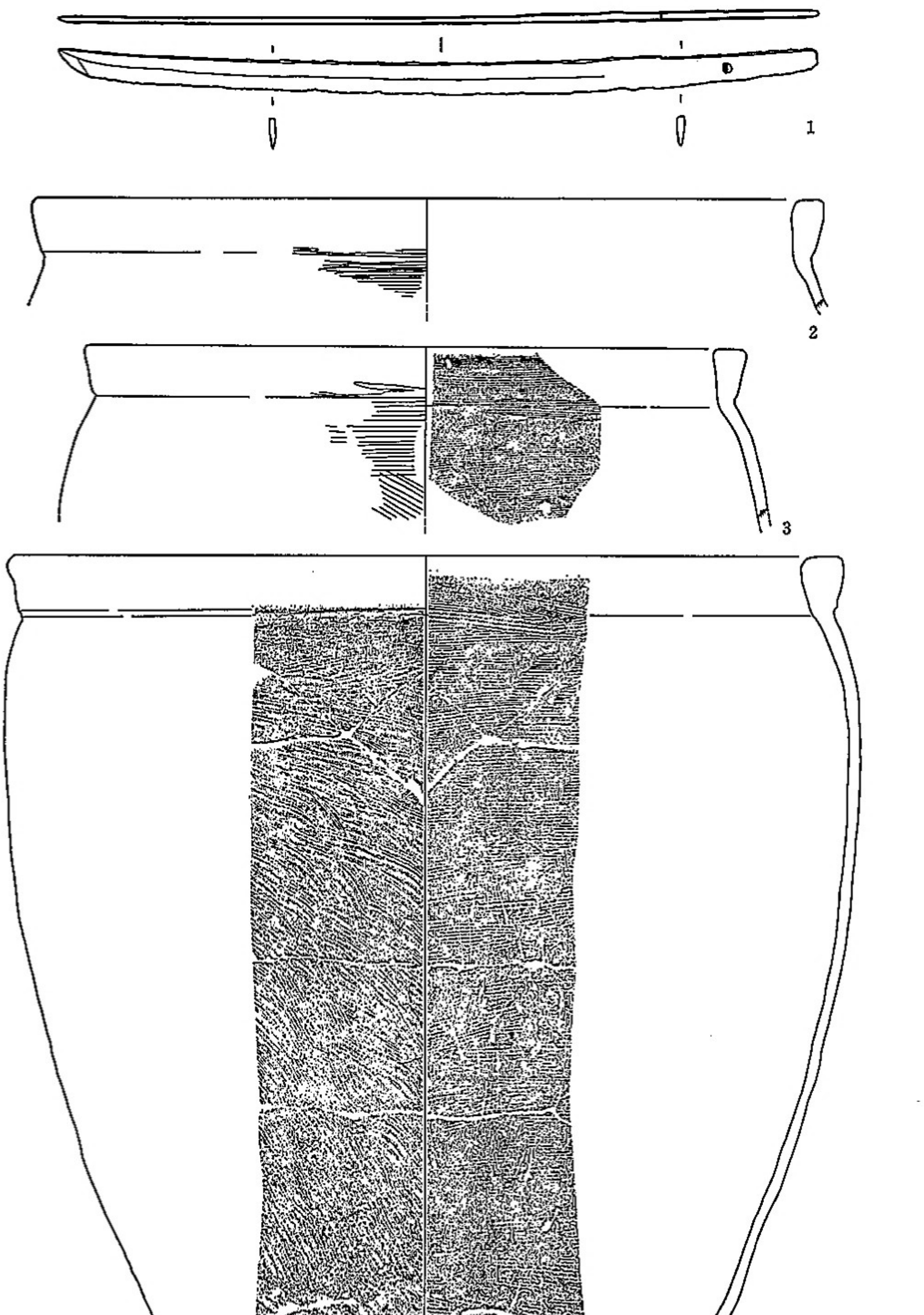
ＳＫＡ23　17世紀代と考えられる。備前焼擂鉢が出土している（第62図３）。

ＳＫＡ25　青磁碗・伊万里焼碗・軒丸瓦（第62図６）・平瓦・丸瓦が出土している。青磁は見込みに圏線がめぐり、わずかに象嵌が窺える。高台は丸く、高い。高台内は釉をかき取って中心部分だけ残している。体部外面下半には退化した蓮弁の基部がわずかに見える。胎土は白灰色で黒色微粒を若干含む。軒丸瓦は径13.6cm、左回りの三ツ巴文で頭部は丸く、尾部は短く独立している。外区内縁の珠文は径７mm前後で16個並んでいる。笵傷が多く見られる。丸瓦との接合部はナデ調整される。接合粘土は余り多くない。丸瓦は幅13cm、厚さ 2.9cmである。外区外縁の幅は1.2〜1.9cmを測る。内区と外区との間には一条の圏線が周る。

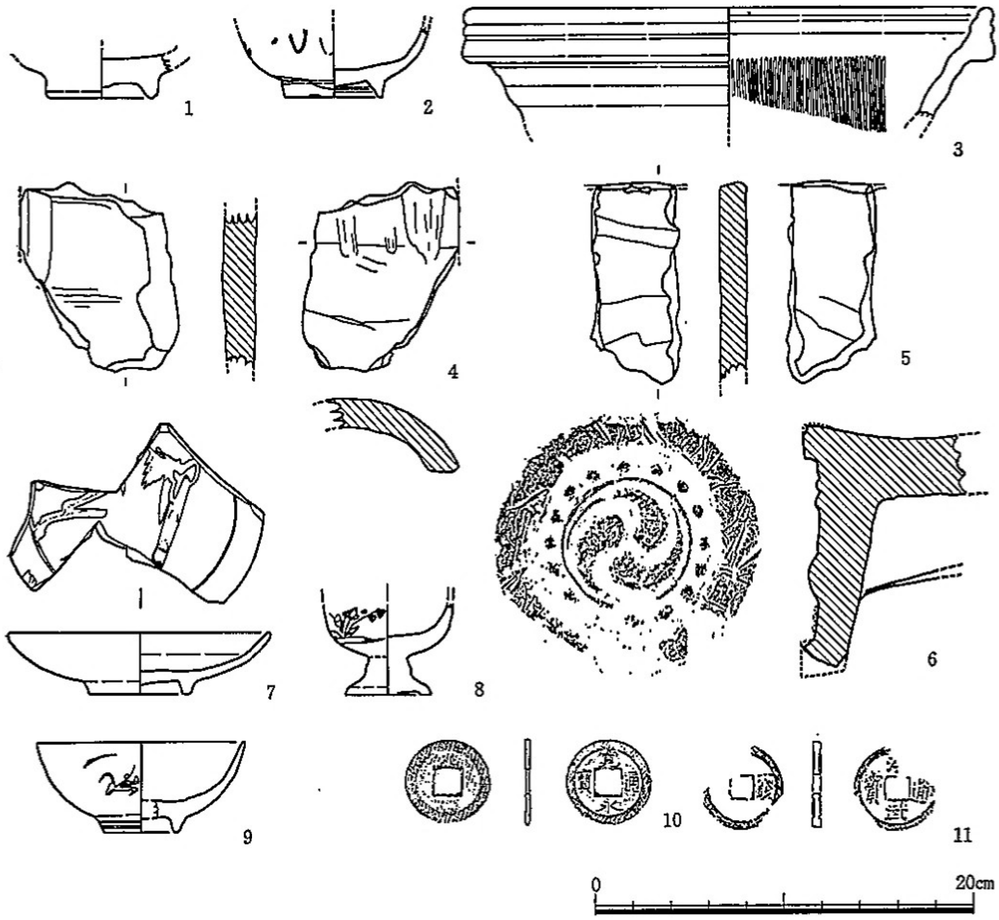
平瓦は平坦で凹凸面の区別がつかない。片面は不調整で他方は側面に接する部分をナデ調整する。丸瓦は凹面に布目圧痕が見られ、長側面をナデ、凸面は磨き風に縦方向のナデ調整がみられた。両者とも胎土に小さな片岩を思わせる砂粒を含んでいた。



第60図　湊焼炮烙・火舎・甕



第61図 日 本 刀 ・ 湊 焼 甕



第62図　遺構内出土遺物

Ⅰ　近・現代　（第61図；図版157）

防空壕内出土遺物

S61区で検出された防空壕内より日本刀一振が出土した（第61図1）。他に鉢等の雑器も投棄されていた。

3　小結

西浦橋遺跡出土遺物について観察してきたが、土器を中心にして気付いた点を羅列しておく。

A　縄文式土器

出土点数が少量であるにもかかわらず、個体差が大きく、他地域産の土器が目立つ事が言える。後期の土器は瀬戸内・近畿地方で縁帯文土器と供伴し、泉州では四ツ池・板原・三軒屋・淡輪遺跡等[6)]で出土している。河内方面では林・国府・縄手遺跡等で知られている。晩期の土器に関しては、矢張り個体差の大きい事と、他地域産の土器が目立つ事が指摘された。これらの型式差を、時間差と考えるならば、少量の器種と数少ない土器を運びつつ生活する集団が想定される。

B　弥生式土器

榎周辺にⅡ～Ⅳ様式期の土器が認められ、口縁部の形態・底部の形態から時間的な差と思われる変化が認められた。また方形周溝墓周辺の土器群には壺が多く、他地域産の土器もみられ、同様に榎周辺についても手捏ね土器[7]や把ッ手付土器、底部穿孔無頸壺等様々な器種と、他地域産の土器片が確認された。他地域産の土器についても片岩や角閃石といった指標となる鉱物の含まれ方に差がある事も判明した。

C　古式須恵器

大甕・壺蓋・器台等[8]が分布しており、その状況から洪積段丘上のＳＤＡ２周辺に置かれていた可能性が考えられた。５世紀前半から中葉にかけて周辺遺構は東側の菱木下遺跡では知られておらず、何らかの単独の祭祀儀礼等に伴う土器の設置かもしれない。周辺地域の調査例が増加すれば分布の中心とその意味が判明するであろう。数片出土している埴輪片との関係も興味深い。

D　６世紀初頭の土器群[9]

第32表　５世紀後半から６世紀初頭における遺跡別出土遺物組成表

		供膳			調理	煮沸	貯蔵			小計	製塩土器	鞴羽口	計
		碗・坏・他	高坏	器台	甑・鉢	甕	大形40cm以上	中形20cm以上	小形				
ＳＤＮ２下層	須恵器	約250組(57.2%)	約90組(20.6%)	25(5.7%)			6(1.4%)	46(10.5%)	20(4.6%)	437	20	4	482
	土師器		1			20				21			
太平寺茶黒粘	須恵器	90組	15組	0	6		0	2	46	159	62	48	335
	土師器	3	6		4	51			2	66			
深田ＳＤ１	須恵器	74	60	7	20		212		49	422		1	633
	土師器		22	5	5	119			59	210			
深田ＳＫ６	須恵器	370	200	12	36		942		160	1720			2161
	土師器	3	6	9	9	318			96	441			
船橋ＯⅤ	須恵器	50	2				2	15	3	72	219		437
	土師器	15	19		32	69			11	146			
船橋ＯⅣ	須恵器	70	10	2	1		1	2	15	101	111		393
	土師器	11	5		46	100			19	181			

ＳＤＮ２下層で検出され、約 500個体以上を数え、供膳形態が圧倒的に多い事が判った。土師器は殆ど見られず、須恵器の坏・坏蓋・高坏等が半数以上を占めていたのである。供膳形態 366点、貯蔵形態72点、煮沸形態20点、その他製塩土器20点、鞴羽口４点を数えた。総数 482点中、須恵器が437点で90.7%を数えた。供膳形態は75.9%を占めている。煮沸形態は４%にすぎない。太平寺遺跡[10]の茶黒色粘質土及び、落ち込みの組成は、須恵器が47%を占め供膳形態が34%を占めている。煮沸形態は15%である。次に深田遺跡[11]のＳＤ１出土土器について見ると、須恵器が67%を占め、供膳形態が 168点で26.5%を数え、煮沸形態が18.7%を占めていた。いずれも不明その他は除外して数えている。河内の集落遺跡の代表として、船橋遺跡[12]０地区Ⅳ層・Ⅴ層の遺物につ

いて見ておくと、須恵器と土師器の割合はほぼ３対７で、５世紀後半代のほうがやや須恵器の比率が高い。供膳形態は35～40％であった。

このように見てくると、ＳＤＮ２の須恵器の比率の高さは和泉の一般的動向の中に納まるとしても、供膳形態の豊富さと、煮沸形態の稀少さが目立つと言える。船橋遺跡の例では供膳形態40％、煮沸形態35％の比率で、ＳＤＮ２の４％や、太平寺遺跡の13％、深田遺跡の14～18％はやや少量に過ぎるようである。大園遺跡[13]の６世紀後半代の煮沸形態についても18％前後と低率である。先述したように生焼けの中・小形甕を煮沸用に使用した可能性を考えておく。

Ｅ　６世紀後半の土器群

まずＳＤＡ２から述べると、供膳形態（坏・坏蓋を一組として）が約40％、貯蔵形態が約50％で、煮沸形態は10％にすぎない。更に甕・壺類の編年を明確にし、器種構成も法量別にとらえ直す必要性を感じた。第33表はその他の遺物を省略しているが、ＳＤＮ２に関しては供膳形態が圧倒的に多く、煮沸形態の少なさが目立った。複数時期の遺物を含む遺構内出土遺物の宿命かもしれないが、集落の一般的な生活形態が直接投棄されたとは考えられない様相であった。

第33表　遺構別器種組成数量表

		坏	坏蓋	高坏	器台	埦	大甕	甕	壺	小計	比率	供膳	貯蔵	煮沸	計
ＳＤＡ２	須恵器	50	34	15	3	6	1	45	40	194	89.8％	68	92	(20)	217
	土師器	2		1				(20)		23	10.2％	(37.7％)	(51.1％)	(11.1％)	
ＳＤＮ２	須恵器	230	160	62	30	12	15	54	34	597	98.3％	320	115	(10)	607
	土師器							(10)		(10)	1.7％	(71.9％)	(25.8％)	(2.2％)	

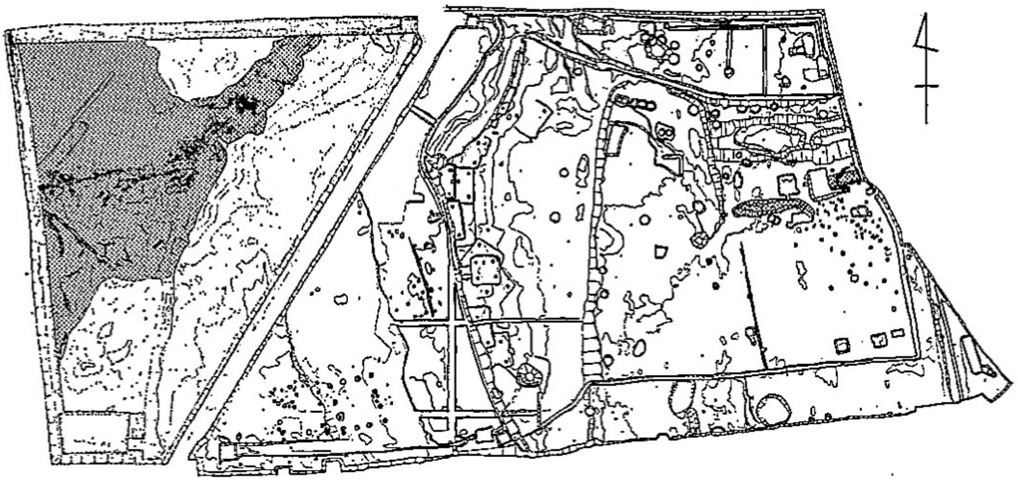
Ｆ　７世紀後半から８世紀前半代の土器群（ＳＤＡ２上層）

ＳＤＡ２上層の器種構成は、供膳形態が80点前後で、壺類に長頸壺・短頸壺・耳付壺・平瓮・無頸壺が増えるが、貯蔵形態は、壺が約10点、甕が約20点ほどで土師器甕は矢張、少量である。船橋遺跡[14]では、供膳形態須恵器、土師器、合わせて1200点を数え、貯蔵形態約 400点、煮沸形態約 600点を数え、圧倒的な遺物量の差が窺える。依然として供膳が多く、煮沸が少ない。

Ｇ　８世紀後半代の土器群

ＳＤＮ２では供膳形態・約 300点、貯蔵形態・約40点、煮沸形態・約50点、製塩土器・約30点を数えた。ＳＤＡ２上層から比べると、土師器が増加し、貯蔵形態が減少しつつある。船橋遺跡では、古墳時代中期に供膳と煮沸の割合がほぼ同数であったものが、奈良時代には２対１の割合に供膳形態が増加している。和泉北部地域では、古墳時代中期において、供膳と煮沸がほぼ２対１であった太平寺・深田遺跡と、20対１の西浦橋遺跡が見られ、古墳時代後期のＳＤＡ２では４対１、ＳＤＮ２では35対１と差がひらき、８世紀前半、ＳＤＡ２上層で８対１、ＳＤＮ２上層で５対１位に縮まってくる。出土地点の性格にもより、曖昧な数字を提示して比較しても始まらないが、資料を示すことによって、特殊か普遍かを判断する材料にもなり得るであろう。

れ、約1000本の矢板材が打設されたのであった。岸辺から長さ４～５ｍの丸木材を投入し、１ｍおきに丸杭により固定された二段重ねの柵は更に幅10cm前後の矢板材により補強され、水位を約１ｍ上昇させうる構造にする。勿論、導水路となるＳＤＡ１がすでに開削され、水量調節用の杭が打たれ、溜水施設もつくられている。洪積段丘面と交差するポイントは、幾重にも杭列を打設し、水取口を確保している。こうして築かれた柵がどの程度の規模の共同体により維持管理され、どの程度の水田面積を潤す水量が得られたのかは不明である。しかし構築の主体はそれ程多くは望めない。つまり、1000本以上の杭はほぼ同種の樹木であり、樹令数100年の大木を利用すれば、数本で材料は得られるのである。古照遺跡等[15)]で見られる丸太杭の場合は、ほぼ似た長さ、太さの樹木を数多く集めなければならない。土盛工程も加わり比較的大きな集団の統御された行動が必要であろう。次に水田位置については、石庖丁の出土や溜水施設の位置からさほど遠く離れていないと考えられる事、実際の集落が数少なく、方形周溝墓も10基前後で共同体成員は20人程度と考えられる事があげられる。しかし和田川支流にもっと井柵が設けられ、それぞれが有機的に関連し結合していた可能性が全くない訳ではない。和田川を更に遡ると川幅が狭くなり、蛇行も小規模なものとなる。こうした言わば急流にあたる地点の丘陵上に銅鐸[16)]が埋納されていたのである。和田川水系の水源を守る祭祀が行なわれた可能性は高く、その場合、和田川流域に存在する共同体の代表者が参加する事は充分考えられる。今後の資料の増加に期待する。

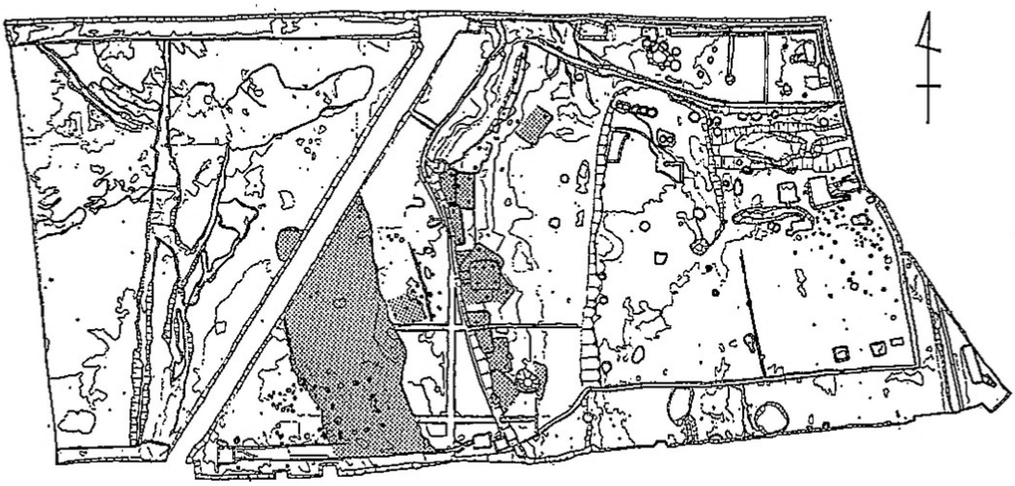


第63図　遺構変遷図（Ｉ）弥生時代

弥生中期後半から古墳時代

この時期、井柵は埋没し、段丘上の集落も急速に衰退し、移動する。鈴の宮遺跡[17)]や万崎池遺跡、信太寺遺跡[18)]、菱木下遺跡においてもその傾向は否めない。古墳時代前期まで、西浦橋遺跡に明確な遺物・遺構はない。古墳時代中葉の古式須恵器の段階からしだいに遺構・遺物が検出され、はじめ、５世紀後半の段階で竪穴住居が２棟｛4、10｝出現し、５世紀末から６世紀前半にかけて、｛（2→3）・6｝→｛倉・1・（8→7）・11｝と建て替えられる現象が起こった。遺構は削

平が激しく、遺物も少量で、若干建物が多すぎるきらいもあるが、ＳＤＮ２内の遺物量や、地形の著しい改変を考慮すれば、存在自体は否定されるものではない。これらの竪穴住居跡はＳＤＮ２が南南東方向に延び、菱木集落へ続く東側段丘崖に更に検出される可能性が強い。沖積段丘の



第64図　遺構変遷図（Ⅱ）古墳時代

溝と相俟って新たな和田川流域開発の集団が選地したものであろうか。６世紀後半以降の展開とも関係するが、住居規模も小さく、建て替えも激しい事から、従属的な性格の村や、非日常的な村である可能性も考えられる。出土遺物は供膳形態が多く、器台が豊富で、製塩土器も出土している。

いずれにしても、対岸の山田遺跡[19]、上流の野々井遺跡[20]、石津川流域の太平寺遺跡、深田遺跡、豊田遺跡[21]等の集落立地・展開・土器組成等との比較検討が急がれる。また陶器山に存在する田園遺跡[22]・辻之遺跡の実態も西浦橋遺跡を理解するうえで不可欠のものである。この時期の須恵器生産[23]は、大野池周辺の窯が、桜池、光明池周辺へと移動し、原山大師周辺と牛石古墳群周辺に窯跡が集まってくる。高蔵寺跡が位置する丘陵では前代からの生産が継続し、次の段階に一旦減少傾向を見せる直前にあたる。

このように当期の西浦橋遺跡の存在は、山田遺跡周辺、大野池周辺の変化、野々井遺跡及び牛石古墳群が立地する丘陵の変化に関係するものと考えられる。

６世紀後半

この時期、再び、竪穴住居群（５・９・12）が出現し、ややおくれて、菱木下遺跡に西接する段丘上にも遺物が多くみられるに至る。ＳＢＫ５他も規模が小さく、供膳形態の占める割合が高い。沖積面は安定度を増し、ほぼ南北に通る溝を掘削し、和田川沖積面及び、埋積谷の開発を一段と安全なものにする働きかけが行なわれたようである。先述したように、大野池周辺の窯は操業の中心を光明池・谷山池に移し、牛石・原山周辺は安定的に生産し、順次谷奥へと進んでいる。野々井、辻之遺跡では大規模な集落が出現し、狭山池周辺に窯跡が増えると言われる時期であり、

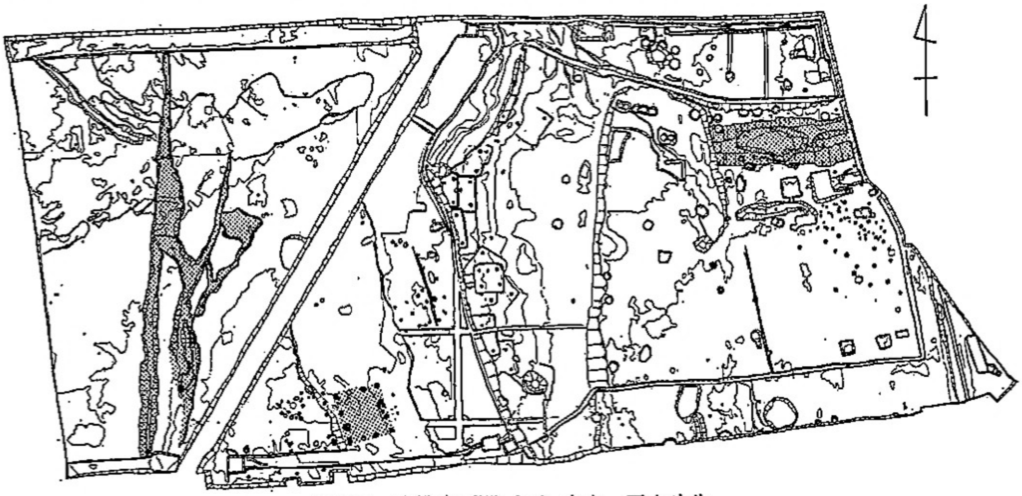
深田遺跡や山田遺跡、豊田遺跡は姿を消している。また桧尾塚原古墳群・山田古墳群・牛石古墳群・陶器千塚古墳群が営まれ、墓制を媒介とした「政治関係」が明確に当地域にも訪れる。その内容は豊富で、個性的である。この時期は、沖積面は開発され、段丘上に集落が集中し、古墳と窯が高位段丘及び丘陵に存在する状況を想定すれば良かろう。こうした状況下における西浦橋遺跡竪穴住居群の存在は前代の内容と、（形態こそ類似するが、）大きく異なると言えよう。中村浩は、須恵器窯に各種の箆記号が焼成され、いくつかの手法の土器がみられる事と、群集墳の存在、更に文献から氏族の復原を通して、中間層を想定し、須恵器生産を官僚的・組織的に把握する試みを行っている[24)]。しかしその根拠となる箆記号、群集墳、文献記録との関連性は稀薄であり、「中間層出現の契機・よって立つ基盤・存続時期・内容・性格・以後の消長」等々課題は多い。6世紀後半に規程される以前は二本木山古墳や黄金塚古墳の被葬者との関係はどのようなもので、6世紀後半以降消滅する辻之、菱木下・西浦橋・野々井遺跡の集落支配者は何処へ繋がってゆくのであろうか。転々と移動する集団を純粋に制度的・政治的に把握し得たのであろうか。

7世紀初頭から後半

この時期にかけて再び閑散とした遺跡の風景が訪れる。菱木下遺跡に近接する洪積段丘上には若干の遺物散布も見られるが、7世紀後半代まで大きな変化はなかった。これは「陶邑」の研究の中でもよく取りあげられる7世紀初頭の窯跡の激減に関係するのか不明である。西浦橋遺跡の南方に続く栂・美木多丘陵地区では著しい窯跡の減少はなく、他地区に比べれば漸減である。周辺の遺跡を見ても、7世紀前半から中葉にかけて展開する遺跡は池田寺遺跡・野々井遺跡があげられる程度である。

7世紀後半から8世紀前半

周辺に古代寺院が建立され、窯跡地域では瓦陶兼業窯や平窯が築かれる。当調査区では東端部のＳＤＡ２上層において遺物が多数検出され、菱木下遺跡に再び集落が出現した事を物語っている。西浦橋遺跡に西接する鶴田池東遺跡[25)]ではこの時期の大量の土器が谷の中から出土している。



第65図　遺構変遷図（Ⅲ）奈良・平安時代

８世紀後半代にはＳＤＮ２もほぼ埋没し、平安時代にかけて軟弱な地盤に３間×３間の掘立柱建物が建てられる。沖積面上の包含層から硯や施釉陶器も出土しているが、東方の洪積段丘上に想定される集落からの流出物ではなかろうか。

８世紀後半から平安時代

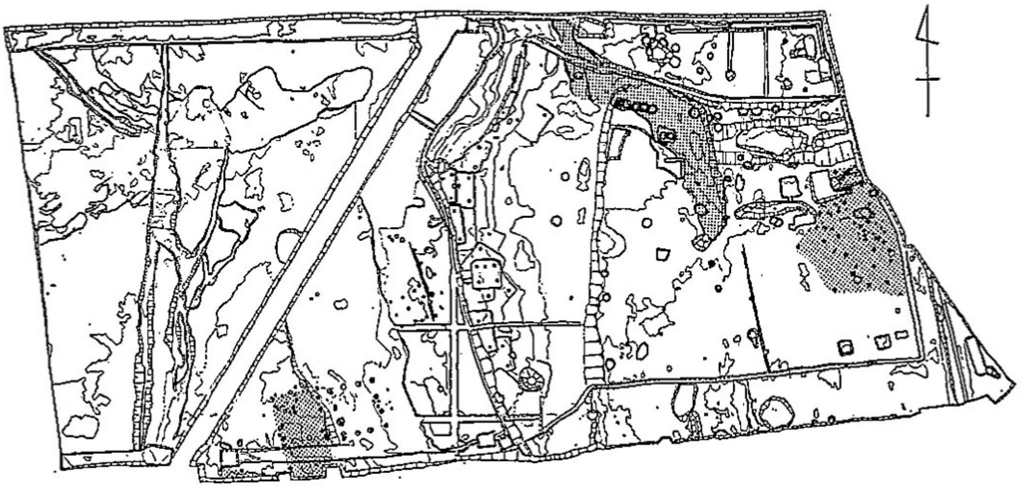
８世紀後半以降・栂・美木多地区に須恵器窯は消える。高蔵寺・陶器山地区もほぼ消滅に近い状態となる。こうした窯跡地域の変容を背景にして、西浦橋遺跡のありかたも若干変化している。須恵器がやや減少し、土師器が漸増してくるのである。圧倒的に生活用具の中心を占めてきた須恵器が平安時代以降皆無の状況を呈するのである。そして、沖積面上の溝も埋没してしまう。

平安後期

この時期に至りようやく本調査区に遺構が掘削される。ここでも建物の柱穴や周辺包含層から出土する瓦片より、鶴田池東遺跡や、菱木下遺跡を本村とする従属的な集落の可能性が窺えた。遺物の内容は包含層内の細片とは言え、泉北段丘地形に位置する集落周辺の典型的なものと考えられた。平安後期から流入する東播系練り鉢は徐々にその数を増し、輸入陶磁器、在地の瓦器、土師器と日常容器の器種を構成する事も判明した。瓦類は陶磁器と伴に沖積段丘面の数個所に投棄されたようである。これらの２次堆積物の分析からも、在地の瓦の形態変化が追求し得、寺院本体の消長を推定する事もできるであろう。

鎌倉・室町期

この時期には鍛冶炉も設けられ、中世農村の風景を呈している。恐らくすでに和田川流域の条里地割が施行され、実際に機能していたであろう。洪積段丘上には土壙が掘削され、ＳＤＡ５が滞水している。徐々にではあるが確実に近世商品生産の前提となる段丘上の畠作の条件が整えられる様子が窺える。



第66図　遺構変遷図（Ⅳ）鎌倉・室町時代

17世紀以降

この時期、洪積段丘上には井戸が開削され、湊焼甕を使用した肥溜が集中して埋められる。湊

焼甕は口縁部内面と底部、体部下半に肥料をくんだひしゃくの使用痕が残っている。

このようにして旧石器から近世、現代の防空濠まで西浦橋遺跡を紹介してくると、西浦橋遺跡における最も主体的な、本来的な、重要性の高い遺物・遺構は弥生中期前半に和田川支流ととり組んだ、西浦橋弥生人の残した榧跡であろう。勿論その他の遺構が重要でないと言う訳ではない。大きく視野を日本全体にひろげて見た時、当調査区の遺構・遺物は如何なる時期のものでも充分比較対照されるに足る資料であると確信する。おしむらくは、報告者の力量不足による誤解と無理解、道路建設による現状の改変、杭列の保護処置の遅れ等、遺跡の責任外の現代人の側の問題が多数残されている事である。

註

1） 嶋倉巳三郎氏の御教示による。
2） 広瀬和雄「小島東遺跡発掘調査概要」 1978による脚台Ⅳ式である。
3） 国乘和雄他「田山遺跡」 大阪文化財センター 1983
4） 註3 P.58 第57図 に似る。
5） 貝塚市内及び大鳥郡周辺に多く出土している。「摂河泉文化資料」 5号
6） 渡辺昌宏他「淡輪遺跡発掘調査概要Ⅲ」 1981
渡辺・芝野他「池上遺跡発掘調査概要Ⅻ」 1980
7） 何らかの祭祀行為の痕跡を考えたい。
8） 田辺編年ＴＫ73～ＴＫ216併行期 田辺昭三「陶邑古窯趾群Ⅰ」 1966
9） 田辺編年ＴＫ47併行
10) p. 731 参照。
11) 中村 浩「陶邑・深田」「大阪府文化財調査抄報」 第２輯 1973 P.11
12) 田辺・原口・田中・佐原「船橋Ⅱ」 1962 出土遺物観察表より作成
13) 広瀬和雄「付２、６世紀後半における集落出土土器の２・３の分析」「大園遺跡発掘調査概要Ⅵ」 1981
14) 原口正三「船橋Ⅰ」 1962
15) 古照遺跡調査団編「古照遺跡」松山市文化財調査報告書Ⅴ 1974
16) 梅原末治「銅鐸に関する若干の新知見」「考古学雑誌」31巻５号・突線紐式銅鐸
17) 堺市教委北野俊明氏の御教示による。
18) 大阪府教委広瀬和雄氏の御教示による。
19) 泉大津高校編「和泉考古学」 1960
20) 中村 浩「陶邑Ⅱ」 1977
21) 大阪府教委奥 和之氏の御教示による。
22) 堺市教委石田 修氏の御教示による。
23) 大阪府教委「陶邑Ⅰ～Ⅴ」 1976～1982
24) 中村 浩「陶邑古窯跡群の検討」「古代を考える」 4号
25) 芝野圭之助「西浦橋・鶴田他遺跡発掘調査概要」 1980
堺市教委による鈴の宮遺跡の調査・翁橋遺跡・深井清水町遺跡の調査等では８世紀前半から中葉の段階で須恵器が少量で土師器が多く出土している。金岡遺跡では須恵器出土の割合が多いようである。いずれにしても、鶴田池東・西浦橋・信太寺・池田寺等で出土する須恵器量の多さと区別されるところである。今後府中・和泉寺周辺の須恵器出土のありかたが判明すれば、遺跡の性格等について論及し得よう。

付、西浦橋遺跡第Ⅱ調査区出土遺物観察表

凡　例

1．法量については、(　)内残存値、推：推定値、復：復原値、高：器高、残存：破片の残存値を示し、口、胴、基、底などは径を示す。

2．胎土には長石、石英、チャート、くさり礫砂粒を主に含むが、それ以外の特徴的な砂粒を記入した。砂粒は大きさにより、大＞5㎜、2㎜＜中≦5㎜、0.5＜細≦2㎜、微≦0.5㎜とした。

旧石器～弥生時代の石器

図番号	図版番号	種　類	遺構・地区・層位	長・幅・厚(cm)　重量	備　考（石材・その他）
16－1	126－1	ナイフ形石器	R64-c4　灰色礫	3.2 × 1.70×0.8　5 g	サヌカイト。風化の著しい石器。
2	2	ナイフ形石器	SDN2　T63-b4　茶黒色土	3.0 × 1.42×0.7　2.64 g	〃
3	5	石　鏃	T63-d1　暗灰色粘質土	2.6 × 2.2 ×0.3　1.43 g	〃
4	3	石　鏃	SDN2　S64-c3	2.2 × 1.67×0.3　0.64 g	〃　縄文時代。
5	4	石　鏃	S61-b4　黒褐色粘質土	2.1 × 1.7 ×0.4　0.71 g	〃
6	6	石　鏃	T63-d1　暗灰色粘質土	1.4 × 1.5 ×0.35　4.86 g	〃
7	7	石　鏃	SBK10　茶灰色粘質土	1.8 × 1.05×0.25　0.36 g	〃
8	8	石　鏃	S63-b3　暗灰色粘質土	1.9 × 1.1 ×0.3　0.547 g	〃
9	13	石　鏃	R62-d2　茶灰色粘質土	3.2 × 1.68×0.4　2.07 g	〃
10	12	石　鏃	R65-c2　茶灰色粘質土	4.5 × 1.42×0.65　3.72 g	〃
11	10	石　錐	SDA2　S61-b1　茶灰色砂質土	3.4 × 1.58×0.7　2.64 g	〃
12	9	石　錐	SDA2　S61-b2　茶黒色砂質土	4.6 × 2.3 ×0.8　5.21 g	〃
13	11	石　錐	表採	2.9 × 0.82×0.4　0.86 g	〃
14	14	石　鏃	S65-c4　茶灰色土	4.1 × 2.4 ×0.6　5.5 g	〃
15	17	不定形石器	SX1	5.0 × 4.9 ×0.85　20 g	〃
16	15	石鏃未成品？	S61-b2　茶灰色粘質土	4.1 × 1.82×0.8　5.86 g	〃
17	16	不定形石器	SX1	3.7 × 7.3 ×0.75　23.71 g	〃

旧石器

図番号	図版番号	種　類	遺構・地区・層位	長・幅・厚(cm)　重量	備　考（石材・その他）
17－1	127－1	翼状剥片	S63-a4　暗茶色土	3.0 × 7.15×0.95　19.5 g	サヌカイト。
2	4	剥　片	R65-c4　茶灰色土	(3.05)×(3.4)×1.2　11.64 g	チャート。
3	2	石　核	S63-c2　黄灰色粘質土	5.5 × 8.2 ×1.2　73.64 g	サヌカイト。
4	3	石　核	SDA4　S64-b1・4	5.3 × 6.5 ×1.45　57.7 g	〃
5	5	石　核	T63-d2　黄灰色砂礫土	8.1 ×12.33×2.7　289.7 g	〃

縄文・弥生式土器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺構・地区・層位	法　量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
18－1	128－9	縄文式土器	甕	SX1	復口28.0、高(12.3)	(外)横ナデのち凸帯。(内)擦痕のち横ナデ。すす付着。	金雲母・片岩(少)、淡黄色
2	6	縄文式土器	甕	S65-c3　茶灰色土	復口21.8、高(5.2)	(外・内)ナデ。(口)刻み目凸帯。	砂粒(含)、にぶい黄橙色
3	7	縄文式土器	甕	SX1	高(4.2)	(外・内)ナデ。(口)刻み目凸帯。	角閃石・雲母、暗茶褐色
4	10	縄文式土器	甕	T65-c1　青灰色粘土上面	復口28.6、復体31、高(21.7)	(外・内)ナデ後凸帯はりつけ後刻み目。(外体下)擦痕。	砂粒(含)、黒褐色、スス付
5	3	縄文式土器	深鉢	SDN1　S64-d4	推口21.0、高(5.4)	(外)凹線。(内)ナデ。	雲母・砂粒(含)、灰褐色
6	1	縄文式土器	深鉢	表採	推口25.2、高(5.2)	(外)凹線。(内)ナデ。(口上面)凹線。	角閃石・雲母、黒褐色
7	2	縄文式土器	深鉢	S64-c2　黒灰色粘土	推口28.8、高(4.0)	(外)縄文。(内)ナデ。(口)突起。	砂粒(含)、にぶい褐色
8	5	縄文式土器	鉢	S64-c2　黒灰色粘土	残存最大径7.2、高(3.3)	(外)縄文。(内)ナデ？	砂粒(含)、黒褐色
9	4	縄文式土器	甕	灰褐色土	推口19.2、高(2.7)	(外)ナデ。(内)横ナデ。	砂粒(含)、褐色・黒色、スス付
10	8	縄文式土器	甕	青灰色シルト	復底 6.6、高(2.3)	(外底)削り。(その他・外・内)ナデ。	砂粒(含)、褐色
11	131－17	弥生式土器	壺	SX1　R65-d3　淡青灰色砂礫	復口20.0、高(4.2)	(外)回転ナデ。(内)剥落して調整観察不可能。	粗・砂粒(含)、浅黄色
12	16	弥生式土器	甕	R65-c3　茶淡灰色砂	復口24.4、高(4.9)	(外・内)剥離激しく調整観察不可能。	粗・砂粒(含)、橙色
13	18	弥生式土器	壺	S65-b3　淡灰色砂下面有機質層	高(6.4)	(外)ヘラミガキ。(内)ナデ。	砂粒(含)、黄褐色
14	14	弥生式土器	壺	SX1	復口21.4、高(5.0)	(外・内)回転ナデ。	粗・砂粒(含)、灰白色
15	20	弥生式土器	甕	SDN1	復底 6.8、高(3.5)	(外)指オサエ、ナデ？。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰褐色
16		弥生式土器	壺	S65-a　淡灰色砂層	復底 8.9、高(6.1)	(外体)ヘラミガキ。(外底)ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰黄色
17	128－12	弥生式土器	壺	R65-c2　青灰色砂礫	底 9.8、高(6.3)	(外底)指オサエ後ナデ。(内底)横と斜めのナデ。	粗・緑泥片岩・砂粒(含)、暗褐色

磨製石器

図番号	図版番号	種　類	遺構・地区・層位	長・幅・厚(cm)　重量	備　考（石材・その他）
19－1	126－18	石　斧	S64-c2　茶灰色土	3 × 4.4 ×1.2　23.64 g	砂質片岩（紀ノ川）
2	20	石　斧	SDN2　T64-a3	6.5 × 4.9 ×2.75　107.86 g	砂岩
3	19	柱状片刃石斧	T63-b4　暗灰色粘質土	3.52×(6.4)×1.4　32.71 g	砂質片岩

図番号	図版番号	種　類	遺 構・地 区・層 位	長・幅・厚(cm)　重量	備　考(石材・その他)
19-4	23	石庖丁	S65-c 4　淡灰色砂	4.2 ×14.74×0.7　52.41 g	玄武岩質凝灰岩
5	22	石庖丁	STS 1　S61-b 4　暗紫褐色土	(4.5)×(12.63)×0.75　62.71 g	緑色片岩
6	24	石庖丁	R65-c1,2,3　灰茶色土	6.4×(8.45)×0.8　60.22 g	泥質片岩
7	21	石庖丁未完成品	S65-c 3　灰茶色土	5.5 ×(7.2)×0.9　55.57 g	玄武岩質凝灰岩

SDN 2 出土弥生式土器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺 構・地 区・層 位	法　量(cm)	成 形・調 整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
20-1	131-23	弥生式土器	甕	SDN 2　T64-a 1　茶黒色土	復口39.4、高(2.6)	(外・内)剥離著しく調整観察不可能。	砂粒(含)、明赤褐色、普通
2	21	弥生式土器	甕	SDN 2	復口29.6、高(4.6)	(外・内)剥離著しく調整観察不可能。	砂粒(含)、灰白色、普通
3	22	弥生式土器	甕	SDN 2　S63-d 2　東岸暗灰黒色土	復口26.0、高(2.6)	(外・内)剥離著しく調整観察不可能。	砂粒(含)、灰白色、普通
4	131-24	弥生式土器	甕蓋	SDN 2　S63-d 4、S64-c 3　黒灰色砂礫	底 5.0、高(2.6)	(外・内)剥離著しく調整観察不可能。	砂粒(含)、淡黄色、普通
5	25	弥生式土器	甕蓋	SDN 2　S63-b 4　黒灰色砂礫	底 6.2、高(3.6)	(外・内)剥離著しく調整観察不可能。	砂粒(含)、橙色、普通
6	129-9	弥生式土器	壺	SDN 2	復底 6.4、高(5.7)	(外)回転ナデ。(内)剥離著しく調整観察不可能。	砂粒(含)、橙色、普通
7		弥生式土器	甕	SDN 2　T 63-d 2　黒灰色砂礫	底11.0、高(2.3)	(外・内)剥離著しく調整観察不可能。	砂粒(含)、淡黄色、普通
8	129-10	弥生式土器	甕	SDN 2	復底11.4、高(4.8)	(外・内)剥離著しく調整観察不可能。	砂粒(含)、橙色、普通
9	131-26	弥生式土器	甕	SDN 2　S63-b 4　黒灰色砂礫	底 9.6、高(3.8)	(外・内)剥離著しく調整観察不可能。	砂粒(含)、浅黄橙色、普通
10		弥生式土器	甕	SDN 2　T63-b 2　黒灰色砂礫	復底 7.4、高(9.5)	(外・内)剥離著しく調整観察不可能。	砂粒(含)、淡黄色、普通

SDA 2 出土弥生式土器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺 構・地 区・層 位	法　量(cm)	成 形・調 整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
21-1	130-1	弥生式土器	壺	SDA 2　最下層	復口23.6、高(3.6)	(外)ナデ。(内)調整不明。	角閃石・砂粒(含)、黄褐色、普通
2	2	弥生式土器	甕	SDA 2　S61-a 2　茶黒色砂質土	復口20.4、高(5.7)、復基18.0	(外)ナデorハケ。(内)剥落して不明。	緑泥片岩、橙色、普通
3	131-8	弥生式土器	壺	SDA 2	底 4.4、高(2.8)	(外)指オサエ。(内)ナデ?。(外底)調整不明。	砂粒(含)、橙色、普通
4	9	弥生式土器	壺	SDA 2　茶灰色砂質土	復底 4.7、高(2.8)	(外・内)ナデ。	粗・砂粒(含)、にぶい黄橙色、普通
5	10	弥生式土器	壺	SDA 2　茶灰色砂質土	底 6.9、高(2.4)	(外・内)ナデ。	粗・片岩、黄橙色、普通
6	130-4	弥生式土器	壺	SDA 2　R61-c 4　最下層　淡黄灰色砂質土	底 6.4、高(2.9)	(外)回転ナデ。(内)指オサエ後ナデ。	片岩・砂粒(含)、にぶい橙色、普通
7	3	弥生式土器	壺	SDA 2　茶黒色砂質土	底12.0、高(4.0)	ナデ?	粗・砂粒(含)、にぶい橙色、普通
8	131-11	弥生式土器	壺	SDA 2　R61-d 4　最下層	復底 7.4、高(2.4)	剥離激しく調整不明。	砂粒(含)、黄橙色、普通
9	13	弥生式土器	壺	SDA 2　S61-a 2　茶黒色砂質土	復底20.4、高(5.7)	ナデ?	砂粒(含)、橙色、普通
10	12	弥生式土器	壺	SDA 2　R 61-d 4　最下層　淡黄灰色砂質土	底 5.3、高(3.2)	(外・内)ナデ?	粗・砂粒(含)、にぶい橙色、普通

SDN 1 出土土器・その他

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺 構・地 区・層 位	法　量(cm)	成 形・調 整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
22-1	129-1	弥生式土器	ミニチュア土器	S64-b2.4　茶褐色礫	口 3.6、体 6.0、高 6.8	(外口・外体上)ナデ。(外体下)指オサエ。(内)指ナデ。	砂粒(含)、にぶい橙色、普通
2	2	弥生式土器	ミニチュア土器	S64-b2.4　茶褐色礫	口 5.5、高 2.9	(外)ナデ。(内)指オサエ。	雲母・砂粒(含)、にぶい橙色、普通
3	6	弥生式土器	無頸壺	SDN 1　灰色砂質土	口6.7、底4.4、体12.1、高 8.7	(外口)凹線。(外体)五段の簾状文。(外体下)ヘラミガキ。(内)ナデ。	粗、淡黄色、普通
4	7	弥生式土器	水指形土器	SDN 1　S65-a 4	復口 7.9、底 5.0、高 21.0	(外)ヘラミガキ、平行線文、波状文。(内)ナデ、把手接合部、指オサエ。	砂粒(多)、淡黄色、普通
5		弥生式土器	壺	R64-d 3　灰色砂礫下	復口 9.0、高(3.6)	(外・内)回転ナデ。	粗・砂粒(含)、淡黄色、普通
6	131-1	弥生式土器	無頸壺	S64-b2.4　茶褐色礫	復口15.0、高(4.2)	(外)回転ナデ、櫛描平行線文。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、にぶい橙色、普通
7	5	弥生式土器	甕	R 64-d3	復口16.6、高(2.5)	(外・内)回転ナデ。	粗・砂粒(含)、浅黄橙色、普通
8	6	弥生式土器	甕	S62-a 4　茶灰色土	復口53.3、高(3.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、赤橙色、普通
9	4	弥生式土器	甕	S64-b 4　淡灰色砂	復口20.4、復基20.2、高(6.5)	(外)剥離し調整不明。(内口)ナデ。(内胴)指オサエ、粘土つぎめ。	粗・金雲母・砂粒(含)、浅黄橙色、普通
10	3	弥生式土器	甕	S64-b2.4　淡灰色砂	復口15.0、復基13.2、高(2.9)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰褐色、普通
11	2	弥生式土器	甕	S64-b2.4　茶褐色礫	復口11.3、復基9.4、高(2.75)	(外・内)ナデ。(内体)削り。	やや粗・片岩・砂粒(含)、褐色、普通
12	129-3	弥生式土器	壺蓋	SDN 1　R 65-c 3	底 5.0、高(3.5)	(外)ヘラ削り、指オサエ、ナデ。(内)指オサエ、ナデ。	砂粒(含)、にぶい橙色、普通
13		弥生式土器	壺	R65-c 3　茶灰色砂質土	復底 8.8、体(38.0)、高(17.5)	(外・内)剥離し調整不明。(外体)ヘラ削り後ナデ。(外底)ナデ。	砂粒(含)、淡黄色、普通
14	131-7	弥生式土器	甕	SDN 1　S64-d 4	底 6.2、高(4.0)	(外)指オサエ。(内)指オサエ。	砂粒(含)、淡黄色、普通　(外)黒斑

弥生式土器および木器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺 構・地 区・層 位	法　量(cm)	成 形・調 整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
23-1	128-11	弥生式土器	壺	SX 1　S63-c 2	復口24.7、高(10.0)	(外・内)ヘラミガキ、剥落顕著。(外)平行線文。(内)指オサエ。	砂粒(含)、暗灰黄色、普通
2	131-15	弥生式土器	壺	SX 1	推残存最大径18.4、高(8.4)	(外)ナデ後櫛描平行線文。(内)縦ナデ。	粗・砂粒(含)、黒褐色・淡黄色、普通
3	129-8	弥生式土器	甕	SDN 1　S64-d 2	復底 9.0、高(8.9)	(外)ナデ後ヘラミガキ。(内底)指オサエ。(内体)回転ナデ。	砂粒(含)、黄色、堅緻

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
23-4	131-19	弥生式土器	壺	SDN1 R64-c2	復底 8.4、高(4.5)	(外)ヘラミガキ。(内)剥離激しく調整観察不能。	砂粒(含)、浅黄橙色、普通
5		弥生式土器	壺	SDN1 S64-d2	復底 8.7、高(5.6)	(外・内)剥離激しく調整観察不可能、ナデ?	粗・砂粒(含)、淡橙褐色、軟質
6		弥生式土器	壺	SX1	推残存最大径24.8、高(9.4)	(外)ヘラミガキ。(内)ナデ、指オサエ。(断)粘土のつぎめ。	砂粒(含)、黒褐色、普通
7		弥生式土器	壺	SDN2 S65-a1	復底 7.0、高(5.6)	(外体)ヘラミガキ。(外底)ナデ。(内体・内底)ナデ、指オサエ。	粗・砂粒(含)、褐色、普通
8		弥生式土器	甕	SDN2 S64-d2	底 7.7、高(13.3)	(外・内)縦ナデ。	片岩(少)、黄橙色、普通
9		木器	杭	SDN2 S65-b3	長13.2、幅11.0、厚 1.5	(板杭頭部)偏平に割りとられた後平滑にする。	
10		木器	杭	SDN2 S65-b3	長17.0、幅 5.0、厚 2.4	(板杭先端部)偏平な素材を面取りする。	
11		木器	鍬	SX1	残長19.9、枘孔(縦3.5、横2.5)	鍬身の四周が欠損している。全体に腐蝕が著しい。	着柄角度75°

包含層出土古式須恵器他

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
25-1	132-8	須恵器	甕	R65-d1 紫灰色粘土	復口36.0、高(4.1)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、堅緻
2	7	須恵器	甕	S63-b1 暗灰色粘質土	復口33.6、高(2.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、堅緻
3	9	須恵器	甕	T65-d1 茶灰色土	復口46.0、高(6.6)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、堅緻
4	12	須恵器	甕	S65-a2 茶灰色土	高(7.5)	(外)細格子、叩キ。(内)ナデ。	砂粒(含)、緑灰色、堅緻
5	11	須恵器	甕	SDA2 S61-b2 茶黒色砂質土	高(10.7)	(外)細格子、叩キ。(内)ナデ。	砂粒(含)、暗青灰色、堅緻
6	10	須恵器	甕	T65-a1~南 暗灰色粘質土	高(5.8)	(外)細格子、叩キ。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰赤色、堅緻
7	20	須恵器	器台	T65-a3 茶灰色土	復口37.6、高(3.7)	(外)回転ナデ、わずかに波状文。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
8	21	須恵器	器台	T65-a1 茶灰色土	復口40.1、高(4.4)	(外)回転ナデ、波状文。(内)回転ナデ。	密・砂粒(中)、灰白色、中心部生焼
9	22	須恵器	器台	T64-a3 茶黒色土	復口30.6、高(4.2)	(外)回転ナデ、カキメのち波状文。(内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、青灰色、普通
10	24	須恵器	器台	S64-a1 暗灰色粘質土	高(8.0)	(外)回転ナデ、波状文。波状文のちナデ。(内)回転ナデ、すかし。	精良・砂粒(含)、暗赤褐色、普通
11	23	須恵器	器台	T65-a3 茶灰色土	復口27.0、高(15.5)	(外)回転ナデ、ヘラ描直線文。叩キのちカキメ。(内)回転ナデ、青海波叩キ。	砂粒(細)、暗緑色、普通
12		須恵器	器台	R63-d3 灰白色礫	復口21.6、高(5.3)	(外)文様区画帯、ヘラ描平行線。(内)回転ナデ。	砂粒(中)、青灰色、普通
13	138-8	須恵器	器台	T63-d1 茶黒色土・茶灰色土	高(9.0)	(外口)ヘラ描斜行文。(外坏底)擬格子叩キ。(内坏底)同心円叩キ。	砂粒(含)、暗青灰色、普通
14	10	須恵器	甕	茶灰色土	復口22.4、高(5.2)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
15	9	須恵器	甕	T63-d1 茶黒色土・茶灰色土	復口19.0、高(6.5)	(外)回転ナデ、カキメのち叩キ。(内)回転ナデ、粘土つぎめ。	砂粒(中)、灰白色、生焼
16		須恵器	甕	R64-d3 茶灰色土	復口19.6、高(4.8)	(外)回転ナデ、叩キ。(内)回転ナデ、粘土つぎめ。	砂粒(中)、暗青灰色、普通

包含層出土須恵器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
26-1	132-15	須恵器	坏蓋	S65-a4 茶灰色土	復口12.4、高(4.1)	(外天上)ヘラ削り。(外口)波状文。回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通、表面に鉄分
2	14	須恵器	壺蓋	T63-d1 茶黒色土	推口11.4、高(3.0)	(外)櫛描圏線の上下に櫛描列点文、ヘラ削りのちナデ。(内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、青灰色、普通
3	16	須恵器	小壺or蛸壺	S65-c1	復口 3.2、高(2.3)	(外・内)回転ナデ。	やや粗・砂粒(含)、青灰色、やや堅緻
4	・19	須恵器	壺蓋?	S64-b4 灰褐色粘質土	復口 9.5、高(6.1)	(外天)ヘラ削りのちナデ。(外口)回転ナデ。(内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、暗青灰色、普通
5		須恵器	坏蓋	T63-d2 茶褐色土	口11.6、高(4.95)	(外)ヘラ削り(ろくろは右回り)、回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(細)、灰白色、堅緻
6	138-1	須恵器	坏蓋	T65-c1	口13.6、高 4.5	(外)ヘラ削りのちナデ(ろくろは右回り)、回転ナデ。(内)回転ナデ、同心円叩キのちナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
7		須恵器	坏蓋	T63-d2 黒灰色砂礫	口10.8、高 4.4	(外)ヘラ削り(ろくろは右回り)、回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(中)、灰白色、生焼
8		須恵器	坏蓋	T63-d1 茶黒色土・茶灰色土	復口12.4、高 4.9	(外)ヘラ削り(ろくろは右回り)、回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(中)、灰色、普通
9	138-2	須恵器	坏蓋	T63-d1 茶褐色土	復口13.0、高(3.9)	(外)ヘラ削り(ろくろは右回り)、回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(細)、灰白色、普通
10		須恵器	坏	T64-b2 黒灰色土	口10.6、高 4.6	(外)回転ナデ、ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、不良
11		須恵器	坏	T64-a3 茶黒色土	推口10.2、高 4.9	(外口・外体上)回転ナデ。(外体下・外底)ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
12	138-3	須恵器	坏	T64-a1 黒灰色土	復口10.5、高(4.6)	(外口・外体上)回転ナデ。(外体下)ヘラ削り(右回り)。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通、自然釉
13		須恵器	坏蓋	T63-d1 茶黒色土・茶灰色土	復口11.0、高 5.1	(外)ヘラ削り(ろくろは左回り)、回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
14	138-4	須恵器	坏蓋	T63-d2 茶黒色土・茶灰色土	口11.5、高 5.3	(外)回転ナデ、ヘラ削り(左回り)。(内)回転ナデ。	砂粒(中・細)、灰色、普通、自然釉
15	5	須恵器	坏蓋	T63-d1 茶黒色土・茶灰色土	口12.1、高 5.2	(外)回転ナデ、ヘラ削り(ろくろは右回り)。(内)回転ナデ。	砂粒(大)、灰色、堅緻
16		須恵器	坏蓋	T63-d1 茶黒色土・茶灰色土	口12.0、高 5.2	(外)回転ナデ、ヘラ削りのちナデ(左回り)。(内)回転ナデ。	砂粒(細)、青灰色、堅緻
17		須恵器	高坏	T63-d1 茶黒色土・茶灰色土	復口 9.6、高 9.0	(外)回転ナデ、ヘラ削り(右回り)。(内)回転ナデ(断)すかし3ケ所。	砂粒(中・細)、灰色、普通
18	138-6	須恵器	高坏	T63-d1 茶黒色土・茶灰色土	口10.4、高 9.6	(外)回転ナデ、ヘラ削り(ろくろは右回り)、カキメ。(内)回転ナデ。(脚)すかし3ケ所。	砂粒(中・細)、灰白色、生焼
19		須恵器	高坏	T63-d2 茶褐色土	復口10.0、高 8.6	(外口)回転ナデ。(外坏体)ヘラ削りのちナデ。(内)回転ナデ、すかし3ケ所。	砂粒(含)、灰黄色、生焼、軟質
20		須恵器	高坏	T63-d2 茶灰色土	復口 8.6、高 8.7	(外)回転ナデ、ヘラ削り。(内)回転ナデ。(断)すかし3ケ所。	砂粒(細)、灰白色、普通
21		須恵器	有蓋高坏	T63-d1 茶黒色土・茶灰色土	復口 9.0、高(4.7)	(外)回転ナデ、ヘラ削り(ろくろは右回り)。(内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、灰白色、生焼

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形・調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
26-22		須恵器	高坏	T63-d 1 茶黒色土・茶灰色土	口10.0、高(4.8)	(外)回転ナデ、ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(細)、青灰色、普通
23		須恵器	高坏	T63-d 2　黒灰色土	高(6.4)	(外)カキメ、粘土つぎめ、回転ナデ。(内)回転ナデ。(脚)すかし3ケ所。	砂粒(含)、灰白色、普通
24	132-13	須恵器	埦	T64-b 2　暗灰色粘質土	高(4.4)	(外)ヘラ削り。(外体下)波状文。(内)回転ナデ。	砂粒(中)、灰白色、生焼
25	18	須恵器	埦	R63-d 3　灰白色礫	復体 9.5、高(3.7)	(外)回転ナデ。(外体中)波状文、叩キ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰白色、不良
26		須恵器	𤭯	SDN 2　黒褐色粘質土	復口10.9、復基 6.8、高(3.9)	(外口)二段の波状文、凸線。(内)ナデ。	砂粒(多)、灰色、自然釉
27		須恵器	𤭯	T63-d 1　茶褐色土	高(7.9)	(外)カキメのちナデ、波状文、カキメ、ヘラ削り。(内)回転ナデ。胴部穿孔。	砂粒(細)、青灰色、普通
28	138-7	須恵器	𤭯	T63-d 1　茶褐色土	高(8.1)	(外)回転ナデのちカキメ、叩キ、ナデのち波状文、ヘラ描沈線。(内)回転ナデ。	砂粒(細)、灰白色、普通
29		須恵器	無蓋高坏	T63-d 2 茶黒色土・茶灰色土	復口12.0、高(4.3)	(外)回転ナデ、ヘラ削り(右回り)、波状文。(内)回転ナデ。	密・砂粒(細)、灰色、普通
30		須恵器	高坏	T63-d 2 茶黒色土・茶灰色土	復口14.0、高(6.1)	(外)回転ナデ、波状文、ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(中・細)、暗灰色、自然釉
31	132-17	須恵器	高坏	S63-b 3　暗灰色粘質土	復底12.1、高(4.9)	(外)回転ナデ。(外脚)カキメのち波状文。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、やや生焼

SDN 2 出土須恵器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形・調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
27-1		須恵器	坏蓋	SDN 2　黒灰色砂礫	復口12.0、高 4.4	(外天上)ヘラ削り(左回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、やや軟
2	133-1	須恵器	坏蓋	SDN 2　暗灰色粘質土	復口11.6、高(4.4)	(外天上)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、自然釉
3		須恵器	坏蓋	SDN 2　T64-c 1	復口11.5、高4.3	(外天上)ヘラ削り(右回り)。(その他外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰赤色・青灰色、普通
4		須恵器	坏蓋	SDN 2　黒褐色粘質土	口11.4、稜10.0、高(4.4)	(外天上)ヘラ削り(右回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
5		須恵器	坏蓋	SDN 2　T63　黒灰色砂礫	復口11.4、高 4.2	(外天上)ヘラ削り(右回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
6	133-2	須恵器	坏蓋	SDN 2 暗灰色粘質土・黒褐色粘質土	復口11.4、高 3.65	(外)回転ヘラ削り(左回り)。(内)回転ナデ。	精良、青灰色、普通
7		須恵器	坏蓋	SDN 2　濃黒茶色土	復口 9.6、高(3.1)	(外天上)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
8		須恵器	坏蓋	SDN 2　淡茶褐色砂質土・暗灰色粘質土	復口15.0、高 4.6	(外天上)ヘラ削り(右回り)。(内中心)横ナデ。(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
9	133-3	須恵器	坏蓋	SDN 2　暗灰色粘質土	復口15.4、高(4.7)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、自然釉
10		須恵器	坏蓋	SDN 2　T63-b 2 茶灰色土・茶黒色土	復口18.6、高(3.7)	(外)カキメ後ナデ。(内)ナデ。	精良、灰色、普通
11	133-4	須恵器	坏蓋	SDN 2	口15.6、高 4.55	(外天上)ヘラ削り(左回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
12		須恵器	坏蓋	SDN 2	復口15.8、高(3.0)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
13		須恵器	坏蓋	SDN 2　T64-c 1 黒灰色粘土	復口13.4、高(3.65)	(外天下)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
14		須恵器	坏蓋	SDN 2　T64-c 1　茶黒色土	復口14.5、高(3.4)	(外天上)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
15		須恵器	坏蓋	SDN 2	復口11.3、高(4.9)	(外天上)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
16	133-5	須恵器	坏	SDN 2	口13.0、高 5.1	(外体下・外底)ヘラ削り。(外底)ヘラ記号。(内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
17	6	須恵器	坏	SDN 2　T64	口10.0、受12.2、高 4.8	(外)ナデ後削り(右回り)。ヘラ記号。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、堅緻
18		須恵器	坏	SDN 2　黒灰色砂礫	復口10.2、高 4.3	(外体)ヘラ削り(右回り)。(その他外・内)回転ナデ。	粗、灰白色、普通、焼歪激、自然釉
19		須恵器	坏	SDN 2　暗灰色粘質土	口10.5、受12.4、高 4.9	(外)ナデ後削り(右回り)。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
20		須恵器	坏	SDN 2 黒褐色粘質土・暗灰色粘質土	復口10.2、高 4.55	(外体下・外底)ヘラ削り(右回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
21	133-7	須恵器	坏	SDN 2	復口10.4、復受15.1、高(4.4)	(外)回転ナデ。(内)叩キ。	砂粒(含)、灰色、普通、自然釉
22		須恵器	坏	SDN 2　T64-a 3 黒灰色粘土	復口13.2、復受15.6、高 4.6	(外体下・外底)ヘラ削り(右回り)。(内底)叩キ。(その他外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
23	133-8	須恵器	坏	SDN 2　茶黒色粘質土	復13.4、復受15.8、高 5.0	(外体下・外底)ヘラ削り(右回り)。(内底)叩キ。(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色・灰黄色、普通
24		須恵器	坏	SDN 2 濃黒茶色土・黒褐色粘質土	復口12.8、復受15.2、高 4.6	(外体下・外底)ヘラ削り(右回り)。(内底)叩キ。(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、自然釉
25		須恵器	坏	SDN 2　T64-c 1 黒灰色粘土	復口13.2、復受15.6、高 4.5	(外体下・外底)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
26		須恵器	坏	SDN 2　S64　茶褐色土	復口13.8、復受15.8、高(2.8)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
27		須恵器	坏	SDN 2　S64-c 1 黒灰色粘土	復口13.4、復受15.4、高 4.2	(外体下・外底)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通、自然釉
28		須恵器	坏	SDN 2　暗灰色粘質土	復口11.6、復受13.5、高(2.8)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
29		須恵器	坏	SDN 2　T63-b 4 茶灰色土・茶黒色土	口13.2、受15.4、高 4.2	(外口)回転ナデ。(外体・外底)ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、生焼ぎみ
30		須恵器	坏	SDN 2　T63-b 2　茶黒色土	復口11.2、復受13.4、高(2.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通、自然釉
31	133-9	須恵器	坏	SDN 2	復口12.6、復受14.6、高 4.2	(外体下・外底)ヘラ削り。(内)仕あげナデ。(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
32	10	須恵器	𤭯	SDN 2　T64・S63 茶黒色土・暗紫灰黒色土	復基 7.0、復体10.9、高(9.4)	(外)カキメ、波状文、叩キ、ヘラ記号。(内)ナデ、指オサエ。	砂粒(含)、灰色、普通
33	11	須恵器	𤭯	SDN 2　暗灰色粘質土	口11.8、基 5.6、高(14.5)	(外)ナデ、波状文。(内)ナデ。(内底)指オサエ。	砂粒(中)、灰色、良好、自然釉

SDN 2 出土須恵器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形・調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
28-1	134-1	須恵器	坏蓋	SDN 2　濃黒茶色土	復口13.3、高 5.8	(外天上)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、淡灰色、良好、自然釉
2		須恵器	坏蓋	SDN 2　黒灰色粘土	復口11.6、つまみ3.2、高 4.8	(外天上)ヘラ削り。(外つまみ・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通、自然釉

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺構・地区・層位	法　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
28－3	134－2	須恵器	坏蓋	SDN 2　T64-c 1	口 5.6、つまみ4.3、高(5.7)	(外天上)ヘラ削り(右回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
4	3	須恵器	坏蓋	SDN 2　黒灰色土	復口14.0、高 4.8	(外天)ヘラ削り。(その他外・内)ナデ。	砂粒(含)、淡灰色、良
5		須恵器	高坏	SDN 2　暗灰色粘質土	口9.6、基5.1、受6.95、高 8.8	(外坏底)ヘラ削り。(その他外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
6	134－4	須恵器	高坏	SDN 2　暗灰色粘質土	復口 9.8、復基 4.7、復底 8.2、高 9.1	(外)ヘラ削り、カキメ。(内)回転ナデ。(脚)すかし(三角形)。	砂粒(含)、灰白色、褐灰色、普通
7		須恵器	高坏	SDN 2　S63・64　黒灰色砂礫	復口10.4、復基 4.8、高 9.0	(外坏底・外脚)カキメ。(その他外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
8	134－5	須恵器	高坏	SDN 2	復口 9.4、高 8.3	(外坏底)ヘラ削り。(外脚)カキメ。(その他)ナデ。	砂粒(含)、淡灰色、普通
9		須恵器	高坏	SDN 2　暗灰色粘質土	基 5.1、底 7.7、高(5.5)	(外坏)ヘラ削り。(脚)ナデ、すかし 3 ケ所。	砂粒(含)、灰白色、生焼
10		須恵器	高坏	SDN 2　T64-c 1　茶黒色土	復基 6.4、復底 7.6、高(4.3)	(外基・外脚最下・内)回転ナデ。(その他外)カキメ。(脚)すかし穴。	砂粒(含)、灰色・灰白色、生焼
11		須恵器	高坏	SDN 2　T63-d 2　青灰色砂質土	復底 4.2、高(3.1)	(外・内)回転ナデ。(脚)すかし穴。	砂粒(含)、灰白色、生焼
12		須恵器	高坏	SDN 2　T63-d 2　青灰色砂質土	復底 9.2、高(3.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、堅緻、自然釉
13	134－6	須恵器	高坏	SDN 2　T63　黒灰色砂礫	口12.8、基 5.2、高 20.0	(外坏体)ヘラ削り。(内坏底)叩キ。(内脚上)しぼり目。(脚)すかし。	砂粒(含)、明青灰色、普通、自然釉
14		須恵器	高坏	SDN 2　T63-d 2　黒灰色砂礫	復口20.4、高(4.2)	(外・内)回転ナデ。(外坏体)波状文。	砂粒(含)、灰色、良好
15		須恵器	高坏	SDN 2　暗灰色粘質土	復口13.4、高(4.8)	(外・内)回転ナデ。(外坏体)波状文。	砂粒(含)、灰白色・緑灰色、普通
16	135－2	須恵器	器台	SDN 2　T63-d 2	復口46.2、高(8.3)	(外坏底)ヘラ削り後カキメ。(外体)波状文。(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
17		須恵器	高坏	SDN 2　T63-b 2　黒灰色砂礫	高(3.5)	(外)ナデ後ヘラ削り、波状文。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
18	134－7	須恵器	高坏	SDN 2　暗灰色粘質土	復口14.7、高 12.2	(外坏底)ヘラ削り後カキメ。(外体)波状文。(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、生焼
19	8	須恵器	高坏	SDN 2　T63-d 2　茶黒色土	復口13.2、高 8.8	(外坏体下)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
20		須恵器	高坏	SDN 2　T63-b 4　黒灰色砂礫	高(2.0)	(外体下)列点文。(外底)ヘラ削り。(外・内)回転ナデ。(脚)すかし。	砂粒(含)、灰白色、普通
21		須恵器	高坏	SDN 2　T64-c 1　黒灰色粘土	復口 9.4、高(3.3)	(外)ナデ、ヘラ削りのちナデ、ヘラ削り。(内)不整ナデ。(脚)すかし。	砂粒(含)、灰色、普通
22		須恵器	高坏	SDN 2　T63-b 4　黒灰色砂礫	復基 3.8、復底 9.1、高(5.8)	(外・内)回転ナデ。すかし(1.5cm)並んでいる。	密・砂粒(含)、灰白色、普通
23		須恵器	無蓋高坏	SDN 2　T64-a 1　黒灰色粘土	口15.4、高(6.0)	(外体下)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。(脚)すかし。	砂粒(含)、灰色、普通
24		須恵器	高坏	SDN 2　T64-a 3	高(4.9)	(外体下)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
25		須恵器	高坏	SDN 2　黒灰色砂礫・灰黒色砂質土	復底14.8、高(4.8)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
26		須恵器	高坏	SDN 2　T63-b 2　黒灰色砂礫	復基 6.0、高(5.5)	(外・内)回転ナデ。(断・基)粘土のつぎ目。すかし 3 ケ所。	砂粒(含)、暗青灰色、普通
27		須恵器	高坏	SDN 2　T63　茶黒色土・黒灰色砂礫	復底11.4、高(11.0)	(外・内)回転ナデ。(脚)すかし。	砂粒(含)灰白色・暗灰色、普通
28		須恵器	高坏	SDN 2　S64-a 3　茶黒色土	復底10.2、高(9.8)	(外・内)回転ナデ。すかし 3 ケ所。	密・砂粒(含)、灰色・青灰色、普通
29	136－2	須恵器	壺	SDN 2	口 9.9、基 5.7、体11.2、高 12.4	(外体下)カキメ、叩キメ。(内底)指オサエ。	砂粒(含)、青灰色、良好、(外・内)被灰
30	1	須恵器	𤭯	SDN 2　T63-b 2　黒灰色砂礫	推口13.1、復基 6.8、体11.4	(外頸)波状文。(外体下)叩キ。(内底)指オサエ。(外・内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通、自然釉

SDN 2 出土須恵器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺構・地区・層位	法　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
29－1	132－3	須恵器	壺	SDN 2　T63　黒灰色砂礫・茶黒色土・暗灰色粘質土	復口17.8、高(4.5)	(外口唇)回転ナデ。(外頸)カキメのち波状文。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、暗青灰色、普通
2	1	須恵器	甕	SDN 2　S63-d 4　暗灰黒色土	復口21.8、高(4.55)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、明オリーブ灰色、普通
3	135－1	須恵器	壺	SDN 2　T64　黒灰色粘土・茶灰色土	復口14.8、高 17.5	(外体上)叩キのちナデ。(外体下)擬格子叩キ。(内下)指オサエ。	砂粒(含)、灰赤色・暗青灰色、良好
4		須恵器	甕	SDN 2　S64-c 3・4　茶黒色土	復口19、高(6.6)	(外)回転ナデ。(外・肩)平行叩キメ。(内)回転ナデ。(内・肩)同心円叩キ。	砂粒(含)、灰色、普通
5	136－4	須恵器	甕	SDN 2　T63　黒灰色砂礫・黒褐色粘質土	復口21.0、高(10.2)	(外)カキメのちナデ、平行叩キのちカキメ。(内)同心円叩キ、回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
6	132－2	須恵器	甕	SDN 2　T64-a 3　茶黒色土	復口14.2、高(2.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰褐色、普通
7	4	須恵器	甕	SDN 2　T63-b 2　黒灰色砂礫	復口13.8、高(4.7)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、赤褐色、普通
8		須恵器	甕	SDN 2　T64-a 4　茶黒色土	復口21.35、高(5.1)	(外・内)回転ナデ。(外基)叩キメ。	砂粒(含)、緑灰色、普通
9	132－6	須恵器	甕	SDN 2　黒灰色土	復口13.2、高(3.88)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
10	136－3	須恵器	甕	SDN 2　T63・64　茶黒色土・黒灰色粘土	復口19.4、高(7.45)	(外)擬格子叩キのちカキメ、ナデ。(内)同心円叩キ、ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
11		須恵器	甕	SDN 2　S63-d 4　茶褐色土	復口22.6、高(5.0)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
12		須恵器	甕	SDN 2　T63-b 2　上面	復口20.4、高(5.2)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
13	136－5	須恵器	甕	SDN 2　T63-d 2　青灰色砂質土	復口20.6、高(15.0)	(外体)カキメのち擬格子叩キ。(内体)同心円叩キ。(その他)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
14	132－5	須恵器	甕	SDN 2　T63-b 2　黒灰色砂礫	復口21.4、高(4.0)	(外・内)回転ナデ。(外頸)カキメ。	砂粒(含)、灰白色、普通
15		須恵器	甕	SDN 2　T63-d 2　黒灰色砂礫	復口17.2、高(5.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、淡黄色、生焼
16		須恵器	甕	SDN 2　S63・64　黒灰色砂礫	復口18.0、高(4.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、紫灰色、普通、釉
17		須恵器	甕	SDN 2　T63-d 2　茶黒色土	復口26.6、高(8.55)	(外)肩部平行叩キ。(外その他)回転ナデ。(内)同心円叩キ。(内その他)ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通、釉
18		須恵器	甕	SDN 2　S64-c 3　茶黒色土	復口20.2、高(3.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰黄褐色、普通

SDN 2 出土須恵器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
30 - 1	146-17	須恵器	壺蓋	SDN 2	復口 9.4、高(2.8)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
2	16	須恵器	坏蓋	SDN 2　暗灰色粘質土	復口 9.7、高(2.0)	(外・内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、褐灰色、生焼
3	137-1	須恵器	把手付埦	SDN 2　T63　黒灰色砂礫・茶黒色土	口 7.4、底 5.3、高 4.55	(外体下・外底)ヘラ削り(左回り)。(内底)未調整。(その他)回転ナデ。	砂粒(含)、緑灰色、普通
4	146-20	須恵器	壺	SDN 2　T63-b 4　茶黒色土	復口 5.4、復基 5.0、高(3.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、浅黄橙色、生焼
5	18	須恵器	蛸壺	SDN 2　T64-a 2　茶黒色土	穴径(縦0.9、横1.1)、高(4.5)	(紐上)粘土付着。(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰黄色、生焼
6	22	須恵器	壺	SDN 2　S63　上面	復口13.4、高(6.0)	(外口)ヘラ描直線文。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
7	21	須恵器	壺	SDN 2　S64-c 3　茶灰色土・茶黒色土	復口11.8、高(5.1)	(外・内)回転ナデ。(内口)粘土のつぎめ。	砂粒(含)、灰白色、普通
8	137-3	須恵器	𤭯	SDN 2　S64-c 1　黒灰色粘土	復基 3.6、体 9.1、高(12.7)	(外体下)ヘラ削り(左回り)。(内肩)シボリメ。(その他)ナデ。	砂粒(含)、灰色、堅緻
9	4	須恵器	壺	SDN 2　T63　茶黒色土・黒灰色砂礫	口16.4、基 8.4、高(9.5)	(外頸上)カキメ後ナデ後ヘラ描直線文。(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
10		須恵器	壺	SDN 2　S63・64　上面茶褐色土	復口12.0、高(6.4)	(外)カキメ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
11	137-2	須恵器	提瓶	SDN 2　茶黒色土・黒灰色砂礫	復基 6.2、高(9.1)	(外肩)ヘラ削り。(外体下・外頸)カキメ。(内基)指オサエ。	砂粒(含)、暗青灰色、良好
12	5	須恵器	壺	SDN 2　T63　黒灰色砂礫・黒灰色土	口 9.7、高 15.2	(外体下・外底)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
13	146-19	須恵器	壺	SDN 2　暗灰色粘質土	復口12.6、基11.1、高(2.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、淡緑灰色、生焼
14	137-6	須恵器	壺	SDN 2　黒灰色砂礫・黒灰色粘土	復口12.6、推高21.8	(外頸・外肩)カキメ。(外底)平行叩キ。(内底)同心円叩キ。	砂粒(含)、灰色、普通
15	8	須恵器	甑	SDN 2　黒灰色砂礫・暗灰色粘質土	推底15.6、高(19.7)	(外)平行叩キ後カキメ。(内)叩キ後ナデ。(底)ヘラ削り。	砂粒(含)、灰色・青灰色、普通
16	7	須恵器	甕	SDN 2　T63・64　黒灰色砂礫・茶黒色土	復口50.4、高(18.2)	(外)カキメのちヘラ描直線文、擬格子叩キ。(内)同心円叩キ。	砂粒(含)、灰白色、普通

SDN 2 出土須恵器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
31 - 1	135-5	須恵器	器台	SDN 2　T64-c 1　黒灰色粘土・茶黒色土	復口30.0、高(12.05)	(外脚上)擬格子叩キ。(外脚下)カキメ、波状文。(内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
2	3	須恵器	器台	SDN 2　T63　暗灰色粘質土・茶黒色土	復口35.4、高(4.05)	(外坏体)波状文。(内)回転ナデ、粘土のつぎめ。	砂粒(含)、暗灰色、良好
3	6	須恵器	器台	SDN 2　鍛冶炉焼土・茶灰色土	復口40.0、推高14.2(坏部)	(外)波状文、ハケメ、擬格子叩キ。(内)同心円叩キ、ナデ。	砂粒(含)、青灰色、良好
4	4	須恵器	器台	SDN 2　T63　黒灰色砂礫・茶灰色土・茶黒色土	復口13.4	(外)波状文。(内)回転ナデ、指オサエ、未調整。すかし。	砂粒(含)、灰色、良好、筒形
5		須恵器	器台	SDN 2　S63　暗紫灰黒色土	復口35.6、高(4.2)	(外坏体)ヘラ描直線文。(外坏口・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
6		須恵器	器台	SDN 2　暗灰色粘質土	復口27.0、高(6.25)	(外体上)ヘラ描直線文。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
7		須恵器	器台	SDN 2　S63-d 2　暗灰黒色土	復口18.0、高(4.6)	(外口・外体上)ヘラ削り。(外体下)ナデ、ヘラ描直線文。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
8		須恵器	器台	SDN 2　T63-b 4・d 2　茶褐色土	残存最大径22.8	(外)叩キ後カキメ、ヘラ描斜行文。(内)叩キ後横ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
9	135-7	須恵器	器台	SDN 2　T63　黒灰色砂礫・黒色土・茶灰色土	脚25.4、高(27.0)	(外)ナデ後カキメ後波状文。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通

SDA 4 出土土器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
32 - 1	130-5	弥生式土器	甕	SDA 4　T64-b 2　灰黒色砂質土・黒灰色砂質土	復口18.6、復基16.6、高(17.9)	(外体)叩キ。(外口・内)回転ナデ。	金雲母・灰オリーブ色、普通
2		弥生式土器	甕	SDA 4　T64-b 4	底 6.1、高(3.0)	(外)ヘラ削りのちナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、にぶい橙色、普通
3	143-1	須恵器	坏蓋	SDA 4　T64-b 2	復口14.1、高 3.4	(外天上)ヘラ削り(右回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
4	2	須恵器	坏蓋	SDA 4　T64・65　灰黒色砂質土	復口13.2、高 4.1	(外天上)ヘラ削り(左回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
5	3	須恵器	坏蓋	SDA 4　S・T64	復口13.4、高 3.7	(外天上)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通、自然釉
6		須恵器	坏蓋	SDA 4　T64-b 2　灰黒色砂質土	復口13.1、高 3.8	(外天上)ヘラ削り(左回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、生焼
7	143-4	須恵器	坏	SDA 4　T65-c 1	復口10.2、復受12.4、高 4.9	(外体下・外底)ヘラ削り(左回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
8		須恵器	坏	SDA 4　T65-c 1	復口15.2、復受18.0、高(4.3)	(外体下)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、青灰色、普通
9	143-5	須恵器	坏	SDA 4　T64-b 2　黒灰色砂質土	復口13.0、復受15.8、高(3.9)	(外体下)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、灰色、普通
10	6	須恵器	坏	SDA 4　T65-a 1	復口13.3、復受15.6、高(3.9)	(外体下)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
11		須恵器	坏	SDA 4　T64-b 2　灰黒色砂質土	復口11.8、高(4.0)	(外体下)ヘラ削り(左回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
12		須恵器	坏	SDA 4　T65-a 3	復口11.6、復受13.4、高(2.9)	(外体下)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、少し焼歪
13	143-7	須恵器	𤭯	SDA 4　S64-d 2　灰黒色砂質土	復体11.0、高(7.0)	(外)波状文、ヘラ削りのちナデ、弱い叩キ。(内)オサエ。	砂粒(含)、灰色、普通
14	8	須恵器	甕	SDN 2・SDA 4　T65-c 1	復口18.2、復基13.4、高(5.4)	(外・内) 回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、堅緻
15		須恵器	甕	SDA 4　T64-b 2	復口15.9、高(3.4)	(外・内) 回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
16		須恵器	甕	SDA 4　T64-b 2	復口13.4、復基 9.0、高(5.7)	(外・内) 回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
17		須恵器	甕	SDA 4　T65-a 3	復口30.0、高(3.5)	(外・内) 回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
18	143-9	須恵器	甕	SDA 4　T65-c 1	復口19.0、復基15.6、高(6.2)	(外頸)カキメ。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
19	10	須恵器	甕	SDA 4　T64-b 2　灰黒色砂質土	復口19.4、復基15.6、高(6.7)	(外肩)叩キのちカキメ。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
32 - 20		須恵器	甕	SDA 4　T65-a 3	復口17.4、高(3.6)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
21		須恵器	甕	SDA 4　T64-b 2	復口19.7、高(3.8)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
22		須恵器	甕	SDA 4　T64-b 4	復口19.3、高(4.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
23	143-13	須恵器	甕	SDA 4　S64-d 4　灰黒色砂質土	復口15.2、復基14.2、高(7.3)	(外体)叩キ。(内体)同心円叩キ。(外・内・口頸)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
24	11	須恵器	甕	SDA 4　T65-c 1	復口15.6、復基13.0、高(5.8)	(外)擬格子叩キのちナデ。(内)同心円叩キ。(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、生焼
25	12	須恵器	甕	SDA 4　T64-b 4	復口20.8、復基18.8、高(8.9)	(外肩)擬格子叩キ。(内肩)同心円叩キ。(外・内・口頸)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
26		須恵器	甕	SDA 4　S65-c 3　灰色砂土	復口18.0、高(3.6)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、浅黄橙色、生焼
27	143-14	須恵器	甕	SDA 4　T64-b 2　灰黒色砂質土	復口16.2、復基12.4、高(8.7)	(外)叩キのちカキメ。(内)叩キ?。(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼

SDA 3・4、SDN 9 出土土器他

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
33 - 1	144- 2	須恵器	坏蓋	SDA 4	復口13.2、高(4.8)	(外)ヘラ削り、削りのちナデ。	砂粒(含)、明青灰色、自然釉
2		須恵器	坏蓋	SDA 3　R65-c 3　暗灰色粘土	復口13.4、高(3.1)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
3		須恵器	坏蓋	SDA 3	復口14.6、高(2.9)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
4		須恵器	坏蓋	SDA 4　S64-d 4	復口14.2、高 2.7	(外)ナデ後回転ヘラ削り。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
5	144- 4	須恵器	坏蓋	SDN 9	復口14.0、高 3.8	(外天上)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好、須恵器片付着
6	3	須恵器	坏蓋	SDA 4	復口13.8、高(3.6)	(外)ヘラ削り(左回り)、削りのちナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
7		須恵器	坏蓋	SDA 4　S64-b 4	復口14.0、高 4.4	(外天上)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
8	144- 5	須恵器	坏蓋	SDA 4	復口14.8、高 4.3	(外天)ヘラ削り(右回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
9		須恵器	坏蓋	SDA 3	復口 8.0、高(1.0)	(外・内)回転ナデ。(外天・内かえり)粘土つぎめ。	砂粒(含)、灰白色、普通
10	144- 1	須恵器	高坏蓋	S65-c 4　茶灰色土	口15.4、つまみ2.5、高 4.5	(外天)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、堅緻
11		須恵器	坏	SDA 4	口12.3、高 4.6	(外体上)削りのちナデ。(外体下)ヘラ削り(左回り)。(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、やや生焼
12		須恵器	坏	SDA 4	復口12.0、高(4.1)	(外体下)ヘラ削り。(内中心)同心円叩キ。(その他外・内)ナデ。	密・砂粒(含)、灰色、普通、自然釉
13		須恵器	坏	SDN 9	口12.75、高 3.6	(外)ヘラ削り、螺旋状ヘラ削り。(内)粘土ひも巻上げ痕。	砂粒(含)、灰白色、良好、焼歪
14		須恵器	坏	SDN 9　R64-d 4　茶灰色砂質土	復口15.3、高(4.2)	(外底)削りのちナデ。	砂粒(含)、灰色、普通、土器付着
15		須恵器	坏	SDA 3	復口13.8、高(3.7)	(外底)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
16		須恵器	坏	SDN 9	復口12.8、高(3.7)	(外体)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、明青灰色、良好
17		須恵器	坏	T65-c 1　灰色砂	復口15.1、高(3.6)	(外)ヘラ削りのちナデ、ヘラ削り、ナデ。(内)回転ナデ。	やや密・砂粒(含)、灰色、(断)焼ムラ
18	144- 6	須恵器	坏	SDN 9	口12.3、高 3.5	(外体)ヘラ削り。(外受)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼、軟質
19		須恵器	坏	SDA 4	復口12.9、復受13.8、高(2.2)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、明青灰色、普通
20		須恵器	高坏	SDA 4　T64-b 2	復底13.0、高(5.7)	(外・内)回転ナデ。すかし。	砂粒(含)、灰色、普通
21	144-10	須恵器	甕	SDA 3　S65-a 3　暗灰色粘質土	復口20.1、高(5.3)	(外頸～肩)カキメ。(内中心)青海波叩キ。(その他外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
22		須恵器	甕	SDA 3　S65-a 3　暗灰色粘質土	復口19.0、復基16.0、高(4.4)	(外)叩キのちナデ、カキメ、ナデ。(内)回転ナデ、叩キ。	砂粒(含)、黄色、生焼
23	144- 9	須恵器	瓶	SDA 4　S64-d 4	復口17.1、復基14.8、高(2.7)	(外基)叩キのちナデ。(断)焼ムラ。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
24		須恵器	甕	SDA 4	推基16.2、高(6.5)	(外)青海波叩キ。(内)擬格子叩キ。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、浅黄色、生焼
25		須恵器	甕	SDA 3	復口19.0、高(2.1)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼、鉄分付着
26	144-12	須恵器	甕	T65-c 1　灰色砂	復口56.0、幅12.2、高(5.0)	(外口)ヘラ描斜行文。(外頸)凸 4 本、ヘラ描斜行文。(内)ナデ。	砂粒(多)、青灰色、堅緻
27	11	須恵器	甕	SDA 4	復口46.5、高(7.1)	(外)波状文。(その他外・内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、灰色、普通
28	8	須恵器	横瓮(俵壺)	SDN 2　上層	口 7.8、基 5.3、高 21.2	(外体)叩キのちカキメ。(両側面)接合痕?(外・内頸)ナデ。	密・砂粒(含)、灰色、普通、自然釉
29	7	須恵器	短頸壺	SDN 9	口 6.0、高 7.1	(外体下底)手持ちヘラ削り。	砂粒(含)、青灰色、良好、鉄分付着
30		須恵器	壺	SDN 9	復肩11.0、高(6.0)	(内底)指オサエ?　(外・内)剥離観察不可能。	粗・砂粒(含)、灰白色、生焼
31		土師器	小型壺	SDA 3	復底 3.9、復基 5.8、復体 7.6、高(6.9)	(外)ナデ、ヘラ削り。(内)指オサエのちナデ。(外・内)剥離激。	砂粒(含)、黄橙色・褐色、普通

包含層出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
34 - 1		須恵器	坏蓋	T64-b 2　黒灰色土	口15.2、高 5.2	(外天上)ヘラ削り(右回り)。(内)叩キ後ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼、ワラ付
2		須恵器	坏蓋	T63-d 1　茶黒色土・茶灰色土	復口13.8、高(3.85)	(外天上)ヘラ削り(右回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
3		須恵器	坏蓋	S65-c 3　灰茶色土	復口16.4、高(3.6)	(外)ナデ後ヘラ削り。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
4		須恵器	坏蓋	T63-d 1　暗灰色粘質土	復口14.0、高(3.5)	(外)ナデ後ヘラ削り。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
5		須恵器	坏蓋	S65-a 3　紫灰色粘土	復口17.4、高 4.2	(外)ナデ後ヘラ削り。(内)ナデ。	砂粒(含)、暗青灰色、良好
6	145- 1	須恵器	坏蓋	S65-a 2　紫灰色粘土	口14.4、高 4.6	(外)ナデ後ヘラ削り。(内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
34－7		須恵器	坏蓋	T65-a1、a3　暗灰茶色土	口14.4、高(3.9)	(外)ナデ後ヘラ削り。(内)叩キ後ナデ。	砂粒(含)、明青灰色、普通
8		須恵器	坏	S64-b2　茶灰色土	復口15.6、高(3.8)	(外体下)ヘラ削り(ろくろは右回り)。(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
9		須恵器	坏	T64-a3　茶黒色土	口13.05、受15.25、高(4.2)	(外底)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通、自然釉、焼歪土器片付
10	145－4	須恵器	坏	T64-b2　暗灰茶色土	復口12.0、高(4.2)	(外体下)ヘラ削り。(その他外・内)。	砂粒(含)、灰色、普通、自然釉
11		須恵器	高坏	T63-a2　茶灰色土	復基 4.8、復底11.4、高(7.2)	(外坏体)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通、自然釉
12	145－5	須恵器	高坏	T64-a3　茶黒色土	復口15.2、復底9.0、復基4.0	(外坏)ナデ、ヘラ削り。(内坏)ナデ。(脚)三方すかし。	砂粒(含)、灰白色、生焼
13	2	須恵器	坏蓋	S64-b4　茶灰色土	復口 8.6、高(2.8)	(外天)ヘラ削り。(外口・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
14	6	須恵器	小壺	SDN2　淡茶褐色砂質土	口 6.1、高 5.7	(外)ナデ後ヘラ削り。(内)ナデ。	砂粒(含)、淡灰色、普通
15	7	須恵器	短頸壺	S65-c1　紫灰色粘土	口 6.0、体10.5、高 7.1	(外体下)ヘラ削り？。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
16	148－5	須恵器	短頸壺	S61-a2	口 7.2、体 9.4、高 3.4	(外体下)ヘラ削り。(外底)不定ヘラ削り。(その他外・内)ナデ。	精良・砂粒(含)、灰白色、やや軟質
17		須恵器	高坏	T63-d2　茶褐色土	復基 4.8、復底 9.9、高(4.8)	(外・内)回転ナデ。(内・脚・断基)粘土のつぎめ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
18	145－10	須恵器	陶棺	R63-c4　撹乱	高(6.4)	(外)擬格子叩キ。(内)同心円叩キ後ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
19		須恵器	𤭯	R64-d4　灰色礫土	体 9.1、復基4.25、高(9.1)	(外体最下底)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、灰色、普通
20		須恵器	𤭯	S63-d2　茶灰色土	体 9.3、基3.85、高(8.0)	(外)ナデ後削り、凹線による文様帯に斜格列点文。	砂粒(含)、灰色、普通
21	145－8	須恵器	小型𤭯	SDN2　黒褐色粘質土	体 8.6、高(5.7)	(外)ヘラ削りのちナデ、ヘラ削り。(内基)シボリメ。(内底)水挽き痕？	砂粒(含)、灰色、普通
22		須恵器	甕	S65-c1～2　茶灰色土	口15.0、基10.8、高(6.0)	(外・内)ナデ。(外・内肩)叩キ。	砂粒(含)、明青灰色、灰色、普通
23	138－12	須恵器	壺	S61-a2　茶灰色砂質土	復口14.8、高(3.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰黄白色、普通
24		須恵器	壺(仮壺)	S64-b1、d1　茶灰色土	復口12.6、基 3.8、高(3.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、暗灰色、良好
25		須恵器	甕	R64-d3　淡灰色砂下面	復口15.4、高(4.6)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通、自然釉
26		須恵器	甕	S64-b1、d1　茶灰色土	復口15.0、復基13.0、高(5.4)	(外肩)カキメ。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、オリーブ灰色、生焼
27		須恵器	甕	R64-d2　灰褐色砂礫	復口19.0、高(5.25)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼、鉄分付
28		須恵器	壺	S64-c2　表　土	復口11.8、高(3.1)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
29	138－11	須恵器	甕	T63-d2　茶黒色土・茶灰色土	復口17.4、高(4.7)	(外)カキメ後ナデ。(内)横ナデ。(外頸)ヘラ記号。	砂粒(含)、灰白色、生焼
30		須恵器	甕	T63-d1 茶褐色土	復口16.0、高(5.8)	(外)平行叩キ後カキメ後ナデ。(内)同心円叩キ後ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
31		須恵器	壺	S63-b1　灰茶色土	復口13.4、高(2.0)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼

SDA2出土6世紀後半須恵器他

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
35－1	140－1	須恵器	坏	SDA2　S61-b1　茶黒色砂質土	復受13.6、高(3.4)	(外体底)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
2		須恵器	坏	SDA2　R・S61　茶黒色砂質土・茶黒色粘質土	復受14.6、高(3.6)	(外体下半)ヘラ削り左。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、堅緻
3		須恵器	坏	SDA2　S61-b2　茶黒色粘質土・茶灰色砂質土	復口23.5、復受25.4、高(5.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、明青灰色、普通
4	140－2	須恵器	坏蓋	SDA2　茶黒色砂質土	復口13.4、高 4.9	(外)回転ヘラ削り後つまみ付着。(内)回転ナデ、仕上ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
5	3	須恵器	高坏	S61-a2、b1　茶黒色粘質土・茶黒色砂質土	復口13.8、復受15.8、高(4.1)	(外体下半)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、軟質
6	4	須恵器	高坏	SDA2　茶灰色砂質土	基 5.1、高(9.0)	(外・内)回転ナデ。(外坏底・台部)カキメ。(内台部)シボリメ。	砂粒(含)、にぶい橙色、普通
7		須恵器	高坏	SDA2　R61-c4　茶黒色粘質土	復底15.8、高(5.0)	(外・内)回転ナデ。(内・外すそ部)自然釉。	砂粒(含)、灰色、普通、焼歪
8		須恵器	高坏	SDA2　T64　暗灰色粘質土・茶黒色粘質土	復底14.7、復基 4.5、高(13.2)	(外・内)回転ナデ。(内)斜シボリメ。すかし(3？)。	砂粒(含)、オリーブ黒色、普通
9		須恵器	高坏	SDA2　S61-a2　茶黒色砂質土	基 3.5、すかし幅0.3～0.5、高(6.1)	(外)横ナデ。(内)シボリ。すかし穴(長4.5cm)。	砂粒(含)、灰色、軟質
10	139－3	須恵器	𤭯	SDA2　S61-b2　茶黒色粘質土・茶灰色砂質土	復胴 9.2、高(5.5)	(外底)ヘラ削りのちナデ。(外・内)ナデ。(外体)ヘラ描列点文。(内底)オサエ。	密・砂粒(含)、灰色、普通
11	1	須恵器	𤭯	SDA2　R61-d4　茶灰色砂質土	基 4.0、胴 9.7	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
12	2	須恵器	𤭯	SDA2　S61-a2　茶黒色砂質土	推口 8.4	(外体)ヘラ描、ナデ、櫛描列点文(8)。(外体下)シボリメ。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、赤灰色、普通
13	5	須恵器	𤭯	SDA2　S61-a2　茶灰色砂質土	体 9.3、穴 1.5、高(6.3)	(外)カキメ、一部ハケメ。(内)回転ナデ。(内底)角型凹凸。	砂粒(含)、灰色、普通
14	4	須恵器	𤭯	SDA2　S61-b1　茶黒色砂質土	復基 3.0、体 8.8、高(7.2)	(外・底)削り。(内・底)ナデ後刺突文。	砂粒(含)、灰黄褐色、普通
15		土師器	高坏	SDA2　S61-b2　茶黒色粘質土・茶灰色砂質土	基 3.8、高(4.7)	(外)ハケメ。(内)ナデ。	砂粒(含)、橙色、普通
16		土師器	高坏	SDA2　S61-a2　茶灰色砂質土	高(2.2)	剝落して調整不明。	金雲母・角閃石・砂粒(含)、褐色、普通
17		土師器	不明土製品	S62-a2　茶灰色粘質土	基 4.5、底 5.0、高(6.4)	(外・基)回転ナデ。(外・体)指オサエ。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
18		須恵器	器台	SDA2　S61-a2　茶灰色砂質土	復口22.7、高(4.2)	(外・内・口・体上)回転ナデ。(外・内・体下)叩キ。	砂粒(含)、灰色、普通
19	140－5	須恵器	器台	SDA2　S61-b2　茶灰色砂質土	復基10.0、高(9.5)	(外下)横カキメのちナデのちヘラ描。(外・内)ナデ。(すかし)2段。	砂粒(含)、灰白色、生焼
20		須恵器	器台	SDA2　S61-b1、2　茶灰色砂質土・茶黒色粘質土	復基 5.8、高(9.5)	(外・内)回転ナデ。(すかし)2段。	砂粒(含)、灰色、普通
21	140－6	須恵器	器台	SDA2　S61-b1　茶黒色粘質土	復底22.0、高(19.6)	(外)ヘラ描。(内)指オサエのちナデ。(外・内)ナデ。(すかし)2段。	砂粒(含)、灰色、良好
22	7	須恵器	高坏	SDA2　S61-b2　茶黒色粘質土・茶灰色砂質土	復底 9.4、復基 5.4、高(4.6)	(内坏底)脚部接合の不整ナデ。(外・内)ナデ。(すかし)2段。	砂粒(含)、暗灰色、普通

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
35 - 23	140- 9	須恵器	高坏	SDA 2 S61-b 1 茶黒色砂質土	底 8.3、基 3.7、高(4.9)	(外坏底)ヘラ削り後ナデ。(その他外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
24	8	須恵器	廸	SDA 2 S61-b 2 茶灰色砂質土	底 7.7、高(2.5)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
25	10	須恵器	高坏	SDA 2 S61-b 2 茶黒色砂質土	復底 8.2、基 2.4、高(6.1)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
26		須恵器	蓋	SDA 2 S62-a 2 茶灰色砂質土	復口11.4、高(2.4)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、黒褐色・青灰色、普通
27	139- 6	須恵器	短頸壺	SDA 2 S61-b 2 茶灰色砂質土	復口 7.4、高 6.0	(外底)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
28	7	須恵器	台付壺	SDA 2 S61-ab 2 茶灰色砂質土・茶黒色粘質土	復基 6.3、高(7.8)	(外体下)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。(すかし) 3～4ケ所。	砂粒(含)、灰色、生焼
29		須恵器	台付壺	SDA 2 R61-c 4 茶黒色粘質土	底17.3、すかし幅4.1、高(5.8)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通

SDA 2 出土 6 ～ 7 世紀須恵器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
36 - 1		古式須恵器	大甕	SDA 2 S61-b 1 茶黒色砂質土	復口41.2、高(6.0)	(外・内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、黒色、良好、自然釉
2		須恵器	甕	SDA 2 S61-b 1 茶灰色砂質土	幅 1.8、高(2.4)	(外・内)回転ナデ。	精良、灰黄色、普通
3		須恵器	甕	SDA 2 S61-b 2 茶灰色砂質土	幅 3.9、高(3.1)	(外)ナデ、沈線。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、良好
4		須恵器	甕	SDA 2 R61-c 4 茶黒色粘質土	復口20.3、高(7.8)	(内基)不整方向のナデ。(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
5	142-11	須恵器	甕	SDA 2 S61-b 2 茶灰色砂質土	口25.4、高(3.2)	(外・内口)横ナデ。(外)平行叩キ後カキメ。(内)同心円叩キ。	砂粒(含)、青灰色・灰白色、普通
6	9	須恵器	甕	SDA 2 S61-b 1 茶黒色砂質土	口18.2、高(4.3)	(内基)叩キ。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、オリーブ灰白色、良好
7		須恵器	甕	SDA 2 S61-b 2 茶灰色砂質土	口27.6、高(4.0)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、暗灰黄色、良好
8	142-13	須恵器	甕	SDA 2 S61-b 2 茶灰色砂質土	復口17.8、復基14.9、高(7.5)	(外)カキメのちナデ、擬格子叩キ。(内)同心円叩キ。	密・砂粒(含)、灰色、普通、自然釉
9	10	須恵器	甕	SDA 2 R61-c 4 茶黒色粘質土	復口27.3、高(5.3)	(外体)叩キの上からカキメ。(外)青海波叩キメ。	砂粒(含)、灰色、普通
10		須恵器	甕	SDA 2 S61-b 2 茶黒色砂質土	復口23.8、高(4.6)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、オリーブ色、普通
11		須恵器	甕	SDA 2 S61-b 2 茶灰色砂質土	復口19.4、高(4.8)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、良好
12		須恵器	甕	SDA 2 S61-d 2 茶灰色砂質土	復口25.8、高(4.3)	(外・内)回転ナデ。	密、灰色、堅緻、自然釉
13		須恵器	甕	SDA 2 R61-d 4 茶灰色砂質土	復口14.0、高(3.1)	(外・内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、灰白色、良好
14		須恵器	甕	SDA 2 茶褐色砂質土	復口27.3、基21.8、高(7.5)	(外・内口)指ナデ。(外)擬格子叩キ。(内)同心円叩キ。	砂粒(含)、灰色、良好、自然釉
15	142-15	須恵器	壺	SDA 2 S61-b 1 茶灰色砂質土	復口13.0、高(6.7)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
16		須恵器	甕	SDA 2 S61-b 2 茶灰色砂質土	口28.6、高(5.4)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、暗青灰色、普通

SDN 2 出土 6 ～ 7 世紀須恵器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
37 - 1	136- 6	須恵器	甕	SDN 2 暗灰色粘質土・黒褐色粘質土・淡茶灰色粘質土	復口20.0、高(30.1)	(外)回転ナデ。(外体)擬格子叩キ。(内)回転ナデ。(内体)同心円叩キ。	砂粒(含)、灰白色、普通
2		須恵器	甕	表採	復口22.2、高(6.0)	(外・口・頸)ナデ。(外肩)ハケメ。(内・口・頸)ナデ。(内肩)同心円叩キ。	砂粒(含)、灰白色、普通
3		須恵器	甕	SDN 2 T63-b 2	復口18.3、高(5.75)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
4		須恵器	甕	SDN 2	復口20.0、高(4.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
5		須恵器	甕	SDN 2 S63-d 4 茶黒色土	復口20.8、高(3.6)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、堅緻、自然釉
6		須恵器	甕	SDN 2 S63 上面	復口14.6、高(2.2)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
7	136- 7	須恵器	甕	SDN 2 暗灰色粘質土・黒灰色粘土・黒灰色礫土・暗灰色礫土	復口20.1、高(17.8)	(外)ナデ、擬格子叩キのちカキメ。(内)ナデ、同心円叩キ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
8		須恵器	甕	SDN 2 T63-d 2 黒灰色粘土	復口20.8、高(6.2)	(外)ナデ、擬格子叩キのちカキメ。(内)ナデ、同心円叩キ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
9	136- 8	須恵器	甕	SDN 2 T63-b 4 黒灰色砂礫	復口18.0、高(6.7)	(外)回転ナデ。(外肩)カキメ。(内)回転ナデ。(内肩)同心円叩キ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
10		須恵器	甕	SDN 2 S63-c 3 茶黒色土	復口19.75、高(4.2)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
11		須恵器	甕	SDN 2 T63-d 2 黒灰色砂礫	復口18.7、高(4.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
12		須恵器	甕	SDN 2 上層 黒灰色土	復口18.5、高(6.0)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
13		須恵器	甕	SDN 2 S63-d 2	復口20.9、高(3.7)	(外)回転ナデ。(内)回転ナデ。(内肩)同心円叩キ。	砂粒(含)、灰色、普通
14		須恵器	甕	SDN 2 T64-a 1 茶黒色土	復口18.62、高(3.85)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
15		須恵器	甕	SDN 2	復口14.6、高(5.55)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
16		須恵器	蛸壺?	SDN 2 S63-d 4 茶黒色土・暗黒灰色土	復口11.0、高 3.9	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
17		須恵器	甕	SDN 2 S63-b 4 黒灰色砂礫	復口17.6、高(4.35)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
18		須恵器	甕	SDN 2 S64-a 3 黒灰色粘土	復口23.4、高(6.2)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通

SDA 2 出土須恵器装飾付甕

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
38 - 1	139- 8	須恵器	甕	SDA 2 S61-b 2 茶灰色砂質土・茶黒色砂質土	復口52.8、高(15.3)	(外)カキメ、櫛描列点文。(内)ナデ、カキメのちナデ。	砂粒(含)、緑色、良好、自然釉
2	141- 3	須恵器	甕	S61-b 1、2 茶灰色砂質土・茶黒色粘質土・茶黒色砂質土	復口32.0、復基18.2、高(10.7)	(外)櫛描列点文、擬格子叩キ。(内)同心円叩キ。	砂粒(含)、緑灰色、良好

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
38-3	142-7	須恵器	甕	SDA2 S61-b2 茶灰色砂質土・茶黒色砂質土	復口33.8、復基22.1、高(13.6)	(外)ヘラ描直線文、擬格子叩キ。(内)同心円叩キ、ナデ。	砂粒(含)、灰オリーブ色、普通
4	141-5	須恵器	甕	SDA2 S61-a2 茶灰色砂質土	口29.4、推体56.6、復基20.0 高(60.0)	(外)波状文、平行叩キ、ナデ。(内)同心円叩キ。	砂粒(含)、灰色、良好、(底)煤付着

埴輪

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
39-1	146-6	埴輪	形象	S64-d3 茶灰色土	残存5×6.5×1.3	(裏)ナデ。(表)ヘラ描沈線文。	砂粒(含)、淡黄色、普通
2	4	埴輪	円筒	T63-b2 暗灰色粘質土	残存8×4 厚さ1.0	(外)縦ハケ後たが付着。(内)縦ナデ。すかし穴穿孔。	砂粒(含)、橙色、普通
3	5	埴輪	円筒	S65-c2 茶灰色土	残存5.3×4.5厚さ1.0	(外)たが付着後横ハケ。(内)横ハケ後縦ハケ。すかし穴。	砂粒(含)、橙色、普通

鞴羽口

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
40-1	146-2	土製品	鞴羽口	T64-a4 暗灰茶色土	残存7×5.0(外)7.2(内)2.8	(外)シボリメ、面取、ナデ。(内)剥離。	砂粒(含)、(外)紫灰色、(内)黄色
2	3	土製品	鞴羽口	S63-d3 黄茶色土	残存5×3.5(外)7.4(内)3.2	(外)シボリメ後ナデ。(内)擦痕。	砂粒(含)、(外)灰白色、(内)黄褐色
3	1	土製品	鞴羽口	S64-d1	残存5.5×4.2(外)7.4(内)2.6	(外)ナデ。(内)調整不明。(先端)還元。	砂粒(含)、(外)灰色

蛸壺・製塩土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
41-1	145-9	須恵器	蛸壺	R65-C3	口(正4.4、横3.9)、高(10.9)	(外紐頭)ヘラ削り後ナデ。(その他外・内)ナデ、シボリメ。	密・砂粒(含)、灰色、普通
2	146-25	須恵器	蛸壺	T63-b2 暗灰色粘質土	穴径10.0、高(3.9)	(外)粘土じわが多い。(内)ナデ。(外断)粘土のつぎめ。	砂粒(含)、暗灰色、普通
3	26	須恵器	蛸壺	T64-b2 暗灰色粘質土	穴径 0.9、高(3.4)	(紐上)粘土のつぎめ。(内天)叩キ。	砂粒(含)、灰色、普通
4	24	須恵器	蛸壺	S64-b3、d4 茶灰色土	穴径 1.2、高(5.0)	(紐上)粘土のつぎめ。(内天)シボリのち指オサエ、ナデ?	砂粒(含)、明青灰色・灰白色、良好
5	23	須恵器	蛸壺	SDN2 S63-d4 茶褐色土	穴径 4.0、高(5.6)	(紐上)粘土ひも接合痕。(外天)ヘラ記号。(内天)ナデ。	密・砂粒(含)、灰色・緑灰色、普通
6	27	須恵器	蛸壺	R62-c2	復口 4.0、復体 7.4、高(4.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、オリーブ灰色、普通
7	29	須恵器	蛸壺	S64-a2 灰褐色土・暗灰色粘質土	復口 3.4、復体 5.0、高(5.0)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、明青灰色、普通
8	28	須恵器	蛸壺	T65-a1 暗灰色粘質土	復口 3.6、復体 7.6、高(2.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、明青灰色、普通
9	7		製塩土器	SDA3 T65-a1	復口 6.4、高(3.4)	(外)剥離著しく調整不明。(内口唇)ナデ。(内体)貝殻腹縁痕。	精良、淡白赤褐色、生焼
10	11		製塩土器	SDN2 T63-d2 黒灰色砂礫	復口 8.6、高(2.9)	(外)剥離著しく調整不明。(内口唇)ナデ。(内体)貝殻腹縁痕。	精良・砂粒(含)、淡黄色、生焼
11	14		製塩土器	SDN2 T63-d2 灰褐色砂質土	復口 6.8、高(3.0)	(外・内)剥離激しく調整観察不可能。	砂粒(含)、淡赤橙色、生焼
12	9		製塩土器	T63-b4 暗灰茶色土	復口 7.2、高(5.0)	(外・内)剥離激しく調整観察不可能。(内)粘土しわ。	粗・砂粒(含)、赤橙色、生焼
13	10		製塩土器	T65-a1 茶灰色土	復口 6.3、高(2.5)	(外・内)剥離激しく調整観察不可能。	砂粒(含)、灰色、生焼
14	8		製塩土器	R65-c3 暗灰茶色土	復口 9.4、高(3.5)	(外)指オサエ。(内)剥離激しく調整観察不可能。	片岩・砂粒(含)、橙色・灰色、生焼
15	15		製塩土器	R64-c2 茶灰色土	復口 4.8、高(3.5)	(外・内)剥離激しく調整観察不可能。(内)粘土のしわ。	精良・砂粒(含)、淡紫灰色、生焼
16	13		製塩土器	SDN2 T63-d2 茶黒色土	復口 7.8、高(4.0)	(外・内)剥離激しく調整観察不可能。	粗・砂粒(含)、灰白色、生焼
17	12		製塩土器	SDN2 S63-d4 茶黒色土	復口 7.6、高(3.1)	(外・内)剥離激しく調整観察不可能。(外)粘土つぎめ。	粗・砂粒(含)、橙色、生焼

ピット内出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
42-1		弥生式土器	壺	Pit38 掘り方	推底 8.5、高(3.9)	剥離激しく調整観察不可能。	砂粒(含)、灰白色、普通
2		土師器	甕	SBK2	推口16.0、推基13.4、高(3.3)	剥離激しく調整観察不可能。	片岩・砂粒(含)、にぶい橙色、普通
3		須恵器	坏蓋	Pit39 掘り方	つまみ 3.3、高(4.0)	(外)回転ナデ。(内)1cm幅の平行なナデ痕2本。	砂粒(含)、青灰色・赤灰色、普通
4	152-1	須恵器	坏蓋	Pit69 掘り方	高(5.15)	(外天上)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	粗・砂粒(含)、青灰色、堅緻
5		須恵器	坏蓋	Pit69 S63 掘り方	復口16.0、高(2.3)	(外口唇)カキメ or 削り?(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
6		須恵器	坏蓋	Pit44	復口10.2、復稜 9.6、高(2.7)	(外・内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、灰色、普通
7		須恵器	坏	Pit41 掘り方	復口10.3、復受11.9、高(3.7)	(外体下)ヘラ削り。	砂粒(含)、灰色、普通、自然釉
8		須恵器	坏	Pit63 S63 掘り方	復口10.4、復受12.0、高(3.7)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、淡黄色、生焼
9		須恵器	坏	Pit44	推受12.2、高(2.5)	(外・内)回転ナデ。(断)粘土のつぎめ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
10	152-3	須恵器	高坏	Pit47・33 掘り方	復口12.0、復稜11.6、復基 5.1、高(4.9)	(外体下・外底)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
11		須恵器	高坏	SBK2 S63 茶褐色土	復基 4.8、高(2.6)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
12	152-2	須恵器	高坏	S63 住居址群付近包含層 暗灰紫色砂性粘質土	復底12.4、高(6.8)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、黒灰色、普通
13		須恵器	坏	SBK5 黄灰茶砂	復受14.8、高(2.3)	(外・内)回転ナデ。(断受)粘土のつぎめ。	密・砂粒(含)、灰白色、普通
14		須恵器	坏	Pit41 掘り方	復受11.8、高(3.1)	(外体下)ヘラ削り(左回り)。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
15		須恵器	坏	S63 暗灰紫色砂性粘質土	復口12.0、高(1.9)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、オリーブ灰色、普通
16		須恵器	坏	Pit35 柱根	復口14.0、高(1.7)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
42-17		須恵器	坏	SBK 2	復口11.2、復受13.3、高(2.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
18	152-10	須恵器	高坏	SBK11 茶褐色砂質土	口13.6、高(6.5)	(外体下)ヘラ削り。(内)ナデ。(口)重ね焼きのあと。	砂粒(含)、灰色、普通、自然釉
19		須恵器	壺	SBK 2 S63 茶褐色土	推底 5.8、推体15.8、幅 5.5	(外体上)波状文。(内)不正方向のナデ、同心円叩キ痕？。	砂粒(含)、灰色、普通
20		須恵器	甕	Pit41 掘り方	推口15.6、残幅 3、高(1.7)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
21		須恵器	甕	SKA 2 R62 灰赤色砂礫土	復口20.4、高(3.7)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、オリーブ色、普通、自然釉
22		須恵器	甕	Pit69 S63 掘り方	復口22.4、高(4.4)	(外頸)カキメのちナデ。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通

SDA 2 出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
43-1		須恵器	坏蓋	SDA 2 S61-b 2 茶灰色砂質土	復口 9.6、高(1.4)	(外・内)回転横ナデ。	砂粒(含)、灰色、生焼
2		須恵器	坏蓋	SDA 2 S61-b 1 茶灰色砂質土	復口 9.8、高(2.8)	(外天上)ヘラ削り。(外天下・口)回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
3		須恵器	坏蓋	SDA 2 S61-b 1 茶灰色砂質土	高(1.6)	(外)ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
4	142-2	須恵器	坏蓋	SDA 2 S61-a 2 茶灰色砂質土・茶黒色砂質土	口13.0、高 7.5	(外天上)ヘラ削り。(外天下)削りのちナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、明青灰色、普通
5	1	須恵器	坏蓋	SDA 2 S61-b 1 茶灰色砂質土	復口15.5、高 3.2	(外つまみ・口)回転ナデ。(外天)ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
6		須恵器	坏	SDA 2 S61-a 2 茶灰色砂質土	復底 5.4、高(2.8)	(外底)ヘラおこし。(外体下)回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
7	142-5	須恵器	坏	SDA 2 S61-b 1 茶黒色粘質土	口12.9、高 2.4	(外底)ヘラ削りのちナデ。(外体)回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
8		須恵器	坏	SDA 2 S61-b 1 茶灰色砂質土	高(2.8)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、緑灰色、普通
9	142-4	須恵器	高台付坏	SDA 2 S61-a、d 3 茶灰色砂質土	高(2.8)	(外体)回転ナデ。(外坏底・高台)ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
10	3	須恵器	高台付坏	SDA 2 茶黒色砂質土	復口15.4、高 4.2	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、暗緑灰色、普通
11		須恵器	坏	SDA 2 S61-a 2 茶灰色砂質土	高(2.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
12		須恵器	薬壺	SDA 2 S61-b 2 (アゼ上層) 茶灰色砂質土	復口12.8、高(3.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰(白)色、普通
13		須恵器	蛸壺	SDA 2 S61-a 2 茶黒色砂質土	穴0.7、高(3.1)	(紐)縦ナデ。(内)回転ナデ。(紐)粘土付着痕。	砂粒(含)、灰色、堅緻
14		須恵器	耳付壺	SDA 2 S61-b 2 茶黒色砂質土・茶灰色砂質土	高(6.4)	(外・内)回転ナデ。(外肩)沈線。	砂粒(含)、灰色、普通
15		須恵器	長頸壺	SDA 2 S61-a 2 茶灰色砂質土	高(12.4)	(外・内)回転ナデ。(外頸中央)二条の沈線。	砂粒(含)、灰白色、普通
16	141-1	須恵器	長頸壺	SDA 2 S61-a 2 茶灰色砂質土	高(20.7)	(外体)ヘラ削り、ナデ。(外底)指オサエ。(外・その他)回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
17	2	須恵器	平瓶	SDA 2 S61-b 1 茶灰色砂質土・茶黒色砂質土	口 7.9、高(10.4)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰オリーブ色、普通
18	4	須恵器	甑	SDA 2 S61 茶黒色砂質土・茶黒色粘質土	復底13.8、高(14.5)	(外)叩キ後ナデ、ヘラ記号。(内)指オサエ後ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
19		須恵器	すり鉢	SDA 2 S61-a 2 茶灰色砂質土	復底 8.6、高(3.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
20		須恵器	坏	SDA 2 S61-b 1 茶灰色砂質土	復底12.4、高(3.1)	(外・内)ナデ。(外底)不調整。	砂粒(含)、にぶい黄橙色、普通
21	142-6	土師器	甕	SDA 2 S61-b 1 茶灰色砂質土	口26.8、高(7.2)	(外)横ナデ。(内)ハケ後ナデ。(内体)ヘラ削り。	砂粒(含)、にぶい橙色、普通
22		土師器	甕	SDA 2 茶灰色砂質土	口22.9、高(4.5)	(外)縦ハケ。(内)横ハケ。	砂粒(含)、橙色、普通

SDA 2 出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
44-1	141-8	須恵器	甕	SDA 2 S61 茶灰色砂質土・灰茶色土	復口18.4、高 45.4	(外)擬格子叩キ、カキメ。(内)同心円叩キ。	砂粒(含)、灰色、良好、自然釉
2	7	須恵器	甕	SDA 2 R・S61 茶黒色粘質土・茶黒色砂質土・茶灰色砂質土	復口23.0、高(31.0)	(外)平行叩キのちナデ。(内)同心円叩キ。	砂粒(含)、灰色、堅緻
3		須恵器	甕	SDA 2 S61-a 2 茶灰色砂質土	復口22.0、高(5.4)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、極暗褐色、良好
4	141-6	須恵器	甕	SDA 2 S61-b 2 茶灰色砂質土・茶黒色粘質土	復口24.5、復胴51.8、推高50.8	(外)擬格子叩キ、ナデ。(内)同心円叩キ、ナデ。	密・砂粒(含)、灰色・(基)白色、普通
5	142-8	須恵器	甕	SDA 2 S61-a 2 茶灰色砂質土	復口39.7、高(6.2)	(外基)ヘラ削りのちナデ。(外口・内)回転ナデ。	密、灰色、普通、自然釉

包含層出土須恵器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
45-1		須恵器	坏蓋	S64-b 3 暗灰色粘質土	復口10.2、高(1.9)	(外)ナデ後削り。(内)ナデ。(外)重ね焼痕あり。	密・砂粒(含)、灰白色、普通
2	145-3	須恵器	壺蓋	R62-c 4、d 3 茶灰色土	復口 7.6、高 1.7	(外)ヘラ削り後ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、良好、鉄分付着
3		須恵器	坏蓋	S65-d 3 茶灰色土	復口12.2、高 1.7	(外)回転ナデ。(外天下)ろくろ目 2 ケ所。(内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、灰白色、普通
4	147-2	須恵器	坏蓋	T65-b 1 灰茶色土	復口17.4、高(2.1)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、紫灰色、良好
5	1	須恵器	坏蓋	T63-a 3 暗灰茶色土	復口19.6、高(1.1)	(外)ヘラ削り後ナデ。(内)ナデ。	密・砂粒(含)、灰白色、普通
6	7	須恵器	坏	T65-b 3 茶灰色土	復口14.7、高 2.9	(外・内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、青灰色、堅緻、被灰
7	4	須恵器	坏	茶灰色土	復口11.0、高(2.9)	(外)ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
8		須恵器	皿	T65-c 2 茶灰色土	復口11.6、高 2.0	(外)ヘラ削り、削りのちナデ、回転ナデ(内)ナデ。	密・砂粒(含)、灰白色、普通
9		須恵器	高台付坏	T65-d 1	復口14.7、高 3.95	(外・内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、灰白色、堅緻
10	147-6	須恵器	高台付坏	S65-c 3	復口18.8、高 5.8	(外・内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、灰白色、普通

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
45-11	147-3	須恵器	皿	SDN 2　S64-a 3　茶黒色土	高(1.1)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
12	14	須恵器	壺	S65-c 1　茶灰色土	高(3.2)	(外底・高台)糸切り痕。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
13	148-8	須恵器	壺	S65-a 3　暗灰色粘質土	底 7.0、高(7.7)	(外)ヘラ削り(右回り)。(外底)粘土台からの糸切り痕あり。(内)ナデ。	砂粒(含)、明灰色、普通
14	147-10	須恵器	鉢	T64-b 4　茶灰色土	推底 7.4、高(3.4)	(外)(削り後?)ナデ。(内)回転ナデ。(外底)糸切り痕。	砂粒(含)、灰白色、普通
15	12	須恵器	壺	S65-c 1　暗灰色粘質土	復底 8.5、高(2.0)	(外)回転ナデ、糸切り痕。(内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、緑灰色、やや堅緻
16		須恵器	横瓶	T63-c 2　暗灰色粘質土	口11.2、高(5.1)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(中)、青灰色、普通
17	147-13	須恵器	壺	R64-d 4　灰色礫土下	高(6.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、良好
18	11	須恵器	蓋	S64-a 4　茶灰色土	口35.2、高(1.8)	(外)削りのちナデのち磨キ?。(内)削りのちナデ。	密・砂粒(含)、灰白色、普通
19		須恵器	甕	T64-a 3　暗灰茶色土	復口27.6、高(6.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
20	148-13	須恵器	鉢	T64-a 3　茶灰色土	復口26.0、高(20.2)	(外)ヘラ削り。(内)ナデ。	砂粒(細)、灰色、普通
21	147-5	須恵器	鉄鉢	T65-a 4　茶灰色土	復口20.4、高(4.9)	(外)ナデのちヘラ磨キ、ヘラ削りのちヘラ磨キ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通、鉄分付着
22	8	須恵器	鉄鉢	R63-d 3　暗灰色粘質土	高(2.4)	(外)ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(中)、灰白色、生焼
23	148-2	須恵器	壺蓋	S63-b 4　暗灰色粘質土	高(2.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
24	147-15	須恵器	すり鉢	S63-d 1　暗灰色粘質土	復底10.0、高(4.0)	(外)回転ナデ、叩キのちナデ、竹管数7個。(内)剝離により不明。	砂粒(含)、灰色、普通
25		須恵器	壺	R61-d 2、4　赤褐色砂礫	復口13.5、高(3.2)	(外内口)横ナデ。(外体)擬格子叩キ。(内体)同心円叩キ。	砂粒(含)、白色、生焼
26	147-16	須恵器	平瓶取手	T63-a 2　茶灰色土	残存6×3.5	ヘラ削り。	精緻、灰白色、普通、自然釉
27	9	須恵器	鉢	T 64-b 2　茶灰色土	復口38.2、高(5.0)	(外)磨き擬格子叩キのちナデ。(内)回転ナデ、叩キのちナデ。	砂粒(細)、オリーブ黒色、普通
28		須恵器	壺	T63-c 2　暗灰色粘質土	復口25.0、高(6.3)	(外・内)ナデ。	密・砂粒(含)、灰色、堅緻
29		須恵器	壺	淡茶褐色砂質土	復基 7.6、復底 9.0、高(2.9)	(外・内)ナデ。	密・砂粒(含)、灰色、普通、自然釉

SDN 2 上層出土 8 世紀須恵器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
46-1	147-17	須恵器	坏蓋	SDN 2　T63-b 4　茶黒色土	復口 9.0、高(1.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通、釉
2	18	須恵器	坏蓋	SDN 2 東岸　S63-d 4　暗灰黒色土	復口10.3、高(1.6)	(外天上)ヘラ削り。(外天下・口)回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
3	20	須恵器	坏蓋	SDN 2　黒褐色粘質土	高(1.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
4	22	須恵器	坏蓋	SDN 2　S64-c 1　黒灰色粘土	復口10.3、高(1.2)	(外・内)回転ナデ。(外)沈線。	砂粒(含)、灰色、普通
5	21	須恵器	坏蓋	SDN 2　黒褐色粘質土	高(1.8)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
6	25	須恵器	坏蓋	T64-a 3　茶褐色土	つまみ径2.4、高(1.3)	(外・内)ナデ。	密・砂粒(微)、灰白色、良好
7	19	須恵器	坏蓋	SDN 2　S63-d 4　茶黒色土	復口17.6、高(1.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
8	27	須恵器	坏蓋	SDN 2　T64-a 1　茶黒色土	復口12.8、高(0.8)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
9	23	須恵器	坏蓋	SDN 2　T63-b 4　茶黒色土	復口12.0、高(1.6)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
10	24	須恵器	坏蓋	SDN 2　S63-d 4　暗紫灰黒色土	復口17.8、高(1.4)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
11		須恵器	坏蓋	SDN 2　T63・64　茶黒色土・茶灰色土	復口25.4、高(2.7)	(外)ヘラ削り、回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、良好
12	147-26	須恵器	坏蓋	SDN 2	復口17.8、高(1.3)	(外)ヘラ削り、回転ナデ。(内)不整方向のナデ、カキメ。	砂粒(含)、灰白色、普通
13	148-1	須恵器	坏蓋	S63-d 2、4　暗灰黒色土	復口16.9、高 2.4	(外)回転ナデ、ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、生焼
14	147-28	須恵器	坏蓋	SDN 2　淡茶褐色砂質土	復口12.4、高(1.4)	(外)ヘラ削り、回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、生焼
15	29	須恵器	坏蓋	SDN 2　T63-b 2　黒灰色砂礫	高(1.7)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
16		須恵器	坏	SDN 2　S63・64　黒灰色砂礫	復口 8.6、高 2.5	(外体下)ヘラ削り。(外体上・口)回転ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(微)、灰白色、普通
17	147-31	須恵器	坏	SDN 2 上面　T63-b 2　茶褐色土	高(1.3)	(外)ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
18		須恵器	坏	SDN 2　灰褐色砂質土	復口12.4、高 3.6	(外口・体)回転ナデ、底部ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
19		須恵器	坏	SDN 2　濃黒茶色土	復口12.4、高 2.6	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、良好
20		須恵器	坏	SDN 2　T64-a 3　茶黒色土	復口13.2、高 3.2	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、やや生焼
21		須恵器	坏	SDN 2　T63-a 3　茶黒色土	復口12.0、高(3.2)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
22	148-3	須恵器	坏	SDN 2　黒褐色粘質土	復口15.4、高 3.4	(外)回転ナデ。(内)不整方向のナデ?	砂粒(含)、灰白色、普通
23	147-39	須恵器	高台付坏	SDN 2　T63-b 2　茶黒色土	高台 6.0、高(1.8)	(外)ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
24	34	須恵器	高台付坏	SDN 2　T63-d 2　茶黒色土	高台 6.8、高(1.7)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
25	32	須恵器	高台付坏	SDN 2 上面　T64-a 3　茶褐色土	高台10.0、高(1.6)	(外底)ヘラ削り後ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
26	148-4	須恵器	高台付坏	SDN 2 上面　T64-a 3　茶褐色土	復口13.8、高台10.4、高 3.7	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
27	147-30	須恵器	高台付坏	SDN 2　T63-d 2　暗灰色粘質土	高台13.6、高(2.8)	(外基)粘土のつぎめ。(内)不整方向のナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
28	33	須恵器	高台付坏	SDN 2　黒褐色粘質土	高台10.8、高(1.6)	(外)ヘラ削り。(外基)粘土つぎめ。(内)ナデ?	砂粒(含)、灰色、普通

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
46－29		須恵器	高台付坏	SDN 2　T64-c 1　茶黒色土	復口16.8、高台11.0、高 5.4	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
30		須恵器	高台付坏	SDN 2　S63-d 4　茶黒色土	復口16.4、高台12.6、高 5.4	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
31	147-36	須恵器	坏	SDN 2　S63・64　黒灰色砂礫	復口12.7、高(3.4)	(外体上)回転ナデ。(外体下)ヘラ削り。(内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、暗緑灰色、普通
32	35	須恵器	皿	SDN 2　T64-a 3　茶黒色土	復口17.2、高(2.2)	(外・内)ナデ。	精良・砂粒(含)、青灰色、普通
33	148-12	須恵器	鉄鉢	SDN 2　暗灰色粘質土	復口22.0、高(5.5)	(外)回転ナデ。(内)回転ナデ、粘土のしわ。	精良・砂粒(含)、灰色、普通
34	147-43	須恵器	鉄鉢	SDN 2 上面　T64-b 4	高(2.2)	(外)ヘラ削りのちナデ、左回り。(内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、灰白色、やや堅緻
35		須恵器	広口壺	SDN 2　S64-c 3　茶灰色土・茶黒色土	復口17.0、高(5.1)	(外・内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、緑灰色、普通
36	147-37	須恵器	壺蓋	SDN 2　T63-b 4　茶黒色土	復口11.9、高(2.9)	(外・内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、灰白色、普通
37	38	須恵器	有蓋短頸壺	SDN 2　S63-d 4　茶黒色土	高(4.7)	(外)回転ナデ。(内)ナデ(ヘラ削りのちナデ?)。	精良・砂粒(含)、灰白色、やや堅緻、釉
38		須恵器	壺	SDN 2　淡茶褐色砂質土	復底 9.0、高(12.5)	(外)回転ナデ、ヘラ削り右回り、ナデ。(内)回転ナデ、粘土のつぎめ?	密・砂粒(細)、灰色、普通、自然釉
39		須恵器	短頸壺	SDN 2　T63・64　茶黒色土・茶灰色土	高(9.8)	(外)回転ナデ、沈線。(内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、灰色、やや軟
40	148-9	須恵器	壺	SDN 2 上面　T63-b 4	復底13.0、高(5.3)	(外・内)回転ナデ。(断)脚部接合の粘土つぎめ。	密・砂粒(含)、灰白色、普通
41		須恵器	壺	SDN 2　T 64-a 1　茶黒色土	復口 4.2、高(2.3)	(外・内)回転ナデ。	精良・雲母・砂粒(含)、灰色、普通、緑色釉
42	148-6	須恵器	壺	SDN 2　T63-d 1　茶黒色土・淡茶褐色砂質土	復底 3.4、高(5.6)	(外体)回転ナデ。(外底・高台)ヘラ削り。(内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、灰色、堅緻、自然釉
43	7	須恵器	壺	SDN 2 上面　T63-d 2	復底 3.8、高(2.9)	(外体)ヘラ削りのちナデ。(外底)糸切り。(内)回転ナデ。	密・砂粒(細)、にぶい赤褐色、普通
44	147-42	須恵器	台付壺の台?	SDN 2　S63・64　黒灰色砂礫	復底 9.8、高(2.5)	(外・内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、褐灰色、普通
45	41	須恵器	鉢	SDN 2 上面　T63-b 4	復底11.4、高(2.2)	(外口)回転ナデ。(外体)ヘラ削り。(断)粘土つぎめ。	精良・砂粒(含)、灰色、やや軟質
46	40	須恵器	鉢	SDN 2　S64-c 1　黒灰色粘土	復底10.6、高(2.4)	(外体)回転ナデ。(外底)ヘラ削り。(内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、灰色、普通

包含層出土 8～9 世紀土器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
47－1	149-15	土師器	蓋	T63-c 1　暗黄灰色砂質土	つまみ2.6、高(2.1)	(外)ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、橙色、普通
2	150-3	土師器	皿	T64-a 2　暗灰茶色土	復口14.0、高 2.3	(外体下)指オサエ。(外体上・内)回転ナデ。	砂粒(含)、浅黄橙色、普通
3	149-14	土師器	壺or甕	T65-a 1　茶灰色土	復口9.8、高(3.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色・橙色、普通
4	21	土師器	堝の取手部	暗灰色粘質土	高(4.5)	(外)指オサエ。(内)ヘラ削り。	砂粒(含)、灰白色、普通
5	150-4	土師器	甕	T64-d 1　暗灰色粘質土	復口23.3、復胴21.1、高(17.3)	(外口)ナデ。(外体)ハケメ。(内)剥離激、ヘラ削り?	砂粒(含)、明褐色、普通
6	149-3	須恵器	甑	R65-c 1	復口23.4、高(9.4)	(外)平行叩キ。(内)同心円叩キ。	砂粒(含)、灰白色、普通
7	9	須恵器	甑	R61-d 2　茶褐色砂質土	復底13.0、高(7.6)	ナデ。(外体下)指オサエ。(内体下)ヘラ削りのちナデ。	砂粒(含)、明緑灰色・黄褐色、普通
8	6	須恵器	甑	R64-c 2　茶灰色土	復底16.0、高(3.5)	(外体)平行叩キ、ヘラ削り。(内)同心円叩キ、回転ナデ。	精良・砂粒(含)、赤褐色・紫灰色、普通
9	8	須恵器	甑	T65-a 2　茶灰色土	高(5.5)	(外)指オサエ。(内)ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
10	20	土師器	甑	T65-c 1　茶灰色土	復底14.3、高(9.2)	(外)平行叩キ。(内)ナデ。	砂粒(含)、橙色、軟質
11	4	須恵器	甕or壺	T63-c 2　暗灰色粘質土	復口11.6、高(3.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、暗青灰色、普通
12		須恵器	埦or鉢	T63-c 2　暗灰色粘質土	復口11.6、高(3.9)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、良好、鉄分付着
13		須恵器	甕or壺	T65-d 1　茶灰色土	復口12.4、高(4.6)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
14		須恵器	壺	R64-c 4　暗灰茶色土	復口11.0、高(4.4)	(外・内)回転ナデ。(外頸下・内基)粘土のつぎめ。	砂粒(含)、灰色、普通、自然釉
15	149-16	黒色土器	埦	S63-d 4　暗灰茶色土	復口12.8、高(3.4)	(外)横ナデ。(内)横ナデ。	砂粒(含)、褐色、普通
16		黒色土器	埦	S63-d 2　茶灰色土	復底 7.0、高(3.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、黒褐色、普通
17	149-18	黒色土器	埦	R61-d 4　茶褐色砂質土	復底 9.0、高(1.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、黒色・橙色、良好
18	19	黒色土器	埦	S65-a 4　茶灰色土	復底 8.6、高(1.5)	(外・底)ヘラ削り。(外体・内)回転ナデ。	砂粒(含)、黒色・赤褐色、普通
19	17	黒色土器	鉢	S65-a 1　茶灰色土	復口17.2、高(5.2)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、黒色・淡橙色、普通
20	22	黒色土器	鉢	S 65-a 3　茶灰色土	復底11.4、高(2.8)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、黒色・明赤褐色、普通
21		須恵器	甕	S65-d 3　茶灰色土	復口19.0、高(6.5)	(外)ナデ。(外屑)カキメ。(内口)ナデ。(内屑)叩キ。	砂粒(含)、灰色、普通
22	149-2	須恵器	甕	T63-d 2　黒褐色土上面	口20.0、高(2.4)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、黄灰色、生焼
23	1	須恵器	甕	S61-b 2　茶黒色砂質土	復口39.2、高(3.2)	(外)平行叩キ後ナデ。(内)ナデ。	密・砂粒(含)、黒褐色、普通
24	5	須恵器	甕	T64-a 2　暗灰色粘質土	復口22.0、高(4.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
25	7	須恵器	甕	T65-d 1　茶灰色土	復口27.2、復基 4.4、高(4.4)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、良好、自然釉

SDN 2 出土須恵器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
48－1	149-11	須恵器	甕	SDN 2	復口10.6、高(5.1)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
2		須恵器	甕	SDN 2　S64-c 3、4　暗紫灰色粘質土	復口15.6、高(2.8)	(外頸上)叩キのちナデ。(外頸下)カキメ。(内)回転ナデ。	精良・砂粒(含)、緑灰色、普通

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
48－3		須恵器	甕or横瓶	SDN 2　T63-d 1　茶黒色土	復口19.4、高(3.6)	(外体)叩キ後カキメ。(内体)叩キ後ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通、自然釉
4	149-13	須恵器	甕	SDN 2　S63-d 2　暗紫灰黒色土	復口53.4、高(5.2)	(外体)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
5	12	須恵器	高台付壷	SDN 2	復底22.0、高(3.0)	(外・体)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、生焼
6	10	須恵器	壺	SDN 2　S64-c 3　茶黒色土	復底13.8、高(2.6)	(外底)ナデ後ヘラ削り。(内)粗いナデ。	密・砂粒(含)、緑灰色、普通

須恵器硯

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
49－1	149-25	須恵器	二面硯	S65-c 2　茶灰色土	縦 7.6、横 7.7、高(1.7)	(小口・側面・仕切)ヘラ削り。(底)ナデ。脚部欠失。	密・砂粒(含)、青灰色、良好、(海)使用痕
2	148-11	須恵器	硯	R65・S64　暗灰色粘質土・紫灰色粘質土	直径11.8、脚14.0、高(5.8)	(外・内)ナデ。	密・砂粒(含)、青灰色、良好、使用痕
3	10	須恵器	硯	T65-c 1　暗灰色粘質土	直径22.1、高(4.0)	(外脚)ナデ。(内天)不整ナデ。(内)回転ナデ。	密、灰色、良好、自然釉、未使用

SDN 2 出土土師器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
50－1	150－1	土師器	坏	SDN 2 上面　T64-a 1	復口15.0、高(3.2)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、橙色、良好
2	151－4	土師器	坏	SDN 2　T64-c 1　茶黒色土	復口13.6、高(2.7)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、橙色、普通
3	7	土師器	坏	SDN 2 上面　S64-c 1・3　茶褐色土	高(2.3)	(外)回転ナデ。(外体下)指オサエ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、橙色、普通
4	3	土師器	埦	SDN 2　T64-a 2　茶黒色土	復口12.4、高(2.0)	(外・内)回転ナデ？	砂粒(含)、淡橙色、普通
5	6	土師器	埦	SDN 2　T64-a 1　茶黒色土	復口13.8、高(13.5)	(外・内)剝離著しく調整観察不可能。	砂粒(含)、橙色、普通
6	8	土師器	皿	SDN 2 上面　S63-d 2　茶褐色土	復口15.4、高(1.7)	(外)回転ナデ。(外体下)指オサエ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰黄褐色、普通
7	1	土師器	皿	SDN 2　T63-d 1　茶黒色土	復口16.4、高(2.2)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、赤褐色、普通
8	5	土師器	皿	SDN 2　T64-a 1　茶黒色土	復口21.2、高(3.0)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、橙色、普通
9	2	土師器	皿	SDN 2　T63-b 4　黒灰色砂礫	復口22.6、高(2.2)	(外)回転ナデ不調整？。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、淡橙色、普通
10	15	土師器	甕	SDN 2　S64-c 1　茶黒色土	復口21.6、高(1.6)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
11	18	土師器	甕	SDN 2	復口21.4、高(2.9)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、浅黄橙色、普通
12	150－2	土師器	甕	SDN 2	復口20.2、高(5.4)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、浅黄橙色、普通
13	151-13	土師器	甕	S64-c 3、4　茶灰色土・茶黒色土	復口24.4、高(2.1)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(中)、橙色、普通
14	17	土師器	甕	SDN 2　S63・64　暗灰黒色土・茶黒色土	復口27.0、高(3.8)	(外)回転ナデ。(内)回転ナデ、ヘラ削り、カキメorハケメ。	砂粒(含)、淡橙色、普通
15	16	土師器	甕	SDN 2　S64-c 1　茶黒色土	復口28.0、高(6.0)	(外)回転ナデ、指オサエのちヘラ削りのち横ナデ。(内)回転ナデ、ヘラ削り。	砂粒(中)、橙色、普通
16	12	土師器	甕	SDN 2　S64-c 3　黒灰色土	復口14.6、高(2.4)	(外)回転ナデ。(内)ハケ？	砂粒(含)、にぶい橙色、普通
17	150-11	土師器	甕	SDN 2　黒褐色粘質土	復口14.2、高(5.3)	(外)指オサエのちナデ。(内)指オサエ、削り？ナデ。	砂粒(含)、にぶい橙色、普通
18	151-14	土師器	甕	SDN 2	復口12.6、高(4.1)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(中)、橙色、普通
19	11	土師器	甕	SDN 2　T63-b 4　茶黒色土	復口16.4、高(1.6)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、橙色、普通
20	10	土師器	甕	SDN 2　T64-c 1　茶黒色土	復口16.0、高(2.4)	(外)回転ナデ。(内)ハケメ。	砂粒(含)、浅黄橙色、普通
21	9	土師器	甕	SDN 2　T64-a 1　茶黒色土	高(4.8)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、橙色、普通

施釉陶器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
51－1		瀬戸焼	壺	S64-d 3　暗灰色粘質土	高(4.4)	(外・内体下)回転ナデ。(内体上)指オサエ。	砂粒(含)、淡灰褐色
2	149-23	緑釉陶器	皿	T63-b 4　茶灰色土	底 5.4、高台 6.4、高(1.9)	(外高台)削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、(高台内)施釉
3	24	緑釉陶器	皿	S63-d 3　暗灰色粘質土	復底 5.8、復高台6.6、高(1.3)	(外高台)削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、堅緻

中世土師器・瓦器・須恵器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
52－1	150－5	土師器	小皿	S65-b 3　茶灰色土	復口 7.2、高 1.5	(外口)横ナデ。(内)ナデ。	砂粒(含)、淡橙色、普通
2	6	土師器	皿	T64-a 1　暗灰色粘質土	復口 8.0、高 1.3	(外口)ナデ。(外底)指オサエ。(内)ナデ。	砂粒(含)、淡橙色、普通
3	7	土師器	皿	R63-d 3　灰白色礫	復口 7.8、高 0.7	(外口)ナデ。(外底)指オサエ。(内)ナデ。	砂粒(含)、灰褐色、普通
4	10	土師器	皿	R65-c 4　暗灰色粘質土	復口 7.0、高(0.8)	(外口)ナデ。(外底)指オサエ。(内)ナデ。	砂粒(含)、淡黄色、軟質
5	8	瓦器	皿	S63-d 4　暗灰色粘質土	復口 8.4、高 1.4	(外体)指オサエ。(内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、淡黄色・灰色、普通
6	9	瓦器	皿	T65-a 4　茶灰色土	復口 8.0、高 1.0	(外体下)指オサエ。(内)回転ナデ。	密・砂粒(含)、灰白色・暗灰色、普通
7	12	瓦器	皿	T64-a 3　暗灰色粘質土	復口10.2、高 1.9	(外体下)指オサエ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色・黄褐色、普通
8		瓦器	埦	S64-c 4　茶灰色土	復口15.0、高(4.2)	(外体下)指オサエ。(内体下)ヘラ削キ。(内底)不明。	砂粒(含)、灰白色、淡黄色、普通
9		瓦器	小埦	S65-b 1　茶灰色土	復口 7.0、高(2.4)	(外)回転ナデ。(内体下)暗文。	密、暗灰色、普通
10	150-13	瓦器	皿	S64-b 3　暗灰色粘質土	復口 8.9、高(1.75)	(外体下)指オサエ。(内体)ヘラミガキ。	密・砂粒(含)、灰色・灰白色、普通

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
52 - 11		瓦質土器	土釜	T65-d 4　茶灰色土	推口 6.6、高(3.15)	(外・内)回転ナデ。	密、暗灰色・灰色、普通
12		瓦質土器	土釜	R64-d 4　茶灰色土	復口15.2、高(2.8)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(中)、暗灰色、普通
13		瓦質土器	不　明 土製品	S64-a 3　茶灰色土	残存 5.5×4.0	指オサエ。	砂粒(含)、灰白色・灰色、普通
14		瓦質土器	土釜脚	T63-c 2　暗灰色粘質土	幅1.5×2の楕円形、高(7.5)	縦方向のナデ？	砂粒(含)にぶい橙色、普通
15	153- 1	須恵器	鉢	R65-d 3　暗灰色粘質土	復口24.6、高(4.3)	(外)横ナデ後縦ナデ。(内)横ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
16	2	須恵器	鉢	R64-c 1　暗灰色粘質土	復口24.4、高(3.6)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
17	3	須恵器	練鉢	S64-d 1　茶灰色土	復口26.8、高(4.7)	(外・内)ナデ。(内)すす付着。	砂粒(含)、灰白色、普通
18	4	須恵器	鉢	S64-a 2　暗灰色粘質土	復口25.6、高(3.9)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
19	5	須恵器	鉢	R63-d 3　暗灰色粘質土	復口33.6、高(3.95)	(外)回転ナデ。(内)ハケメ。	砂粒(含)、灰白色、普通
20		須恵器	鉢	S65-a 3　暗灰色粘質土	復口27.4、高(2.75)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(細)、明青灰色、普通
21	150-14	瓦質土器	擂鉢	S65-a 4　茶灰色土	復口30.4、高(4.8)	(外口)回転ナデ。(外体)ヘラ削り。(内)ナデ後擂目7本以上。	砂粒(含)、黄灰色、普通
22	153- 6	瓦質土器	擂鉢	R64-a 2　茶灰色土	復口29.6、高(5.2)	(外頸)ヘラ削り(上から下)。(内頸)擂目。(外・内口)回転ナデ。	密・砂粒(含)、暗灰色、良好
23	7	瓦質土器	擂鉢	T65-a 1　暗灰色粘質土	復口25.6、高(4.3)	(外)回転ナデ後ヘラ削り。(体・内)ナデ後擂目12本。	砂粒(含)、灰黒色、普通
24	8	瓦質土器	甕	T63-b 4　暗灰色粘質土	復口32.6、高(2.0)	(外頸)平行叩キ後ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通
25	9	瓦質土器	甕	R65-c 1　暗灰色粘質土	復口23.8、高(3.2)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(微)、褐灰色、普通
26	10	瓦質土器	甕	T65-c 2　暗灰色粘質土	復口23.2、高(5.5)	(外)ヘラ削り。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、黒色、普通
27	11	瓦質土器	甕	S62-a 2　茶黒色砂礫土	復口28.2、高(4.0)	(外体)平行叩キ。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(細)、灰色、生焼
28		瓦質土器	土釜	T63-d 1　暗灰色粘質土	復口28.8、高(5.9)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白色、軟質

遺構内出土中世土器

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調　焼成・その他)
53 - 1	152- 5	土師器	埦	S61-a 4　Pit85　柱根	高(1.6)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、橙色、普通
2	8	土師器	皿	SDA 2　上面	復口 7.4、復底 5.6、高 1.3	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、淡黄色・橙色、普通
3	4	瓦器	皿	S61-a 4　Pit84　柱根	復口10.3、高(2.3)	(外・内)回転ナデ。(内)暗文すりへって見えない。	砂粒(含)、灰白色、普通
4	11	瓦器	皿	SDN 9	復口 9.0、高 1 4	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通、(内)剝離、黒色付着
5	9	瓦器	埦	SDA 2　上面	復口 9.5、高(1.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、普通、軟質
6		須恵器	練り鉢	SDA 5　上面　暗褐色礫	復口23.4、高(3.5)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青灰色、堅緻、自然釉
7		須恵質 土　器	練り鉢	SDA 5　アゼ 2　灰色粘土	復口15.3、高(3.3)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通、自然釉、剝住
8		土師器	土釜	赤褐色砂質土	復口24.0、高(3.9)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、黄橙色、普通、煤付着
9	152- 6	瀬焼	埚	SE 1　R62-c 3　茶褐色砂礫土	復口28.0、高(3 5)	(外口)回転ナデ。(外体)ヘラ削り。(内)ハケメ。	砂粒(含)、浅黄橙色、普通
10	7	須恵器	羽釜	SE 1　R62-c 3　茶褐砂礫土	口20 0、つば25 0、高(10 2)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、橙色、普通
11		瓦質土器	甕	SDA 5　R62-c 4　灰色粘土	復口22.0、高(3 4)	(外肩)平行叩キのちナデ。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
12		瓦質土器	擂鉢	SDA 5　R62-c 3　灰色粘土	復口22.4、高(4 0)	(外)削り？。(内)回転ナデ。	砂粒(含)、浅黄色、普通
13		瀬焼	鉢	SDA 5　R62-c 3 SE 1 周辺、灰色粘土	復口31 6、高(3 7)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、橙色、普通
14	142-14	備前焼	甕	SDA 5　S62-a 1　灰色粘土	復口37.2、高(6 5)	(外・内)回転ナデ。(内断)粘土のつぎめ。	砂粒(含)、赤褐色、普通、自然釉

中国陶磁器・瀬戸・唐津

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土　色調　焼成　その他)
54 - 1	154- 1	白磁	碗	R64-c 1　灰色礫	復口18.2、高(3.2)	(外体)ヘラ削り。(内)ナデ。	オリーブ灰白色、(断)灰白色
2	2	青磁	碗	R64-c 2　暗灰茶色土	復口15.4、高(3.6)	(外)削りのち施釉。	オリーブ灰色、(断)灰白色
3	7	青磁	碗	S63-b 1　暗灰色粘質土	底 3.8、高(2.55)	(高台)削り。(外・内)高温による釉の変質。	灰白色、(無釉部)灰色
4	8	青磁	碗	R64-c 2　暗灰茶色土	底 3.7、高(1.6)	(外高台)ヘラ削り。	(内)オリーブ灰色、(外断)灰白色
5	5	中国白磁	碗	R64-c 2　暗灰色粘質土	復底 4.3、高(1.3)	(外)ヘラ削りのちナデ。(内)回転ナデ、トチン痕。(外・内)施釉	砂粒(含)、灰白色、堅緻
6	4	白磁	碗	S64-d 3　暗灰色粘質土	復底 4.2、高(1.4)	(外底)ヘラ削り、割り高台。(内)施釉、トチン痕。	砂粒(含)、白色、(高台内)墨書有
7	3	白磁	皿	R65-c 2　茶灰色土	復口 9.6、復底 3.4、高 2.8	(外高台)削り。(内)ナデ。	厚い白釉を施す。
8	6	白磁	皿	R64-d 4　茶灰色土	復底 4.9、高(0.9)	(外)削りのち施釉。(内)白釉。	(外・内)灰白色、(断)白色
9	9	青磁	碗	表採	復底 5.0、高(2.6)	(外高台)削り。(内)ナデ、中央に彫り込み文有り。	淡青緑色釉・黒色微粒
10	156-4-4	青磁	碗	T65-a 1　暗灰色粘質土	復口20.8、復底10.0、高 5.8	(外・内)ナデ。黒色呉須。乳白色の釉が厚い。	(外・内)淡黄色、(断)浅黄橙色
11	154-10	中国染付	碗	R62-c 4　茶灰色粘質土	復底 2.2、高(1.4)	(外・内)ナデ。(外高台・内中央)唐獅子、濃紺呉須施文。	(外・内)灰白色、(断)白色
12	11	中国染付	皿	R62-c 4　茶灰色砂質土	復底 4.6、高(1.35)	(内)濃紺呉須。(高台端部)ヘラによる面取り。	青灰白色、堅緻
13	14	中国染付	碗	S64-d 2　暗灰色粘質土	復底 4.0、高(1.9)	(高台)ヘラ削り。	明緑灰白色、(断)浅黄橙色

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
54-14	154-13	中国染付	碗	T65-a 3　暗灰色粘質土	復底 4.6、高(2.3)	(外高台)ヘラ削り。(外高台・内中央)濃紺呉須施文。	(外・内)灰白色、(断)白色
15	12	中国陶磁	皿	T65-a 4　暗灰色粘質土	復底 0.9、高(0.9)	(外底)ヘラ削り痕。(内中央)唐獅子文。	青緑白色、濃紺の呉須
16	155-17	唐津焼	埦	SE 1　R62-c 3　灰色礫	底 4.4、高(2.0)	(外・内)ナデ。(内中央)象眼。	砂粒(含)、灰黒色、堅緻
17	156-10	唐津焼	埦	R63-c 1　暗灰色粘質土	復底 4.8、高(4.0)	(外体下半・高台)ヘラ削り。	砂粒(含)、鈍い赤褐色、堅緻
18	155-12	唐津焼	皿	SE 3　T62-d 1	復口11.6、高(1.7)	(外・内)横ナデ、施釉(オリーブ黄)。	砂粒(含)、(外)橙色、(断)灰色、堅緻
19	156-1	唐津焼	埦	T65-b 3　暗灰色粘質土	復口11.4、復底 5.3、高 3.3	(外・内体)回転ナデ、施釉(明オリーブ灰色)。	砂粒(含)、(外断)赤褐色、堅緻
20	155-14	唐津焼	埦	T65-a 4　暗灰色粘質土	復底 3.6、高(1.9)	(内)トチン痕。(外・内)回転ナデ、施釉。	砂粒(含)、橙色、堅緻
21	8	唐津焼	埦	R63-c 4　暗灰色粘質土	復口 9.6、高(4.7)	(外体下)ヘラ削り。(その他)回転ナデ。灰白釉。	砂粒(含)、褐色、堅緻
22	16	唐津焼	埦	SE 1　R62-c 3　灰色礫	復底 4.6、高(3.2)	(外台)ヘラ削り。(外・内体)回転ナデ。(外・内体)施釉。	砂粒(含)、(外・内)緑灰色釉
23	156-7	唐津焼	埦	S64-d 3　暗灰色粘質土	復底 5.1、高(4.2)	(外・内)ナデ。	砂粒(含)、灰白釉、堅緻
24	155-20	志野焼	埦	R62-c 4　暗褐色砂礫土	復底 4.9、高(3.6)	(外・内)回転ナデ。(外・内体)施釉。	砂粒(含)、灰白色・黄橙色、堅緻
25	19	唐津焼	埦	T64-b 4　暗灰色粘質土	復底 3.6、高(3.0)	(外)ハケメ唐津。(外・内体)ナデ、施釉。(内)重ね焼き痕。	砂粒(細)、灰色・オリーブ色、堅緻
26	13	唐津焼	壺	SE 1　R62-c 3　灰色礫	復底 5.6、高(2.0)	(外・内)回転ナデ。(外体)黒釉。	砂粒(含)、灰白色・赤褐色、堅緻
27	10	唐津焼	鉢	S63-d 4　暗灰色粘質土	復口26.4、高(6.0)	(外)ハケメ唐津(白、赤褐色)。(外・内)回転ナデ、施釉。	砂粒(含)、(内)灰色、堅緻
28	15	唐津焼	埦	T65-b 1　暗灰色粘質土	復口13.8、高(3.4)	(外・内)回転ナデ。(外下)ヘラ削り。(内)段。灰緑釉。	砂粒(含)、(外)橙色、堅緻
29	11	唐津焼	鉢	T64-d 2　暗灰色粘質土	復口25.2、高(4.4)	(外)ハケメ唐津(オリーブ灰)。(外・内)回転ナデ、施釉。	砂粒(含)、褐色、堅緻
30	9	唐津焼	鉢	T65-a 4　暗灰色粘質土	復口21.0、高(4.4)	(内)象眼、カキメ。(外・内)回転ナデ、灰白釉。	砂粒(含)、(外)赤色、堅緻
31	156-2	唐津焼	鉢	R63-c 1　暗灰色粘質土	底 9.2、高(8.3)	(外体底)横ナデ。(その他外・内)横ナデ。	砂粒(含)、にぶい褐色、堅緻
32	155-18	唐津焼	埦	R62-d 2、4　赤褐色砂礫	復底 8.2、高(4.8)	(内)ハケメ唐津。(外・内体)ナデ、施釉。(外底)ヘラ削り。	砂粒(含)、(外)暗緑灰色
33	4	瀬戸焼	蓋	S63-d 4　暗灰色粘質土	推口11.0、高(1.2)	(外・内)回転ナデ。(外)鉄釉。	精良、暗褐色・灰白色、普通
34	156-8	瀬戸焼	埦	S63-b 2　暗灰色粘質土	復口11.1、高(4.9)	(外)施釉のため調整不明。(内)回転ナデ。(外・内)黒釉。	砂粒(含)、黒褐色、堅緻
35	155-6	瀬戸焼	皿	R63-c 4　暗灰色粘質土	復底 4.4、高(0.8)	(外底面)糸切り痕。(内)緑灰色の施釉。	砂粒(含)、褐色、堅緻
36	5	瀬戸焼	鉢	S65-d 1　茶灰色土	復口18.7、高(3.7)	(外・内)回転ナデ、施釉。	砂粒(含)、浅黄色、堅緻
37	3	瀬戸焼	埦	S63-d 4　暗灰色粘質土	復底 3.3、高(2.7)	(外・内)回転ナデ、鉄釉(暗褐色)。	砂粒(含)、灰白色、堅緻
38	2	瀬戸焼	皿	T65-a 4　暗灰色粘質土	復口15.5、高(1.75)	(外)ナデ。(内)菊花文。	砂粒(含)、浅黄色、堅緻
39	7	瀬戸焼	埦	S63-b 1　暗灰色粘質土	復底 4.5、高(2.6)	(外・内)施釉。(内)回転ナデ。(外)施釉のため調整不明。	砂粒(含)、淡黄色、堅緻
40	1	瀬戸焼	皿	T 65-a 1　暗灰色粘質土	復口12.6、高(2.0)	(外・内)施釉。(内)回転ナデ。(外)施釉のため調整不明。	砂粒(含)、淡黄色
41	156-9	瀬戸焼	埦	R62-c 4　暗褐色砂礫	復底 4.8、高(3.6)	(外・内)ナデ、施釉。	砂粒(含)、浅黄色・灰白色、堅緻
42		常滑焼	甕	SE 1　R62-c 3　暗青灰色粘質土	復底16.8、高(4.9)	(外)指オサエ。(内)ナデ。(内)平滑。	砂粒(含)、褐灰色、堅緻

包含層出土瓦拓影

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
55-1		瓦	軒平瓦	S65-c 3　茶灰色土	長 6.5、瓦当厚 2.5、幅 4.2	(内区)唐草文。(外区)直立縁。(顎)縦ナデ後横ナデ、幅 2.7cm。	砂粒(含)、灰色、普通
2		瓦	軒平瓦	S64・65　茶灰色土	長 3.0以上、幅 5.5以上	(凹)布目。(凸)縄叩キ。(長縁)ヘラ削り後ナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
3		瓦	平瓦	S64-b 2　茶灰色土	推直径14.5	(瓦当文様)連珠文。(外区内縁)圏線。(外区外縁)直立縁。	砂粒(含)、黒色、良好
4		瓦	軒丸瓦	R63-d 4　暗灰色粘質土	推直径15.3	(内外区境)圏線。(外区内縁)珠文。(外区外縁)直立縁。	砂粒(含)、灰白色、良好
5		瓦	軒丸瓦	R64-c 3　暗灰色粘質土	推直径14.5、厚 1.5	(内区)左巴。(外区内縁)珠文。(内外縁境)圏線。(外区外縁)直立。	砂粒(含)、黒色、普通
6		瓦	軒丸瓦	T64-b 4　暗灰色粘質土	直径13.5	(内区)左巴。(外区内縁)珠文。(外区外縁)直立縁。	砂粒(含)、暗青黒色、良好
7	153-16	瓦	平瓦	R63-c 2　灰色砂礫	長13.5、厚 2.0、幅12.0	(凹)布目痕。(凸)縄叩キ。(長縁)ヘラ削り後凹との境をナデ。	砂粒(含)、灰色、普通
8	12	瓦	平瓦	R63-c 2	長 8.0、厚 8.0、幅 2.6	(凹)ナデ。(凸)離れ砂、縄叩キ。(長側面)ヘラ削り。(短側面)自然釉。	砂粒(含)、淡橙色、二次焼成
9	13	瓦	平瓦	R61-c 4	長 9.5、幅8、厚 1.8	(凹)糸切痕、布目痕、模骨痕。(凸)離れ砂。(長縁)削りのちナデ。	砂粒(含)、青灰色、普通
10	15	瓦	平瓦	S63-b 2　茶灰色土	長10.0、厚 1.5、幅 6.0	(凹)細かい離れ砂。(凸)糸切り痕、細かい離れ砂。(長縁)ナデ。	砂粒(含)、淡茶灰色、良好
11	14	瓦	平瓦	S64-c 1　暗灰色粘質土	長16.5、厚 1.5、幅10.0	(凹)平滑ナデ。(凸)粗いナデ。長縁・短縁。	砂粒(含)、黒灰色、良好

砥　石

図番号	図版番号	種　類	遺　構・地　区・層　位	長・幅・厚(cm)　重量	備　　考(石材・その他)
56-1		磨　石	S64-c 3　暗灰色粘質土	5.55×6.17×1.23　　77.0 g	砂岩
2		砥　石	T65-b 3　茶灰色土	5.42×3.55×1.45　　46.4 g	〃
3		砥　石	S65-b 3　暗灰色粘質土	4.76×3.42×2.6　　46.36 g	凝灰岩質砂岩か？

包含層出土石器

図番号	図版番号	種類	遺構・地区・層位	長・幅・厚(cm) 重量	備考(石材・その他)
57		砥石?	S65-a3 紫灰色粘土	20.5×7.55×6.6 114g	砂岩
		硯	S64-d4 暗灰色粘質土	10.4×7.45×1.35 107g	ホルンヘルス

SDA5他出土土器

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
58-1	129-4	弥生式土器	甕	SDN10 S65-d1 灰色砂質土	復口17.8、高(10.5)	(外)ハケメ。(内)指オサエ?。剥離激しく調整不明。	砂粒(含)、浅黄橙色、普通
2		土師器	甕	SDA5 R62-c4 灰色粘土	推基22.6、高(4.3)	(外口)回転ナデ。(外肩)ハケメ。(内肩)ハケメ。	砂粒(含)、黄橙色、普通
3		弥生式土器	甕	SDN9	推基20.0、推体28.0、高(13.5)	(外・内)剥離激しく調整観察不可能。	砂粒(含)、黄色、普通
4	152-12	須恵器	坏	SDN10 d地区	復口14.1、高 4.9	(外)ヘラ削りのちナデ、火だすき痕、ナデ。(内)回転ナデ。	砂粒(含)青灰色、普通
5		須恵器	甕	SDA6 R61-d3 灰褐色土	復口13.2、高(4.35)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、自然釉
6		須恵器	甕	SDN2 S63-d1～4 灰色砂質土	復口20.9、高(2.4)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰白色、やや生焼、軟
7		弥生式土器	甕	STS2 S61-a4 暗茶灰色砂質土	復口14.0、高(2.0)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、浅黄色、普通
8	129-5	弥生式土器	高坏	SDN10 S65-a4	復底 9.0、高(8.8)	(内脚上)シボリメ。(外・内)表面剥落のため調整不明。	砂粒(含)、にぶい褐色、生焼
9	130-6	弥生式土器	壺	SDA4 S64-d4	復体34.0、高(16.5)	(外)ヘラミガキ、ハケメ、ナデ。(内)ヘラ削り、ナデ。	砂粒(含)、淡黄色、煤付着
10		須恵器	甕	SDA5 S62 灰色粘土	復口25.0、高(3.7)	(外頸)カキメ。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、良好
11		須恵器	甕	SDA5 SE1周辺 R62-c3 灰色粘土	復口10.4、高(3.7)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、青黒色、普通、自然釉
12		須恵器	甕	SDA5 R62-d2	復口19.0、高(3.65)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、灰色、堅緻、自然釉
13		須恵器	器台	SDA5 R62-d2付近	復口17.8、高(3.6)	(外頸)ヘラ描直線文。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、明青灰色、良好
14	142-12	須恵器	甕	SDA5 R62-c4 灰色粘土	復口34.0、復基24.8、高(9.6)	(外頸・内基より上)粘土のつぎめ。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)灰色、普通

備前・丹波・信楽・擂鉢

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
59-1	155-21	備前焼	擂鉢	R63-d1 暗灰色粘質土	復口19.0、高(4.6)	(外・内)ナデ。(外口)凹線2条。(内)擂目11本。	砂粒(含)、灰色・暗赤色、堅緻
2	23	備前焼	擂鉢	S64-d3 暗灰色粘質土	復口31.4、高(5.4)	(外体)削り。(内)ナデ後擂目9本。	砂粒(含)、褐色、堅緻
3	22	備前焼	擂鉢	S64-d1 暗灰色粘質土	復口21.4、高(5.5)	(外・内)ナデ。(外口)2条の沈線。(内)擂目9本。	砂粒(含)、黄橙色・橙色、普通
4	24	備前焼	擂鉢	T65-a4 暗灰色粘質土	復口30.2、高(7.0)	(外)ヘラ削り後ナデ。(内)ナデ後擂目10本以上。	砂粒(含)、橙色・黒褐色、堅緻
5	25	備前焼	擂鉢	T64-b4 暗灰色粘質土	推口40.4、高(4.1)	(外)削り後ナデ。(内)ナデ後擂目9本。片口付き。	砂粒(含)、赤褐色・橙色、良好
6	26	備前焼	擂鉢	T64-b4 暗灰色粘質土	推底21.8、高(7.8)	(外)右削り後ナデ。(内)ナデ後擂目10本。	砂粒(含)、にぶい赤褐色、堅緻
7	27	信楽焼	擂鉢	R61-d2、4 赤褐色砂礫	復口29.4、高(2.7)	(外・内)ナデ。(内)擂目4本以上。	砂粒(含)、明赤褐色、堅緻
8	32	信楽焼or丹波	擂鉢	S64-d3 暗灰色粘質土	推口28.6、高(3.9)	(外・内)ナデ。(内)擂目5本以上。	砂粒(含)、明褐色、堅緻
9	28	信楽焼	擂鉢	S65-c2 暗灰色粘質土	復口29.2、高(4.3)	(外・内)ナデ。(内)擂目6本以上。	砂粒(含)、灰色・褐色、堅緻
10	29	信楽焼	擂鉢	T65-a4 暗灰色粘質土	復口23.4、高(3.8)	(外・内)ナデ。(外口)ハケ後2条の凹線。(内)ナデ後擂目6本以上。	砂粒(含)、にぶい褐色・灰色、堅緻
11	31	信楽焼	擂鉢	R63-c4 撹乱	残存最大径35.0、高(5.0)	(外・内)ナデ。(内)凹線後擂目7本。	砂粒(含)、暗赤褐色、堅緻
12	30	丹波焼	擂鉢	S62-a2 灰茶色土(礫まじり)	復口31.0、高(6.8)	(外・内)ナデ。(内)擂目9本。	砂粒(含)、褐色、堅緻、自然釉
13	33	信楽焼or丹波	擂鉢	R63-c4 撹乱	残存最大径32.7、高(7.7)	(外・内)ナデ。(内)擂目6本。	砂粒(含)、褐色、堅緻

湊焼炮烙・火舎・甕

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
60-1	157-12	湊焼	火舎	R61 表土	底(正14.2、横14.3)、体(正18、横17.8)、高 15.8	(外・内)ナデ。(後部)すかし3つ(長さ5.0cm、幅1.3cm)。	砂粒(含)、黄橙色、普通
2		湊焼	炮烙	R61-d2、4 赤褐色砂礫	復口30.0、高(5.4)	(外体)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。(外体)すす付着。	砂粒(含)、黄橙色、普通
3	157-9	湊焼	炮烙	R63-c4 下段水路内 暗灰色粘質土	復口29.5、高(7.8)	(外口・体上)回転ナデ。(外体下)ヘラ削り。(内)ナデ。(外)すす付着。	砂粒(含)、茶褐色、普通
4	7	湊焼	炮烙	R61-d2、4 赤褐色砂礫	復口36.2、高(6.9)	(外口)ナデ。(外底)型作り。(外体下)ヘラ削り。(内)ナデ。把手付。穿孔。	砂粒(含)、黄橙色、普通
5	8	湊焼	炮烙	R61-d2、4 赤褐色砂礫	復口29.2、高(6.0)	(外・体中)ヘラ削り。(外底)型作り。(内)横ナデ。(外)すす付着。	砂粒(含)、茶褐色、普通
6		湊焼	炮烙	R63-c4 暗灰色粘質土	復口25.0、高(4.7)	(外体)ヘラ削り。(その他外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、赤黒色、黄橙色、普通
7		湊焼	炮烙	R61-d2、4 赤褐色砂礫	復口26.9、高(4.7)	(外体下)ヘラ削り。(その他外・内)ナデ。	砂粒(含)、橙色、普通
8		湊焼	釜	S61-b2 茶灰色砂質土	復口16.2、高(5.0)	(外・内)回転ナデ。	砂粒(含)、にぶい橙色、普通
9		湊焼	大甕	R62-c4 茶灰色砂質土	推口72.4、高(7.0)	(外)回転ナデ、叩キ。(内)ハケメはほぼ風化、消失、ナデ。	砂粒(含)、橙色、普通
10		湊焼	埋め甕	SKA23内 R62-c2	復口30.0、高(11.6)	(外体)平行叩キ。(内)指オサエのちハケメ。(外・内口)ナデ。	砂粒(含)、橙色、淡橙色、普通

日本刀・湊焼甕

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
61-1	157-10		鉄刀	防空濠内出土	長64.4、厚(刀身0.5～0.7、基0.8)		目釘穴

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
61 - 2		須恵	甕	R63-c 2　暗灰色粘質土	推口64.0、高(9.3)	(外口)回転ナデ。(外体)平行叩キ。(内)剥離して調整不明。	砂粒(含)、にぶい橙色、普通
3		須恵	甕	落ち込み　S62-a 4　東半部上層	推口50.0、高(14.4)	(外体)平行叩キ。(外口)ナデ。(内)ハケメ後指オサエ、ハケメ。	砂粒(含)、橙色、普通
4	157- 7	須恵	埋め甕	SKA25　暗褐色砂礫土	口70.0、高 77.0	(外体)叩キ後粗いハケ。(下半)粗い指ナデ。(内)横ハケ。(底)型造り。	砂粒(含)、橙色、良好

遺構内出土遺物

図番号	図版番号	種　類	器　種	遺　構・地　区・層　位	法　　量(cm)	成　形　・　調　整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
62 - 1	157- 1	青磁	碗	SKA25内	復底 5.4、高(2.35)	(外・高台内)削り。(その他外・内)ナデ。	明緑灰色、(断)灰白色
2	2	伊万里焼	碗	SKA25内	復底 4.7、高(3.9)	(外底)ヘラ削り後ナデ。(外・内)灰白釉。(外)紺の網目文。	明緑灰色、橙色、(断)灰白色
3	3	備前焼	擂鉢	SKA23内　R62-c 2	復口27.0、高(5.9)	(外・内口)回転ナデ。(内体)擂目。	やや粗・粗砂(含)、赤橙色、普通
4	4	瓦	丸瓦	SKA25　暗褐色砂礫土	残存 8.5×7.5	(凸)横ナデ後部分的縦ナデ。(凹)布目痕。(側縁)ナデ。	片岩・砂粒(含)、黒灰色、普通
5	5	瓦	平瓦	SKA25内	残存10.5×4	ナデ。(側縁)ナデ。	片岩・砂粒(含)、黒灰色、普通
6	156- 3	瓦	軒丸瓦	SKA25内	外縁径13.6	(外区内縁)珠文。(外・内区間)圏線。(内区)左回りの三巴。	砂粒(含)、黒灰色、普通
7	6	伊万里焼	皿	SE 3	復口13.8、復底5.0、高 3.25	(外)削りのちナデ？。(内)ナデ。	(内中央)暗灰青色、絵付
8	157- 6	伊万里焼	仏茶碗	SE 3	復基 2.0、復底 3.5、高(4.8)	ナデ。(外底)削り。(外)草花文。	オリーブ灰白色
9	156- 5	伊万里焼	碗	SE 3	復口10.8、復底 3.6、高 4.8	(外・内)施釉。(内中央)掻き取り。(外)梅の折枝文。	オリーブ灰白色
10		貨銭	寛永通宝	第 1 層黄灰色土	直径 2.3、厚 0.1、穴辺 0.7		
11		貨銭	洪武通宝	R64-d 1　茶灰色土	直径2.25、厚 0.2、穴辺 0.5		

第2章 付 論

1 飯蛸壺形土器をめぐる諸問題

1 はじめに

西浦橋遺跡において出土した須恵器飯蛸壺形土器（以下蛸壺と呼ぶ）について技法と形態の変化を観察し、蛸壺出土遺跡との関係を考えてみたい。蛸壺全てを観察した訳ではないが、一応の見通しと問題整理を行っておく。

漁具としての蛸壺の生産と、消費をめぐる諸現象を理解しようとする試みは、森浩一[1]、森茂[2]、和田晴吾[3]等によって行われてきている。しかし、生産と流通を蛸壺の技法・形態から追求する仕事は「陶邑」出土蛸壺の分析を経なければならず、問題は進展していない。膨大な「陶邑」の資料を観察する前に、周辺遺跡から出土した資料分析を事前に積み上げ、「陶邑」の資料への見通しを付けておく事は無益な事ではないだろう。

2 蛸壺の技法と形態

西浦橋遺跡出土蛸壺はつまみが付いた釣鐘形のものである。その天井部内面の技法は、回転ナデ・絞り・小原体による圧痕・中心突出の4類型に分けられた。外面調整はつまみ貼り付け後ユビヲサエ、又はナデ調整が認められ、外面は磨滅し、使用されていた事も窺えた。口縁部は、内彎するものと、直口するものがあり、強いナデにより凹部を形成するものもみられる。法量は、つまみが太く、上方から見て、円形の中心に一文字につまみが付着するものが大型で、つまみが体部に較べ大きく、体部が細長く小型のものがみられる。他につまみ付着部がなで肩になったものもみられる。これらの蛸壺の差異は何を物語るのであろうか。

3 他遺跡出土蛸壺の概観

A 集落跡出土蛸壺

和泉地方では、堺市から上町台地にかけてを北端とし、泉佐野[4]・泉南市[5]・阪南町[6]にかけて出土している。大阪市内や貝塚以南では、6世紀から8世紀にかけて土師器の蛸壺と同時に出土する例が多い。しかし、大鳥郡から和泉郡については、須恵器蛸壺がほとんどである。このうちまとまって出土している例としては、四ツ池[7]、水源池[8]、大園[9]、豊中[10]、湊遺跡[4]が知られる。大園出土例では、ＳＤ303の39個体中、5型式が抽出された[11]。しかし、法量はほぼ均一で、時期的にも6世紀後半代と考えられる。つまり、集落で使用され、放棄された時は一連の蛸壺縄であったが、生産される際、系譜の異る窯で焼かれたか、複数工人による製作である可能性が考えられる。これらの生産が、中央政権の監督下で直接的に行なわれ、その流通についても強い規制があったと考える事はやや無理があろう。

B 窯跡出土蛸壺

第35表　蛸壺形土器出土地名表(1)

遺跡名	Y	PH	PS 6C	PS 8C	中世	遺跡名	Y	PH	PS 6C	PS 8C	中世
泉北地区						㉗堺市陶邑高蔵寺(TK) 209			○		
①堺市土師			○○			㉘〃 〃 7			○		
② 〃 金岡				○		㉙〃 〃 217			○		
③ 〃 船尾西			○			㉚〃 〃 314				○	
④ 〃 大和川今池			○			㉛〃 〃 230-Ⅰ				○	
⑤ 〃 浅香今池			○○			㉜〃 〃 230				○	
⑥ 〃 四ッ池	○		○○			㉝〃 〃 43-Ⅰ			○	○	
⑦ 〃 大仙			○		○	㉞〃 陶器山(MT) 5-Ⅰ				○	
⑧ 〃 浜寺諏訪・森町東二丁		○	○		○	㉟〃 〃 9				○	
⑨ 〃 反正陵			○?			㊱〃 〃 217				○	
⑩ 〃 旧市内			○		○	㊲〃 〃 93				○	
⑪ 〃 翁橋			○			㊳〃 〃 26				○	
⑫ 〃 長曽根			○	○		㊴〃 栂美木多(TG) 51			○		
⑬ 〃 田出井	○					㊵〃 〃 63			○		
⑭ 〃 三国丘	○					㊶〃 〃 68				○	
⑮ 〃 北花田	○					㊷〃 〃 10-Ⅰ			○		
⑯ 〃 万崎				○		㊸〃 〃 30-Ⅱ			○		
⑰ 〃 万崎池	○			○		㊹堺・和泉市光明池(KM) 102				○	
⑱ 〃 西浦橋			○	○		㊺〃 〃 234			○		
⑲ 〃 菱木下			○			㊻〃 〃 35				○	
⑳ 〃 鶴田池東			○	○		㊼〃 〃 268			○		
㉑ 〃 鈴の宮	○					㊽〃 〃 22				○	
㉒ 〃 羽衣砂丘		○	○			㊾〃 〃 38-Ⅰ				○	
㉓ 〃 石津		○				㊿〃 〃 51				○	
㉔ 〃 塔塚			○			51〃 〃 34				○	
㉕ 〃 浜寺公園駅	○					52〃 〃 31				○	
㉖ 〃 百舌鳥陵南			○陁			53和泉市梨本池No.155				○	

第35表　蛸壺形土器出土地名表(2)

遺跡名	Y	PH	PS			遺跡名	Y	PH	PS		
			6C	8C	中世				6C	8C	中世
㊴和泉市谷山池長池№62			○			⑳泉南市光平寺				○	
㊵高石市大園		○	○			㉑阪南町田山		○大	○	大	
㊶〃水源池			○			㉒〃蓮池				大	
㊷〃伽羅橋	○	○	○			㉓岬町淡輪		大？			
㊸〃伽羅橋東						摂津					
㊹和泉市池上	○		○			㉔尼崎市上ノ島	○				
㊺〃観音寺山	○					㉕〃田能	○				
㊻〃和気	○					㉖〃庄下川	○				
㊼〃信太寺			○			㉗〃金楽寺					
㊽〃古池北		○				㉘〃西長州東					
㊾泉大津市七の坪	○					㉙〃中食満					
㊿〃豊中古池			○			㉚〃藻川					
⑥〃池浦	○					㉛大阪市森の宮	○				
⑦〃穴師			○			㉜〃浪速区敷津町	○	○			
⑧〃二田			○			㉝〃遠里小野		○	○	○	
泉南地区						㉞〃桑津		○	○	○	
⑨岸和田市米の池			○			㉟〃難波貝層遺跡		○			
⑩〃吉井一の坪			○			㊱〃住吉第三地点					
⑪〃天の川						㊲〃瓜破	○				
⑫〃小寺						㊳〃淀川区加島					
⑬〃下野町						㊴〃阿倍野区帝塚山					
⑭〃下池田	○					⑩〃高麗橋					
⑮〃土佐	○	○	○			⑩〃山ノ内		○			
⑯貝塚市畠中		○	○	○		河内					
⑰泉佐野市湊		大○	○		大○	⑫東大阪市日下		○			
⑱泉南市男里	○	○	○		大	⑬〃巨摩・瓜生堂	○				
⑲〃海会寺			○			⑭〃山賀					

第35表　蛸壺形土器出土地名表(3)

遺跡名	Y	PH	PS 6C	PS 8C	中世	遺跡名	Y	PH	PS 6C	PS 8C	中世
(105)八尾市亀井	○					(118) 岡山県					
(106)柏原市船橋			○	○		(118)倉敷市広江浜					
(107)松原市大堀		○				(119)玉島市長尾			○		
(108)美原町真福寺		○	○刷毛目			山口県					
(109)藤井寺市土師の里		○(土鈴？)				(120)松山窯跡					
(110)羽曳野市誉田白鳥		○				福岡県					
兵庫県						(121)天観寺山窯2区1号					
(111)淡路島沖の島古墳群						(122)　〃　3区2号	○K？				
(112)姫路市大津区						(123)多々良蔵ノ元遺跡					
(113)播磨大中	○					(124)下山門（福岡市西区）	○K？		○		
(114)北淡町育波浜田						(125)西新町					
(115)津名土器屋						(126)志賀島		○			
(116)高砂土器屋		○		○		愛知県					
香川県						(127)瓜郷	○→？				
(117)櫃石島											

Y ：弥生時代
K ：古墳時代
PH：土師器
PS：須恵器
大 ：大蛸壺

※各時期の新旧を小○印の位置により表現した。

蛸壺は「陶邑」では6世紀代に栂・美木多地区を中心に焼成されていた。[12] 光明池地区や、陶器山地区では8世紀のものが多い。6世紀代のものは、比較的大型で、個体差が大きく、プロポーションがやや異なる。一般に、体部中央に最大腹径がくる。器高は8～12cm位で、口径は3.5～6.5cmのものが多い。7世紀代のものは、明確に把握し難いが、6世紀代のものに比べ、最大腹径がつまみに近づき、ほぼ円筒形を呈する。8世紀代のものは、器高が低くなり細身になる。肩部が張り、つまみが体部に比べ大きくなる。粘土紐巻き上げ痕が見えにくくなり、みずびき成形を思わせるこまかい凹凸が内外面にみられる。これらの特徴が技法と出土状況に合致すれば、集落出土蛸壺との関係が明らかになり、蛸壺供給のネットワークが把握されるであろう。また窯跡でのありかたについても、支群毎に分析すれば、6世紀代のありかたと、8世紀代の違いが見ら

れる。簡単に説明すると、6世紀代には数十の窯跡群の中で、比較的長期間操業された所で焼かれている場合（ＫＭ234、ＴＧ30―Ⅰ）と１～2時期の短期間操業の中で焼かれるものがみられる（ＴＧ68、63―Ⅰ、51、10―Ⅰ・ＫＭ268他）。8世紀代のものは、ＴＧ・ＫＭ・ＭＴ・ＴＫ地区でも谷奥部に集中的にみられる。そして、そこでは大概、各種の土器や瓦、陶棺・硯等が焼成され、窯構造に舟底ピットを持っている。現時点で管見に触れた資料は以上の如き状況である。

4　若干の課題

須恵器生産と流通・消費に関して蛸壺を中心にメモ的に述べてきた。特殊な用途の製品は特徴的で、観察し易いので今後、瓦や、陶棺、壺、鉢、土錘、硯等について観察していかねばならない。先ず生産地での状況を見なければならないが、困難が多いので、与えられた資料から考える事にした。そこで気付いた事は、千基近くあると言われる「陶邑」の内容について、田辺昭三[13]の段階から余り進展していない事である。5世紀代から9世紀に至る「陶邑」の歴史が一般的な形で提示されて以後その特殊性や個性についての論述が余り見られず、胎土分析、編年の細分と、操業開始時期の問題が議論されている状況である[15]。蛸壺の分析からより個性的な歴史を描く第一歩が踏み出せるかもしれない。ひとつは生産集団の問題であり、それを消費する集団内部の問題がある。次にそれらの集団に製品を供給する媒介者の位置が問題になってくる。古墳時代と奈良時代の須恵器蛸壺の分布と土師器蛸壺の分布の変容をどのように解釈し、また平安時代以降の蛸壺生産及び蛸壺漁の内容をどう検証すべきか[16]。生産手段の生産と生産手段の分配と所有は、古墳から奈良時代にかけていかに変化したのであろうか。今ここでその結論は述べ得ないが、少なくとも①須恵器生産の開始期から蛸壺は生産され、大阪湾沿岸集落に供給されていた。いわゆる一元的体制、ヤマト王権の工人支配のイメージにそぐわない、在地的な流通がみられるのである。②次に6世紀後半代の分布についてはやや遠距離にある村々では土師器の蛸壺もみられ、「陶邑」の供給範囲は蛸壺に限って言えばそれ程広くないという事である。③「陶邑」内での状況も、各尾根毎の変遷に個性があり[17]、蛸壺他の製品の焼かれ方も色々な問題が考えられる事、その中で、「陶邑」の生成、展開、発展、消滅の過程を位置付け直す必要に迫られている。④土器生産の比重がどの程度、時の政権に意識されていたのか。等々、思いつくままにあげ出すときりがないのである。考古学は遺構・遺物を分析にする学問である。その場合、形態・法量・状況・量を重んじる場合も多いが、それは時間的累積の結果であり、土器以外に消滅したものも多いはずである。またそれ故にそれらの痕跡から導びかれるイメージの飛躍や、思い付きも大切になるが、あくまでも考古資料に立脚した仮説でなければならない。そうした仮説は遺構・遺物により検証可能で、新たな仮説が生み出されるものである。今後の検証作業の第一歩として、記述しておく。

註

1）　森　浩一「大阪湾沿岸における飯蛸壺形土器とその遺跡」「古代学研究２号」　1950

2）　森　　茂「付１、漁撈遺物出土についての一考察」　府教委「大園遺跡Ⅵ」　1981

3） 和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『小林行雄古稀記念論文集「考古学論考」』 1982
4） 泉佐野市教委（鈴木）「泉佐野市所在遺跡発掘調査概要Ⅰ」 1981
5） 泉南市教委（仮屋）「男里遺跡発掘調査報告書」 1978～1982
6） 大阪文化財センター「田山遺跡発掘調査報告書」 1983
7） 堺市教委「四ツ池遺跡発掘調査概要」 1976～1980
8） 渡辺昌宏氏の御教示による。
9） 大阪府教委「大園遺跡発掘調査概要１～Ⅵ」 1974～1981
大園遺跡調査会「大園遺跡発掘調査概要１～Ⅵ」 1974～1982
10） 泉大津市「豊中遺跡発掘調査概要」 1977
豊中・古池遺跡調査会
11） 大阪府教委、大園遺跡発掘調査概要Ⅴ 1981
12） 大阪府教委「陶邑Ⅰ～Ⅴ」 府教委・企業局「陶邑」 1976～1982
13） 田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園 1966
15） 中村 浩「須恵器生産の諸段階一地方窯成立に関する一試考一」考古学雑誌第67巻第１号 1981
16） ６世紀後半代の蛸壺の所有を物語る可能性を有するものとして、府教委（山本）「大園・古池北遺跡発掘調査概要」に報告された掘立柱建物（倉庫？）の周辺に多数の蛸壺が出土する状況を提示しておく。
17） 芝野圭之助「陶邑をめぐる諸問題」「青海波」 創刊号 1984

2 小字名図について

和田川西岸から石津川にかけての調査区周辺の小字名を堺市の法務局で点検したところ図のように、菱木下遺跡西部に「本田寺」、西浦橋遺跡西半部に「五ノ坪・四ノ坪」、万崎池遺跡西端に「尺尊寺」、第５調査区に「玉の山」等の地名が残っている事が判った。更に菱木の集落方面には「白木、才ノ城、堂ノ前、大垣外、大将軍、大堀」等の地名が見え、太平寺の集落方面には「大門」「神木浦」といった寺院・神社に関する地名もみられた。字名「本田寺」については、西方、鶴田池東遺跡内にも見られ、その支配地かと考えられる。また菱木集落の東には猫塚・西方には中塚の字名が見られ、集落周辺に墓域が存在した可能性が考えられる。

今後の考古学調査の進展によりこれらの小字名の命名時期が、どの程度遡るものか判明させてゆく必要があろう。

第67図　字　名　図